

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 197

国司尾遺跡  
坂田遺跡  
坂田墳墓群  
宮ノ上遺跡  
宮ノ上古墳群

一般国道374号（美作岡山道路）

改良に伴う発掘調査1

2006

岡山県教育委員会



1 調査地遠景（南から）



2 宮ノ上遺跡南半部全景（上空から、上が北西）

卷頭図版 2



1 宮ノ上1号墳埋葬施設（西から）



2 1号墳出土の青銅鏡

# 序

岡山県では、県内循環高速道路網を形成すべく、また県東部地域の発展を期して、中国縦貫自動車道と山陽自動車道を南北に結ぶ地域高規格道路「美作岡山道路」の建設を進めています。岡山県教育委員会では、この事業の計画段階から、路線内に所在する遺跡の取り扱いについて関係部局と協議を重ねてまいりました。その結果、現状での保存が困難な部分については、やむを得ず記録保存の措置を講じてきました。

本報告書には、美作岡山道路建設の第1期事業区間のひとつである一般国道374号の改良に伴って実施した、勝田郡勝央町小矢田に所在する国司尾遺跡、坂田遺跡、坂田墳墓群、宮ノ上遺跡、宮ノ上古墳群の発掘調査成果を収載しました。これらの遺跡では、弥生時代から中世にかけての集落や墳墓が確認されました。特に、弥生時代末から古墳時代初頭の集落から出土した土器には日本海側や瀬戸内地域などの影響が認められ、地域間の交流が盛んに行われていたことがうかがえます。また、集落とともに墳墓群が発見されたことは、当時のムラの景観を復元するうえで重要な資料となりました。

この報告書が学術研究に寄与するだけでなく、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史を物語る資料として広く役立つならば幸いです。

最後に、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、美作岡山道路建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の先生方に有益な御助言と御指導を賜り、また関係各位から多大な御協力をいただきました。記して厚くお礼申し上げます。

平成18年2月

岡山県古代吉備文化財センター

所長 松本和男

# 例 言

- 1 本書は、一般国道374号（美作岡山道路）改良に伴い、岡山県教育委員会が岡山県勝英地方振興局（現岡山県美作県民局勝英支所）の依頼を受け、岡山県古代吉備文化財センターが発掘調査を実施した<sup>くにしお</sup>国司尾遺跡、<sup>さかた</sup>坂田遺跡、<sup>さかた</sup>坂田墳墓群、<sup>みやのうえ</sup>宮ノ上遺跡、<sup>みやのうえ</sup>宮ノ上古墳群の発掘調査報告書である。
- 2 上記の5遺跡は、岡山県勝田郡勝央町小矢田に所在する。
- 3 発掘調査時の遺跡名については小字名に従っているが、本書では、天神遺跡を「坂田遺跡、坂田墳墓群」に改称した。これは、周知の埋蔵文化財包蔵地などとの整合性を考慮した結果である。また、地理的特徴や遺跡の性格を鑑みて、天神遺跡の一部を宮ノ上遺跡として報告した。
- 4 本書収載の発掘調査は、平成14年度から平成15年度にかけて実施したもので、各遺跡の調査当時の調査期間、担当者、調査面積、出土遺物箱数は、本文の表1に記した。
- 5 発掘調査および報告書の作成にあたっては、「美作岡山道路建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」を設け、下記の方々に委員を委嘱した。委員各位からは終始有益な御指導と御助言をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。なお、（ ）は依頼時の所属機関名である。

角南 勝弘（柵原町教育委員会）〈平成16年度から〉  
土居 徹（津山市田邑公民館）〈平成15年度まで〉  
野崎 貴博（岡山大学）  
間壁 忠彦（倉敷考古館）  
松本 武彦（岡山大学）
- 6 本書に関係する遺物等については、下記の諸氏、諸機関に鑑定・分析・調査指導を依頼し、それぞれ有益な教示を得た。また、一部の成果については報告文をいただいた。記して厚くお礼を申し上げる。なお、（ ）は依頼時の所属機関名である。

石製品等の石材鑑定	鈴木茂之（岡山大学）
鉄滓・鉄鉱石の金属学的調査	大澤正己（株式会社 九州テクノロジーサーチ）
土器・埴輪の胎土分析	白石 純（岡山理科大学自然科学研究所）
青銅鏡の調査指導	森下章司（大手前大学）
青銅鏡の鉛同位体比測定	平尾良光、齋籐美奈子（別府大学） 谷水雅治（海洋研究開発機構）
青銅鏡の成分・赤色顔料分析	財団法人 元興寺文化財研究所
樹種鑑定・放射性炭素年代測定	パリノ・サーヴェイ株式会社
花粉・植物珪酸体分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
- 7 本書の作成は、平成16年度に岡山県古代吉備文化財センターにおいて、柳瀬昭彦（4～7月）、柴田英樹（4～7月、11～3月）が担当した。
- 8 本文の執筆は、調査あるいは報告書作成を担当した柳瀬、柴田、佐藤寛介、山崎孝盛、有賀祐史が分担し、文責は節および各項目、あるいは遺構ごとの文末に示した。また、全体の編集は柴田が担当した。
- 9 遺物写真については、江尻泰幸氏の協力と援助を仰いだ。
- 10 本書収載の遺物および各種図面・写真等の記録は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）に保管している。

# 凡 例

- 1 本報告書に記載された高度は、海拔高である。各種遺構図の方位は磁北であり、遺跡付近の磁北線偏差は西偏7°10′を測る。
- 2 グリッドの座標値は日本測地系に準拠し、第3図の方位は平面直角座標第V系の座標北である。
- 3 本報告書に掲載した地図のうち、第2図は国土院発行の地形図(1/25,000)『津山東部』(平成9年)と『真加部』(平成4年)を複製して使用した。
- 4 土層断面図の土色は各調査者の記述に従っているが、土製品の色調は『新版標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修 2002年版)による。
- 5 各遺構・遺物実測図の縮尺率は、原則として下記のとおりである。  
 遺構 堅穴住居・建物・段状遺構：1/80 土壙・土壙墓：1/40 被熱土壙：1/30  
 遺物 土器：1/4 石製品・金属製品・土製品：1/2、1/3 玉類：1/2
- 6 遺構・遺物の番号は、各遺跡でそれぞれ種類別に通し番号を付している。
- 7 遺物番号は、土器は番号のみ、それ以外は材質にしたがって下記の記号を番号の前に付した。  
 石製品：S 金属製品：M 土製品：C
- 8 遺構図における、焼土や炭や粘土の分布範囲、被熱による変色範囲、については、下記のように表現した。



- 9 土器実測図の中軸線左右の白抜きは、小破片のため口径復元に不確実性があることを示す。
- 10 本報告書で用いる時代区分は、一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために文化史区分や世紀を併用した。なお、弥生時代～古墳時代の土器編年の対比については以下のとおりである。

編年対比表

時代	時期	基布遺跡名等	高橋編年 <sup>(10)</sup>	上東 <sup>(11)</sup>	田辺編年 <sup>(12)</sup>
弥生	中期	中葉 高本遺跡Ⅰ・Ⅱ式 <sup>(1)</sup>	Ⅳ b c		
		後葉 金井別所遺跡 <sup>(2)</sup> 西吉田遺跡Ⅱ・Ⅲ式 <sup>(3)</sup>	Ⅴ a b Ⅵ a b		
		前葉 西吉田北遺跡Ⅱ・Ⅲ式 <sup>(4)</sup> 小原遺跡 <sup>(5)</sup>	Ⅶ a b c d	鬼川市1	
	後期	中葉 小中遺跡 <sup>(6)</sup>	Ⅷ a b c d	鬼川市2	
		後葉 大田十二社3式 <sup>(7)</sup>	Ⅷ a b c d	鬼川市3	
		末 大田十二社4式(PE55)	Ⅸ a b c	オノ町1 オノ町Ⅱ	
		前期 初頭 大田十二社4式(PE29) 前葉 大田十二社5式	Ⅹ a b c	下田所	
	古墳	前期	中葉	ⅩⅡ a b	川入大落
後葉			ⅩⅢ a b		T K 47
後期		前半 河辺上原古墳群 <sup>(8)</sup>			T K 10
		後半 畑ノ平1・2期 <sup>(9)</sup> 畑ノ平3・4期			T K 43 T K 209
		末 畑ノ平5・6期			T K 217

- (1) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8 岡山県教育委員会 1975
- (2) 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第25集 中国電力株式会社新津山変電所文化財発掘調査委員会 津山市教育委員会 1988
- (3) 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第17集 津山市教育委員会 1985
- (4) 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第58集 津山市教育委員会 1997
- (5) 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第38集 津山市土地開発公社 津山市教育委員会 1991
- (6) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』117 岡山県教育委員会 1997
- (7) 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第10集 津山市教育委員会 1981
- (8) 『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第54集 河辺上原遺跡発掘調査委員会 津山市教育委員会 1994
- (9) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』111 地域振興整備公団 岡山県教育委員会 1996
- (10) 高橋義「弥生土器-山陽1~4」『考古学ジャーナル』173・175・179・181 1980 高橋義「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告9』岡山県立博物館 1988 高橋義「土器の編年-中国・四国」『古墳時代の研究6』1991
- (11) 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977
- (12) 田辺昭：『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966

# 目 次

巻頭図版

序

例言

凡例

目次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 調査の経緯と経過	5
第1節 発掘調査の契機と推移	5
第2節 発掘調査および報告書作成の体制	7
第3節 発掘調査および報告書作成の経過	8
第3章 国司尾遺跡	11
第1節 調査の概要	11
第2節 弥生時代の遺構・遺物	14
第3節 古墳時代以降の遺構・遺物	23
第4節 小結	29
第4章 坂田遺跡・坂田墳墓群	31
第1節 調査の概要	31
第2節 弥生時代の遺構・遺物	32
第3節 古墳時代以降の遺構・遺物	35
第4節 坂田墳墓群	42
第5節 小結	66
第5章 宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群	67
第1節 調査の概要	67
第2節 弥生時代～古墳時代前期の遺構・遺物	69
第3節 古墳時代後期以降の遺構・遺物	107
第4節 宮ノ上古墳群	121
第5節 小結	129
第6章 まとめ	131
第1節 まとめ	131
第2節 弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器	135
第3節 美作地域の中期古墳の展開と宮ノ上古墳群	143
付載1 宮ノ上遺跡出土土器・埴輪の胎土分析 (白石 純)	147
付載2 国司尾遺跡・坂田遺跡・宮ノ上遺跡の自然科学分析 (結果抜粋)	
(パリノ・サーヴェイ株式会社)	151

付載 3	宮ノ上 1号墳出土青銅鏡の分析 (抜粋) …………… (財団法人元興寺文化財研究所) ……	152
付載 4	岡山県宮ノ上古墳から出土した青銅鏡 (内行花文鏡、獸帯鏡) の鉛同位体比 …………… (平尾良光、齋籐美奈子、谷水雅治) ……	153
付載 5	宮ノ上・坂田遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査 …………… (大澤正己) ……	157
	遺構・遺物一覧表 ……………	161
	新旧遺構名対照表 ……………	166
図版		
報告書抄録		

## 目 次

第 1 図	調査位置図 (1/1,500,000) ……………	1	第33図	トレンチ断面図 (1/120) ……………	32
第 2 図	調査地周辺の主要遺跡分布 (1/25,000) ……………	2	第34図	段状遺構 1 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	33
第 3 図	予定路線と遺跡位置図 (1/4,000) ……………	6	第35図	段状遺構 2・3 (1/80) ……………	33
第 4 図	国司尾遺跡全体図 (1/800) ……………	11	第36図	土壇 1・2 (1/40) ……………	34
第 5 図	トレンチ断面図 (1/120) ……………	12	第37図	その他の遺物① (1/4) ……………	34
第 6 図	一字一石経塚 (1/30) ……………	13	第38図	その他の遺物② (1/4・1/3) ……………	35
第 7 図	竪穴住居 1 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2・1/3) ……………	14	第39図	谷部の中世遺構全体図 (1/400) ……………	35
第 8 図	竪穴住居 2 (1/80) ……………	15	第40図	段状遺構 4 (1/80) ……………	36
第 9 図	竪穴住居 3 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	15	第41図	段状遺構 4 出土遺物① (1/4) ……………	37
第10図	竪穴住居 4・5 (1/80) ……………	16	第42図	段状遺構 4 出土遺物② (1/4・1/3) ……………	38
第11図	竪穴住居 4 出土遺物 (1/4) ……………	17	第43図	土壇 3 (1/40) ……………	38
第12図	竪穴住居 5 中央穴 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	17	第44図	土壇 4 (1/40)・出土遺物① (1/4・1/6) ……	39
第13図	竪穴住居 6 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	18	第45図	土壇 4 出土遺物② (1/4・1/6) ……………	40
第14図	竪穴住居 7 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2・1/3) ……………	19	第46図	被熱土壇 1 (1/30) ……………	40
第15図	段状遺構 1・2 (1/80) ……………	19	第47図	溝 1 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/6) ……	41
第16図	段状遺構 3 (1/80)・出土遺物① (1/4) ……	20	第48図	その他の遺物① (1/4) ……………	41
第17図	段状遺構 3 出土遺物② (1/3) ……………	21	第49図	その他の遺物② (1/4・1/3) ……………	42
第18図	段状遺構 4 (1/80) ……………	21	第50図	土壇墓 1 (1/40) ……………	42
第19図	段状遺構 5 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……	21	第51図	土壇墓群 (弥生時代) 全体図 (1/500) ……	43
第20図	柱穴列 1 (1/80) ……………	22	第52図	土壇墓 2 (1/40) ……………	43
第21図	その他の遺物① (1/4) ……………	22	第53図	土壇墓 3～6 (1/40) ……………	44
第22図	その他の遺物② (1/3) ……………	23	第54図	土壇墓 7～9 (1/40) ……………	45
第23図	土壇 1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	24	第55図	土壇墓10～13 (1/40) ……………	46
第24図	土壇墓 1 (1/40)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	24	第56図	土壇墓14・15 (1/40) ……………	47
第25図	土壇墓 2 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	25	第57図	土壇墓16 (1/40)・出土遺物 (1/3) ……	47
第26図	土壇墓 3 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	26	第58図	土壇墓17～20 (1/40) ……………	48
第27図	土壇墓 4 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	26	第59図	土壇墓21～23 (1/40) ……………	49
第28図	段状遺構 6 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……	27	第60図	土壇墓24～26 (1/40) ……………	50
第29図	被熱土壇 1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	27	第61図	土壇墓27 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……	51
第30図	その他の遺物① (1/4) ……………	28	第62図	土壇墓28～30 (1/40) ……………	51
第31図	その他の遺物② (1/4・1/3) ……………	29	第63図	土壇墓31～34 (1/40) ……………	52
第32図	坂田遺跡・坂田墳墓群全体図 (1/800) ……	31	第64図	土壇墓35～38 (1/40) ……………	53
			第65図	東斜面全体図 (1/300) ……………	54
			第66図	土壇墓39 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……	54



第67図	土壙墓40・41 (1/40) ……………	55	第112図	竪穴住居21上層出土遺物② (1/4) ……………	88
第68図	土壙墓42・43 (1/40) ……………	56	第113図	竪穴住居22 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	89
第69図	土壙墓44 (1/40) ……………	57	第114図	竪穴住居23 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	90
第70図	土壙墓・古墳 (古墳時代) 全体図 (1/500) ……	57	第115図	竪穴住居24 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	91
第71図	土壙墓45 (1/40) ……………	57	第116図	建物1 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	92
第72図	土壙墓46～48 (1/40) ……………	58	第117図	建物2 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2・1/3) ……	93
第73図	土壙墓49～51 (1/40) ……………	59	第118図	建物2 遺物出土状態 (1/30) ……………	93
第74図	土壙墓52 (1/40) ……………	60	第119図	建物3 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	94
第75図	土壙墓53 (1/40)・出土遺物 (1/3) ……………	60	第120図	段状遺構1 (1/80) ……………	94
第76図	土壙墓54 (1/40)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	61	第121図	段状遺構1 出土遺物 (1/4・1/2・1/3) ……	95
第77図	土壙墓55 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	62	第122図	段状遺構2・3 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……	96
第78図	土壙墓56 (1/40)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	63	第123図	段状遺構4 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	97
第79図	箱式石棺墓1 (1/40) ……………	64	第124図	段状遺構5 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	97
第80図	坂田3号墳 (1/150)・周溝断面 (1/30) ……	64	第125図	段状遺構6 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……	98
第81図	埋葬施設1 (1/40) ……………	65	第126図	土壙1 (1/40) ……………	98
第82図	埋葬施設2・3 (1/40) ……………	65	第127図	土壙2 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	98
第83図	宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群全体図 (1/1,000) ……	67	第128図	土壙3 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	99
第84図	トレンチ断面図 (1/120) ……………	68	第129図	土壙4 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	99
第85図	弥生時代～古墳時代前期遺構全体図 (1/800) ……	69	第130図	土壙5 (1/40)・出土遺物 (1/3) ……………	100
第86図	竪穴住居1 (1/80) ……………	70	第131図	土壙6 (1/40)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	100
第87図	竪穴住居1 出土遺物 (1/4・1/3) ……………	71	第132図	土壙7 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	101
第88図	竪穴住居2 (1/80) ……………	72	第133図	土壙8 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	101
第89図	竪穴住居3 (1/80) ……………	72	第134図	土壙9～11 (1/40) ……………	102
第90図	竪穴住居3 出土遺物 (1/4・1/3) ……………	73	第135図	土壙12 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……………	102
第91図	竪穴住居4 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	73	第136図	溝1 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	102
第92図	竪穴住居5～7 (1/80) ……………	74	第137図	その他の遺物① (1/4) ……………	103
第93図	竪穴住居8・9 (1/80)・ 竪穴住居8 出土遺物 (1/2) ……………	75	第138図	その他の遺物② (1/4・1/2・1/3) ……	104
第94図	竪穴住居9 出土遺物 (1/4) ……………	76	第139図	その他の遺物③ (1/4) ……………	105
第95図	竪穴住居10 (1/80)・ 出土遺物 (1/4・1/2・1/3) ……………	76	第140図	その他の遺物④ (1/2・1/3) ……………	106
第96図	竪穴住居11 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……	77	第141図	古墳時代後期以降遺構全体図 (1/800) ……	107
第97図	竪穴住居12 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	78	第142図	竪穴住居25 (1/80・1/30)・ 出土遺物 (1/4・1/3) ……………	108
第98図	竪穴住居13 (1/80)・出土遺物 (1/2) ……	78	第143図	竪穴住居26 (1/80・1/30)・ 出土遺物 (1/4) ……………	109
第99図	竪穴住居14 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	79	第144図	竪穴住居27 (1/80・1/30)・ 出土遺物① (1/4) ……………	110
第100図	竪穴住居15 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……	79	第145図	竪穴住居27出土遺物② (1/3) ……………	111
第101図	竪穴住居16 (1/80) ……………	80	第146図	竪穴住居28 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……	111
第102図	竪穴住居16出土遺物① (1/4) ……………	81	第147図	竪穴住居29 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……	112
第103図	竪穴住居16出土遺物② (1/3) ……………	82	第148図	竪穴住居30 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……	112
第104図	竪穴住居17 (1/80) ……………	82	第149図	竪穴住居31 (1/80) ……………	113
第105図	竪穴住居18 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3) ……	82	第150図	竪穴住居32 (1/80・1/30) ……………	113
第106図	竪穴住居19・20 (1/80)・ 竪穴住居20出土遺物① (1/3) ……………	83	第151図	建物4 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	114
第107図	竪穴住居19・20 (1/80)・ 竪穴住居19出土遺物 (1/4) ……………	84	第152図	建物5 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……………	115
第108図	竪穴住居19・20出土遺物② (1/4) ……	84	第153図	建物6 (1/80) ……………	115
第109図	竪穴住居21 (1/80) ……………	85	第154図	段状遺構7・8 (1/80・1/30) ……	116
第110図	竪穴住居21 (1/80)・出土遺物 (1/4) ……	86	第155図	段状遺構7・8 出土遺物 (1/4・1/3) ……	117
第111図	竪穴住居21上層出土遺物① (1/4) ……	87	第156図	被熱土壙1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	117
			第157図	被熱土壙2 (1/30) ……………	117

第158図	被熱土墳 3 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	117
第159図	土壙墓1 (1/40) ……………	118
第160図	その他の遺物① (1/4) ……………	118
第161図	その他の遺物② (1/4) ……………	119
第162図	その他の遺物③ (1/4・1/6・1/3) ……………	120
第163図	宮ノ上古墳群全体図 (1/300) ……………	121
第164図	宮ノ上1号墳 (1/150) ……………	122
第165図	宮ノ上1号墳墳丘断面図 (1/80) ……………	123
第166図	埋葬施設 (1/40) ……………	124
第167図	埋葬施設断面図 (1/40) ……………	125
第168図	宮ノ上1号墳出土遺物 (1/2・1/3) ……………	126
第169図	宮ノ上2～4号墳 (1/200) ……………	127
第170図	宮ノ上2・3号墳断面図 (1/60) ……………	127
第171図	2号墳埴輪出土状態 (1/80) ……………	128
第172図	4号墳断面図 (1/60) ……………	128

第173図	2号墳・周辺出土遺物 (1/4) ……………	128
第174図	調査遺跡遺構全体図 (1/1,600) ……………	130
第175図	弥生時代中期遺構全体図 (1/3,000) ……………	131
第176図	弥生時代後期～古墳時代前期 遺構全体図 (1/3,000) ……………	132
第177図	宮ノ上遺跡の弥生時代後期末～ 古墳時代初頭の土器 (1/12) ……………	136
第178図	美作東部の集落遺跡分布 (弥生時代後期末～古墳時代初頭) ……………	139
第179図	美作東部の前方後円(方)墳分布 (古墳時代初頭) ……………	140
第180図	埋葬施設の床面の比較 (1/50) ……………	143
第181図	主要古墳の埋葬頭位の比較 ……………	144
第182図	美作地域の前・中期の主要古墳の分布 (1/600,000) ……………	145

## 巻頭図版目次

巻頭図版 1	1 調査地遠景 (南から)
	2 宮ノ上遺跡南半部全景 (上空から、上が北西)

巻頭図版 2	1 宮ノ上1号墳埋葬施設 (西から)
	2 1号墳出土の青銅鏡

## 図版目次

図版 1	1 遺跡遠景 (東から)
	2 遺跡遠景 (北東上空から)
	3 国司尾遺跡・坂田墳墓群全景 (上空から、上が北西)

### 国司尾遺跡

図版 2	1 竪穴住居 1 炭化材・遺物出土状態 (東から)
	2 竪穴住居 1 (東から)
	3 竪穴住居 4・5 (南から)
図版 3	1 竪穴住居 6 炭化材・遺物出土状態 (南西から)
	2 北東部炭化材出土状態 (北西から)
	3 中央穴遺物出土状態 (西から)
	4 土壙 1 遺物出土状態 (南から)
	5 土壙墓 1 遺物出土状態 (南東から)
	6 土壙墓 2 埋土断面 (南から)
	7 土壙墓 2 遺物出土状態 (南東から)

図版 4	出土遺物①
図版 5	出土遺物②

### 坂田遺跡・坂田墳墓群

図版 6	1 谷部調査状況 (西から)
	2 土壙 4 遺物出土状態 (南から)
	3 墳墓群調査状況 (北から)

	4 土壙墓 3・4 (南東から)
	5 土壙墓 16 遺物出土状態 (北東から)
	6 土壙墓 24～26 (東から)
	7 土壙墓 24～26 埋土断面 (北から)
図版 7	1 東斜面の土壙墓群 (南から)
	2 土壙墓 42 (南から)
	3 土壙墓 43 (南から)
	4 土壙墓 50 石蓋検出状態 (南から)
	5 土壙墓 53 調査状況 (南西から)
	6 土壙墓 51 (東から)

図版 8	1 土壙墓 54 (南西から)
	2 遺物出土状態 (南西から)
	3 土壙墓 55 (西から)
	4 遺物出土状態 (西から)
	5 土壙墓 55・56 埋土断面 (南西から)

図版 9	1 土壙墓 56 (南から)
	2 箱式石棺墓 1 (南から)
	3 坂田 3 号墳 (西から)
	4 3 号墳埋葬施設 1 (西から)

図版 10	谷部出土遺物
図版 11	土壙墓出土遺物

宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群

- 図版12 1 遺跡全景（上空から、上が北西）  
 2 南半部全景（北東から）  
 3 北半部全景（上空から、上が北西）
- 図版13 1 竪穴住居1（南西から）  
 2 竪穴住居3（南西から）  
 3 竪穴住居8・9・16・22（南から）
- 図版14 1 竪穴住居19・20（南から）  
 2 竪穴住居19南部礫出土状態（東から）  
 3 竪穴住居19北部礫出土状態（南東から）  
 4 竪穴住居21（西から）  
 5 遺物出土状態（北東から）  
 6 上層遺物出土状態（東から）
- 図版15 1 竪穴住居22（北西から）  
 2 調査状況（北西から）  
 3 中央土壇埋土断面（北西から）  
 4 竪穴住居24（南東から）  
 5 中央土壇埋土断面（南東から）  
 6 埋土B断面（南東から）
- 図版16 1 建物2（南東から）  
 2 P2遺物出土状態①（南東から）  
 3 P2遺物出土状態②（南東から）  
 4 段状遺構1調査状況（南から）
- 図版17 1 土壇4遺物出土状態（西から）

- 2 土壇5（南から）  
 3 遺物出土状態（南から）  
 4 竪穴住居25・27（南から）  
 5 竪穴住居25上層遺物出土状態（南から）  
 6 竪穴住居27カマド遺物出土状態（南から）
- 図版18 1 建物4（南西から）  
 2 段状遺構7・8（南西から）  
 3 埋土E断面（西から）  
 4 被熱土壇3（北東から）  
 5 柱穴1遺物出土状態（東から）
- 図版19 1 宮ノ上1号墳（上空から、上が北東）  
 2 墳丘B断面（東から）  
 3 埋葬施設（西から）
- 図版20 1 1号墳埋葬施設南壁（北から）  
 2 石柁・東壁石材出土状態（北東から）  
 3 東壁石材出土状態（南西から）  
 4 宮ノ上2・3・4号墳（東から）  
 5 2号墳埴輪出土状態（東から）  
 6 4号墳周溝埋土断面（南から）
- 図版21 弥生時代～古墳時代前期の出土土器①
- 図版22 弥生時代～古墳時代前期の出土土器②
- 図版23 古墳時代中期以降の出土土器
- 図版24 石製品・金属製品・土製品

## 表 目 次

表1 文化財保護法に基づく文書一覧表	5	表5 石製品一覧表	163
表2 一般国道374号（美作岡山道路）改良に伴う調査一覧表	8	表6 金属製品一覧表	164
表3 竪穴住居一覧表	161	表7 土製品一覧表	165
表4 埋葬遺構一覧表	161	表8 新旧遺構名対照表	166

## 写 真 目 次

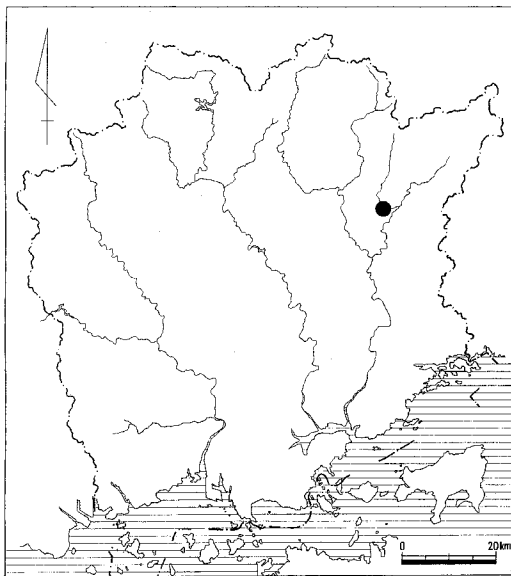
写真1 平成14年度現地説明会開催状況	10	写真4 一字一石経塚供養塔	13
写真2 平成15年度現地説明会開催状況	10	写真5 一字一石経塚検出状況	13
写真3 竪穴住居復元作業状況	10	写真6 経石	13

## 第1章 地理的・歴史的環境

旧国の美作国勝田郡にあたる、現在の岡山県勝田郡勝央町小矢田に今回の調査地は所在している。岡山県の北東部、津山盆地の東端に位置する勝央町には標高200m前後の丘陵がおおく見られ、その山間を縫うように、滝川が南北に流れている。滝川は吉井川水系にあたる吉野川の支流で、那岐山山麓の滝山に水源を発している。滝川に沿って、石生・植月・田井地区に北の平野部を、勝間田地区に南の平野部を見ることができる。二つの平野部を貫流した滝川は、やがて梶並川と合流し、後に吉野川の大きな流れとなって県南の各地域にそそいでいる。南の平野部にあたる勝間田盆地は、東の美作市と西の津山市の間に位置し、滝川に沿って東西方向に伸びる回廊状の地形をなすことから、両地域を結ぶうえでの要衝の地となっている。そうした水運の要となる滝川と陸路の要所である勝間田盆地を望む低丘陵上に、今回の調査地である国司尾遺跡・坂田遺跡・坂田墳墓群・宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群は位置している。

勝央町では現在のところ約800か所にもおよぶ遺跡が確認されている。そのうちの最も古いものでは、縄文時代の早期の押型文土器が発見された金鶏塚遺跡の事例がある。そのほかには、虫尾遺跡で発見された、早期の押型文土器や後期の縁帯文土器、狩猟の際に使用されたとする落とし穴遺構などが示される。

弥生時代は、中期以後の遺跡が多くを占め、平野に張り出した丘陵上に多くの存在を見ることができる。町内の南部に位置する小中遺跡は、勝間田盆地を望む丘陵上の大規模集落で、過去の三度にわたる調査によって、中期から後期の竪穴住居や段状遺構を数多く発見している。小中遺跡は、今回調査された宮ノ上遺跡や国司尾遺跡の集落と時期が近く、勝間田盆地をはさんだ両集落の対称的な立地からも、その関係が注目される。小中遺跡一帯の丘陵上には、鍵谷遺跡、長尾遺跡、小池谷遺跡、宗



第1図 調査位置図 (1/1,500,000)

友遺跡、八幡遺跡、金仙寺遺跡など散布地を含めた多くの遺跡が存在し、広範囲にわたる弥生集落の存在が想定される。それらは丘陵上の見晴らしの良い集落と言える。また、近年の調査で後期の集落が発見された、田井ちご池遺跡や田井たれをず遺跡、そして岡東高塚遺跡などは、さきの丘陵上の集落とは対照的な山間の高所に位置する集落といえる。そのほかには、中期から後期の集落である弥平治遺跡や能部遺跡、さらに鳥羽野遺跡や袈裟襷文銅鐸を出土した念佛塚遺跡などが著名な遺跡といえる。また、最近の調査では、勝間田平野の黒土地区の大河内遺跡で弥生時代を含む集落跡が発見されている。滝川流域の低位部での弥生集落の発見例としては珍しく、平野部における弥生時代の集落の広がりを今後検討していくうえで



○ 弥生集落    ○ 古墳群    ● 古墳    ▲ 竪穴    ■ 経塚    □ 寺院跡    □ 城跡

- |                   |                 |                   |            |           |
|-------------------|-----------------|-------------------|------------|-----------|
| 1 宮ノ上遺跡ほか (今回調査地) | 16 宮の谷古墳群       | 31 小中古墳群          | 46 矢ノ久保古墳群 | 61 清水竪跡   |
| 2 田井ちこ池遺跡         | 17 岡高塚古墳        | 32 妻古墳群           | 47 大井ヶ丘古墳群 | 62 宇津木谷竪跡 |
| 3 岡東高塚遺跡          | 18 金尾古墳群        | 33 鍛冶屋竪古墳群        | 48 横遺跡     | 63 城谷奥竪跡  |
| 4 宮ノ東遺跡           | 19 上の山古墳群       | 34 大平古墳群          | 49 大平遺跡    | 64 大成竪跡   |
| 5 小中遺跡            | 20 琴平山古墳        | 35 中塚古墳群          | 50 上相遺跡    | 65 大河内竪跡  |
| 6 難谷遺跡            | 21 塩谷古墳群        | 36 小池谷古墳群         | 51 鍛冶屋竪遺跡  | 66 八ヶ谷竪跡  |
| 7 長尾遺跡            | 22 高塚古墳群        | 37 片山古墳群          | 52 平遺跡     | 67 糸山筑紫城跡 |
| 8 金仙寺遺跡           | 23 上相坂元古墳群      | 38 源坂古墳群・金井谷古墳群ほか | 53 勝間田遺跡   | 68 岡地跡    |
| 9 宗友遺跡            | 24 殿塚古墳 (堂山1号墳) | 39 東光寺栗山古墳群       | 54 間山高福寺跡  | 69 高山城跡   |
| 10 八幡遺跡           | 25 堂山古墳群        | 40 坂山古墳群          | 55 地蔵堂竪跡   | 70 東古田城   |
| 11 小池谷遺跡          | 26 烏ヶ風呂古墳群      | 41 漆山古墳           | 56 岡東高塚竪跡  | 71 小矢田城   |
| 12 保木遺跡           | 27 岩井谷古墳群       | 42 塚ヶ登古墳群         | 57 上居遺跡    | 72 城谷遺跡   |
| 13 打木谷遺跡          | 28 名号山古墳群       | 43 赤坂古墳群          | 58 釜屋遺跡    | 73 戸倉城跡   |
| 14 庵山遺跡           | 29 白登古墳群ほか      | 44 大河内古墳群         | 59 小池谷南遺跡  | 74 三里城跡   |
| 15 勝間工業団地内古墳群ほか   | 30 よつみだわ古墳群     | 45 又ヶ池古墳群         | 60 田中遺跡    | 75 大河内遺跡  |

第2図 調査地周辺の主要遺跡分布 (1/25,000)

貴重な調査結果といえよう。

古墳時代には数多くの古墳が築造され、現在のところ町内では400基を越える古墳を確認している。古墳時代前期では、石生・植月・田井地区を望む尾根上に美作地方最大級の前方後方墳である植月寺山古墳（墳長91.5m）を、同古墳に対置する平野部をはさんだ尾根上には、美野高塚古墳（墳長65m）、美野中塚古墳（墳長51m）、両宮神社裏古墳（現存長39m）、田井高塚古墳（墳長42m）などの前方後方墳を見ることができる。さらに、<sup>はしたやま</sup>間山の山麓、標高262mの高所には前方後方墳である岡高塚古墳（墳長56m）があり、美作市までの平野部を眼下にすえている。また、隣接する美作市（旧美作町内）には、前方後方墳である櫛原寺山古墳（墳長54m）がある。上記のように、これほど限定された地域に前方後方墳が集中して築かれるのは県内でも数少ない特徴といえよう。こうした背景には、前方後方墳の築造企画を採用した被葬者集団の地域レベルでのつながりが見え隠れする。また、こうした石生・植月・田井地区を望む尾根とは別の勝間田盆地を望む尾根上に、琴平山古墳（墳長50m）や殿塚古墳（墳長40m）などの前方後円墳が見られること、県北の他地域では前方後円墳が大多数を占めていることは、前者との比較においても大変に興味深い内容と言える。

古墳時代中期は、町内での首長墳の実像はほとんどわかっていない。勝間田盆地の南の山間で発見された落山古墳が中期古墳の希少な調査例といえる。落山古墳は直径12mの円墳で、埋葬施設に箱式石棺を採用している。墳丘面は削平されているが主体部の残りは良く、埋葬人骨、竪櫛、<sup>かみ</sup>鉋や刀子などの鉄器、鋤先などの鉄製農耕具、赤色顔料などが出土している。そのほかでは今回調査された宮ノ上古墳群が古墳時代中期に位置し、落山古墳とおなじ小矢田地区に所在することから、両古墳の関係が注目される。

古墳時代後期には、町内に多数の群集墳を町内に見ることができる。一例には新勝央中核工業団地内の畑ノ平古墳群や近年調査された河内古墳群、高塚古墳群、小中古墳群、よつみだわ古墳群などである。上記の古墳のなかには、美作地域に特徴的な陶棺や豊かな副葬品類を持つものも多く見られる。東光寺裏山古墳群や広高下古墳群などのような未調査の古墳群も多く、今後これらの調査が進展すれば群集墳のなご一層の解明につながるといえる。そうした一方で、愛宕山古墳（墳長26m）、よつみだわ2号墳（墳長20m）、そして美作市（旧美作町）に所在する大年1号墳（墳長18.5m）や中塚5号墳（墳長21.2m）などのような小規模な前方後円墳も幾つか見られる。

そのほか、町内の古墳時代の集落像はよくわかっておらず、勝央中核工業団地内の遺跡で発見された前期の竪穴住居や近年調査された福吉丸山遺跡の後期の竪穴住居や段状遺構、鉄滓や羽口片などの鍛冶関連遺物などが示されるのみといえる。その意味では、今回調査された宮ノ上遺跡で前期と後期の集落遺構を発見できたことは貴重な調査成果といえる。

古代には、勝間田盆地の北西部に勝間田遺跡や平遺跡が位置している。勝間田遺跡や平遺跡からは、南北軸をそろえた建物群や白鳳期の軒丸瓦、円面硯や蹄脚硯などの陶硯類、そして「郡」の押印やヘラガキの入った須恵器片などの官衙系遺物が多く出土している。そうした調査成果から、勝間田遺跡や平遺跡の周辺は勝田郡衙の推定地とされている。さらには、藤原宮出土木簡に「備前国勝間田郡」、平城宮出土木簡に「美作国勝田郡」の記載が見られること、『和名抄』巻五の記載に「美作国 勝田(加豆萬田)」と見られることから、勝間田地域が古くから行政面や物流面で重要な役割を担っていたことが指摘される。また、近世には勝間田盆地に出雲街道が見られるように、古代の段階も美作国府にいたる経路上の要衝を担った地域であったといえる。

中世にかけては、勝間田地域では窯業が盛んとなり、戸岩窯跡や間山山麓の河内奥窯跡、女夫岩窯跡、大平山窯跡、勝間田平野の南方の山塊の進上谷窯跡や大成窯跡などのおおくの窯跡が見られる。また、陶馬の出土した宇津木谷窯跡は、古墳時代の後期から古代にかけての窯跡として知られている。そのほかにも数多くの窯跡が存在する勝間田地域一帯は、中世勝間田焼の一大生産地（勝間田古窯址群）として知られている。そのほか宗教的な施設としては、間山の谷あいの間山瓦経塚や山頂の間山神社裏瓦経塚、間山高福寺跡などが知られ、古代から中世の間山周辺域が間山高福寺の寺域を中核とした信仰対象地であったことがうかがわれる。その一方、低地では、美野地区にあたる美野条里遺跡や美作市（旧勝間田）の矢田条里遺跡で条里地形が確認されている。また、『和名抄』や『美作古簡集』などにも、町内の荘園である四庄（植月庄・吉野庄・鷹取庄・勝田庄）に関する記載が存在し、中世段階での大規模な土地開発を物語っている。その一方で、勝間田平野の周辺には糸山筑紫城跡や東吉山城、美作の守護職である赤松氏が築城したとされる戸倉城や小矢山城、美作市（旧美作町）にある三ツ星城、大谷城など中世の山城もおおくみられ、当時の軍政の動向が着目される。

近世には出雲街道が整備され勝間田の宿場町を中心として、以後は急速に発展していったと思われる。その後、現代にいたる時代の流れのなかで勝間田はおおくの貴重な文化遺産をのこし、今日に継承しているといえる。（山崎）

#### 【引用参考文献】

- 浅倉秀昭・尾上元規「小中遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』117 岡山県教育委員会 1997  
安川豊史「古墳時代における美作の特質」『吉備の考古学的研究』下巻 山陽新聞社 1992  
安川豊史「美作国」『日本古代道路事典』 古代交通研究会 2004  
井上弘「勝間田遺跡緊急発掘調査概要」『岡山県埋蔵文化財報告』4 岡山県教育委員会1974  
井上弘・中田満雄「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8 岡山県教育委員会 1975  
伊藤晃・山磨康平『勝間田中核工業団地建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』 勝間田教育委員会 1976  
岡田博「落山古墳」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会 1983  
江見正己「美野条里確認調査」『岡山県埋蔵文化財報告』13 岡山県教育委員会 1983  
尾上元規・杉山一雄「大年古墳群ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』102 岡山県教育委員会 1995  
高畑知功「小中遺跡・小中古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7 岡山県教育委員会 1975  
近藤義郎編『岡山県の考古学』 吉川弘文館 1987  
山磨康平・中野雅美『弥平治・能部遺跡』 勝間田委員会 1983  
團正雄「福丸山遺跡」『勝間田文化財調査報告』4 勝間田教育委員会 1999  
團正雄「国司尾遺跡」『勝間田文化財調査報告』5 勝間田教育委員会 2002  
弘田和司・氏平昭則「西大沢古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』111 岡山県教育委員会 1996  
光永真一ほか「田井たれをす遺跡ほか」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』171 岡山県教育委員会 2003  
物部茂樹「田井ちご池遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』185 岡山県教育委員会 2004  
勝間田教育委員会『勝間田誌』 1984

※第2図 調査地周辺の主要遺跡分布に関しては、県（岡山県2003）、市町村（勝間田2003、美作町2004）発行の遺跡地図を総合的に加味して作成した。また、引用参考文献は主要なもののみを明記した。

## 第2章 調査の経緯と経過

### 第1節 発掘調査の契機と推移

岡山県は、県政の最重要課題の一つである県内循環高速道路網の形成を積極的に取り組むなかで、既存の中国縦貫自動車道・山陽自動車道・岡山横断自動車道岡山米子線に、主要地方道佐伯長船線道路改築及び美作岡山道路建設、さらに一般国道374号改良を加え、赤磐郡瀬戸町（山陽自動車道）から勝山郡勝央町（中国縦貫自動車道）区間の整備計画を策定した。

岡山県教育庁文化課（平成15年度から同文化財課）は、熊山～吉井間については路線計画段階の平成4年に関係町の詳細分布調査等を実施し、路線決定に備えた。そして、両間の路線決定ののち、用地買収等の条件整備がある程度整った平成8年度から、埋蔵文化財の取り扱いについて岡山県東備地方振興局（現岡山県備前県民局東備支所）との本格的な協議が始まった。その後の経緯と経過は、既刊の主要地方道佐伯長船線道路改築事業に伴う発掘調査報告書の1～4（「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」174・178・187・191）に詳しいので、ここでは省略する。

いっぽう、本書に関係する一般国道374号改良工事に伴う埋蔵文化財の取り扱いについては、平成10年度以降、県教育庁文化課と岡山県勝英地方振興局（現岡山県美作県民局勝英支所）との間で協議が重ねられた。平成11年度になって、予定路線の決定ののち周知の遺跡との競合関係を精査するため現地の分布調査を実施し、散布地3か所と古墳1基が確認された。その結果をもってさらに協議が進められ、その後平成13年10月1日付けで、県教育委員会教育長が県勝英地方振興局長から文化財保護法57条の3の通知を受け、第1期工事にかかる道路用地内の周知の遺跡（勝山郡勝央町小矢山の国司尾散布地ほか）については発掘調査を実施し、さらに調査の結果重要な遺構などが発見された場合は

表1 文化財保護法に基づく文書一覧表

#### 埋蔵文化財発掘の通知（法第57条の3）

文書番号口付	種類および名称	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	目的	通知者	期間	主な指示事項
教文埋第791号 H13.10.1	集落跡 国司尾散布地 天神散布地 宮ノ上散布地	勝山郡勝央町小矢田字池ノ内3971ほか	21,500	道路工事	岡山県勝英地方振興局長 草野俊彦 (勝地振建第346号 H13.9.25)	未定	発掘調査

#### 埋蔵文化財発掘調査の報告（法第58条の2）

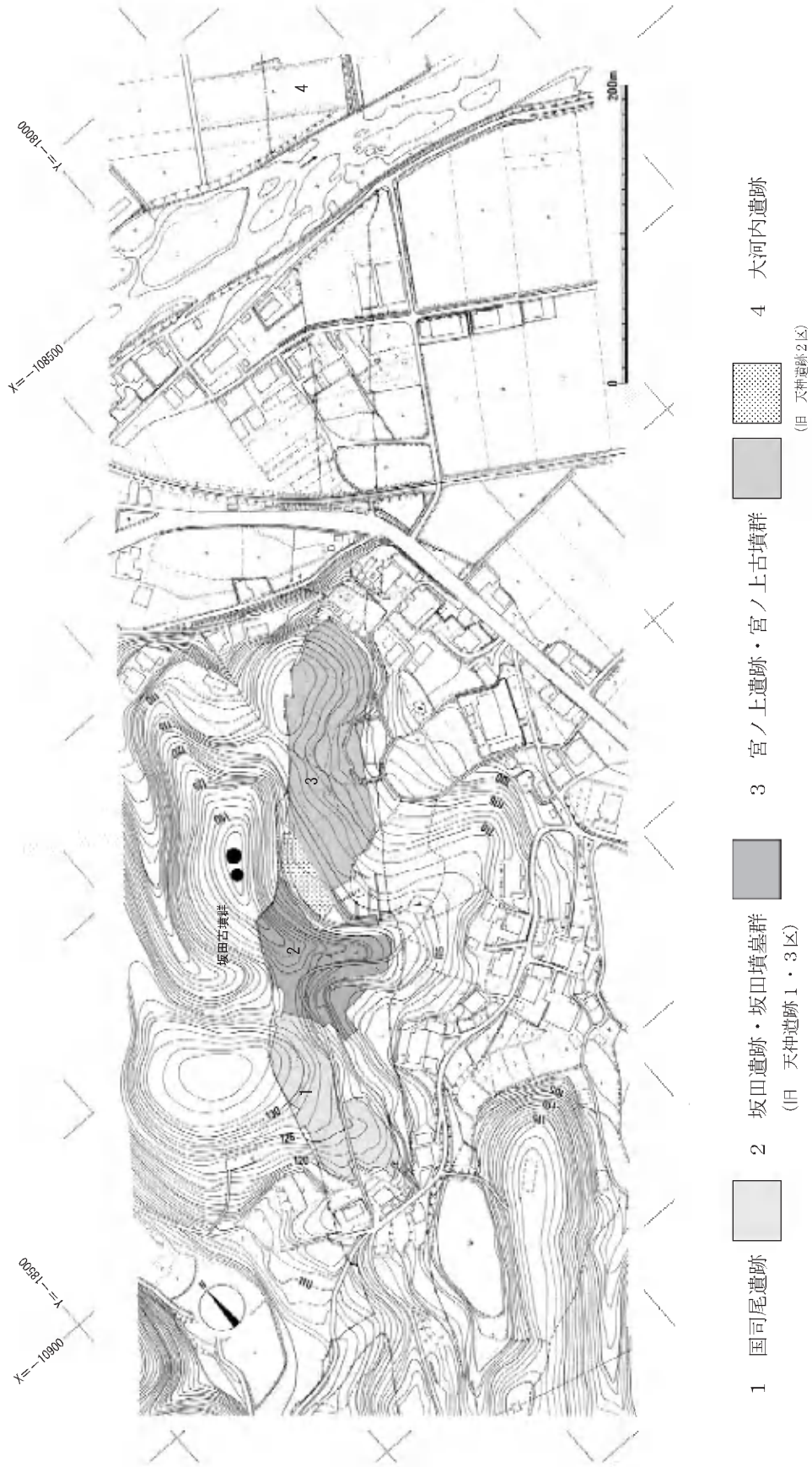
文書番号口付	種類および名称	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	原因	報告者	担当者	期間
岡古調第21号 H14.4.1	散布地・集落跡 国司尾散布地 天神散布地	勝山郡勝央町小矢田404ほか	8,400	道路工事	岡山県古代吉備文化財センター所長	二宮治夫 金田善敬 佐藤寛介 有賀祐史	H14.4.1～ H15.3.31
岡古調第24号 H15.4.3	散布地・集落跡・古墳 宮ノ上散布地 宮ノ上古墳	勝山郡勝央町小矢田274-1ほか	8,400	道路工事	岡山県古代吉備文化財センター所長	柴田英樹 山崎孝盛 有賀祐史	H15.4.1～ H16.3.31

#### 遺物発見通知（法第59条）

岡山県文書番号口付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋第6号 H15.4.1	弥生土器・須恵器・石製品・金属製品など 40箱	勝山郡勝央町小矢田404 国司尾遺跡・天神遺跡	H14.4.8～ H15.3.28	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	岡山県知事 石井正弘	岡山県古代吉備文化財センター
教文埋第1175号 H16.3.15	土器・石製品・金属製品・土製品 62箱	勝山郡勝央町小矢田274-1ほか 宮ノ上遺跡 勝山郡勝央町黒土776ほか 大河内遺跡	H15.4.1～ H16.3.12	岡山県教育委員会 教育長 宮野正司	岡山県知事 石井正弘 勝山郡勝央町小矢田 922-2 赤堀保	岡山県古代吉備文化財センター

※条番号は当時のもの





第3図 予定路線と遺跡位置図 (1/4,000)

別途協議することなどを条件に、記録保存の措置をとることとなった。そして、発掘調査は岡山県古代吉備文化財センターが、平成14年度に国司尾散布地および天神散布地（調査の過程でそれぞれの散布地を遺跡に改名）を、平成15年度に宮ノ上遺跡と宮ノ上古墳（調査の過程で新たに3基の古墳が見つかったため周知の古墳を1号墳、それ以外を2～4号墳とし、全体を宮ノ上古墳群とした）、さらに大河内遺跡の確認調査を、それぞれ実施したものである。なお、予定路線と調査対象遺跡の位置等は第3図、遺跡の調査概要等については第3節と表2を参照願いたい。（柳瀬）

## 第2節 発掘調査および報告書作成の体制

本報告書に所収の国司尾遺跡、坂田遺跡・坂田墳墓群、宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群の5遺跡は、平成14・15年度に全面調査、平成16年度に遺物整理・報告書作成を実施した。

次に調査・報告書作成の体制を記す。

### 1 発掘調査の体制

#### 平成14年度

##### 岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

##### 岡山県教育庁

教育次長 三浦 一男

##### 文化課

課長 西山 猛

課長代理(埋蔵文化財係長) 松本 和男

課長代理 宮田 正彦

文化財保護主任 尾上 元規

主事 浜原 浩司

##### 岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長 藤川 洋二

##### <総務課>

課長 安西 正則

課長補佐(総務係長) 田中 秀樹

主任 小坂 文男

##### <調査第一課>

課長 高畑 知功

課長補佐(第二係長) 島崎 東

文化財保護主幹 二宮 治夫(調査担当)

文化財保護主任 金田 善敬(調査担当)

文化財保護主事 佐藤 寛介(調査担当)

主事 有賀 祐史(調査担当)

#### 平成15年度

##### 岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

##### 岡山県教育庁

教育次長 三浦 一男

##### 文化財課

課長 西山 猛

課長代理 田村 啓介

課長補佐(埋蔵文化財係長) 平井 泰男

文化財保護主任 尾上 元規

主事 浜原 浩司

##### 岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長 藤川 洋二

文化財保護参事 松本 和男

##### <総務課>

課長 中田 哲雄

課長補佐(総務係長) 笏本 弘忠

主任 小坂 文男

##### <調査第三課>

課長 柳瀬 昭彦

課長補佐(第三係長) 井上 弘(調査担当)

文化財保護主査 柴田 英樹(調査担当)

主事 山崎 孝盛(調査担当)

主事 有賀 祐史(調査担当)

## 2 報告書作成の体制

平成16年度

岡山県教育委員会

教育長 宮野 正司

岡山県教育庁

教育次長 釜瀬 司

文化財課

課長 芦田 和正

参事 田村 啓介

総括副参事(埋蔵文化財班長)平井 泰男

主任 小林 利晴

主事 秋山 良樹

岡山県古代吉備文化財センター

所長 正岡 睦夫

次長(総務課長) 内田 猛

参事 松本 和男

参事 伊藤 晃

<総務課>

総括副参事(総務班長) 笈本 弘忠

主任 小坂 文男

主任 小川 紀久

<調査第三課>

課長 柳瀬 昭彦(報告書担当)

総括副参事(第三班長) 山磨 康平

主査 柴田 英樹(報告書担当)

調査・報告書作成協力者 <五十音順、敬称略>

團 正雄(岡山県勝央町教育委員会)、村上恭通(愛媛大学)、義則敏彦(兵庫県新宮町教育委員会)

## 第3節 発掘調査および報告書作成の経過

### 1 調査経過の概要

本報告書所収の国司尾遺跡ほかの調査に至る経緯については、第1節で簡単にふれた。この項では、上記ほか3遺跡が調査されるに至った経過、およびそれぞれの調査を通しての経過を、表1を参照しながら概説する。表2は、調査年度・遺跡名(遺跡番号は第3図の遺跡番号と同)・担当者・期間・面積・遺物量などを一覧にしている。

表2 一般国道374号(美作岡山道路)改良に伴う調査一覧表

年度	番号	遺跡名	調査担当者	調査担当期間	面積(m <sup>2</sup> )	遺物箱数
H14	1	国司尾遺跡	二宮治夫・佐藤寛介・有賀祐史	4.1~3.31	4,840	12
	2	坂山遺跡・坂山墳墓群 (旧天神遺跡)			金田善敬	4.1~9.30
H15	3	宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群 (一部旧天神遺跡含む)	井上弘	11.1~12.31	8,400	61
	4	大河内遺跡	柴田英樹・山崎孝盛・有賀祐史	4.1~3.31	120	1
				計	19,480	102

※遺跡名以外は調査時点の内容を掲載している。

平成14年度は、調査員3名の通年と調査員1名が6か月の調査期間で、国司尾遺跡と天神遺跡の確認調査と全面調査を行った。

平成15年度は、調査員3名が通年と調査員1名が11・12月の2か月の期間、宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳の全面調査と大河内遺跡の確認調査を行い、予定どおりに終了している。なお、大河内遺跡については弥生時代の遺物包含層と柱穴や溝も見つかっていて今後の調査対象とされるが、その成果の詳細は本報告書ではとくに取り上げない。(柳瀬)

## 2 報告書作成経過の概要

報告書の作成は、調査に引き続き平成16年度に岡山県古代吉備文化財センターで作業を行った。4月から7月までは調査員2名が専従したが、8～10月の期間は一時中断し、2名とも他事業の発掘調査を担当した。この調査終了後にあらためて11月から作業を再開したが、3月までは調査員1名で行うという変則的な工程となった。また、平成16年10月7日と平成17年2月17日には、美作岡山道路建設に伴う埋蔵文化財保護対策委員会が開催され、委員各位から指導・助言をいただいた。

遺構については、実測図を再点検しながら個別遺構図と全体図の下図を作成し、トレースを行った。なお遺構図の縮尺は、堅穴住居や土壙墓などにやや大形のものがあるため、それに合わせてそれぞれ1/80と1/40に統一した。

遺物整理については、土器102箱のうち遺構に伴うものを先行して復元作業、写真撮影を行ったが、土器は完形品が少なく、破片や磨滅の著しいものなどが多かった。土器実測は、国司尾遺跡で97点、坂田遺跡・坂田墳墓群で165点、宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群で740点を数えるが、半数あまりしか掲載できなかった。これに並行して石製品や金属製品、土製品の選別を行い、金属製品については錆びの除去等も行った。実測したうち、石製品は68点、金属製品は42点、土製品は22点を掲載した。

なお、調査時に天神遺跡としていた遺跡は、主に墳墓群が尾根上に所在し（当時3区）、北東斜面（当時2区）・南西谷部（当時1区）に集落が営まれている。前者の小字名は「坂田」で、周知の埋蔵文化財包蔵地の「坂田古墳群」も隣接している。後者には「天神」や「宮ノ上」などがあるが、北東斜面の「宮ノ上」は、地理的にも遺跡の性格からも宮ノ上遺跡の一部として捉えるべきと判断された。これらの点から、天神遺跡1・3区を「坂田遺跡・坂田墳墓群」に改称し、天神遺跡2区を宮ノ上遺跡として報告することにした。

## 3 調査日誌抄

### 平成14年度

4月1日（月）発掘調査準備開始  
 4月8日（月）発掘調査開始  
 7月17日（火）一般国道374号（美作岡山道路）改良に伴う埋蔵文化財保護対策委員会  
 11月19日（火）一般国道374号（美作岡山道路）改良に伴う埋蔵文化財保護対策委員会  
 2月21日（金）一般国道374号（美作岡山道路）改良に伴う埋蔵文化財保護対策委員会  
 2月22日（土）国司尾・（旧）天神遺跡現地説明会  
 （勝央町教育委員会主催）

2月26日（水）航空写真撮影

3月31日（月）発掘調査終了

### 平成15年度

4月1日（火）発掘調査準備  
 4月7日（月）発掘調査開始  
 2月6日（金）一般国道374号（美作岡山道路）改良に伴う埋蔵文化財保護対策委員会  
 8月5日（火）一般国道374号（美作岡山道路）改良に伴う埋蔵文化財保護対策委員会  
 10月2日（木）航空写真撮影  
 10月21日（火）一般国道374号（美作岡山道路）改良に伴う埋蔵文化財保護対策委員会

第2章 調査の経緯と経過

11月1日（土）宮ノ上遺跡・古墳群  
現地説明会（見学者140名）  
2月3日（火）大河内遺跡試掘調査開始

2月10日（火）大河内遺跡試掘調査終了  
3月4日（木）航空写真撮影  
3月31日（水）発掘調査終了



写真1 平成14年度現地説明会開催状況  
（勝央町教育委員会主催）



写真2 平成15年度現地説明会開催状況



写真3 竪穴住居復元作業状況

# 第3章 国司尾遺跡

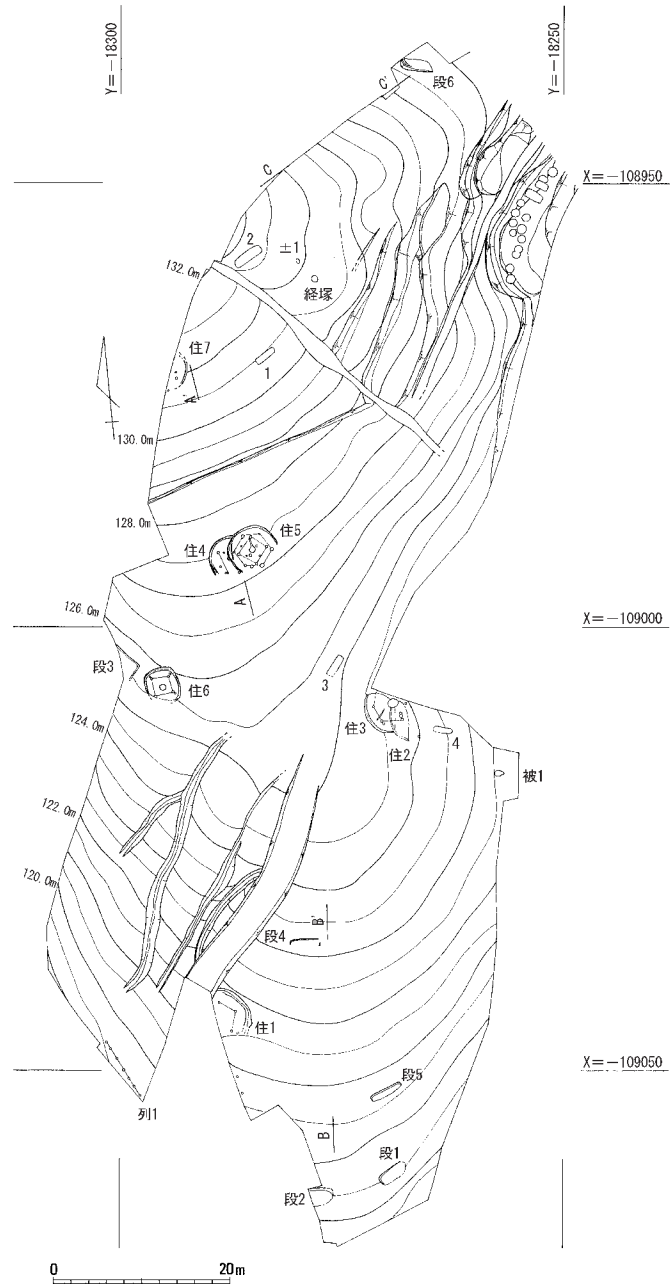
## 第1節 調査の概要

国司尾遺跡は、発掘調査を実施した遺跡のうち、最も南西部に位置する。遺跡は樹枝状に展開する低丘陵に立地し、平野部との比高は30~40mを測る。今回の調査では、遺跡地の南東側を約50mの幅で帯状に縦断したことになる（第4図）。

遺跡地は、調査前はおもに植林地、畑地、墓地となっていた。このため、調査地内は部分的に段状に造成されており、特に近現代の墓地周辺では地形改変が著しかった。



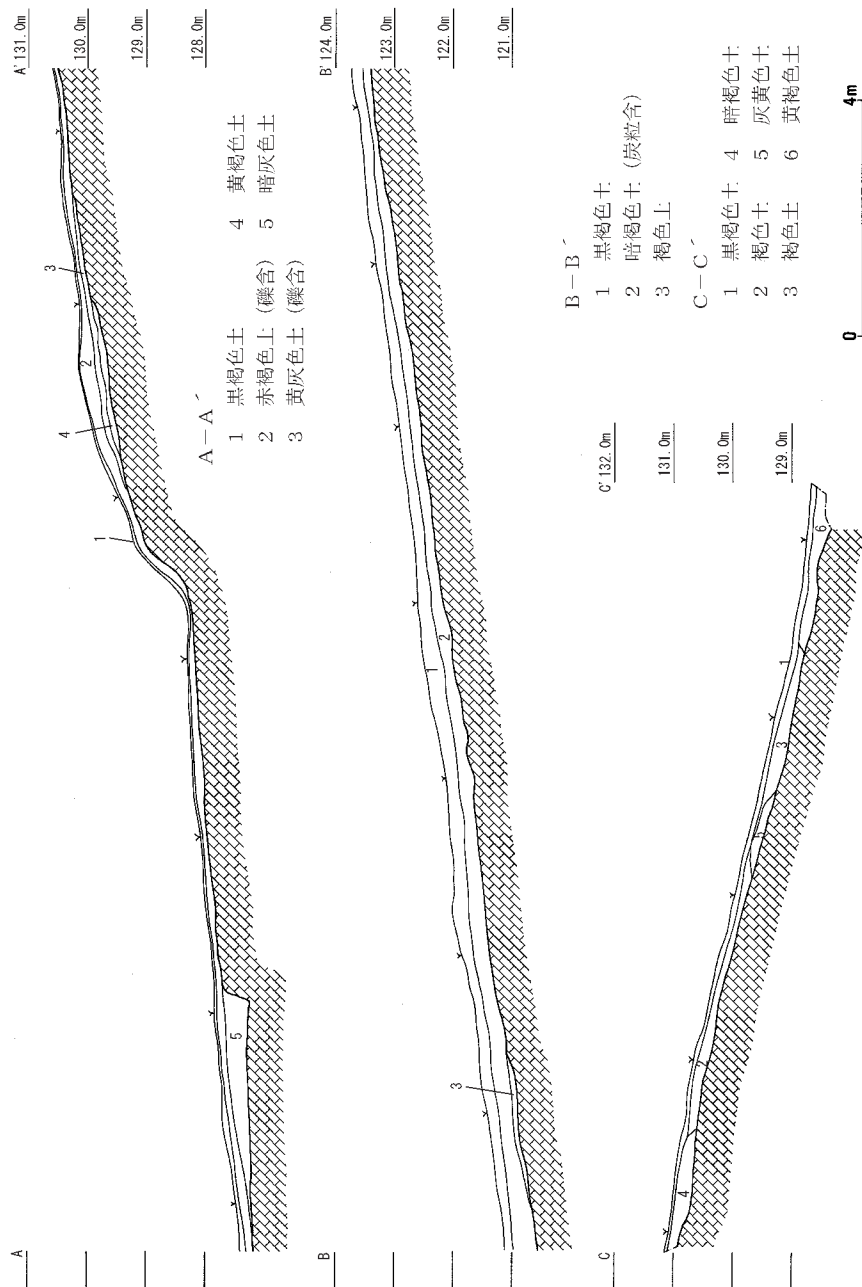
- 竪穴住居：住
- 段状遺構：段
- 柱穴列：列
- 土壇：土
- 被熱土壇：被
- 土壇墓：番号のみ



第4図 国司尾遺跡全体図 (1/800)

遺跡の基本層位は、大きく表土層・遺物包含層（旧耕作土、流土）・地山層に分けられる（第5図）。遺構面は基本的に1面で、地山層に掘り込まれた各時代の遺構を検出した。調査の結果、弥生時代中期・古墳時代中～後期・平安時代末期～鎌倉時代・近現代の遺構・遺物を検出した。以下、各時代の調査概要について次節で記すが、このうち近現代の遺構については、本節で概要を報告する。

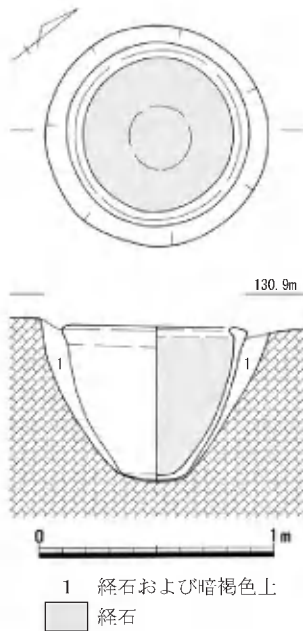
国司尾遺跡では、近現代の遺構として一字・石経塚1基、土壙墓15基（平面プランの検出のみ）、古道数条を検出した。このうち、注目されるのが一字一石経塚である（第6図）。これは、経典の一字を墨書した大量の小礫を埋納した経塚である。



第5図 トレンチ断面図 (1/120)

一字一石経塚は、もともと近現代の墓地区画内にあったもので、経塚の上面に置かれていた石碑が、調査地に隣接する新設の墓地区画内に移転されている。石碑は高さ約1mの立石で、片面に「明治三十一年十月日建之 奉書法華経全部一字一石供养塔 発願主宮野桂治郎清祇」の刻字があり、この経塚が明治31年（1898）に宮野桂治郎の発願によりつくられたことが分かる。経石の埋納容器は焼締め陶器の大甕で、口径78cm・器高65cmの砲弾形を呈する。大甕は一回り大きい素掘りの土壌に据え置かれ、その上面いっぱいまで経石が充填されている。推定される経石の総点数は約1600個、総重量は約11.2kgである。経石は長径2～3cmの扁平な河原石に経典の一字を墨書したもので、しっかりとした筆致で書かれている。書写された経典は、石碑の文面から法華経と考えられる。

一字一石経塚は、岡山県内では本例のほか3例ほど確認されており、それらはいずれも江戸時代のものである。一般的には、一字一石経塚は江戸時代に盛行し、近代以降は廃れると考えられているが、本例により地方によっては明治後半までつくられていたことが判明した。（佐藤）



第6図 一字一石経塚 (1/30)



写真4 一字一石経塚供养塔



写真6 経石



写真5 一字一石経塚検出状況



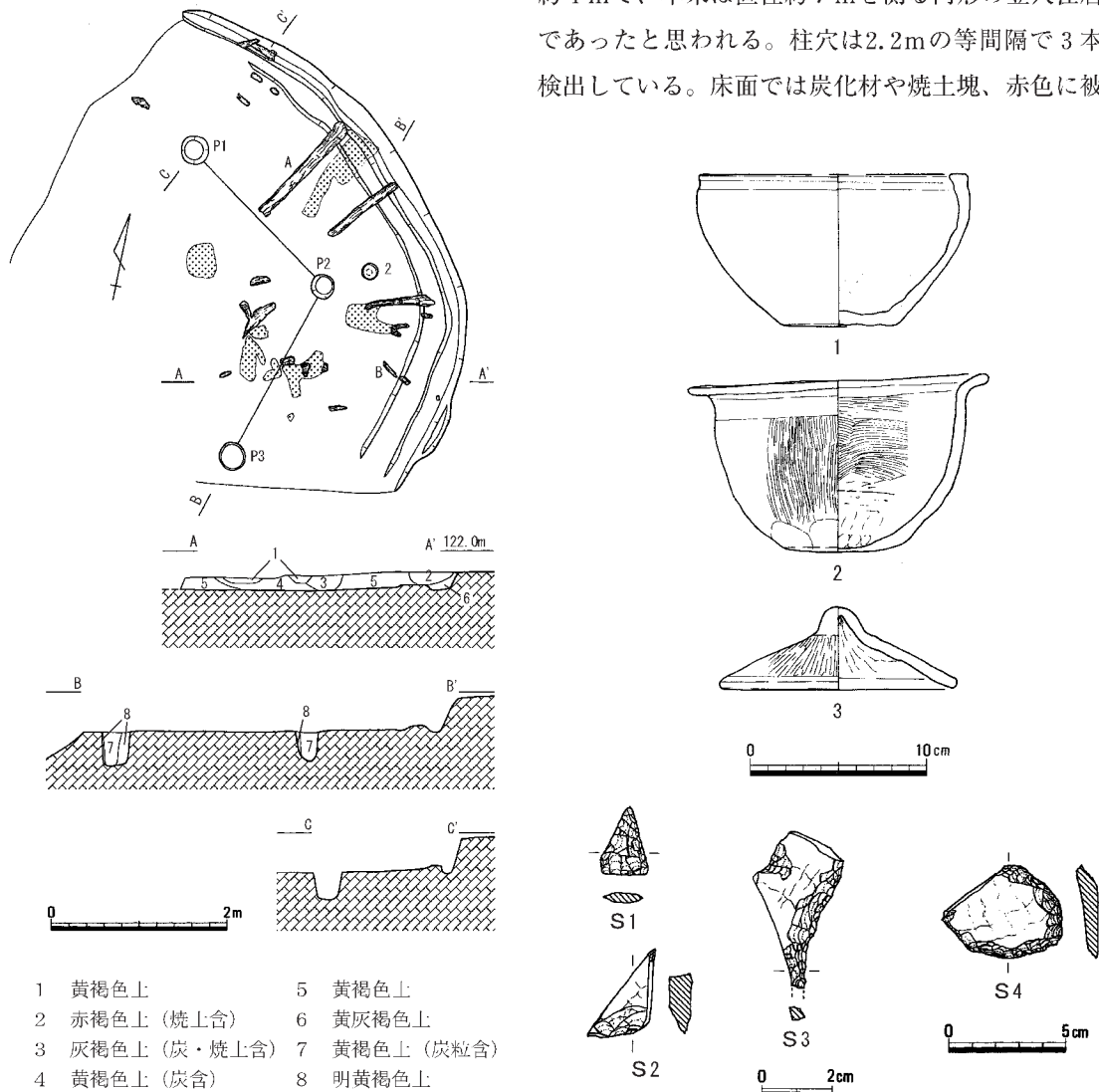
## 第2節 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構として、竪穴住居7軒・段状遺構5基・柱穴列1列を検出した。これらは弥生時代中期中葉～後葉のもので、互いに比高約2m・平面距離約20mほどの間隔をあけて点在しており、各遺構の関連性や集落構成ははっきりしない。遺構の残存状態は概して悪く、削平や流出により失われた遺構もあると考えられるが、もともと遺構密度は薄かったものと思われる。このほか、包含層から弥生時代中期の土器・石器が出土しているが、その量も少ない。(佐藤)

### 1 竪穴住居

#### 竪穴住居1 (第7図、図版2-1・2、4、5)

調査区南部の南西斜面に位置し、北東部分のみが残存する。残存部分の規模は長軸約5.8m、短軸約4mで、本来は直径約7mを測る円形の竪穴住居であったと思われる。柱穴は2.2mの等間隔で3本検出している。床面では炭化材や焼土塊、赤色に被



第7図 竪穴住居1 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2・1/3)

熱した痕跡が認められ、焼失住居と判断される。炭化材A・Bはいずれもクリを使用した垂木材である。床面直上ではほぼ完形の鉢2が口縁部を下に伏せて置かれていた。石器は、石鎌S1、楔形石器S2、石錐S3、削器S4が出土した。住居の時期は、弥生時代中期中葉と思われる。(有賀)

竪穴住居2 (第8図)

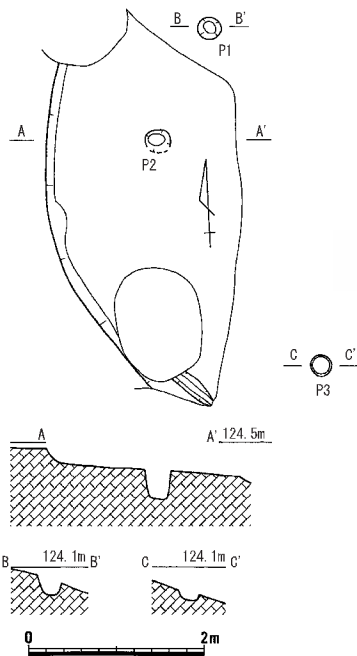
調査区東部の東斜面に位置し、竪穴住居3に切られる。斜面下位の東部分は消失しており、残存部分の長軸は約4.2mを測る。明確な壁体溝は認められないが、平面形は円形を呈すると考えられる。竪穴住居3との関係から、時期は弥生時代中期中葉と思われる。(有賀)

竪穴住居3 (第9図、図版4)

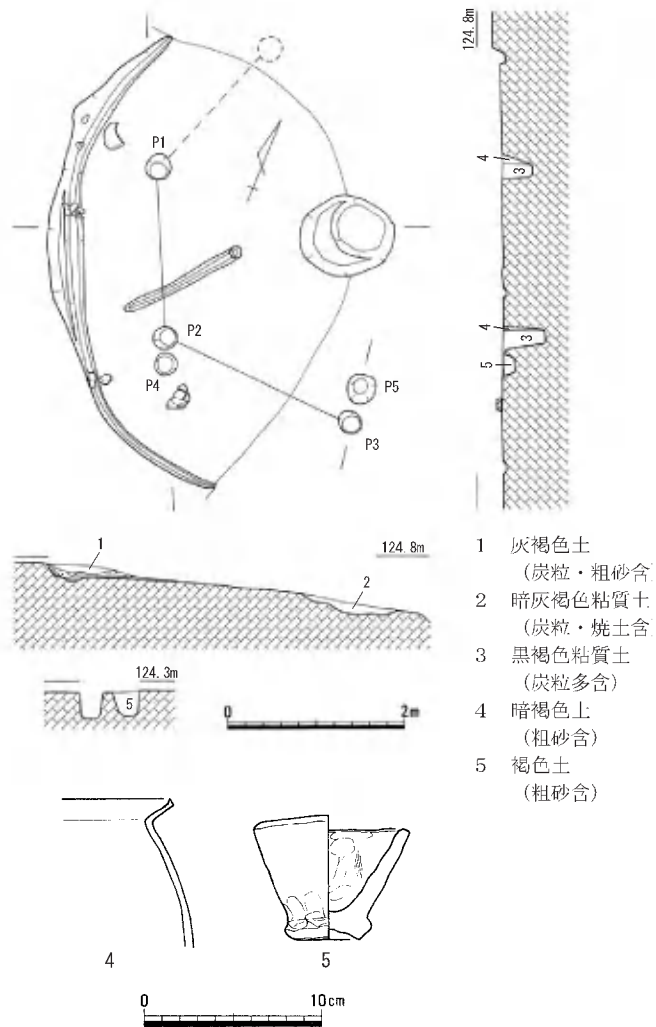
調査区東部の東斜面、竪穴住居2の埋没後に建てられた竪穴住居である。南西部分しか残存していないが、本来の平面形は直径約6mの円形を呈するものと思われる。主柱穴は現状で4本確認しているが、未検出部分を含めて6本あったと推定される。中央穴は平面楕円形を呈し、検出面からの深さは24cmを測る。また、主柱穴P1とP2の間には浅い間仕切り溝を検出した。壁体溝付近で弥生土器が出土し、床面直上2か所で台石が置かれていた。埋土からは、甕4と台付鉢5が出土している。遺物などから、住居の時期は弥生時代中期中葉と思われる。(有賀)

竪穴住居4 (第10・11図、図版2-3)

調査区中央、南に延びる尾根の等高線が緩やかになった地点に位置する。竪穴住居5に切れ、西部分のみが残っている。平面形は円形を呈し、規模は直径約5mと復元できる。斜面上



第8図 竪穴住居2 (1/80)

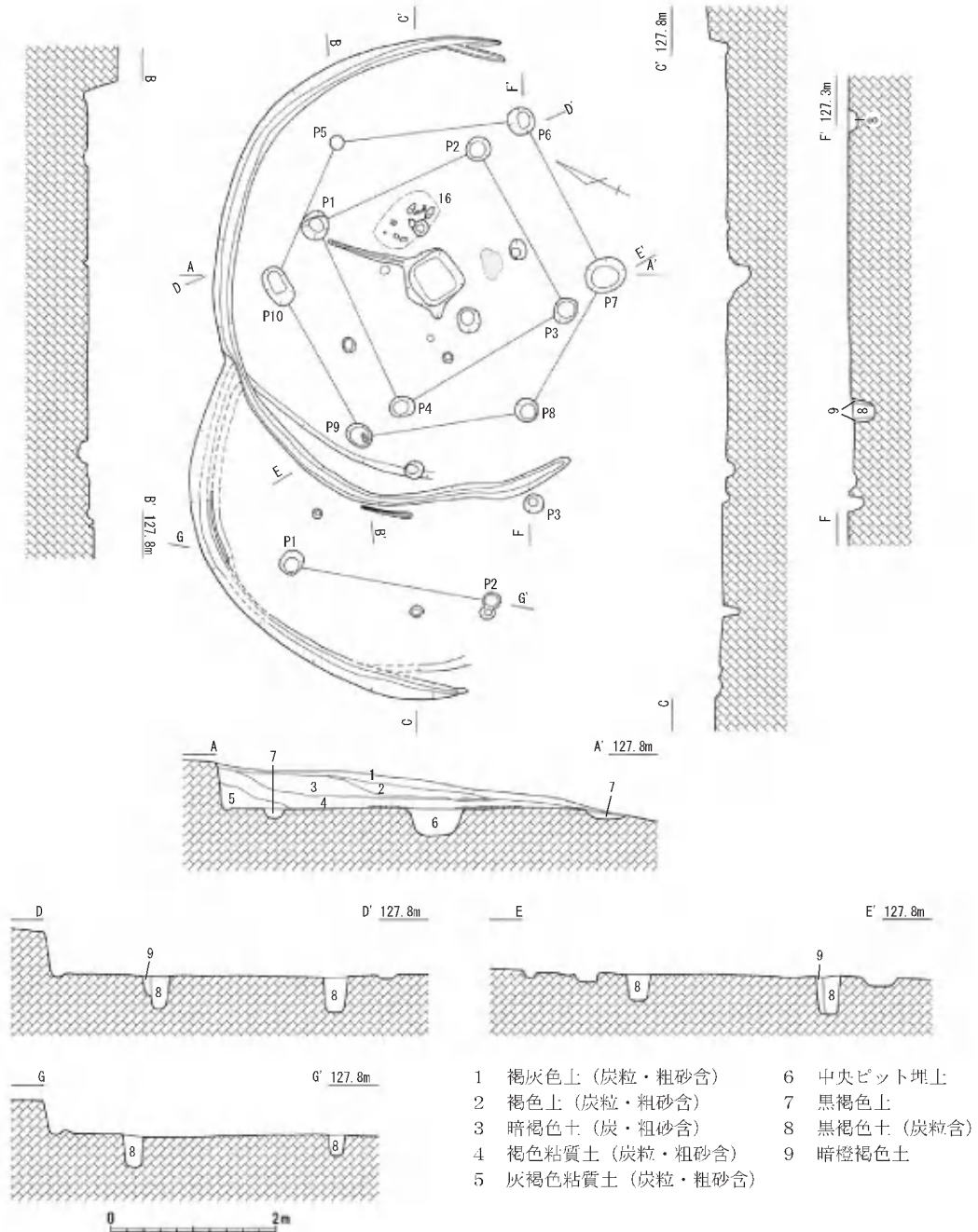


第9図 竪穴住居3 (1/80)・出土遺物 (1/4)

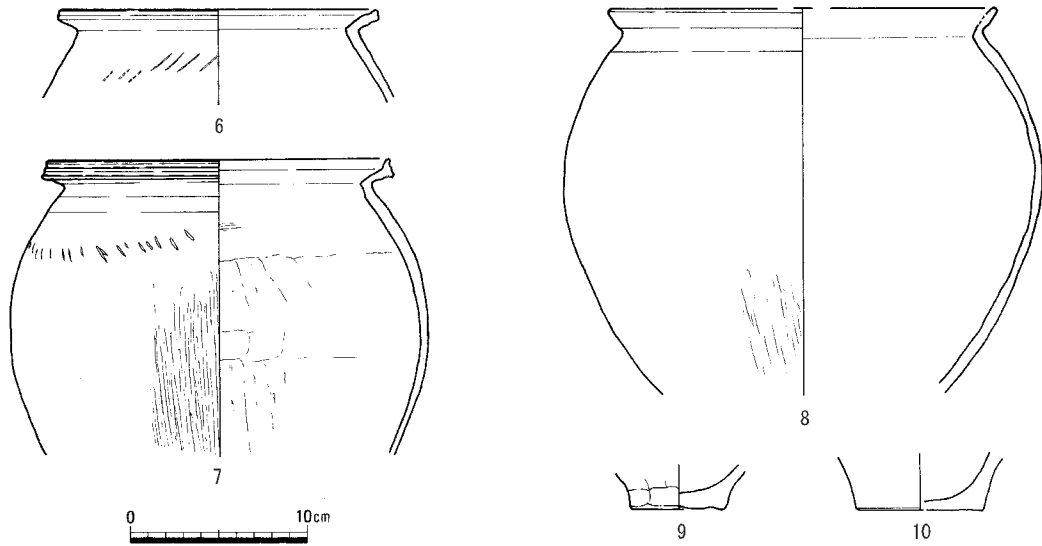
位で深さ約40cmを測り、壁体溝は残存状況がよくないが2条めぐる。主柱穴は2本確認できたが、他は竪穴住居5によって壊され、判然としない。床面直上で甕8が、埋土からは甕6・7・9・10が出土した。遺物などから、時期は弥生時代中期後葉と思われる。(有賀)

竪穴住居5 (第10・12図、図版2-3)

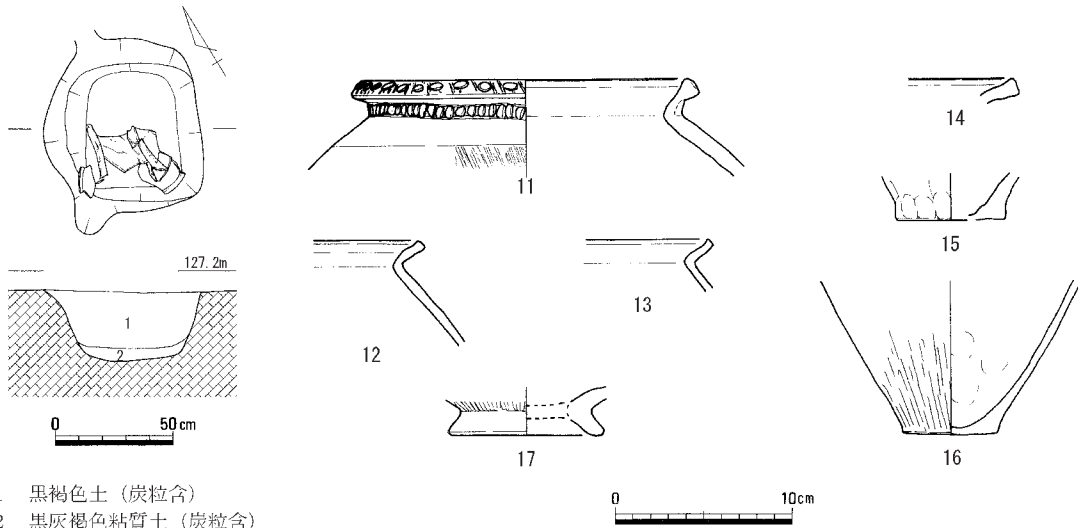
調査区中央、竪穴住居4を切って建てられている。直径5.6mの円形の竪穴住居で、1回の建替えが認められる。壁体溝を大部分共有するが、内側の壁体溝に伴う柱穴はP1～P4までの4本で、外



第10図 竪穴住居4・5 (1/80)



第11図 竪穴住居4出土遺物 (1/4)



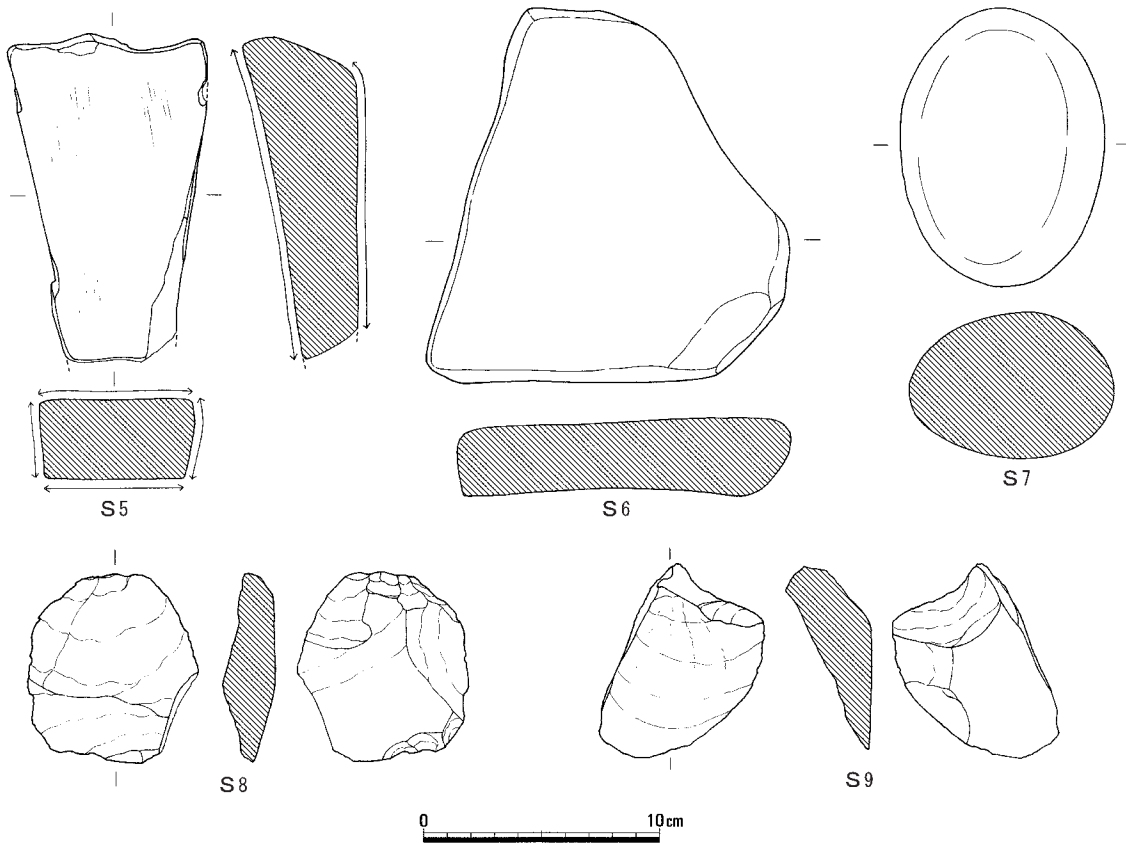
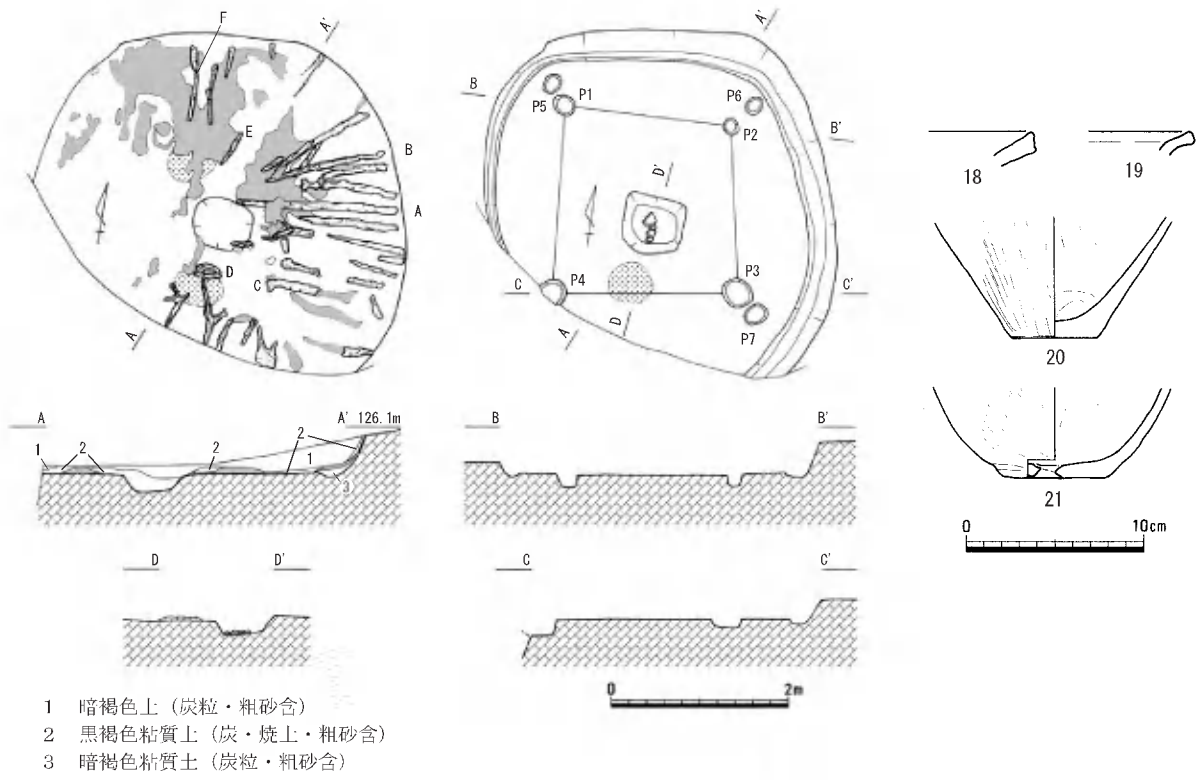
- 1 黒褐色土 (炭粒含)
- 2 黒灰褐色粘質土 (炭粒含)

第12図 竪穴住居5中央穴 (1/30)・出土遺物 (1/4)

側の壁体溝に伴うのがP 5～P 10までの6本と推測される。2軒とも中央穴は同一のものを利用しており、床面もほぼ同一面と考えてよい。壁体溝の切り合い関係から、4本柱の住居の方が古く、その後6本柱の住居へ建て替えたと思われる。中央穴は一辺約60cmの方形を呈し、深さ33cmを測る。その埋土からは、炭化材と甕11・12が出土した。また、床面からは甕16が出土し、1か所で被熱面が見られた。遺物などから、住居の時期は弥生時代中期後葉と思われる。(有賀)

竪穴住居6 (第13図、図版3-1～3)

調査区のほぼ中央に位置する。南西側を削平されているが、平面は隅丸方形で、長径390～400cmを測る。いわゆる焼失住居で、垂木と考えられる炭化材が、放射状に出土している。この炭化材について、樹種鑑定(6点)と放射性炭素年代測定(1点)を実施した。その結果、樹種はクリ(2点)・サクラ属(4点)で、年代はB.C. 195±37の成果を得た。支柱穴のP 1～P 4は、深さ10～15cmといずれも浅く、P 5～P 7が支柱の補助柱穴と考えられる。また、中央穴のすぐ南側に焼土面がある。

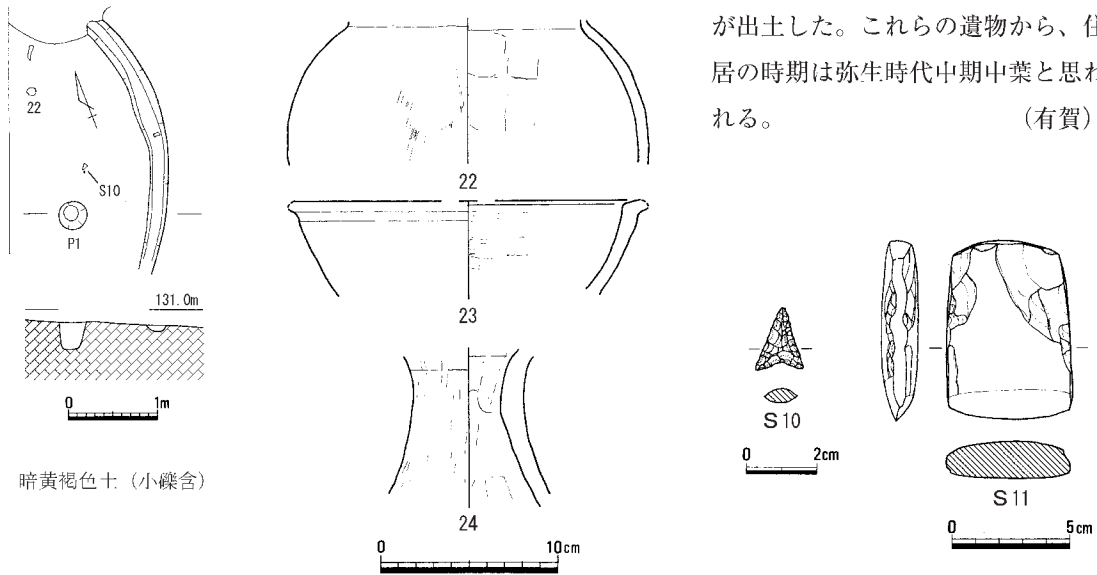


第13図 竪穴住居6 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

出土遺物は少なく、焼失前に持ち出されたと思われる。また、中央穴の底面から、S6～S9が意図的に並べ置かれた状況で出土している。住居の時期は、弥生時代中期後葉と考えられる。（佐藤）

竪穴住居7（第14図、図版5）

調査区北西部に位置する。残存状況はよくないが、復元径約4mの円形の竪穴住居と考えられる。床面直上で甕22とサヌカイト製の打製石鎌S10が出土した。また、壁体溝からは高杯23・24が、埋土からは凝灰岩製の扁平片刃石斧S11が出土した。これらの遺物から、住居の時期は弥生時代中期中葉と思われる。（有賀）



第14図 竪穴住居7（1/80）・出土遺物（1/4・1/2・1/3）

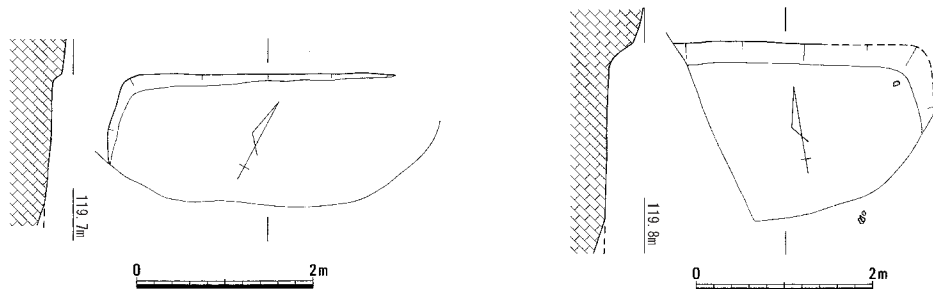
2 段状遺構

段状遺構1（第15図）

調査区の南端に位置する。南側を流失するが、平面は等高線に平行する長方形で、現存で東西330cm・南北145cmを測る。床面に被熱痕などは認められなかった。出土遺物もなく、時期は不明であるが、埋土や周辺の状況から弥生時代中期と考えられる。（佐藤）

段状遺構2（第15図）

調査区の南端に位置する。南側を流失するが、平面は等高線に平行する長方形で、現存で東西295

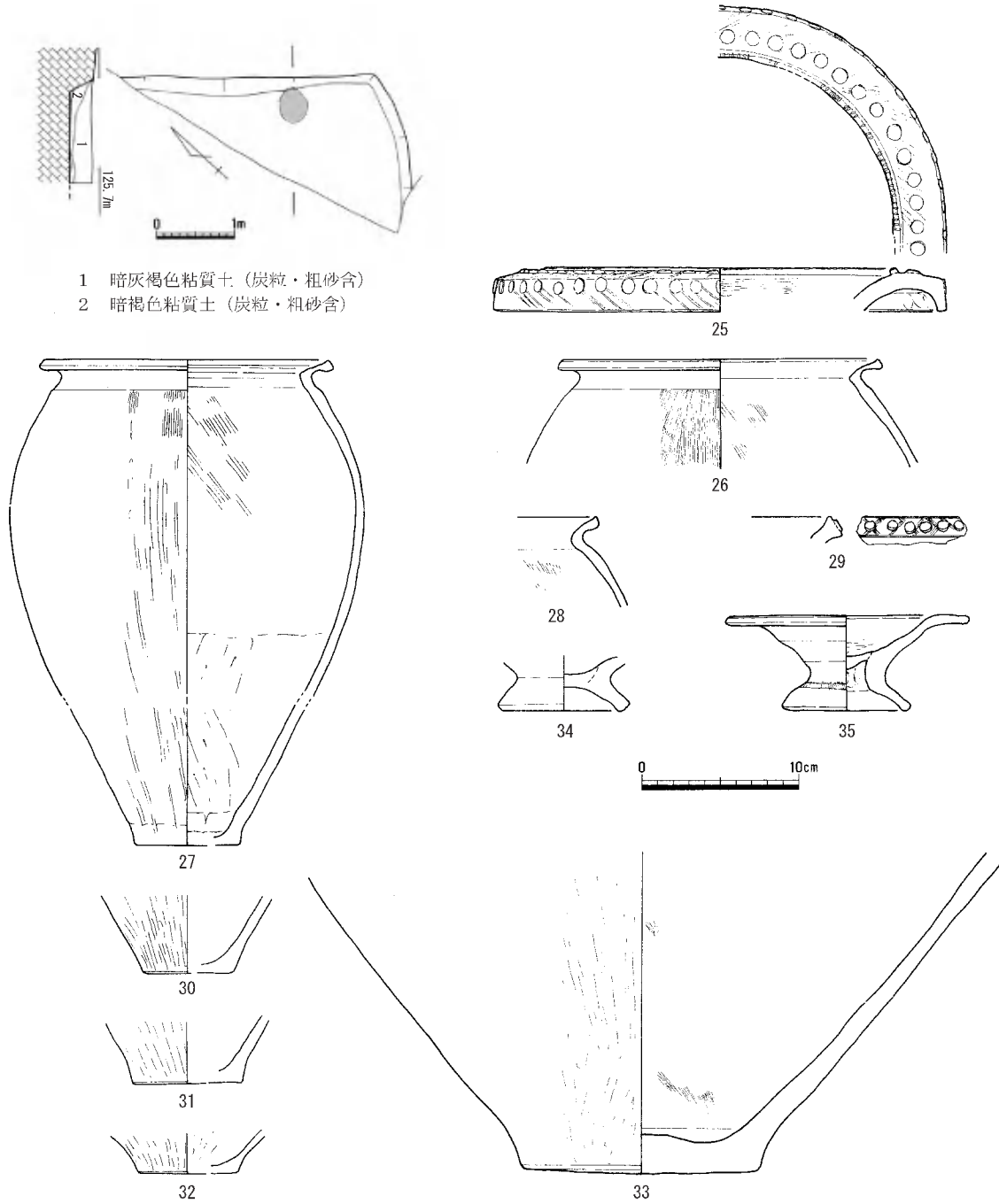


第15図 段状遺構1・2（1/80）

cm・南北205cmを測る。床面に被熱痕などは認められなかった。出土遺物もなく、時期は不明であるが、埋土や周辺の状況から弥生時代中期と考えられる。(佐藤)

段状遺構3 (第16・17図、図版4)

調査区の南端に位置する。西側を削平されているが、平面は等高線に平行する長方形になると考えられ、現存で東西371cm・南北200cmを測る。床面北側の壁体沿いに、直径40cmほどの炭粒の分布が認められる。これらの特徴から、いわゆる長方形竪穴住居状遺構と呼ばれるものと考えられる。埋土中



第16図 段状遺構3 (1/80)・出土遺物① (1/4)

からは、比較的多くの遺物が出土している。25は壺の口縁部で、垂下させた口縁部の上面・側面を凹形浮文で飾る。26・28・29は甕の口縁部、30～33は甕の底部である。27はほぼ完形に復元できる甕で、内面下半をケズリ調整とする。34・35は底部充填の高杯である。S12は流紋岩製の石皿である。これらの遺物から、遺構の時期は弥生時代中期中葉と考えられる。(佐藤)

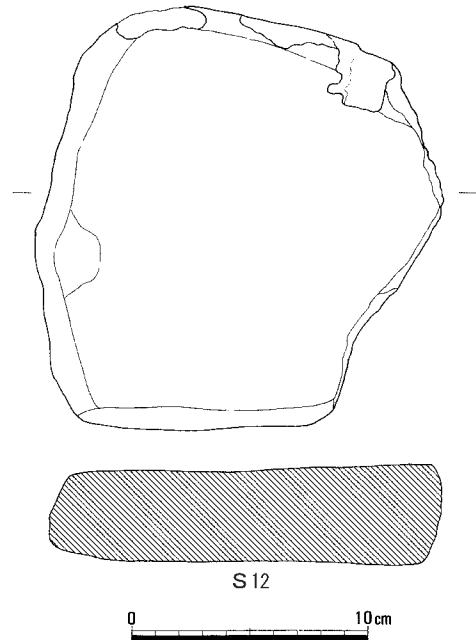
段状遺構4 (第18図)

調査区の中央やや南よりに位置する。南側を流失するが、平面は等高線に平行する長方形で、現存で東西336cm・南北90cmを測る。壁体に沿って溝がめぐり、床面南には直径30cmほどの被熱痕が認められる。出土遺物はなく、時期は不明であるが、埋土や周辺の状況から弥生時代中期と考えられる。(佐藤)

段状遺構5 (第19図、図版4)

調査区の南端に位置する。南側を流失するが、平面は等高線に平行する長方形で、現存で東西381cm・南北80cmを測る。また、壁体に沿って溝がめぐる。床面でP1～P3を検出したが、いずれも不定形で深さ10～20cmと浅い。なお、床面に被熱痕などは認められなかった。遺物は床面上面から比較的まとまって出土している。このうち、36・37は甕で、口唇部を拡張する。38は蓋、39は大形の台付鉢である。これらの遺物から、遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。

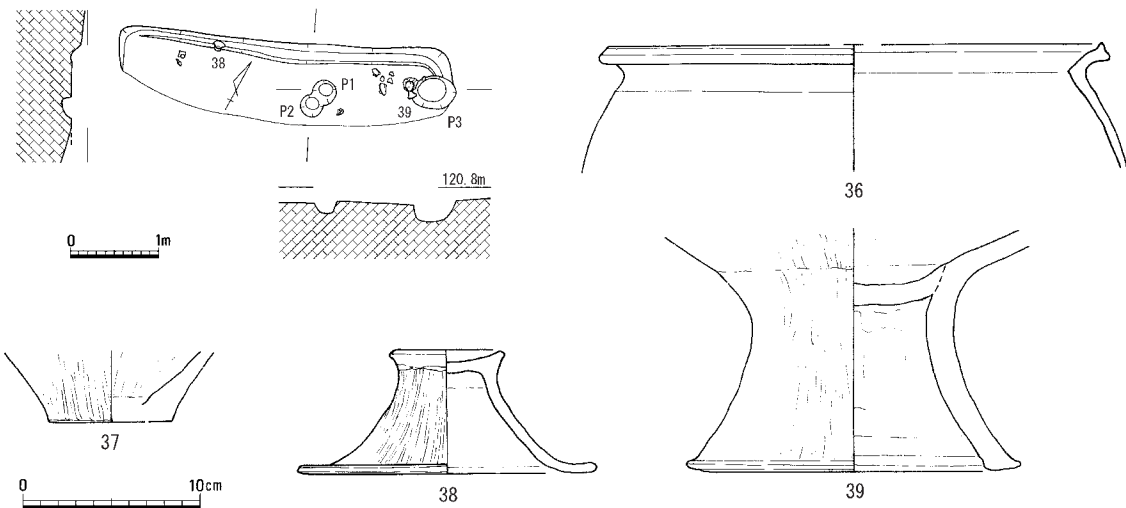
(佐藤)



第17図 段状遺構3 出土遺物② (1/3)



第18図 段状遺構4 (1/80)



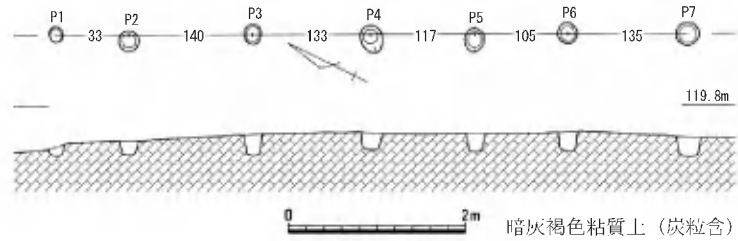
第19図 段状遺構5 (1/80) ・出土遺物 (1/4)



### 3 柱穴列

#### 柱穴列1 (第20図)

調査区の南端に位置する。P1～P7が、83～135cmの間隔で等高線に平行してほぼ一直線に並んでいる。柱穴の直径は約20cmで、底面のレベルもほぼ揃っていることから、おそらく掘立柱建物を構成する柱穴列と考えられる。

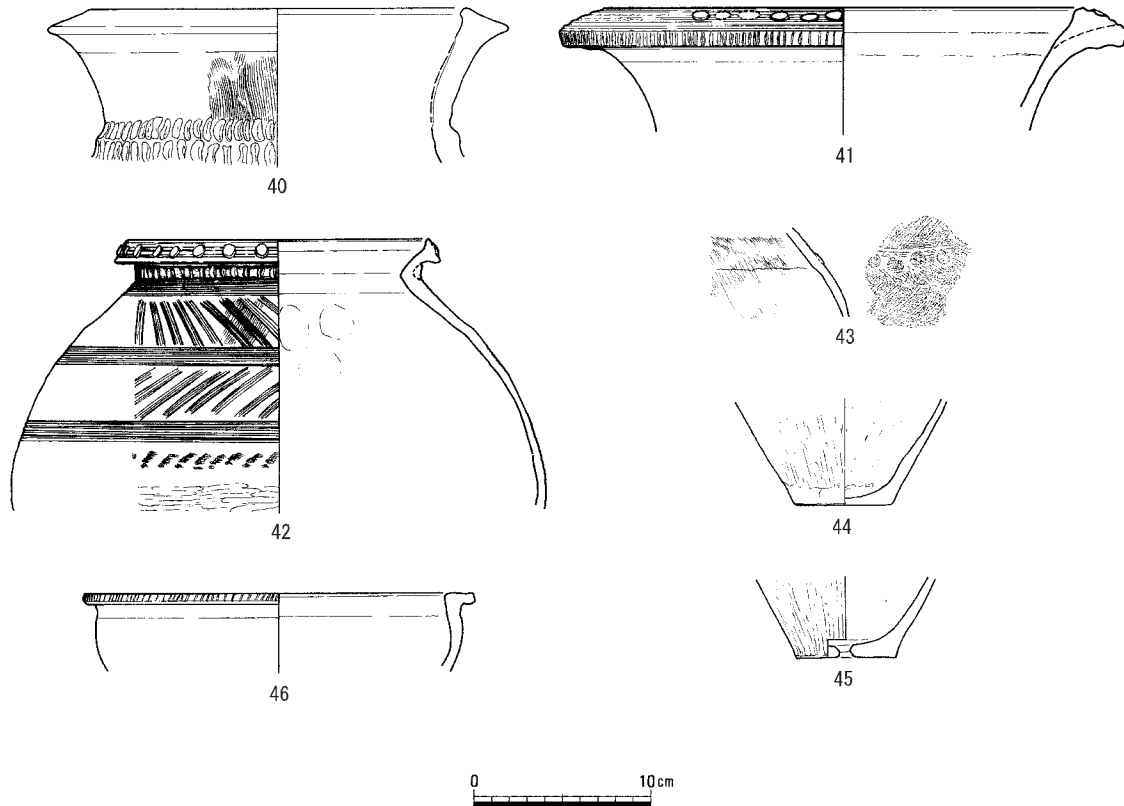


第20図 柱穴列1 (1/80)

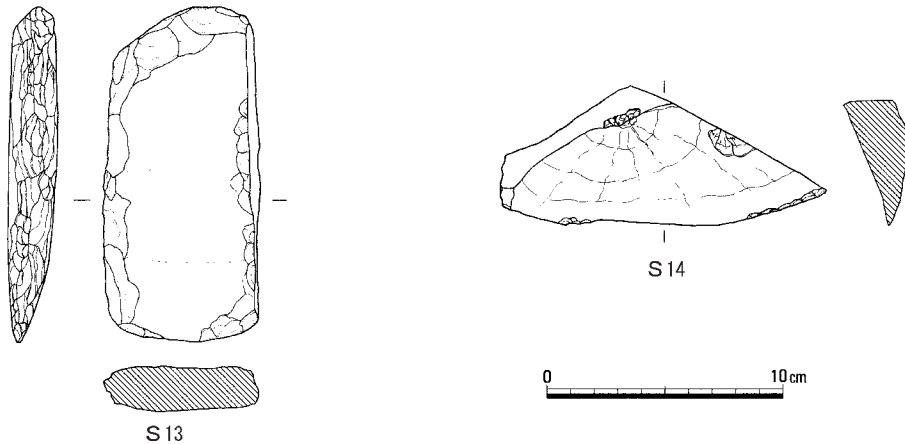
その場合、少なくとも6間以上の桁行をもつ、かなり長大な建物になると予想される。出土遺物はなく、遺構の時期は不明であるが、埋土や周辺の状態から弥生時代中期と考えられる。(佐藤)

### 4 その他の遺構・遺物

単独の柱穴や包含層中から、弥生時代の遺物が若干出土している。このうち、40～45は弥生時代中期中葉の土器である。40・41は大形壺の口縁部で、拡張した口唇部や頸部を円形浮文や沈線、刺突文、



第21図 その他の遺物① (1/4)



第22図 その他の遺物② (1/3)

指頭圧痕で飾る。42・43は中形の甕で、口唇部・頸部・胴部上半を各種装飾で飾る。46は鉢である。44・45は甕の底部で、45には焼成後の穿孔がある。S13は扁平片刃石斧で、最大長141mm・最大幅66mmと大形である。河原石の剥片を素材にしたと考えられ、基部や側面には敲打痕が残るなど、概して仕上げは悪い。石材は塩基性片岩である。S14は粘板岩の剥片で、打撃痕が認められる。（佐藤）

### 第3節 古墳時代以降の遺構・遺物

古墳時代の遺構として、古墳時代中期後半の土壙1基・土壙墓4基を検出した。また、平安時代末期～鎌倉時代の遺構として、段状遺構1基・被熱土壙1基を検出した。その一方、古墳時代前期～中期前半、古墳時代後期～平安時代前期、南北朝時代以降の遺構・遺物は皆無であった。遺構の残存状態は概して悪く、削平や流出により失われた遺構もあると考えられるが、もともと遺構密度は薄かったものと思われる。このほか、包含層から古墳時代中期～鎌倉時代の土器・石器が出土しているが、その量も少ない。（佐藤）

#### 1 土壙

土壙1（第23図、図版3-4、4）

調査区のほぼ中央に位置する。長径55cm・短径41cmの小形の土壙で、中央から須恵器の甕47と土師器の甕48が出土している。このうち、47は口縁部を意図的に打ち欠いている。なお、周辺に同時期の土壙墓があり、土壙1も埋葬遺構の可能性がある。時期は古墳時代中期後半である。（佐藤）

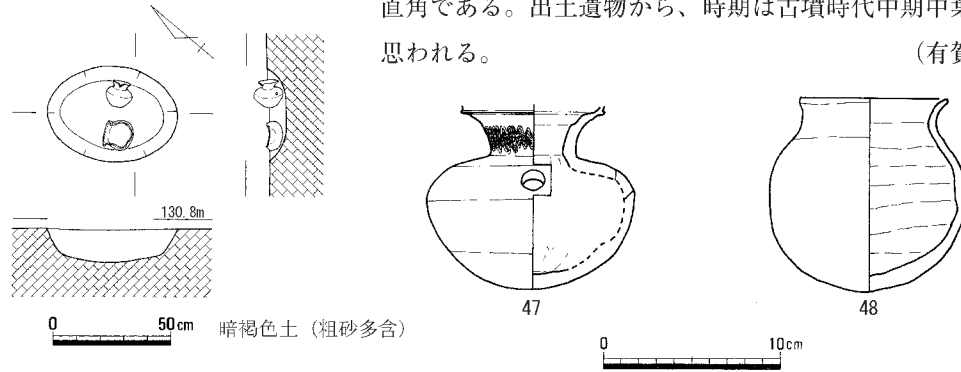
#### 2 土壙墓

土壙墓1（第24図、図版3-5、4、5）

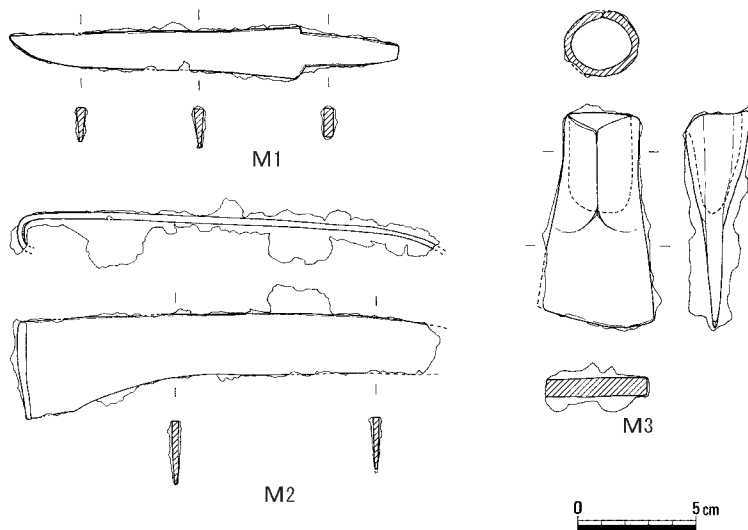
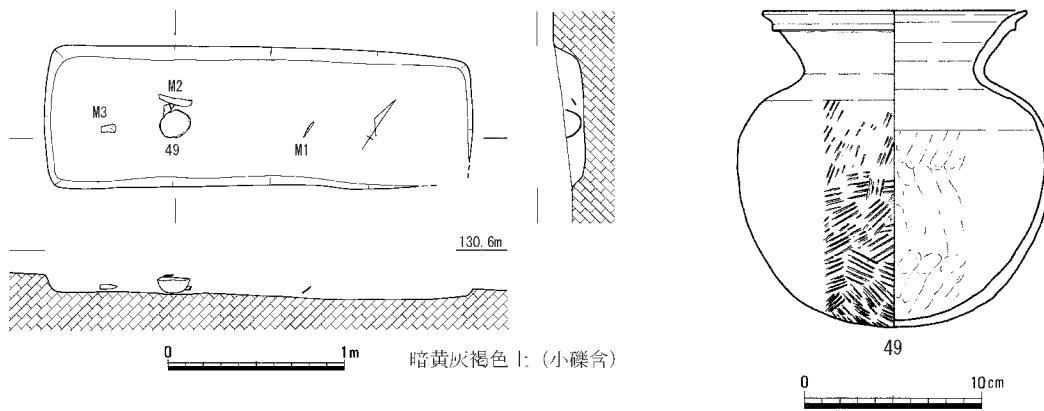
調査区北部の南東斜面に位置する、等高線に平行する土壙墓である。掘り方は平面長方形で、長軸242cm、短軸80cmである。検出面からの深さは17cmで、上部はかなり削平されている。木棺痕跡等は確認できなかった。遺物は、須恵器の甕49が中央よりやや西側に口縁部を横に向けて出土した。この

甕は、口縁端部が丸く、その下部に断面三角形の突帯をめぐらしている。外面は胴部中ごろから底部まで平行叩き目がみられ、内面は無文の当て具を使っているのか、もしくはナデを施しているようである。概して、焼けぶくれが激しい。これらの特徴から、田辺編年のTK73型式と考えられる。鉄器は、刀子M1、鉄鎌M2、袋状鉄斧M3が出土した。M2は刃部直線で、折り返し部は刃部に対して

直角である。出土遺物から、時期は古墳時代中期中葉と思われる。(有賀)



第23図 土壇1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第24図 土壇墓1 (1/40)・出土遺物 (1/4・1/3)

土墳墓2 (第25図、図版3-6・7、4)

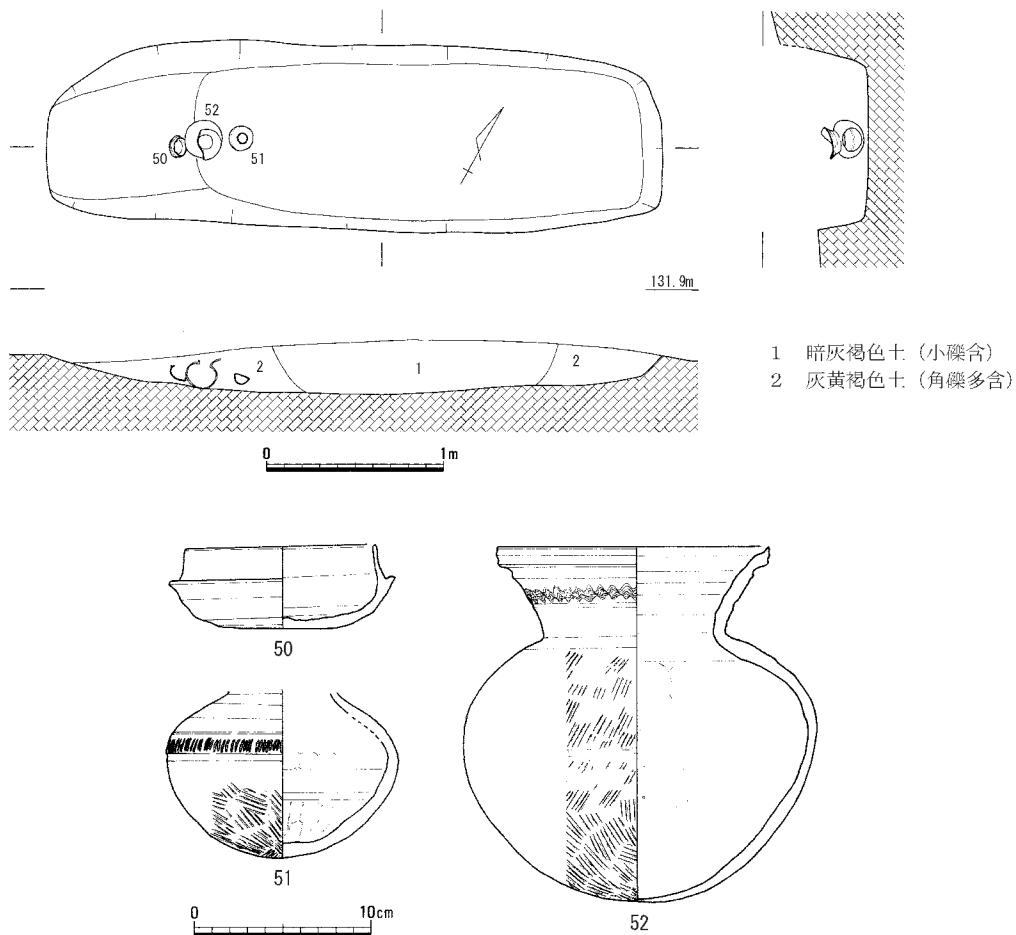
調査区のほぼ中央の最高所に位置する。平面は長方形で、長さ347cm・幅104cmを測る。主軸は等高線に平行する。掘り方が特徴的で、西側がスロープ状を呈する。その部分から、副葬品の須恵器50～52が並べ置かれた状態で出土している。このうち、51の小形壺は意図的に頸部で打ち欠かれており、52の壺とともに外面を平行叩き調整とする。また、土層では確認できなかったが、掘り方の形態から木棺があったと思われる。遺構の時期は、古墳時代中期後半と考えられる。(佐藤)

土墳墓3 (第26図)

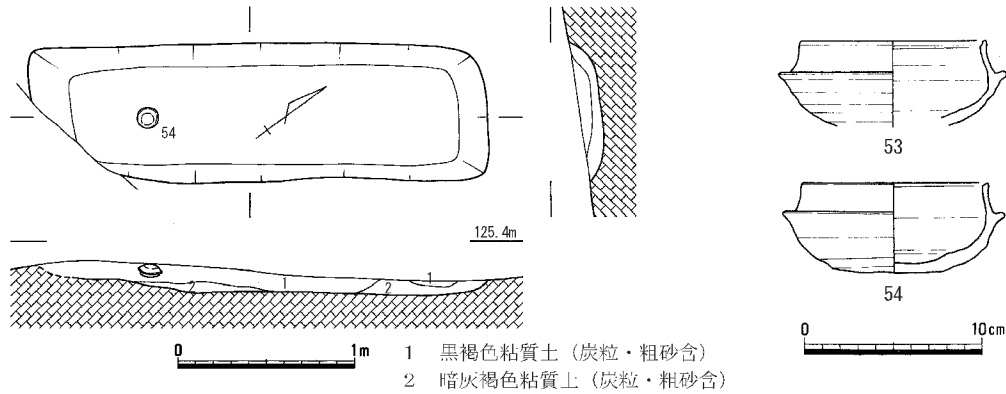
調査区のほぼ中央に位置する。平面は長方形で、長さ257cm・幅78cmを測る。主軸は等高線に平行する。副葬品と考えられる須恵器の杯53・54は、底面からやや浮いた状態で出土しており、本来は掘り方の上面に置かれていたと考えられる。また、土層では確認できなかったが、掘り方の形態から木棺があったと思われる。遺構の時期は、古墳時代中期後半と考えられる。(佐藤)

土墳墓4 (第27図、図版4)

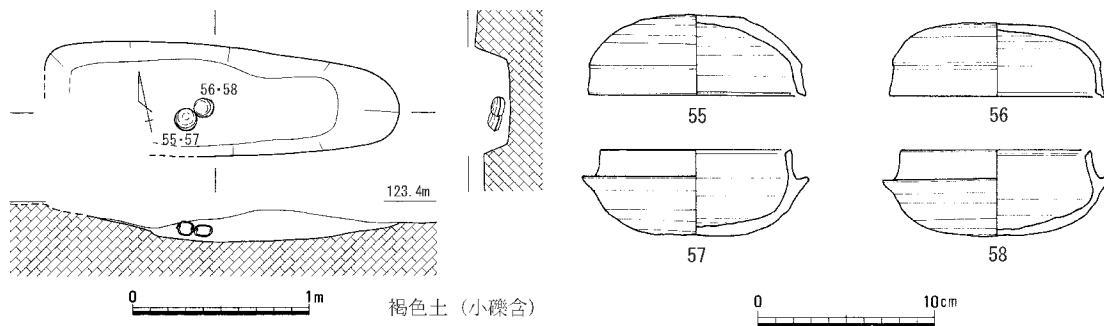
調査区東部の東斜面に位置する、等高線と直交する土墳墓である。掘り方は長楕円形を呈すが、西側は後世の攪乱で明確でない。規模は長軸200cm、短軸62cmを測る。木棺痕跡は確認できず、また壁



第25図 土墳墓2 (1/40)・出土遺物 (1/4)



第26図 土壙墓3 (1/40)・出土遺物 (1/4)



第27図 土壙墓4 (1/40)・出土遺物 (1/4)

の立ち上がりもはっきりしなかった。ほぼ中央付近で、須恵器の杯身57・58に杯蓋55・56がかぶさった状態で2セット並べられていた。これらの出土遺物から、時期は古墳時代後期初頭と思われる。

(有賀)

### 3 段状遺構

#### 段状遺構6 (第28図)

調査区のほぼ中央の西よりに位置する。南側を流失するが、平面は東西を主軸とする長方形で、現存で東西370cm・南北125cmを測る。また、壁体に沿って部分的に浅い溝がめぐっているが、床面に柱穴などは確認できなかった。出土遺物には、勝間田焼の碗59・60、小皿61～63がある。これらの遺物から、遺構の時期は平安時代末期～鎌倉時代と考えられる。

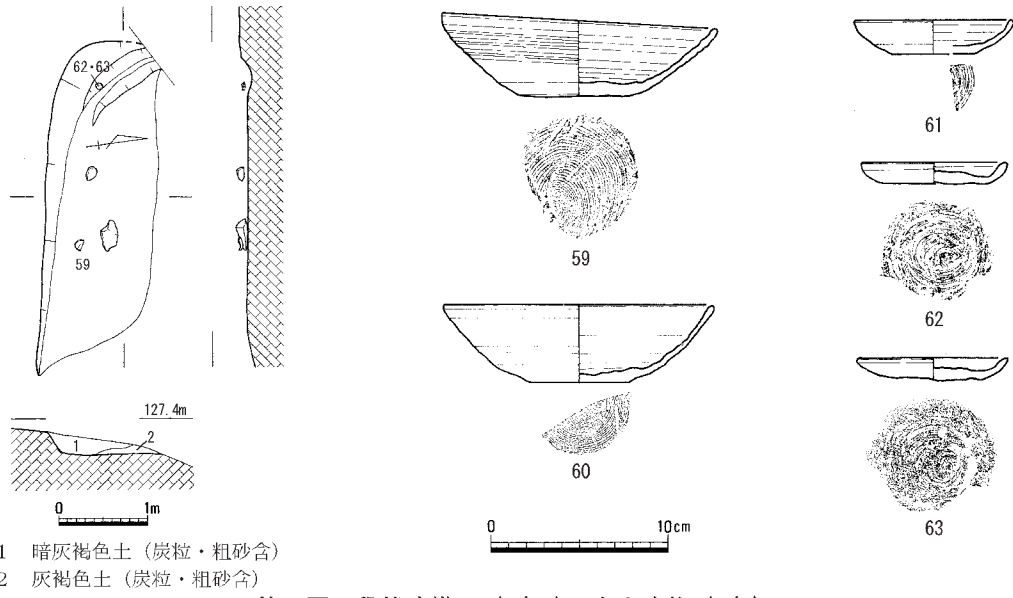
(佐藤)

### 4 被熱土壙

#### 被熱土壙1 (第29図)

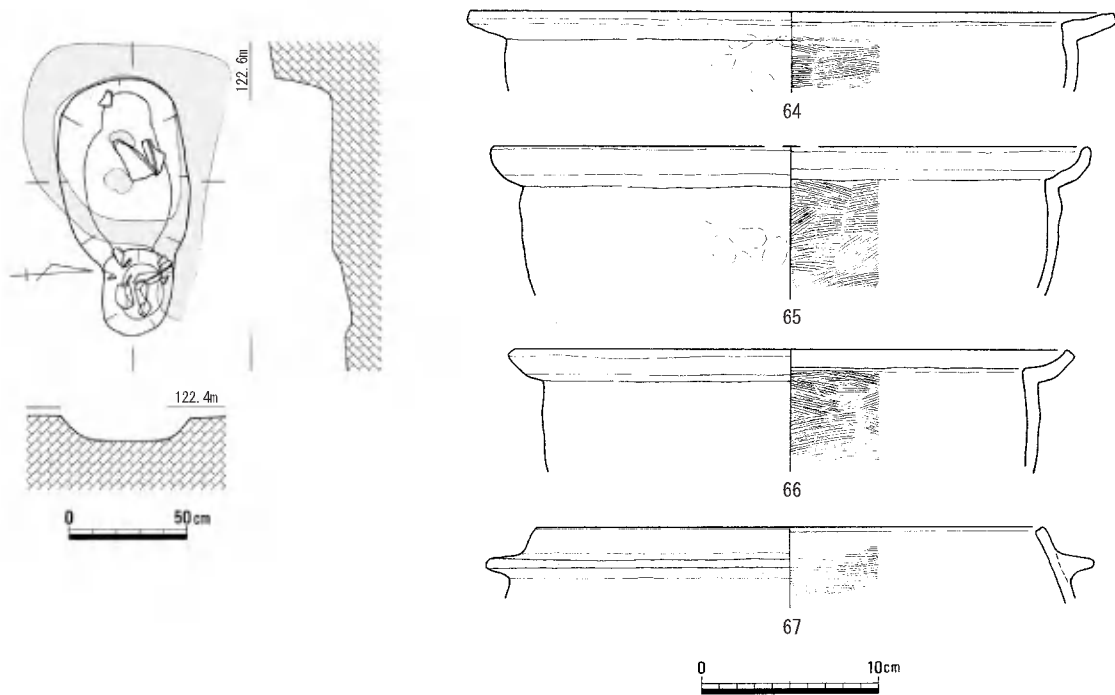
調査区のほぼ中央に位置する。大小の土壙が連結した構造で、長径109cm・短径54cmの長楕円形を呈する。丘陵上方側の土壙は、底面がほぼ水平で周囲が強く焼けている。また、下方側の土壙は底面が一段窪んでいる。これらの中に落ち込むように煮沸具が出土していることから、野外に設置された竈の下部構造と想定される。なお、周辺に上屋を構成する柱穴などは確認できなかった。出土遺物には、瓦質の土鍋64～66、羽釜67があり、遺構の時期は鎌倉時代と考えられる。

(佐藤)



- 1 暗灰褐色土（炭粒・粗砂含）
- 2 灰褐色土（炭粒・粗砂含）

第28図 段状遺構 6 (1/80)・出土遺物 (1/4)

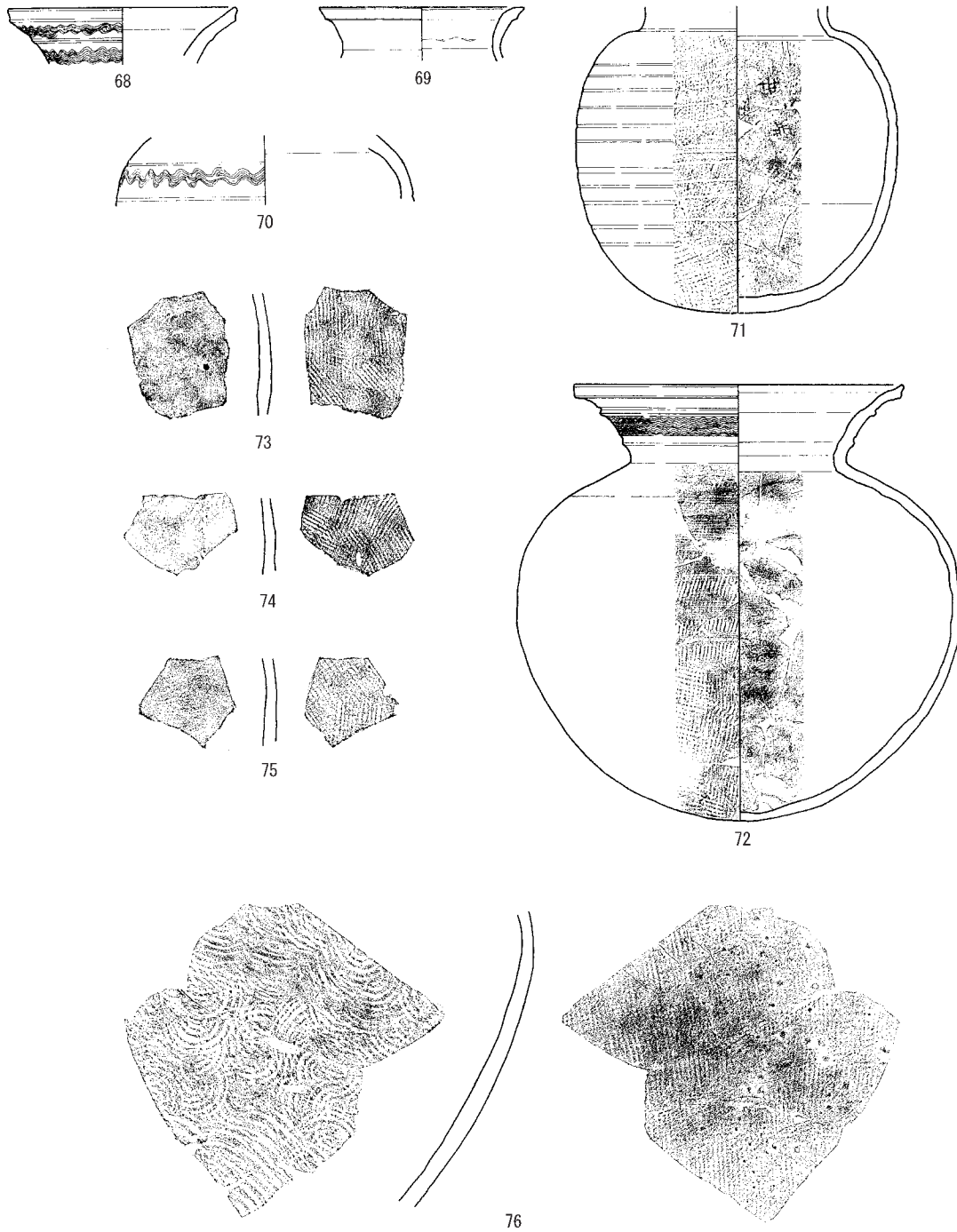


第29図 被熱土壇 1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

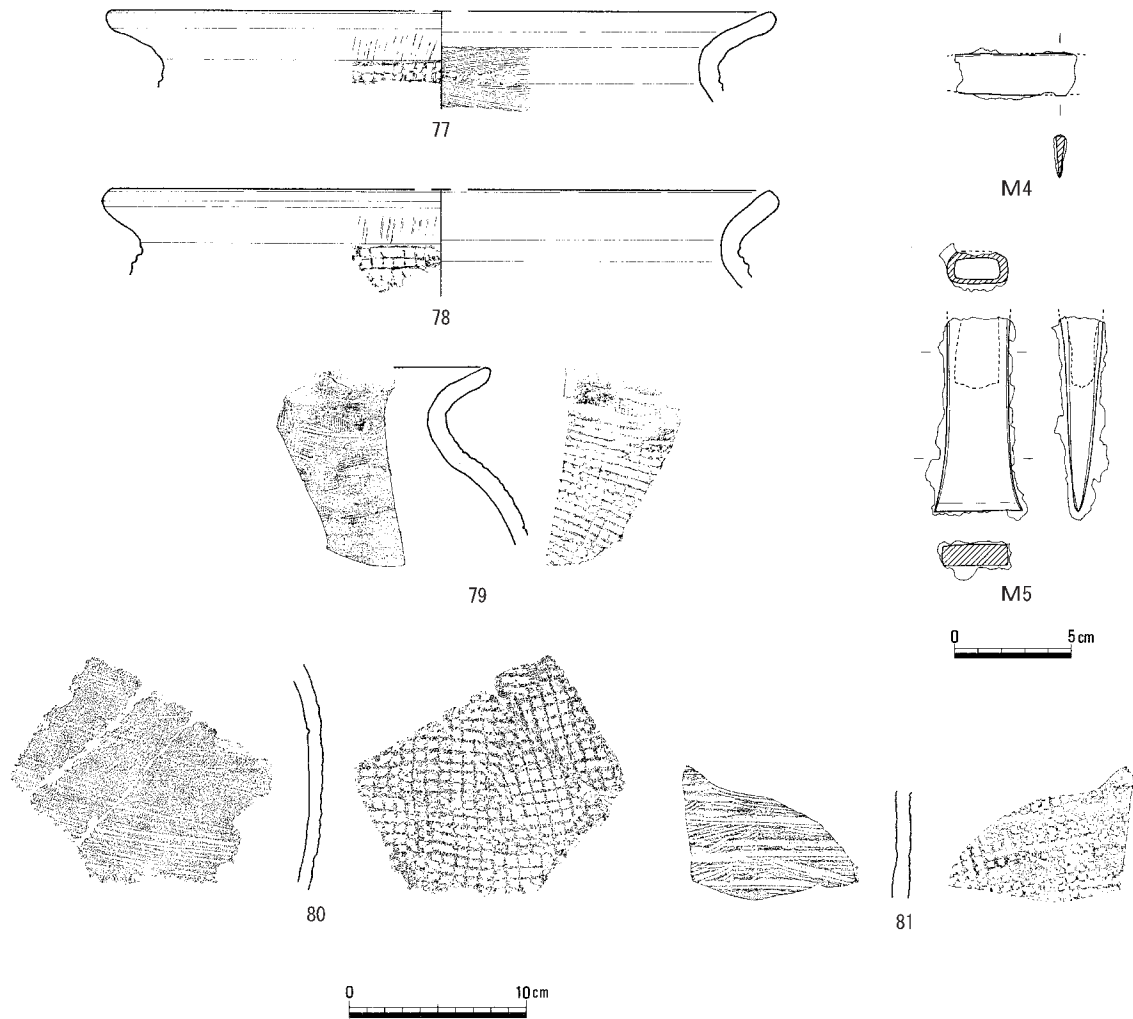
## 5 その他の遺構・遺物

単独の柱穴や包含層中から、古墳時代～鎌倉時代の遺物が若干出土している。このうち、68～75は古墳時代中期後半の初期須恵器で、胴部外面を平行叩きとし、内面の当て具痕を丁寧にナデ消している。68～72は壺で、頸部・胴部を突帯、沈線、波状文で飾る。とくに71は胴部外面上半を縄蓆文叩き

としており、陶質土器の可能性もある。73~75は壺または甕の胴部片である。これらは、土壙墓1・土壙墓2の周辺から出土しており、もともと土壙墓に副葬されていたものであった可能性が高い。76は甕の胴部で、68~75に比べやや新しい時期のものと考えられる。



第30図 その他の遺物① (1/4)



第31図 その他の遺物② (1/4・1/3)

77～81は、平安時代末期～鎌倉時代の勝間田焼である。77・78・79は甕の口縁部、80・81は甕の胴部である。いずれも胴部外面を格子叩き、内面をハケメ調整とする。M4は刀子で、古墳時代のものと思われる。M5は小形の有袋鉄斧である。鍛造品と考えられるが、袋部の合わせ目は肉眼では確認できない。刃部は先が撥状に広がる独特の形状をしている。大きさの割には重厚で、極めて精巧につくられている。時期は不明であるが、初期須恵器などとともに土壙墓の副葬品であった可能性もある。

(佐藤)

## 第4節 小結

国司尾遺跡では、弥生時代中期中葉～後葉・古墳時代中期・平安時代末期～鎌倉時代の3時期の遺構・遺物を確認した。弥生時代中期中葉～後葉については、竪穴住居7軒・段状遺構5基・柱穴列1条を検出し、集落域として利用されていたことが判明した。調査区の制限や、遺跡の遺存状況が悪いため、全体像ははっきりしないが、勝央町教育委員会が実施した隣接地での調査でも同時期の段状遺



構などが確認されており、この一帯に小規模な集落が点在していたと考えられる。

古墳時代中期については、土壙墓4基・土壙1基を検出した。後者の土壙も墓の可能性があり、この一帯は墓域として利用されていたと考えられる。これらの土壙墓は、特定の区画や墳丘をもたず、墓壙掘り方の規模も平均的なものであるが、いずれも須恵器や鉄器などが副葬されている点が注目される。特に、初期須恵器は、勝間田盆地周辺では初の出土であり特筆される。埋葬施設内に土器を副葬する風習は渡来文化の一要素と考えられており、これらの土壙墓群についても渡来文化に何らかの関わりをもつ被葬者像が想定される。

平安時代末期～鎌倉時代については、段状遺構1基・被熱土壙1基を確認した。隣接する坂田遺跡の状況から、ごく小規模な集落が営まれたようである。その後、畑や植林地、墓域として利用され、現在にいたっている。(佐藤)

#### 参考文献

園 正雄 「国司尾遺跡」 勝央町教育委員会 2002

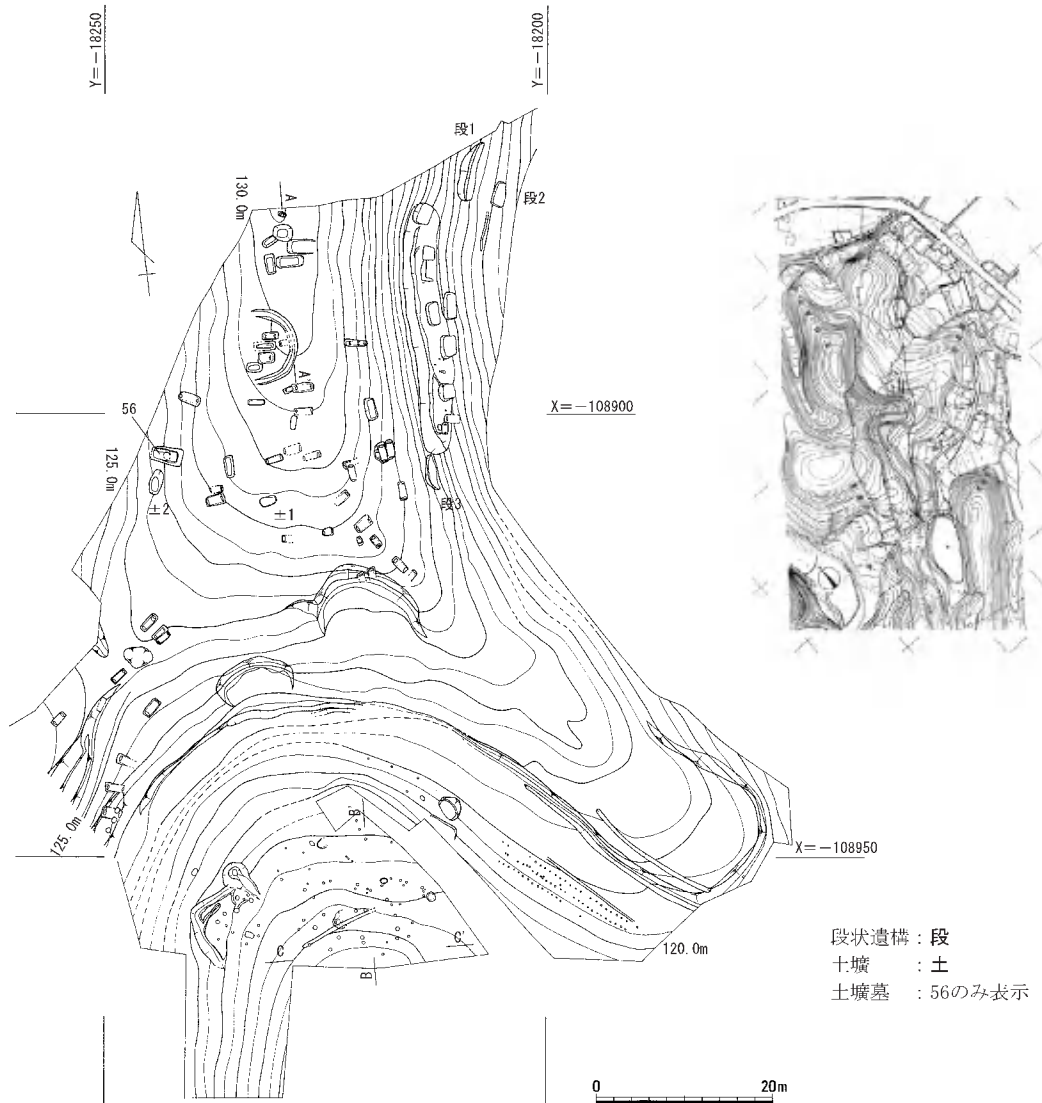
亀山修一 「考古学から見た吉備の渡来人」 『朝鮮社会の史的展開と東アジア』 1997

## 第4章 坂田遺跡・坂田墳墓群

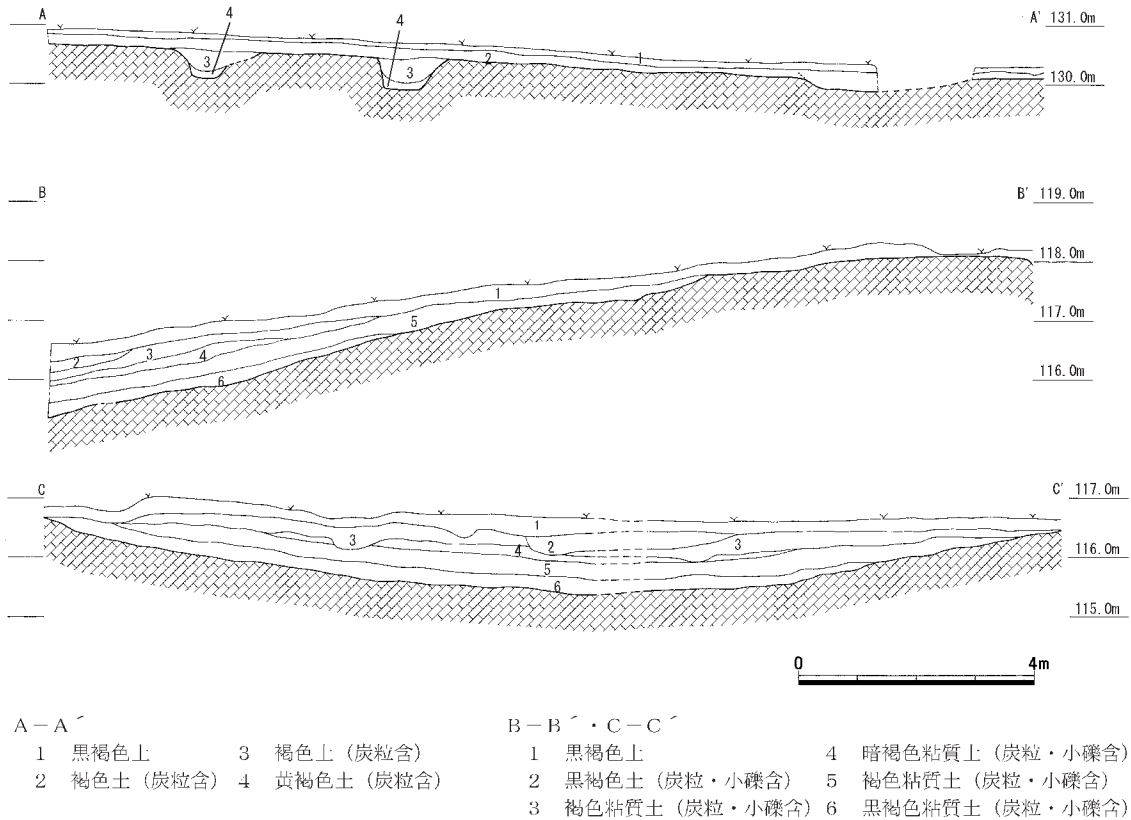
### 第1節 調査の概要

坂田遺跡・坂田古墳群は、発掘調査を実施した遺跡のうち、国司尾遺跡と宮ノ上遺跡の間に位置する。遺跡は樹枝状に展開する低丘陵とその谷間に立地し、平野部との比高は30～40mを測る。今回の調査では、遺跡地の南東側を带状に縦断したことになる（第32図）。

遺跡地は、調査前はおもに植林地、畑地、墓地となっていた。このため、調査地内は部分的に段状



第32図 坂田遺跡・坂田墳墓群全体図 (1/800)



第33図 トレンチ断面図 (1/120)

に造成されており、特に近現代の墓地周辺では地形改変が著しかった。

遺跡の基本層位は、丘陵部では大きく表土層・遺物包含層（旧耕作土、流土）・地山層に分けられる。遺構面は基本的に1面で、地山層に掘り込まれた各時代の遺構を検出した（第33図A-A'）。また、谷部では、長期間にわたる土層の堆積状況が確認できた。第33図B-B'・C-C'のうち、1・2層は近現代の耕作土、3・4層は中世の遺物包含層、5・6層は弥生時代～古代の遺物包含層である。最下層の6層からは、弥生時代中期中葉の土器が出土しており、当地に人々が定住し始めるのは、この時期以降のようである。また、この6層の土壌を採取し、花粉分析と植物珪酸体分析を実施した。しかし、両分析とも風化のため土壌中の花粉や珪酸体がほとんど認められず、風化に強いタケ亜科の珪酸体のみが多く検出されるという結果に終わり、植生復元はできなかった。

調査の結果、弥生時代中～後期・古墳時代・平安時代末期～鎌倉時代の遺構・遺物を検出した。以下、各時代の調査概要について記す。（佐藤）

## 第2節 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構として、段状遺構3基・土壇2基を検出した。いずれも弥生時代中期のもので、国司尾遺跡・坂田墳墓群と有機的な関係にあると考えられる。また、谷部の堆積土中からも弥生時代中期の土器・石器が出土しているが、その量は少ない。（佐藤）

## 1 段状遺構

### 段状遺構 1 (第34図)

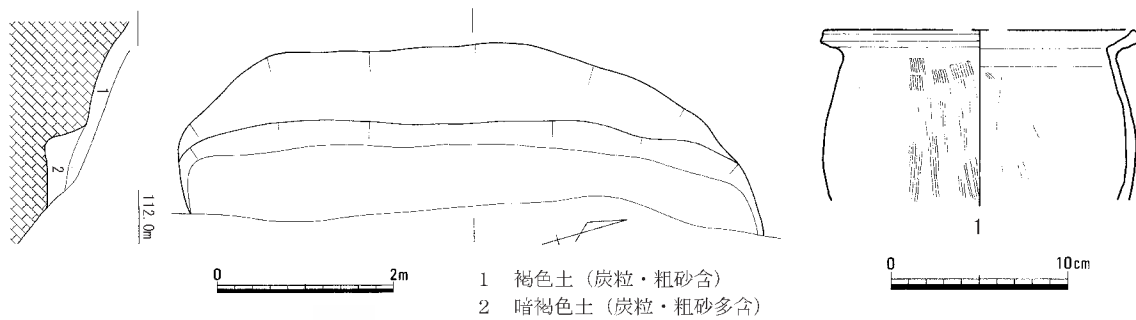
調査区の北端に位置する。東側を流失するが、平面は等高線に平行する長方形で、現存で南北655cm・東西180cmを測る。床面に被熱痕などは認められない。遺物は少ないが、弥生土器の甕1が出土しており、遺構の時期は弥生時代中期後葉と考えられる。(佐藤)

### 段状遺構 2 (第35図)

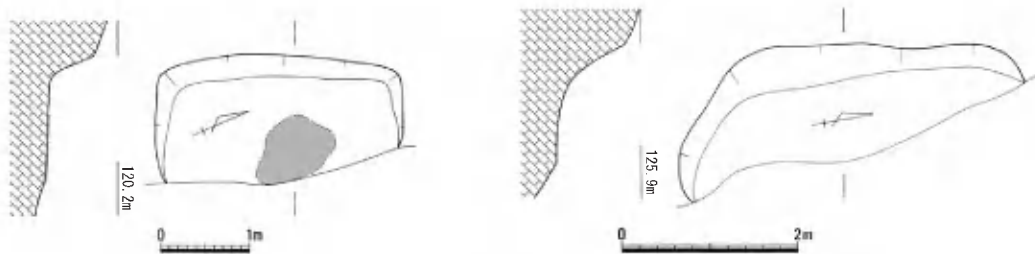
調査区の北端に位置する。東側を流失するが、平面は等高線に平行する長方形で、現存で南北278cm・東西150cmを測る。床面中央に直径約80cmの炭粒の分布が認められる。出土遺物はなく、時期は不明であるが、埋土や周辺の状態から弥生時代中期と考えられる。(佐藤)

### 段状遺構 3 (第35図)

調査区の中央やや北よりに位置する。東側を流失するが、平面は等高線に平行する長方形で、現存で南北400cm・東西130cmを測る。床面に被熱痕などは認められない。出土遺物はなく、時期は不明であるが、埋土や周辺の状態から弥生時代中期と考えられる。(佐藤)



第34図 段状遺構 1 (1/80)・出土遺物 (1/4)

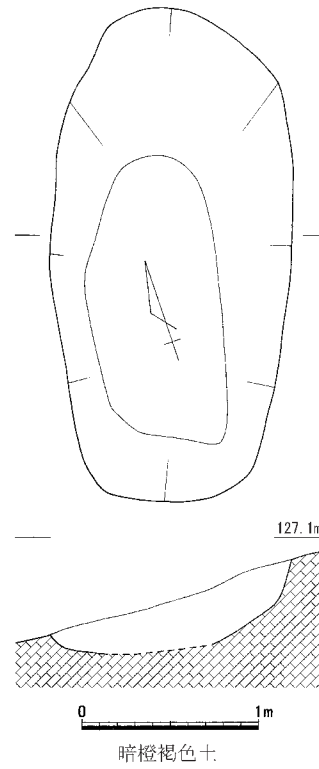
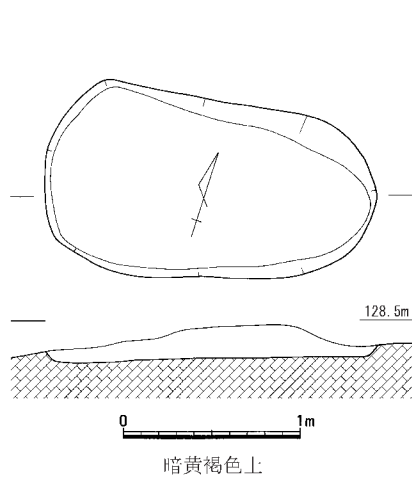


第35図 段状遺構 2・3 (1/80)

## 2 土壙

### 土壙 1 (第36図)

調査区のほぼ中央に位置する。長径187cm・短径105cmの平面長楕円形を呈し、主軸は等高線に平行する。その性格は不明であるが、底面は平坦であることから埋葬遺構の可能性もある。出土遺物もなく、時期は不明であるが、埋土や周辺の状態から弥生時代中期と考えられる。(佐藤)



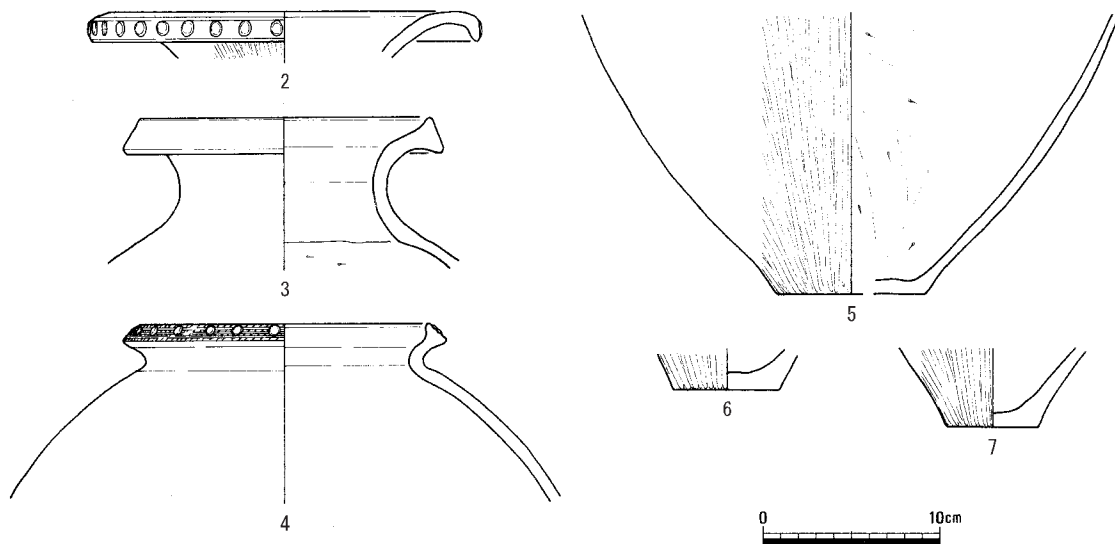
土壙 2 (第36図)

調査区のほぼ中央に位置する。長径280cm・短径137cmの平面長楕円形を呈し、主軸は等高線に平行する。その性格は不明であるが、底面は平坦であることから埋葬遺構の可能性もある。出土遺物もなく、時期は不明であるが、埋土や周辺の状況から弥生時代中期と考えられる。(佐藤)

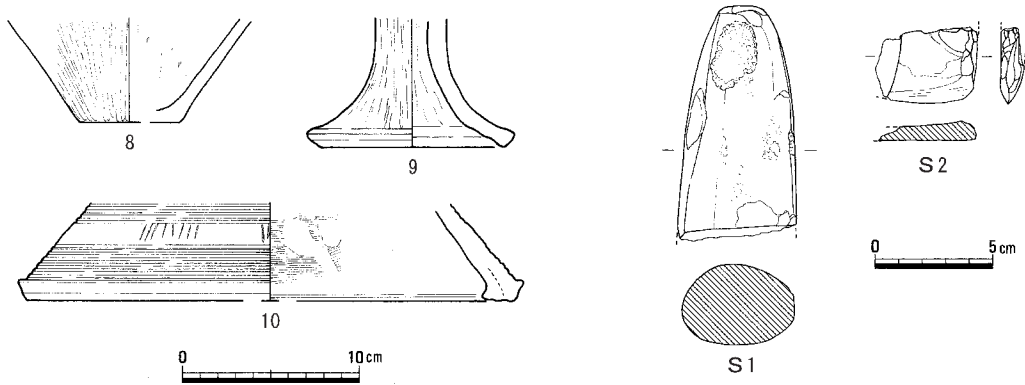
第36図 土壙 1・2 (1/40)

3 その他の遺構・遺物

谷部の堆積土中を中心に、弥生時代中期の遺物が出土している。このうち2～10は弥生土器で、2・3は壺、4～8は甕、9は高杯、10は器台である。いずれも遺存状態は悪く、丘陵上から流れたものと思われる。S1は太型蛤刃石斧で、斧身の中ほどで欠損している。石材は石英安山岩である。S2は扁平片刃石斧で、刃部の一部が残存する。石材は塩基性凝灰岩である。(佐藤)



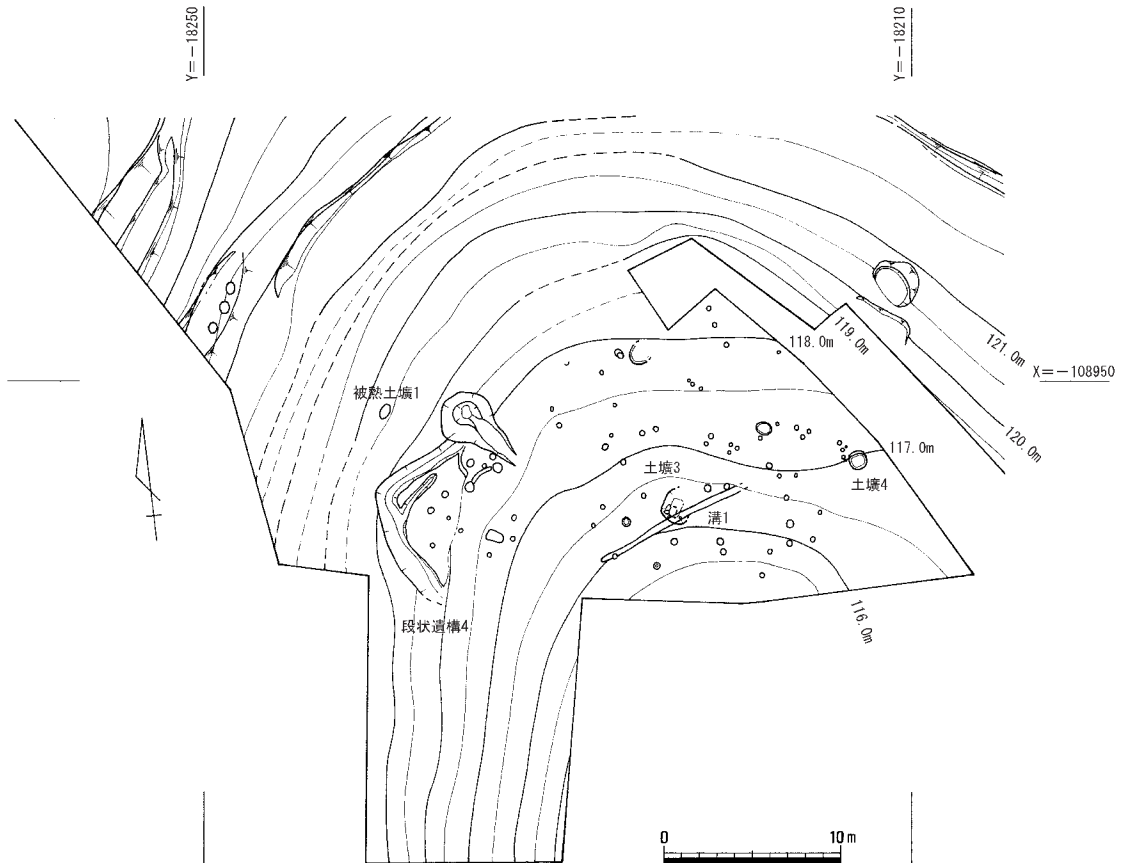
第37図 その他の遺物① (1/4)



第38図 その他の遺物② (1/4・1/3)

### 第3節 古墳時代以降の遺構・遺物

古墳時代については、少量の遺物が出土したのみで、遺構は認められない。また、奈良時代の遺物が若干出土しているが、遺構は周辺遺跡も含め皆無であった。平安時代末期～鎌倉時代の遺構として、段状遺構1基・土壇2基・被熱土壇1基・溝1条を検出した。南北朝時代以降の遺構・遺物は皆無で



第39図 谷部の中世遺構全体図 (1/400)

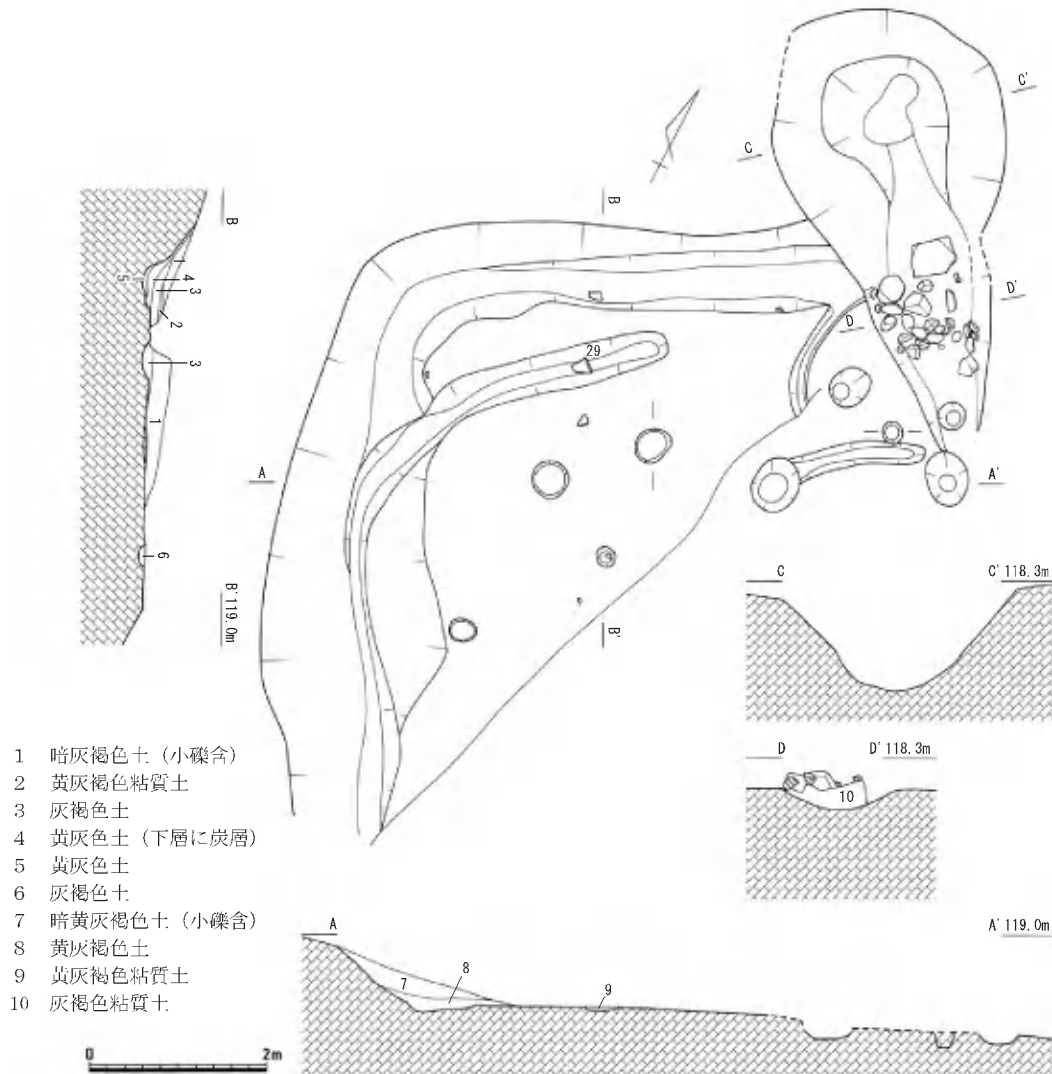
あった。このほか、谷部包含層から椀形滓M1が出土しており、周辺に古代～中世の製鉄炉あるいは鍛冶炉が存在したと考えられるが、今回の調査では確認できなかった。(佐藤)

## 1 段状遺構

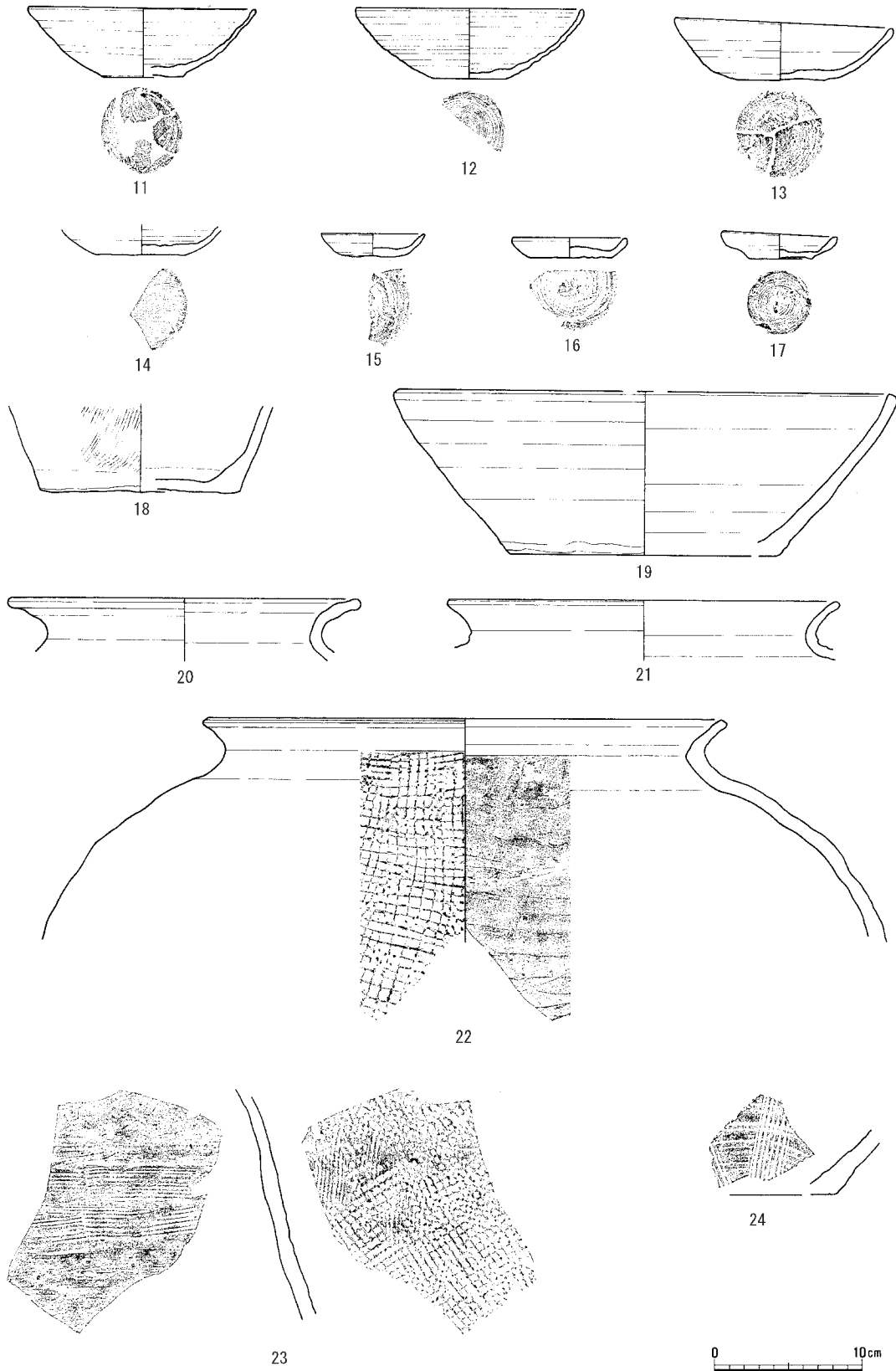
### 段状遺構4 (第40～42図、図版6-1、10)

調査区南部、国司尾遺跡へ伸びる尾根と坂田遺跡南東部へ伸びる尾根に挟まれた谷部に位置する。斜面を掘削し、平坦面をつくり出しているが、斜面下位の東部分は流出している。深さは検出面から約55cmを測り、方形の平面形をなしている。一辺の長さは残存部で約6.5mで、床面の周囲には大きく2条の溝がめぐる。また、床面上には4本の柱穴がみられたが、いずれも配置が一定せず、ここにもどのような構造物が建っていたのかは不明である。

この段状遺構を切って、北東部に井戸状の素掘り土塋が検出された。検出面からの深さは約1.2mで、平面形は径約2.5mの円形を呈する。この土塋の南東部に接続する溝は、拳大から人頭大の礫が

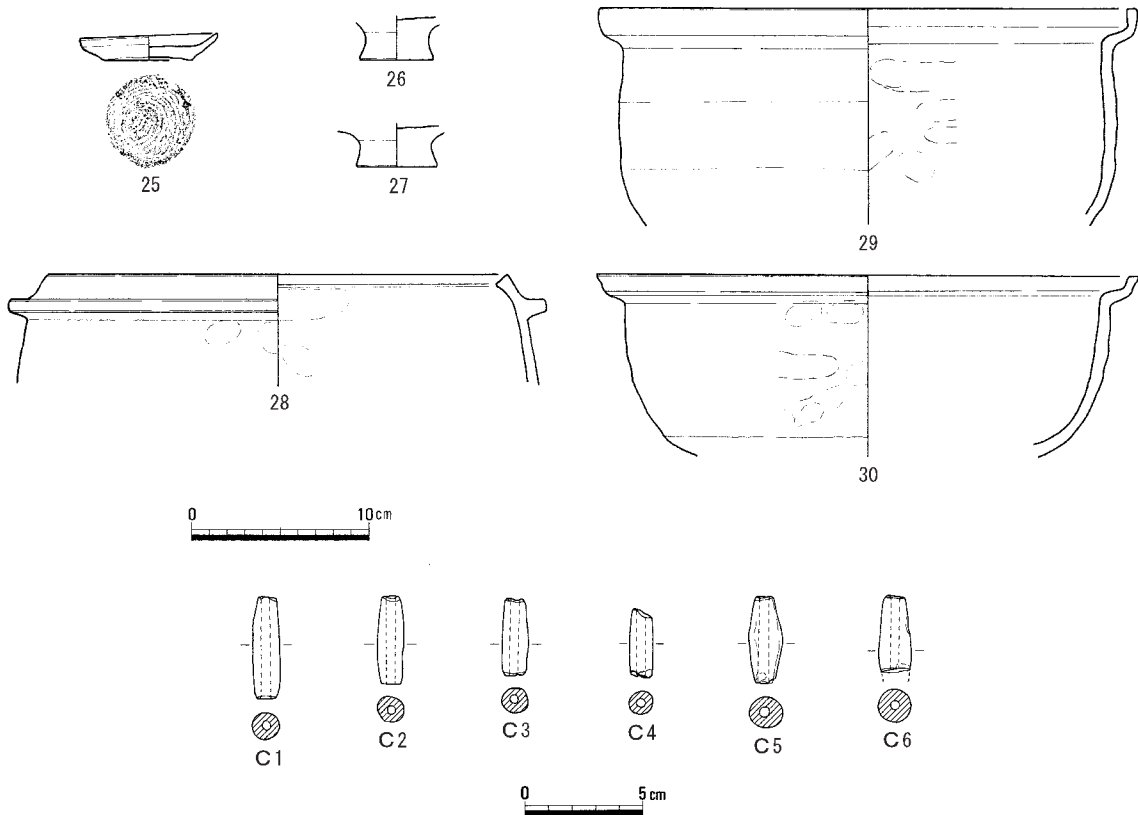


第40図 段状遺構4 (1/80)



第41図 段状遺構 4 出土遺物① (1/4)





第42図 段状遺構4出土遺物② (1/4・1/3)

置かれ斜面下位に伸びており、排水機能をもつと考えられる。出土遺物は勝間田焼が中心で、椀11～14や小皿15～17、壺18、捏鉢19、甕20～23である。また、備前焼の播鉢24や土師器の小皿25、鍋28～30も出土しており、時期は古代末～中世である。(有賀)

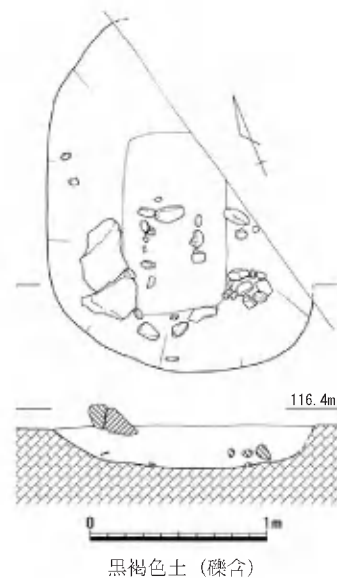
## 2 土壙

### 土壙3 (第43図)

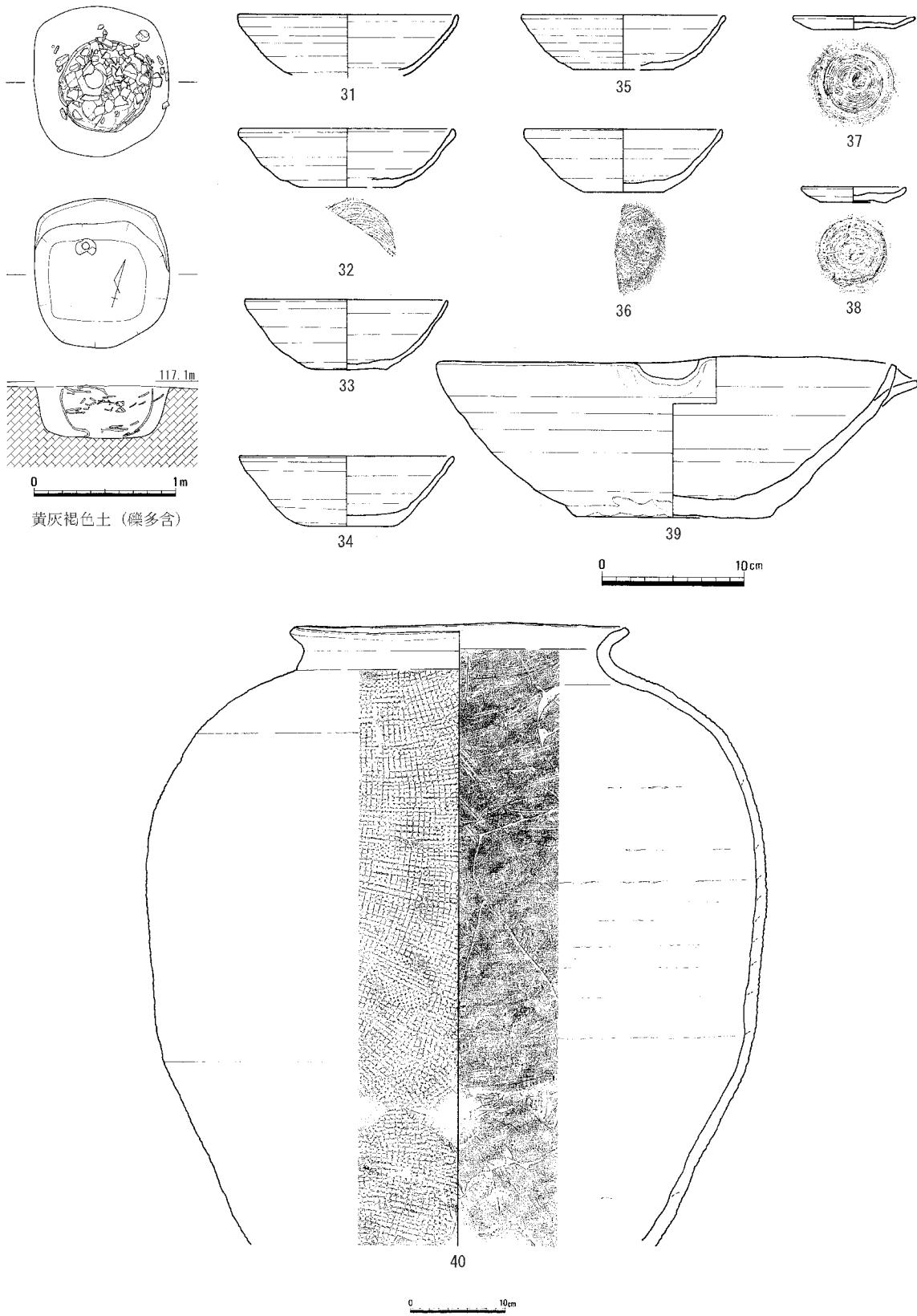
調査区南部に位置する、楕円形の土壙である。規模は、長軸2m・短軸1.45mを測る。拳大から人頭大の礫が底面から浮いて集積していた。人為的な石組みというよりは、くぼみに礫が堆積しているような状況と考えられる。(有賀)

### 土壙4 (第44・45図、図版6-2、10)

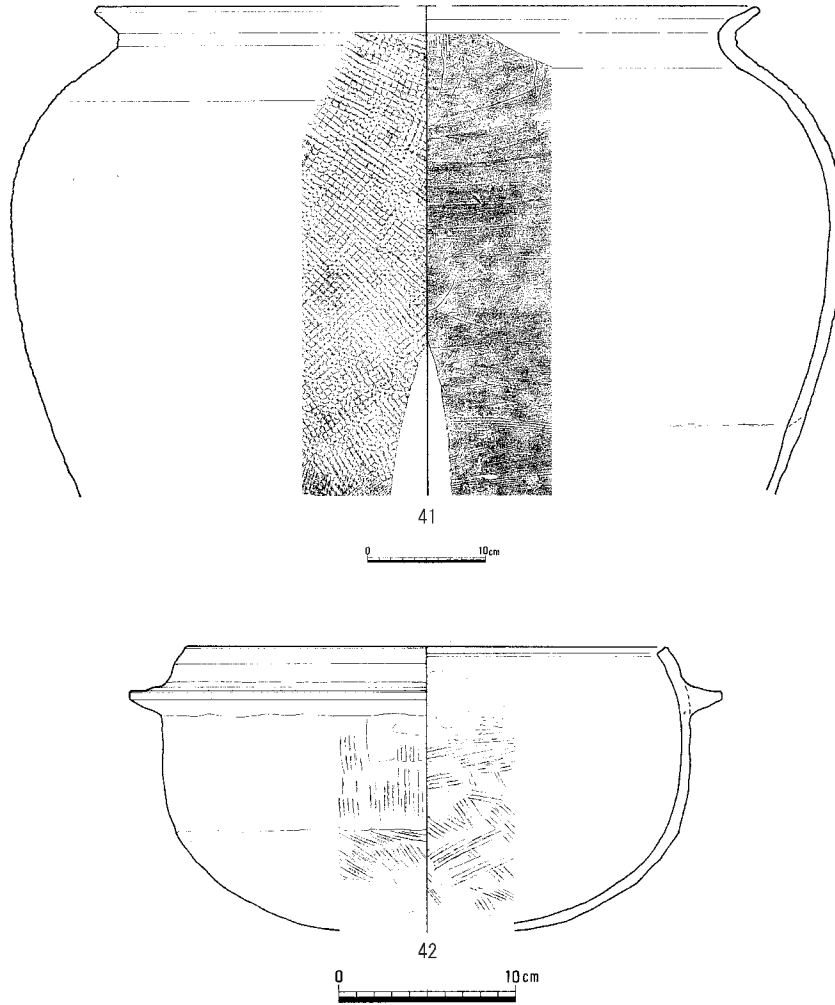
調査区南部谷状地形の海拔117m付近に位置する土壙で、上面規模は長軸106cm、短軸95cmを測る。隅丸方形の土壙を穿ち、中には口縁部を下に向けて勝間田焼の大甕40を置いている。大甕の中には、勝間田焼の椀31～36や小皿37・38、捏鉢39などが割れた状態で、重なり合うように堆積していた。大甕の口縁部は土壙底面に設置され、かつ底部は穿孔されている状況から、



第43図 土壙3 (1/40)



第44図 土壌4 (1/40)・出土遺物① (1/4・1/6)



第45図 土壌4出土遺物② (1/4・1/6)

この大甕が井戸枠として機能した取水施設であったものと思われる。遺物などから、時期は平安時代末と考えられる。  
(有賀)

### 3 被熱土壌

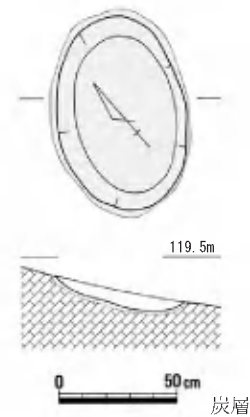
#### 被熱土壌1 (第46図)

調査区の南よりに位置する。長径82cm・短径55cmの平面楕円形を呈する。浅い皿状の底面が被熱により赤変しており、埋土中に多量の炭を含んでいた。遺物はなく、時期は不明である。  
(佐藤)

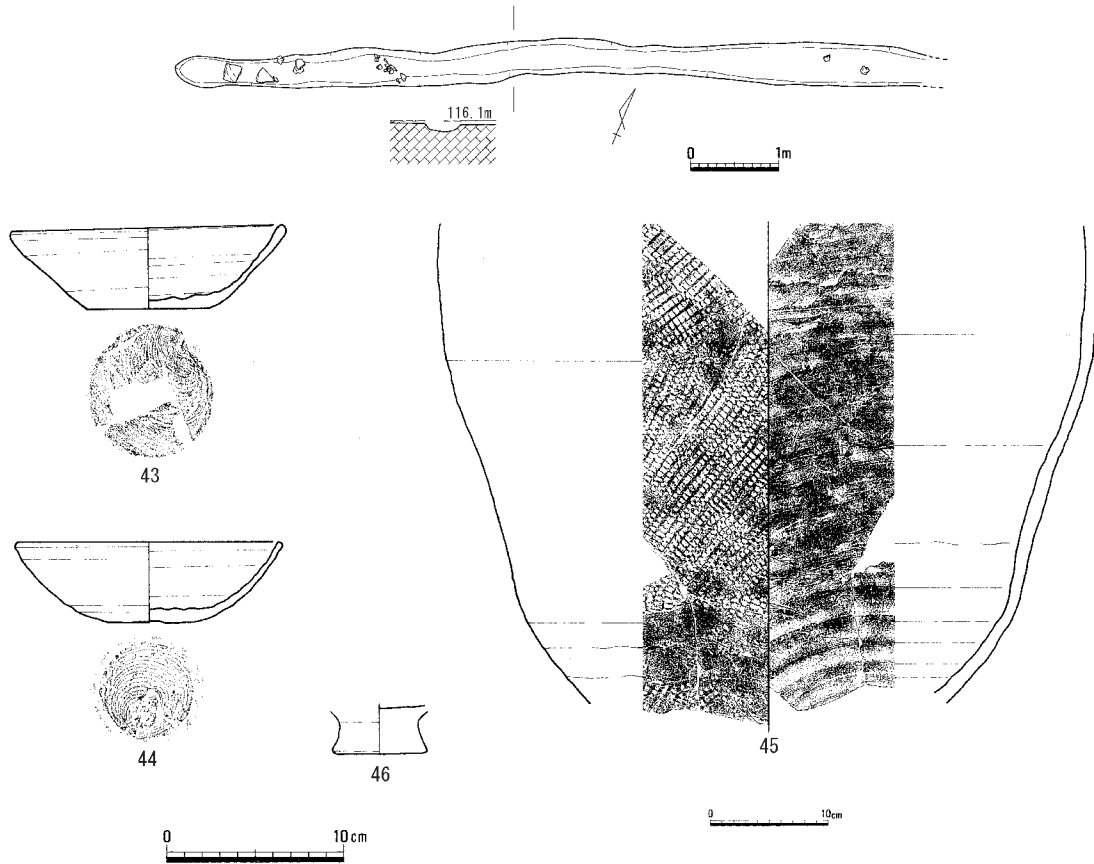
### 4 溝

#### 溝1 (第47図)

調査区の南よりに位置する。谷部を横断するように一直線に掘削した溝で、幅40~50cm、長さ8.5m以上を測る。その性格は不



第46図 被熱土壌1 (1/30)

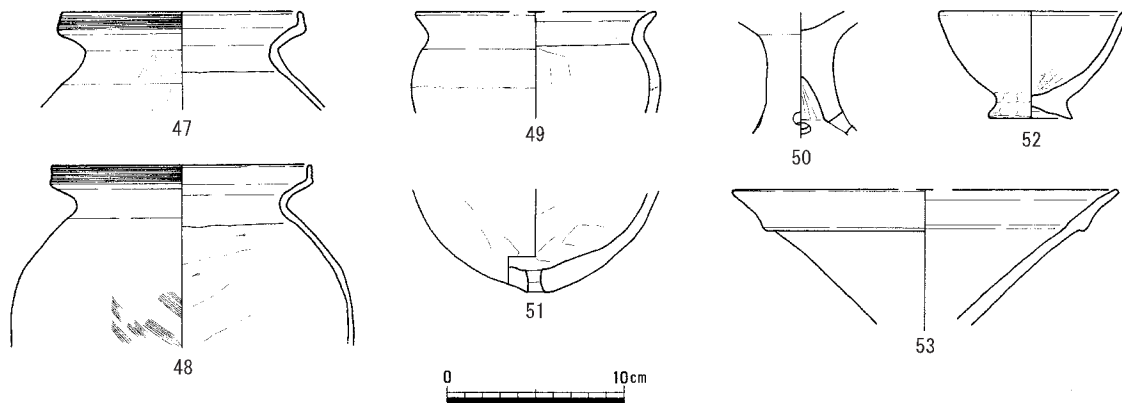


第47図 溝1 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/6)

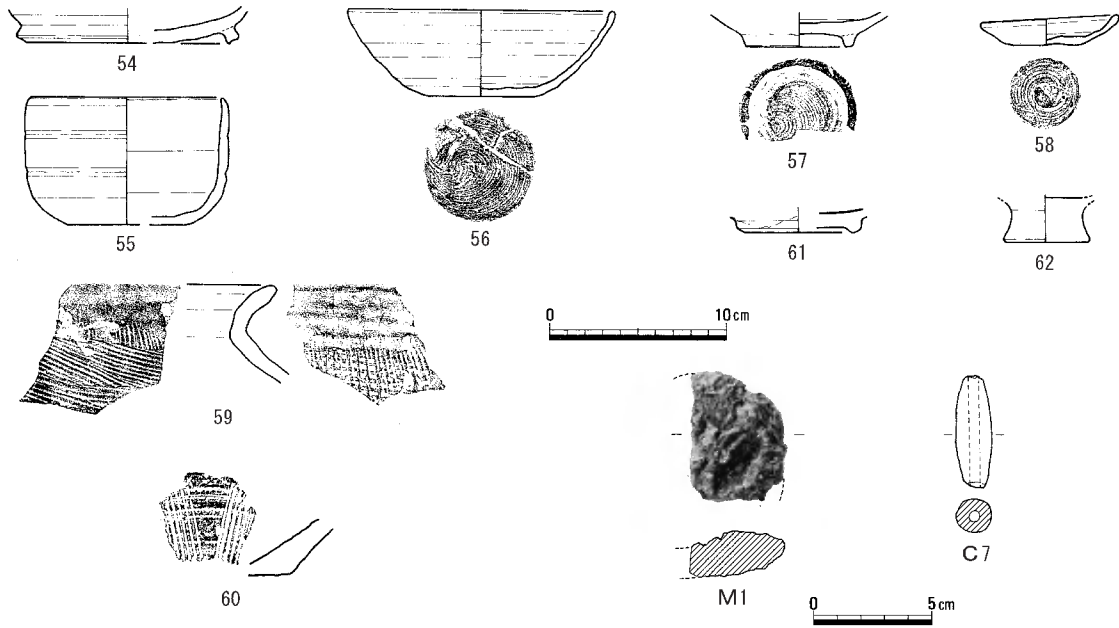
明であるが、先述の段状遺構4と主軸が平行するため、区画溝の可能性もある。溝中からは若干の土器が出土している。このうち、43・44は勝間田焼の椀、45は勝間田焼の甕、46は土師質土器のいわゆる柱状高台の杯である。これらから、遺構の時期は平安時代末期～鎌倉時代と考えられる。(佐藤)

### 5 その他の遺構・遺物

谷部の堆積土中を中心に、古墳時代前期・奈良時代・平安時代末期～鎌倉時代の遺物が出土してい



第48図 その他の遺物① (1/4)



第49図 その他の遺物② (1/4・1/3)

る。このうち47～53は弥生時代終末期～古墳時代初頭の土師器である。いずれも後述する坂田墳墓群の東斜面土壙墓群の下方から出土しており、土壙墓群の時期を示唆する。47・48は吉備型甕で、搬入品と考えられる。49は甕、50は高杯、51・52は鉢、53はいわゆる丹後系の器台である。54・55は奈良時代の須恵器である。56～59は勝間田焼の椀・小皿・甕である。60は備前焼の播鉢である。61は青磁の碗である。62は土師質土器の柱状高台の杯である。M1は椀形滓、C7は土錘である。(佐藤)

#### 第4節 坂田墳墓群

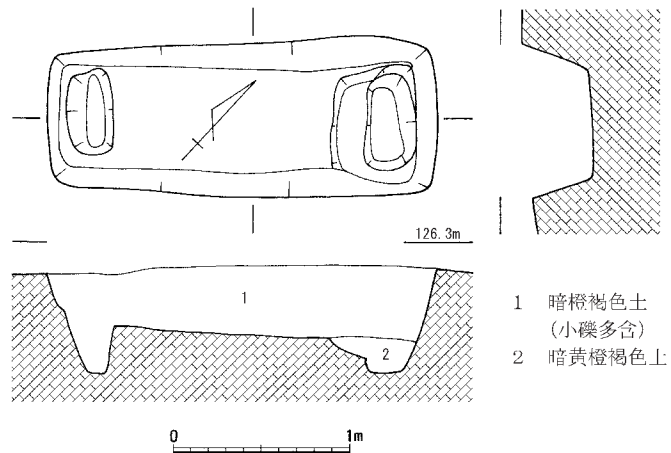
坂田墳墓群は樹枝状に展開する丘陵尾根筋に立地する遺跡である。調査の結果、弥生時代中～後期と考えられる土壙墓38基、弥生時代終末期～古墳時代初頭と考えられる土壙墓6基、古墳時代前半と考えられる土壙墓9基と箱式石棺墓

1基、古墳時代後半の土壙墓2基、鎌倉時代の土壙墓1基を検出した。ただし、弥生時代中期～古墳時代前半の土壙墓については、そのほとんどに遺物がなく、時期が不明確なものが多くを断っておく。(佐藤)

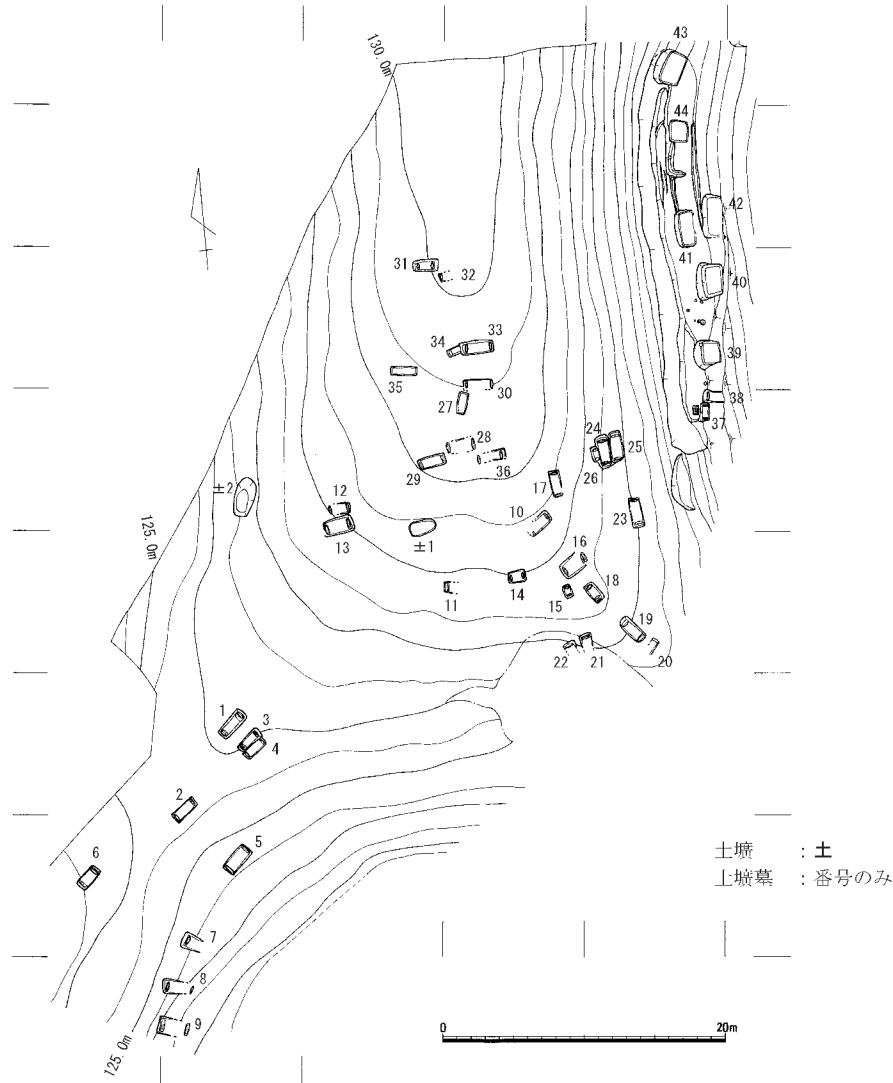
##### 1 土壙墓

###### 土壙墓1 (第50図)

鞍部に位置し、等高線と直交する土壙墓である。掘り方は平面長方形



第50図 土壙墓1 (1/40)

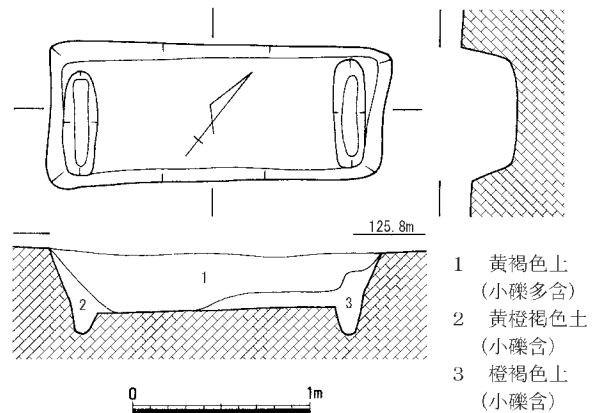


第51図 土壙墓群（彌生時代）全体図（1/500）

で、検出面での長さ210cm・幅88cmを測る。底面はほぼ水平で、両端に小口溝が検出された。北東側の小口溝は、中心に向かって二段掘りになっている。遺物は皆無であるが、他遺構との関係から彌生時代中～後期と思われる。（有賀）

土壙墓 2（第52図）

鞍部に位置し、等高線と平行する土壙墓で、掘り方は平面長方形である。検出面での長さ189cm、幅75cmを測る。底面は水平で、両端に小口溝がある。遺物は皆無であるが、他遺構との関係から時期は彌生時代中～後期と思



- 1 黄褐色上  
（小礫多含）
- 2 黄橙褐色土  
（小礫含）
- 3 橙褐色上  
（小礫含）

第52図 土壙墓 2（1/40）

われる。(有賀)

**土壙墓3** (第53図、図版6-4)

土壙墓4と隣り合っており、切られている可能性が考えられた。また、土壙墓1とほぼ主軸の向きが同じで、1mも離れていない。平面長方形で、検出面での長さ195cm・幅68cmを測る。両端に小口溝を検出したが、西側では2条が確認できた。時期は弥生時代中～後期と思われる。(有賀)

**土壙墓4** (第53図、図版6-4)

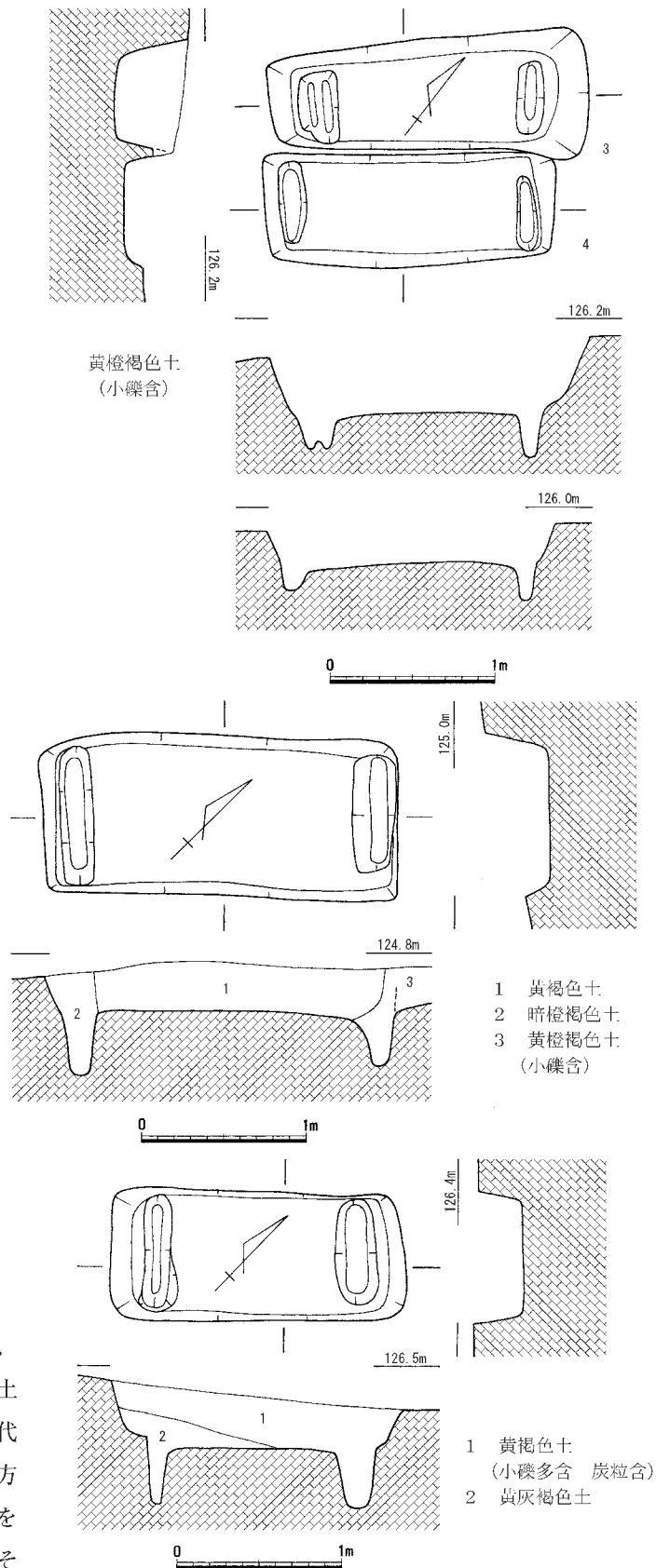
土壙墓3に隣接して位置するが、切り合い関係から土壙墓3より新しい可能性がある。平面形は長方形で、検出面での長さ175cm・幅69cmを測る。両端に小口溝を検出し、その間隔は約142cmである。墳墓群内に、このように主軸方向が同一で近接する例は3か所を数える。遺物は皆無であるが、時期は他遺構との関係から弥生時代中～後期と思われる。(有賀)

**土壙墓5** (第53図)

鞍部上の海拔125m付近に位置する土壙墓である。掘り方は平面長方形で、等高線に平行している。検出面での長さ214cm・幅95cmで、両端に小口溝を検出した。遺物は皆無であるが、時期は弥生時代中～後期と思われる。(有賀)

**土壙墓6** (第53図)

鞍部上の海拔126.5m付近に位置し、土壙墓群の広がりの中で最西端にある土壙墓である。これより西側では弥生時代の土壙墓は確認されなかった。平面長方形で、検出面での長さ177cm・幅78cmを測る。底面両端で小口溝を検出した。その間隔は、122cmである。主軸は等高線

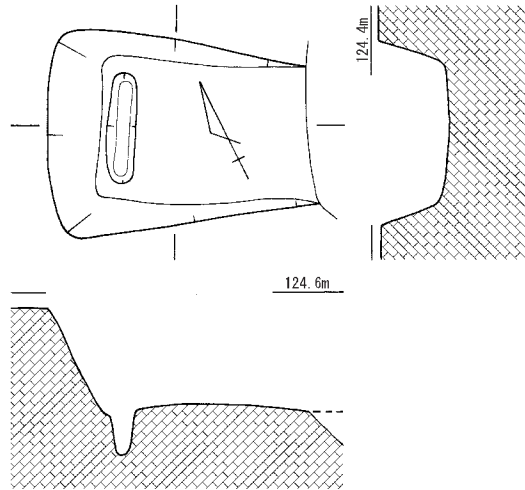


第53図 土壙墓3～6 (1/40)

に直交する。遺物は皆無であるが、時期は他の土壙墓と同様に弥生時代中～後期と思われる。(有賀)

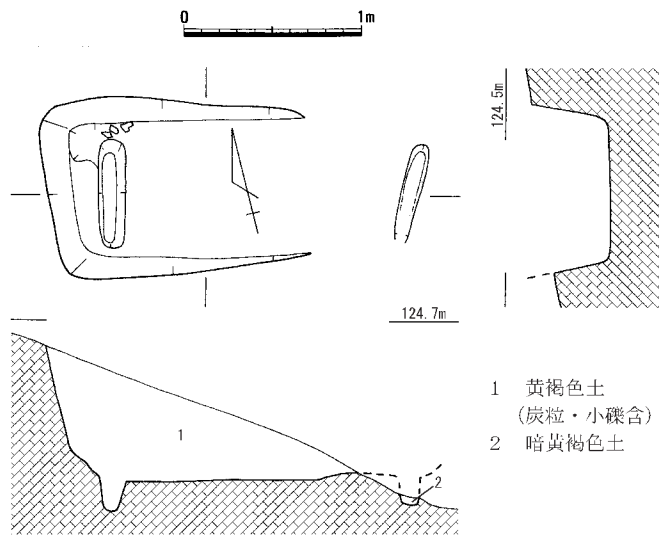
土壙墓7 (第54図)

鞍部の南東斜面に位置する土壙墓で、東半は流失している。検出面での幅は105cmで、平面長方形と考えられる。残存している西側の深さは56cmを測り、小口溝を確認した。時期は弥生時代中～後期と思われる。(有賀)



土壙墓8 (第54図)

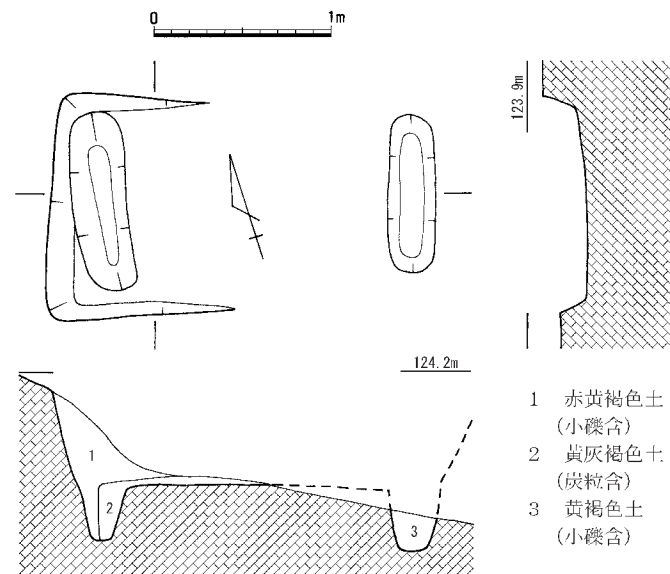
土壙墓7の南西に位置し、等高線に直交している。斜面下位は流失しているが、小口溝が両端で確認できた。その間隔は170cmである。掘り方の平面形は長方形で、上面幅は95cmを測る。西側の小口溝周辺で、底面より浮いた状態で弥生土器の小片が出土した。細片のため詳細な時期は不明であるが、弥生時代中～後期と思われる。(有賀)



- 1 黄褐色土 (炭粒・小礫含)
- 2 暗黄褐色土

土壙墓9 (第54図)

土壙墓8の南西に位置し、等高線に直交している。斜面下位は流失しているが、小口溝が両端で確認できた。その間隔は173cmで、残存している西側の深さは検出面から50cmを測る。遺物は皆無であるが、時期は他の土壙墓と同様に弥生時代中～後期と思われる。土壙墓6と同様に、これより西には土壙墓群は広がらない。(有賀)



- 1 赤黄褐色土 (小礫含)
- 2 黄灰褐色土 (炭粒含)
- 3 黄褐色土 (小礫含)

土壙墓10 (第55図)

尾根上、海拔128.5m付近に位置する土壙墓である。西側の一部は後世の削平により消失している

第54図 土壙墓7～9 (1/40)



る。掘り方は平面長方形で、両端に小口溝をもつ。遺物は出土していない。

(有賀)

**土壙墓11 (第55図)**

尾根の南斜面、海拔128m付近に位置する土壙墓で、等高線に平行している。東側半分以上は後世の削平により失われているが、西側には小口溝が認められる。検出面からの深さは56cmで、幅は77cmを測る。時期は、他の土壙墓と同様に弥生時代中～後期と思われる。

(有賀)

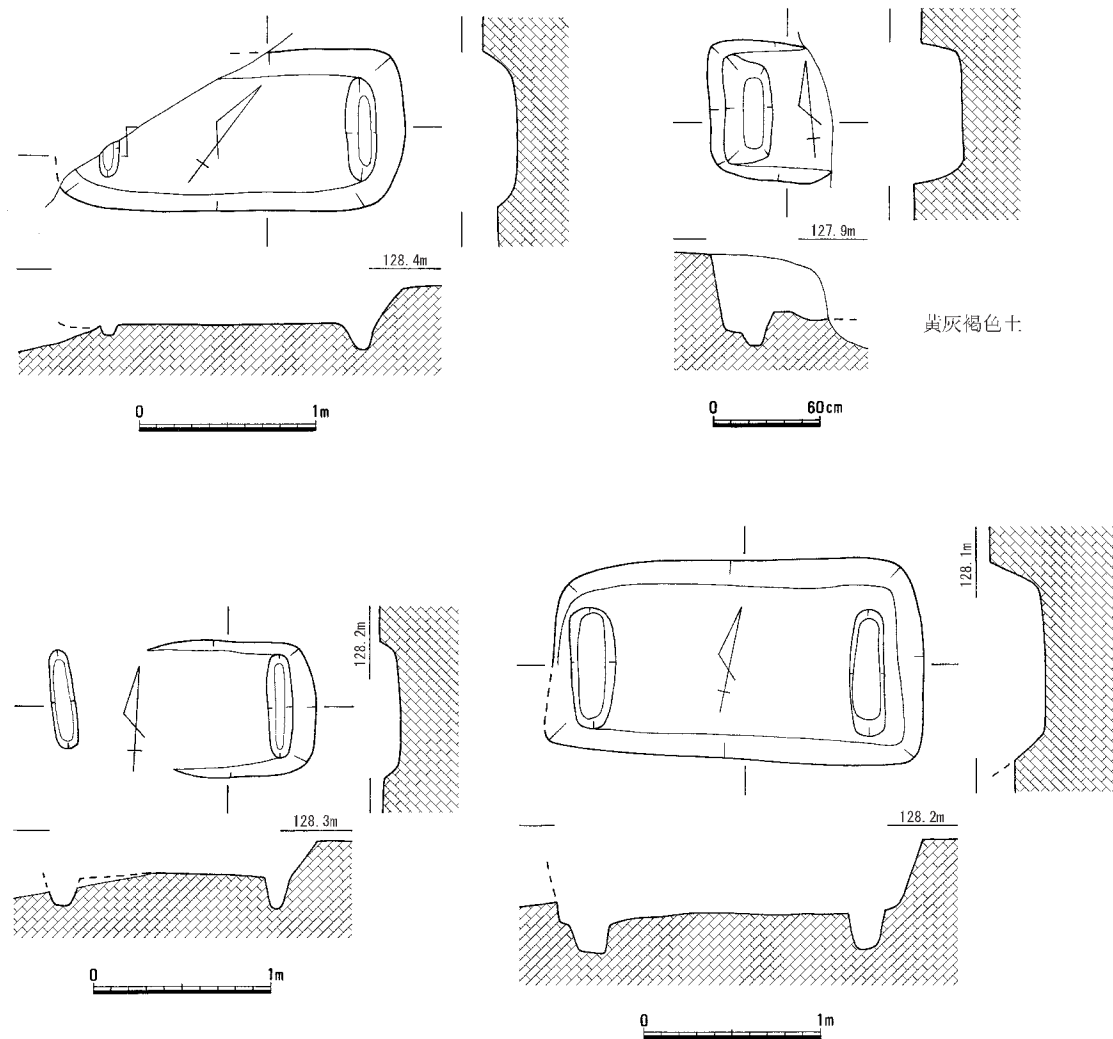
**土壙墓12 (第55図)**

尾根の西斜面、海拔128m付近に位置する。土壙墓主軸は等高線と直交し、斜面下位の西半は流失している。掘り方は平面長方形と推定され、両端には小口溝を検出した。両溝の間隔は122cmである。遺物の出土はないが、時期は弥生時代中～後期と思われる。

(有賀)

**土壙墓13 (第55図)**

尾根の西斜面、土壙墓12の南側に隣接して検出された土壙墓である。掘り方は平面長方形で、検出面での長さ209cm・幅112cmを測る。底面はほぼ水平で、両端に小口溝を確認した。その間隔は155cmで、規模は隣り合う土壙墓12よりも大きい。遺物の出土はなく、詳細な時期は不明であるが、他の土



第55図 土壙墓10～13 (1/40)

墳墓と同様に弥生時代中～後期と思われる。

(有賀)

土壙墓14 (第56図)

尾根の南斜面、海拔128m付近に位置する土壙墓である。等高線に平行して築かれている。掘り方は平面長方形で、検出面での長さ124cm・幅81cmである。両端で小口溝を検出し、両溝の間隔は86cmと小形である。時期は、弥生時代中～後期と思われる。

(有賀)

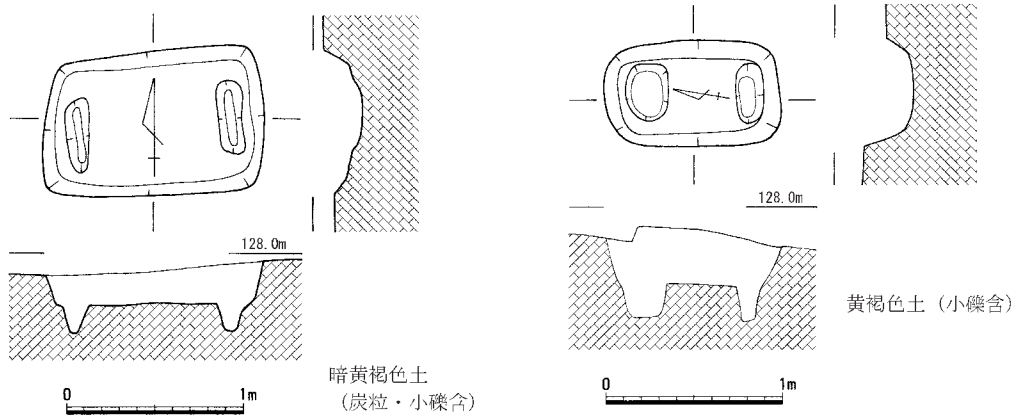
土壙墓15 (第56図)

調査区内南方に伸びる丘陵から、さらに南東に舌状に伸びる尾根の付け根に位置する。海拔128m付近で、等高線とは主軸が直交する。掘り方は平面長方形で、検出面での長さ98cm・幅60cmとかなり小形である。底面には両端に小口溝が確認でき、北側のものは平面楕円形である。

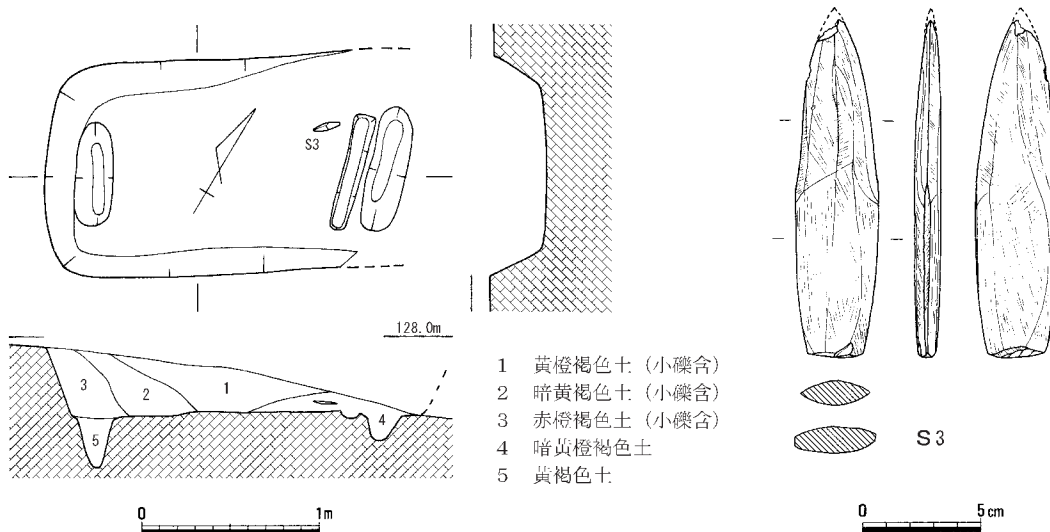
(有賀)

土壙墓16 (第57図、図版6-5、11)

土壙墓15の北に位置し、等高線とは主軸が平行している。斜面下位の東側が流失しているが、掘り方は平面長方形である。検出面からの深さは西小口側で38cmを測り、幅は121cmである。底面はほぼ水平で、両端で小口溝を確認した。東側の溝は2本検出したが、内側はかなり浅い。弥生時代中～後



第56図 土壙墓14・15 (1/40)



第57図 土壙墓16 (1/40)・出土遺物 (1/3)

期に比定される土壙墓群の中で唯一、副葬品を伴う。粘板岩製の磨製石剣S3は完形で、切先を西に向け、底面から約5～10cmのところ出土した。(有賀)

**土壙墓17 (第58図)**

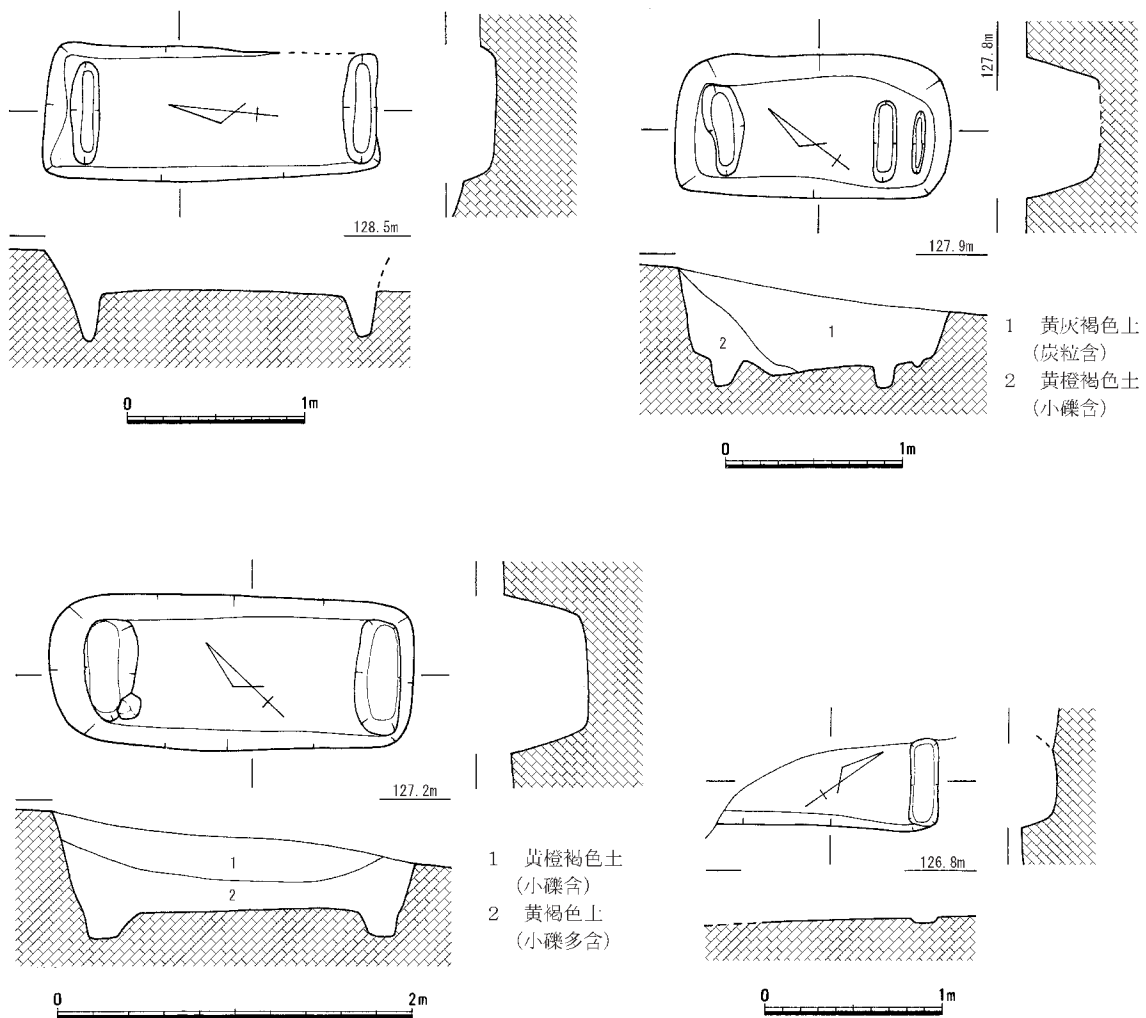
尾根の南東斜面、海拔128.5m付近に位置する土壙墓で、等高線に平行している。北には後に箱式石棺墓1が築かれる。掘り方は平面長方形で、両端に小口溝を設けている。その間隔は155cmである。出土遺物はないが、時期は弥生時代中～後期と考えられる。(有賀)

**土壙墓18 (第58図)**

土壙墓16の南に位置し、等高線に直交している。掘り方は平面長方形で、検出面での長さ154cm・幅81cmを測る。底面両端には小口溝が検出され、その間隔は90cmである。南側では2条の溝が確認されたが、外側のものはかなり浅い。時期は、弥生時代中～後期と思われる。(有賀)

**土壙墓19 (第58図)**

尾根の南東斜面、海拔127m付近に位置する土壙墓である。掘り方は平面長方形で、長さ205cm・幅88cmを測る。主軸は等高線と直交している。底面はほぼ水平で、両端にやや幅広の小口溝を検出した。



第58図 土壙墓17～20 (1/40)

北側の小口溝の脇には、拳大の礫が置かれていた。時期は弥生時代中～後期と思われる。

(有賀)

**土壙墓20** (第58図)

土壙墓19の南に位置する土壙墓で、主軸は等高線と平行している。西側は後世の削平により消失しているため、東側の小口溝のみが確認できた。遺物は出土していない。この土壙墓より南東方向には墓域は展開しないようである。

(有賀)

**土壙墓21** (第59図)

尾根の南斜面、海拔127m付近に位置する。斜面下位の南半は、後世の削平により消失している。主軸は等高線と直交しており、残存している北側で小口溝を検出した。北小口側の深さは、検出面から50cmを測る。時期は、他の土壙墓と同様に弥生時代中～後期と思われる。

(有賀)

**土壙墓22** (第59図)

土壙墓21の西隣に位置し、同様に等高線に直交している。北小口側のみが残存し、大半が後世の削平により消失している。掘り方上面での幅は83cmを測り、小口溝が確認できた。遺物の出土はなく、詳細な時期は不明であるが、弥生時代中～後期と思われる。

(有賀)

**土壙墓23** (第59図)

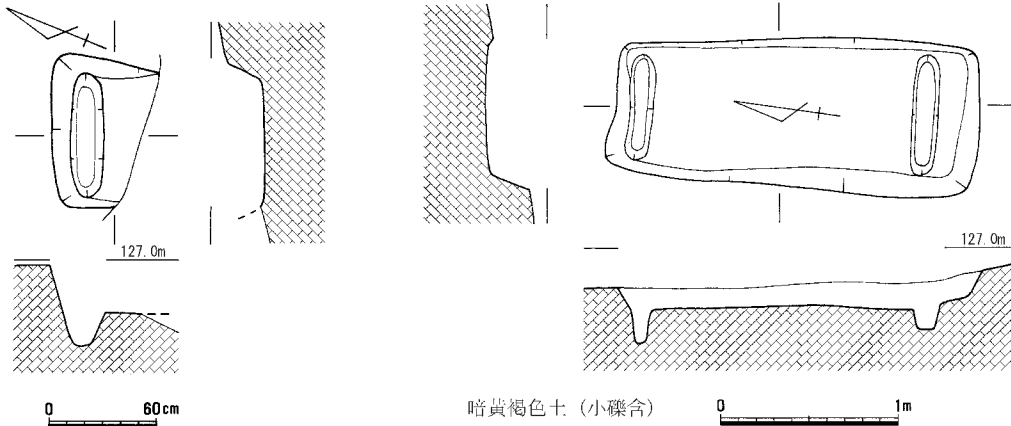
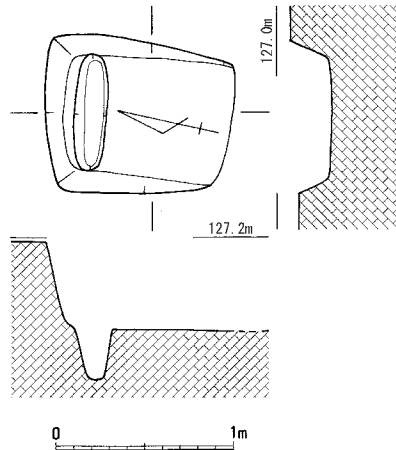
尾根の東斜面、海拔127m付近に位置する土壙墓で、主軸は等高線と平行している。掘り方は平面長方形で、検出面での長さ205cm・幅83cmを測る。底面はほぼ水平で、両端に小口溝を検出した。溝の間隔は160cmである。時期は弥生時代中～後期と思われる。

(有賀)

**土壙墓24** (第60図、図版6-6・7)

尾根の東斜面、海拔127.5m付近に位置する土壙墓で、土壙墓25・26に挟まれる。主軸は等高線と平行している。検出面での長さ243cm・幅94cmを測る。底面両端には小口溝を検出した。時期は弥生時代中～後期と思われる。

(有賀)



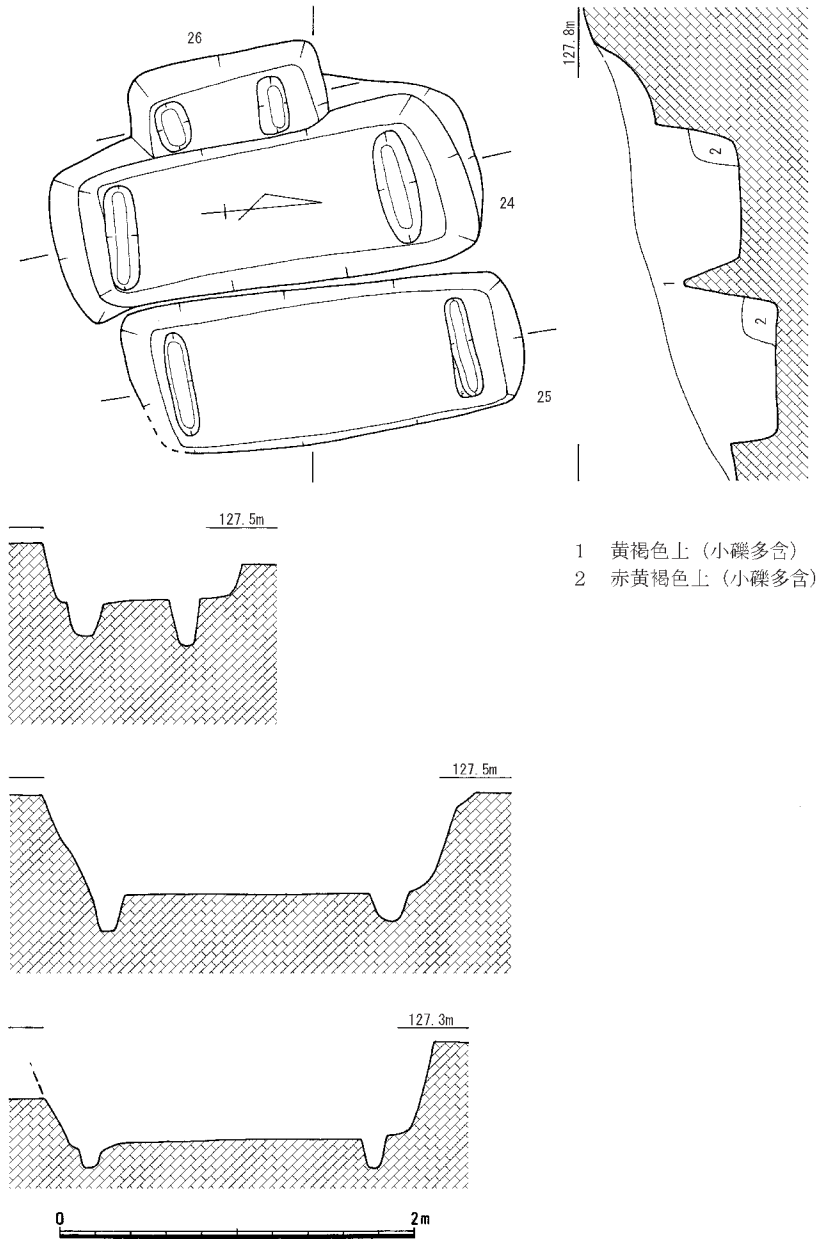
第59図 土壙墓21～23 (1/40)

土壙墓25 (第60図、図版6-6・7)

土壙墓24の東に並ぶ土壙墓で、掘り方は平面長方形である。土壙墓24とほぼ同規模で、検出面での長さ220cm・幅87cmを測る。底面両端に小口溝を有し、その間隔は160cmである。遺物の出土はなく、詳細な時期は不明であるが、弥生時代中～後期と考えられる。(有賀)

土壙墓26 (第60図、図版6-6・7)

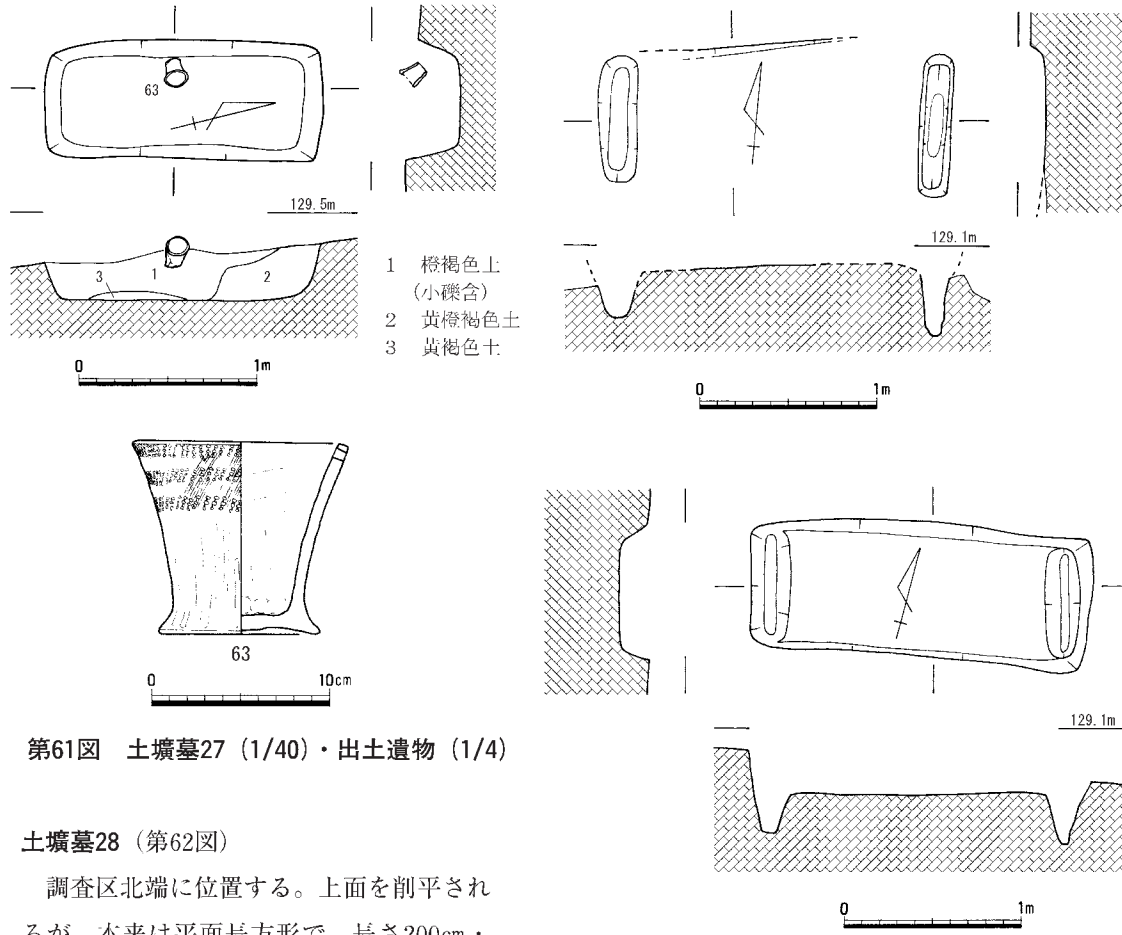
土壙墓24の西に並ぶ土壙墓で、検出面での長さ111cm・幅約50cmを測る。底面の両端に小口溝を検出した。その間隔は58cmで、小形の木棺規模が想定される。南側の溝は、平面形がやや楕円に近い形を呈する。土壙墓24～26は強いまとまりをもっていることが窺える。(有賀)



第60図 土壙墓24～26 (1/40)

土壙墓27 (第61図、図版11)

調査区の北端に位置する。平面長方形で、長さ156cm・幅68cmを測る。主軸は等高線に直交する。底面は平坦で、小口溝は認められない。副葬品と考えられる弥生土器63は、検出面とほぼ同じレベルで出土しており、本来は掘り方の上面に置かれていたと考えられる。63はジョッキ形の器形で、口縁部外面を刺突文で飾る。これから、時期は弥生時代中期中葉と考えられる。(佐藤)



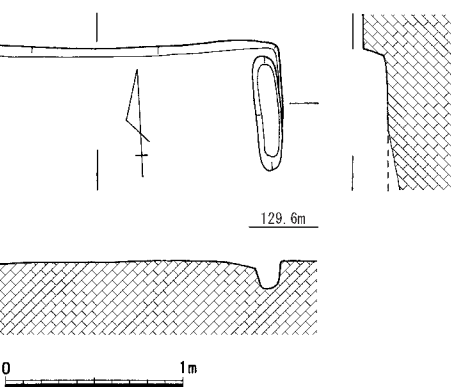
第61図 土壙墓27 (1/40)・出土遺物 (1/4)

土壙墓28 (第62図)

調査区北端に位置する。上面を削平されるが、本来は平面長方形で、長さ200cm・幅90cmと想定される。主軸は等高線に平行する。両小口溝の間隔は180cmを測る。遺物はないが、埋土や遺構の状況から、時期は弥生時代中～後期と考えられる。(佐藤)

土壙墓29 (第62図)

調査区の北端に位置する。平面は長方形で、長さ192cm・幅76cmを測る。主軸は等高線に直交する。底面は平坦で、両小口溝の間隔は166cmを測る。遺物はないが、埋土や遺構の状況から、時期は弥生時代中～後期と考えられる。(佐藤)



第62図 土壙墓28～30 (1/40)

土壙墓30 (第62図)

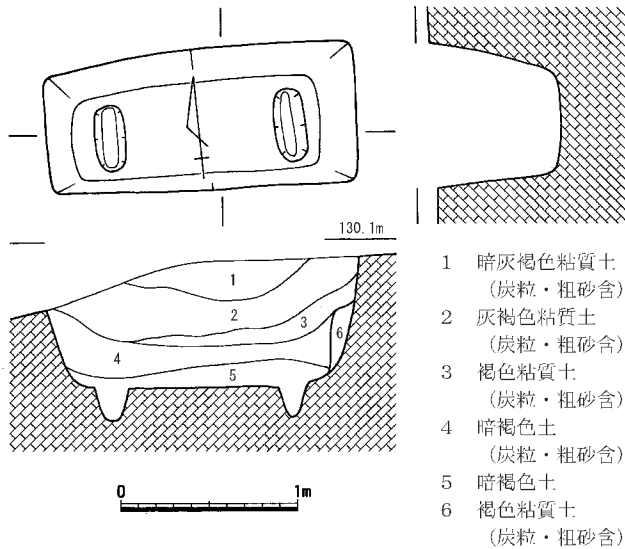
調査区の北端に位置する。南側を流失するが、平面は長方形で、長さ209cm・幅72cmを測る。主軸は等高線に平行する。底面は平坦で、両小口溝の間隔は177cmを測る。遺物はないが、埋土や遺構の状況から、時期は弥生時代中～後期と考えられる。(佐藤)

土壙墓31 (第63図)

調査区の北端に位置する。平面は長方形で、長さ176cm・幅80cmを測る。主軸は等高線に直交する。底面は平坦で、両小口溝の間隔は100cmを測る。遺存状態がよく、検出面から底面の深さ72cmを測る。遺物はないが、埋土や遺構の状況から、時期は弥生時代中～後期と考えられる。(佐藤)

土壙墓32 (第63図)

調査区の北端に位置する。東側を大きく削平されており、平面形や長さは不明である。幅は60cmで、主軸は等高線に直交する。遺物はないが、埋土や遺構の状況から、時期は弥生時代中～後期と考えられる。(佐藤)

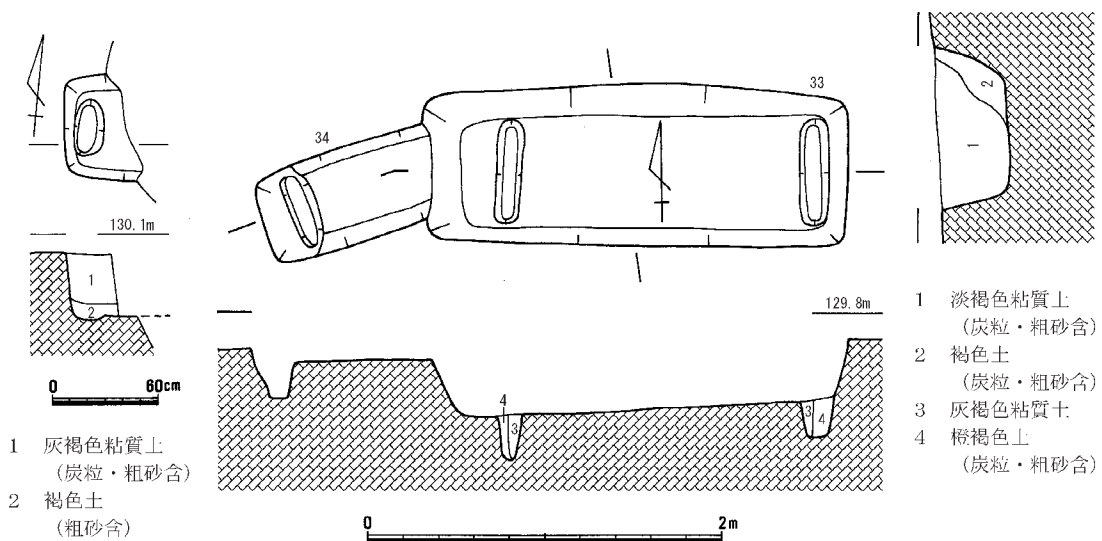


土壙墓33 (第63図)

調査区の北端に位置する。平面は長方形で、長さ241cm・幅92cmを測る。主軸は等高線に平行する。底面は平坦で、両小口溝の間隔は172cmを測る。遺物はないが、埋土や遺構の状況から、時期は弥生時代中～後期と考えられる。(佐藤)

土壙墓34 (第63図)

調査区の北端に位置する。平面は長方形で、幅は53cmを測る。主軸は等高線に平行し、底面は平坦である。土壙



第63図 土壙墓31～34 (1/40)

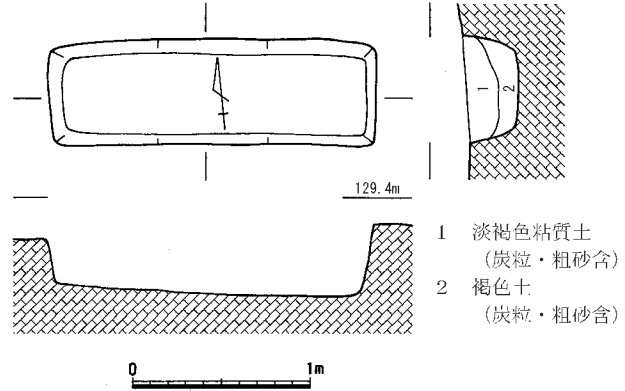
墓33と切り合うが、前後関係は不明である。遺物はないが、埋土や遺構の状況から、時期は弥生時代中～後期と考えられる。(佐藤)

土壙墓35 (第64図)

調査区の北端に位置する。平面長方形で、長さ184cm・幅60cmを測る。主軸は等高線に直交する。底面は平坦で、小口溝は認められない。遺物はないが、埋土や遺構の状況から、時期は弥生時代中～後期と考えられる。(佐藤)

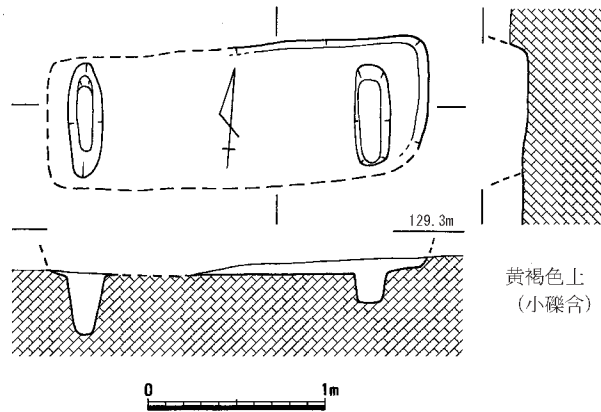
土壙墓36 (第64図)

調査区の北端に位置する。西側上面を大きく削平されているが、平面は長方形で、長さ204cm・幅72cmほどと想定される。主軸は等高線に平行する。底面は平坦で、両小口溝の間隔は160cmを測る。遺物はないが、埋土や遺構の状況から、時期は弥生時代中～後期と考えられる。(佐藤)



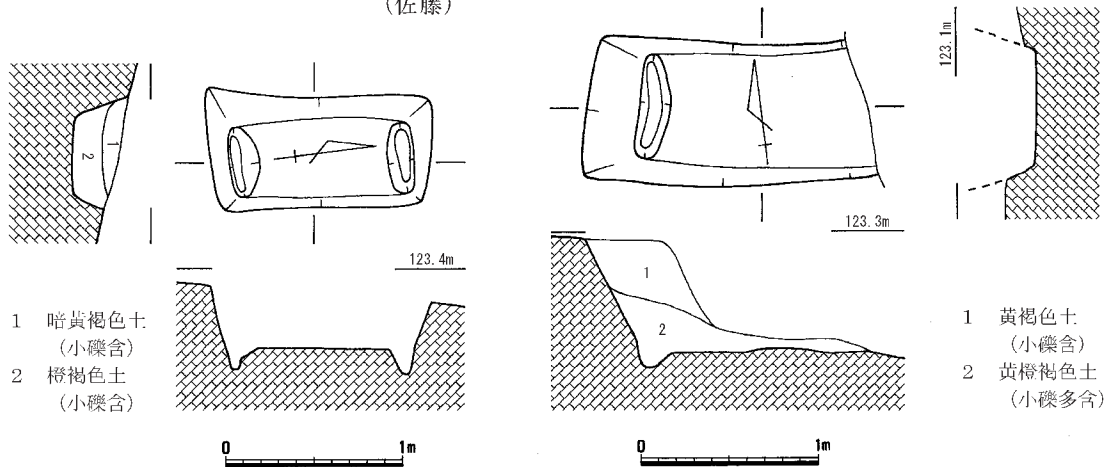
土壙墓37 (第64図)

調査区の北端に位置する。平面は長方形で、長さ125cm・幅62cmを測る。主軸は等高線に平行する。底面は平坦で、両小口溝の間隔は95cmを測る。遺物はないが、時期は弥生時代中～後期と考えられる。(佐藤)



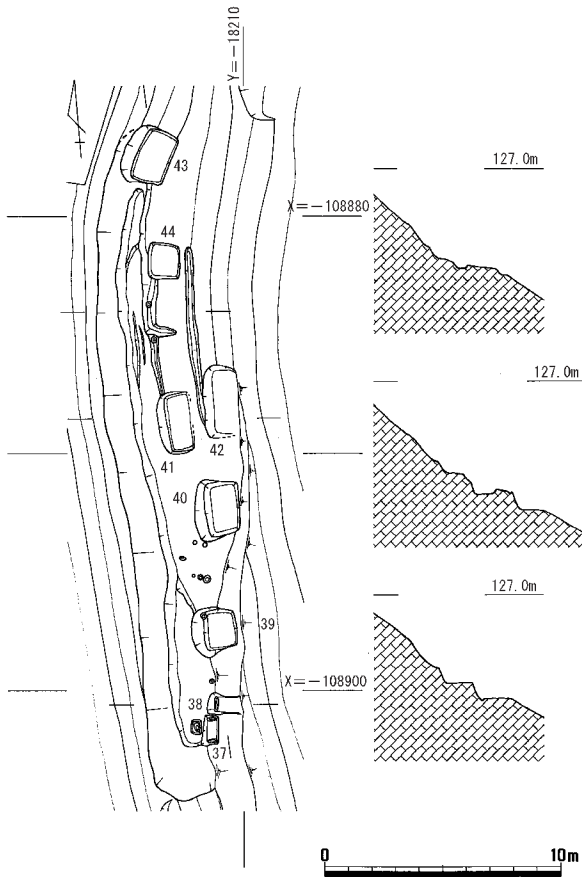
土壙墓38 (第64図)

調査区の北端に位置する。東端を削平されているが、平面は長方形で、幅78cmを測る。主軸は等高線に直交し、底面は平坦である。遺物はないが、埋土や遺構の状況から、時期は弥生時代中～後期と考えられる。(佐藤)



第64図 土壙墓35～38 (1/40)





第65図 東斜面全体図 (1/300)

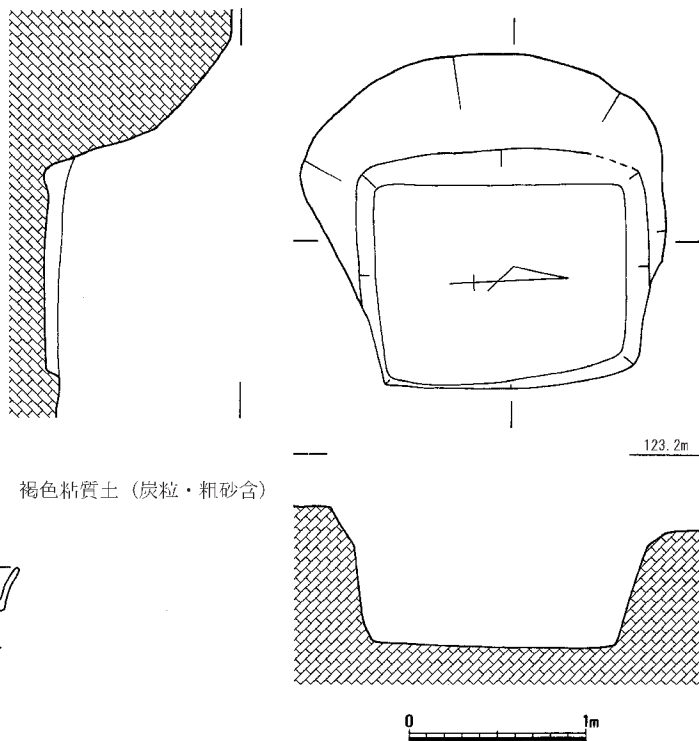
東斜面土壙墓群 (第65図、図版7-1)

坂田墳墓群では、弥生時代中期の土壙墓がまとまって検出されているが、これらとは時期の異なる集団墓が東斜面に構築されていることから、ここで東斜面土壙墓群という呼称でまとめて説明する。

東斜面土壙墓群は、坂田墳墓群の立地する丘陵の東斜面中腹を、全長約29m・全幅3~5m・高さ2~3mにわたって断面L字形にカットして平坦面を確保し、ここに平面長方形を呈する土壙墓6基を構築したものである。この平坦面は何回かに分けて拡張されたようで、壁体に沿って数条の溝を検出している。土壙墓に副葬品がないため、遺構の時期ははっきりしないが、平坦面の柱穴や周辺の堆積土中から弥生時代終末期~古墳時代初頭の遺物がわずかながら出土しており、この時期の遺構と考えられる。(佐藤)

土壙墓39 (第66図)

東斜面土壙墓群の南よりに位置する。平面は長方形で、長さ165cm・幅134cmを測る。主軸は等高線に平行する。底面は平坦で、小口溝はない。埋土中から、弥生時代終末期の甕64が出土している。これや、周辺の状態を勘案すると、遺構の時期は弥生時代終末期~古墳時代初頭と考えられる。(佐藤)



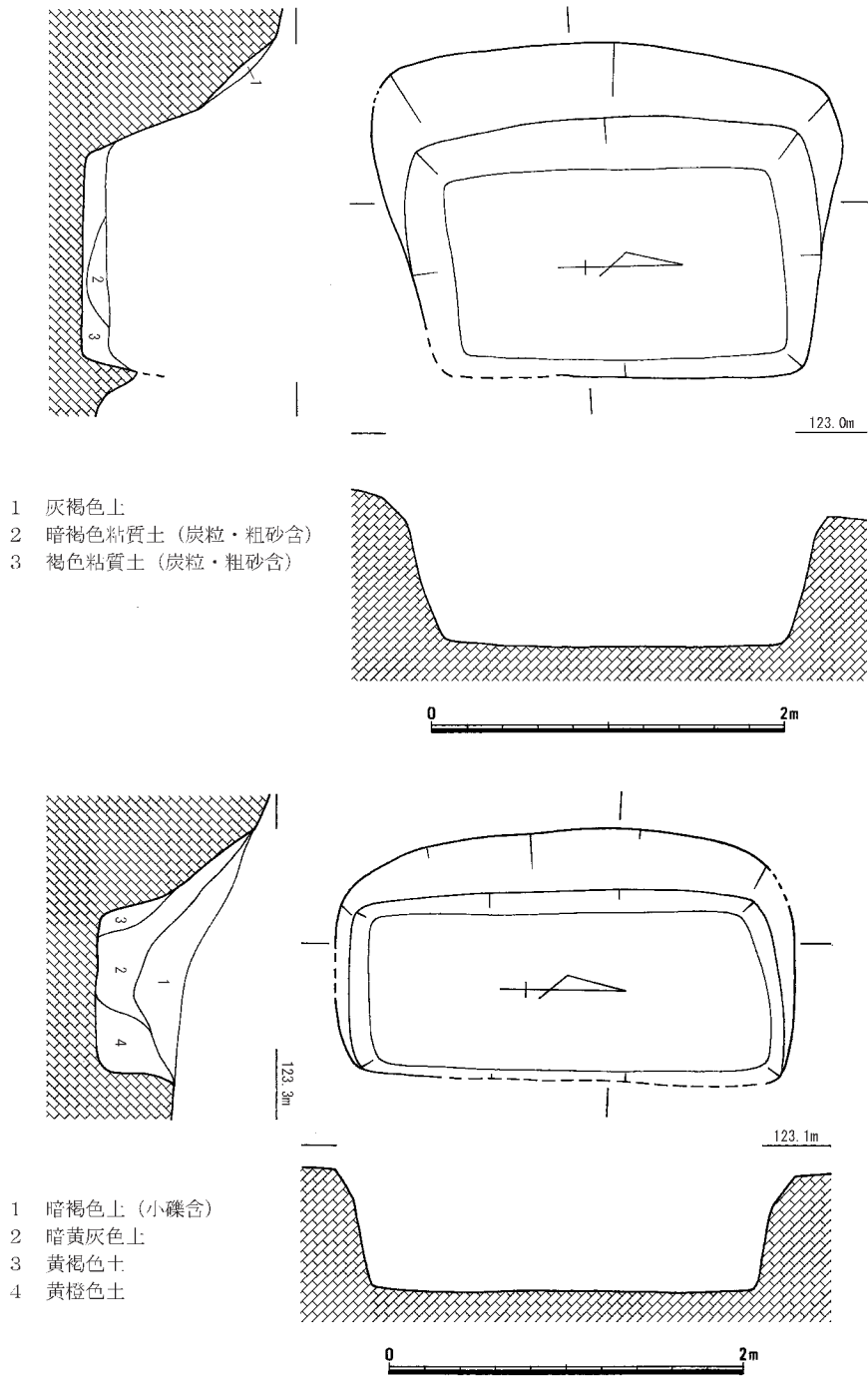
第66図 土壙墓39 (1/40)・出土遺物 (1/4)

土壙墓40 (第67図)

東斜面土壙墓群の中央に位置する。平面長方形で長さ232cm・幅145cmを測る。主軸は等高線に平行し底面は平坦である。遺物はないが、時期は弥生時代終末期～古墳時代初頭と考えられる。(佐藤)

土壙墓41 (第67図)

東斜面土壙墓群の中央に位置する。平面長方形で長さ244cm・幅107cmを測る。主軸は等高線に平行し底面は平坦である。遺物はないが、時期は弥生時代終末期～古墳時代初頭と考えられる。(佐藤)



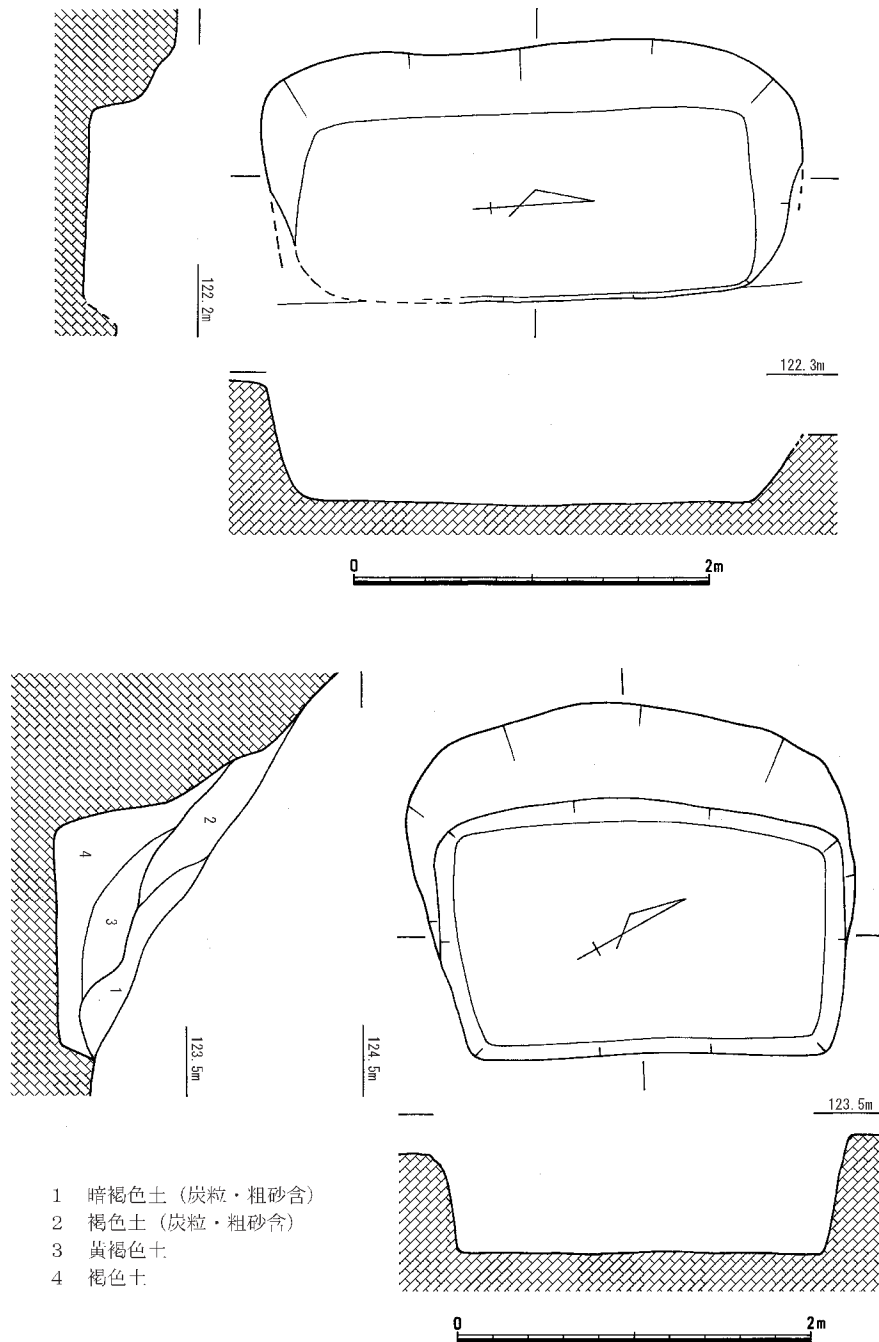
第67図 土壙墓40・41 (1/40)

土壙墓42 (第68図、図版7-2)

東斜面土壙墓群の中央に位置する。平面長方形で長さ301cm・幅143cmを測る。主軸は等高線に平行し底面は平坦である。遺物はないが、時期は弥生時代終末期～古墳時代初頭と考えられる。(佐藤)

土壙墓43 (第68図、図版7-3)

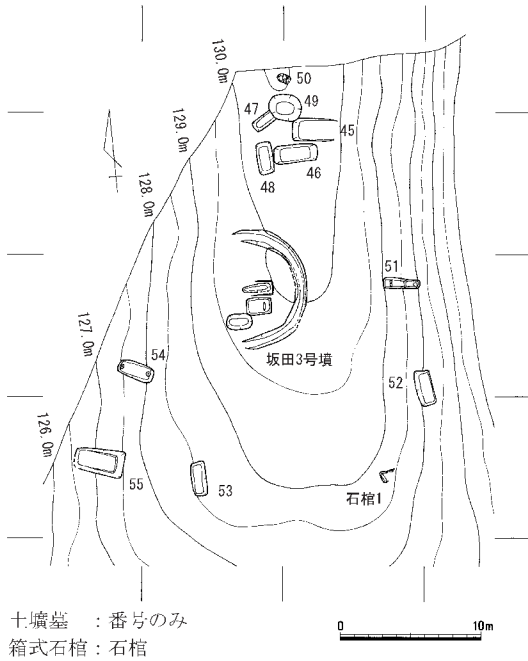
東斜面土壙墓群の北方に位置する。平面長方形で長さ230cm・幅132cmを測る。主軸は等高線に平行し底面は平坦である。遺物はないが、時期は弥生時代終末期～古墳時代初頭と考えられる。(佐藤)



第68図 土壙墓42・43 (1/40)

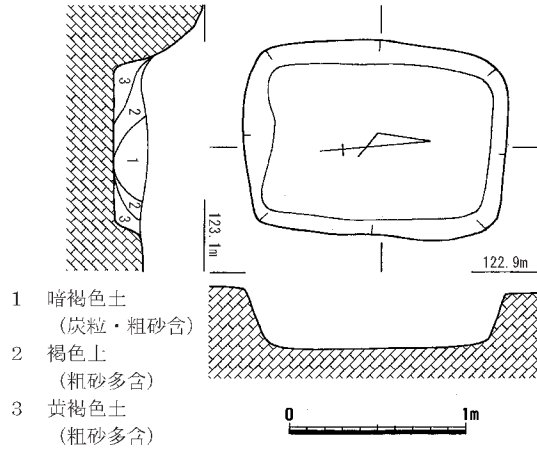
土壙墓44 (第69図)

東斜面土壙墓群の北よりに位置する。平面は長方形で、長さ149cm・幅110cmを測る。主軸は等高線に平行する。底面は平坦で、小口溝はない。遺物はないが、埋土や周辺の状態を勘案すると、遺構の時期は弥生時代終末期～古墳時代初頭と考えられる。(佐藤)



土壙墓：番号のみ  
箱式石棺：石棺

第70図 土壙墓・古墳 (古墳時代) 全体図 (1/500)



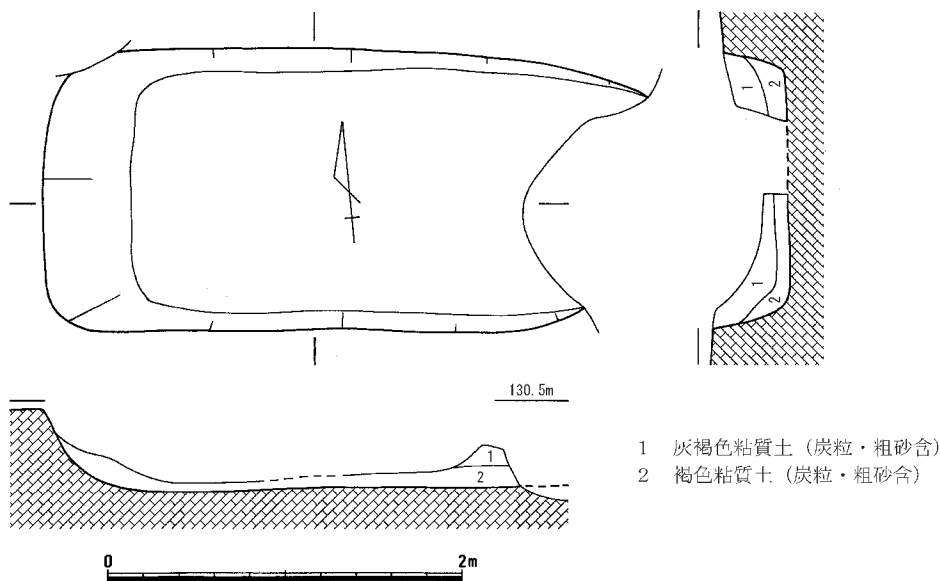
第69図 土壙墓44 (1/40)

土壙墓45 (第71図)

坂田遺跡北端の丘陵尾根筋に位置する。平面は長方形で、長さ340cm・幅158cmと大形である。主軸は等高線に直交し、底面は平坦で小口溝はない。遺物はないが、周辺の状態から遺構の時期は古墳時代前半と考えられる。(佐藤)

土壙墓46 (第72図)

坂田遺跡北端の丘陵尾根筋に位置する。平面は長方形で、長さ307cm・幅125cmと大形である。主軸は等高線に直交し、底面は平坦で小口溝は



第71図 土壙墓45 (1/40)

ない。遺物はないが、周辺の状況から遺構の時期は古墳時代前半と考えられる。 (佐藤)

土壙墓47 (第72図)

坂田遺跡北端の丘陵尾根筋に位置する。平面長方形で長さ166cm・幅86cmを測る。主軸は等高線に直交し、底面は平坦である。遺物はないが、遺構の時期は古墳時代前半と考えられる。 (佐藤)

土壙墓48 (第72図)

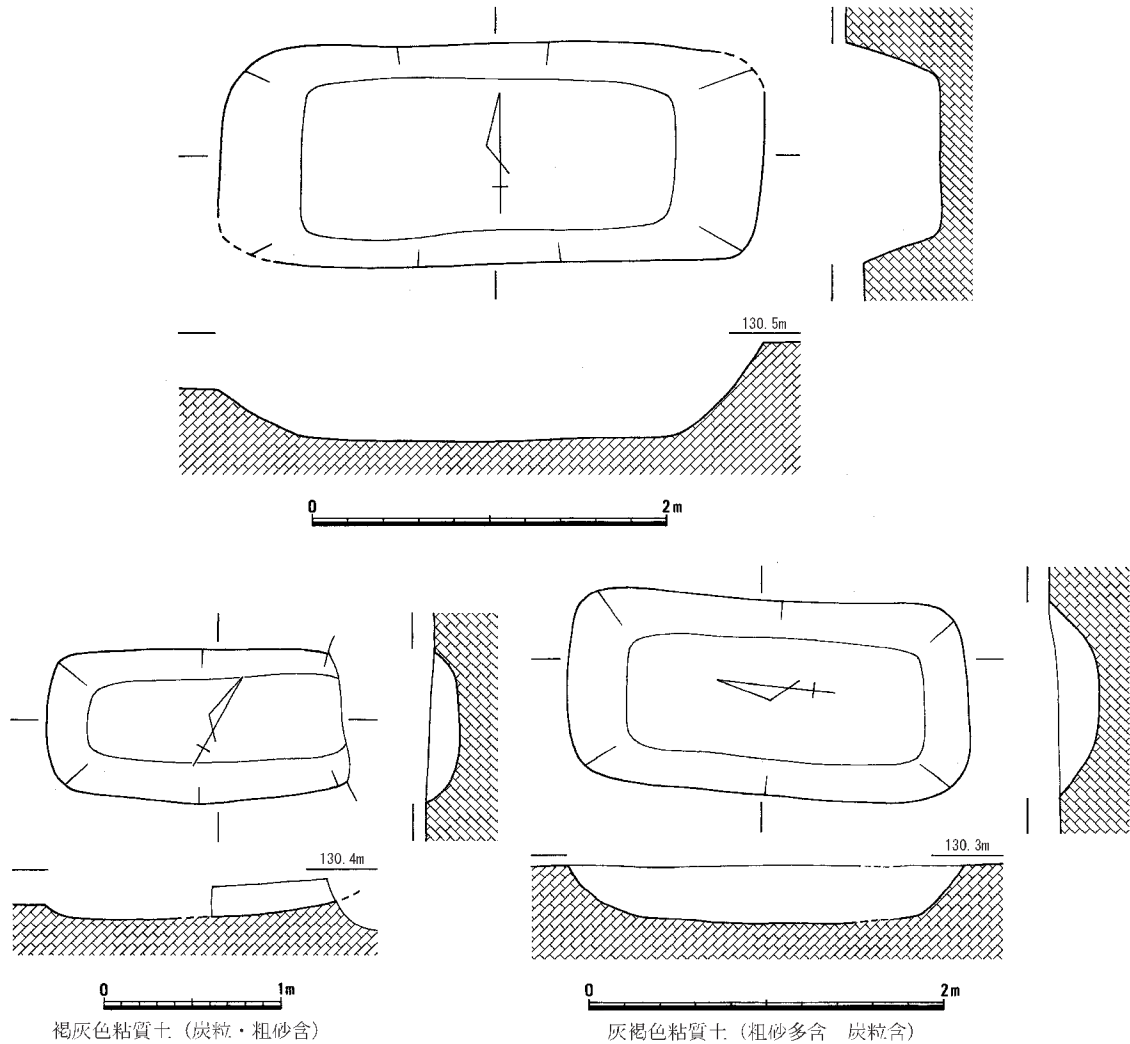
坂田遺跡北端の丘陵尾根筋に位置する。平面長方形で長さ227cm・幅109cmを測る。主軸は等高線に平行し、底面は平坦である。遺物はないが、遺構の時期は古墳時代前半と考えられる。 (佐藤)

土壙墓49 (第73図)

坂田遺跡北端の丘陵尾根筋に位置する。平面楕円形で長さ224cm・幅180cmを測る。主軸は等高線に直交し、底面は平坦である。遺物はないが、遺構の時期は古墳時代前半と考えられる。 (佐藤)

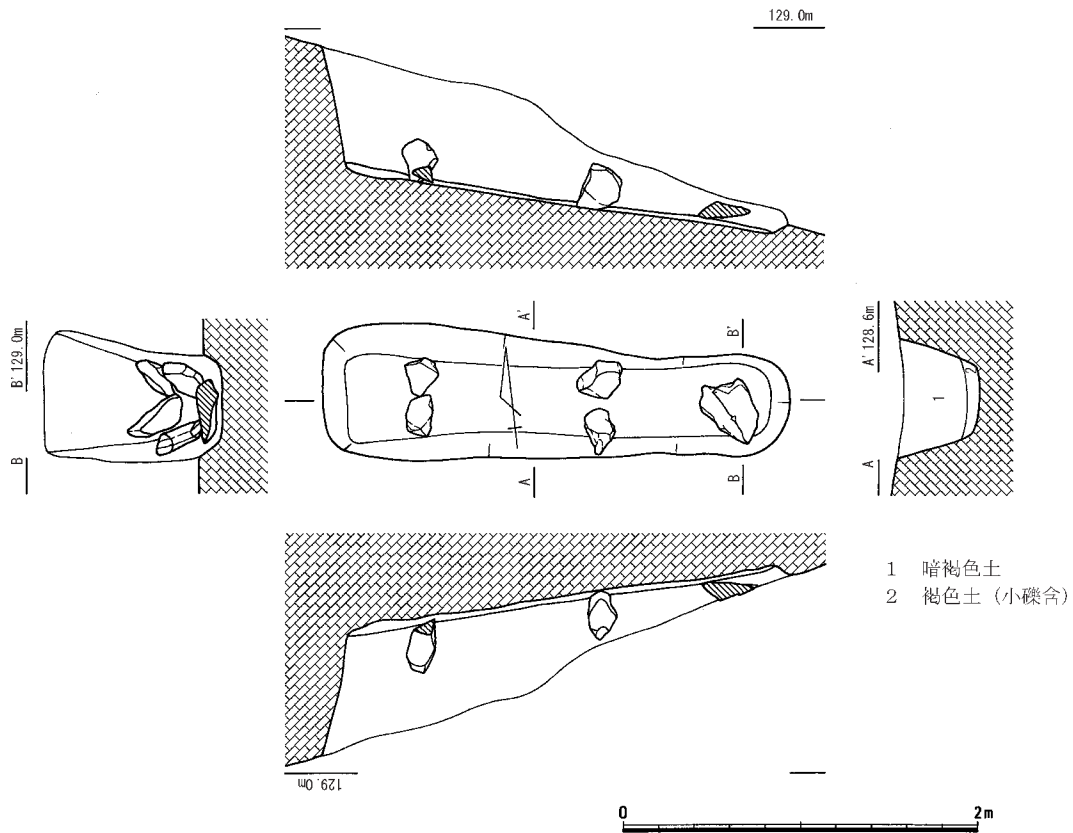
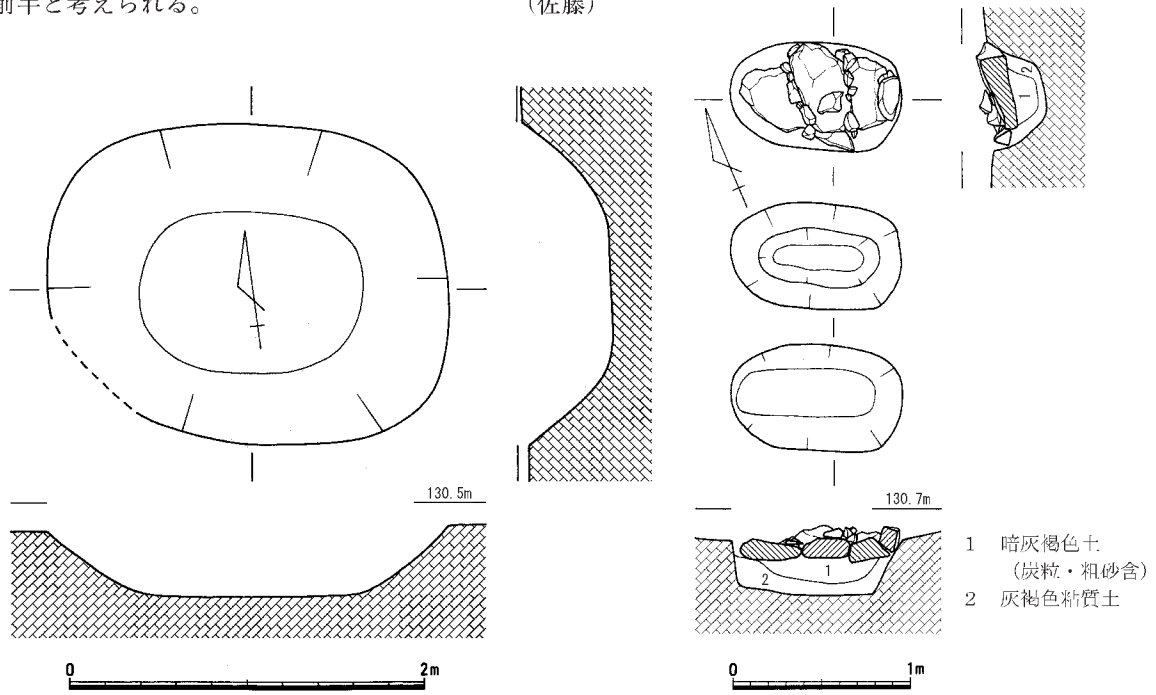
土壙墓50 (第73図、図版7-4)

坂田遺跡北端の丘陵尾根筋に位置する。いわゆる石蓋土壙墓で、主軸は等高線に直交する。掘り方の平面は楕円形で、長径95cm・短径60cmを測る。その内面に灰褐色粘質土を充填しており、内寸で長



第72図 土壙墓46~48 (1/40)

径68cm・短径33cmを測る。その上面に板石4枚を架けて蓋石とする。板石の隙間は小礫で充填しており、粘土による被覆などは認められなかった。遺物はないが、周辺の状況から遺構の時期は古墳時代前半と考えられる。  
(佐藤)



第73図 土壙墓49~51 (1/40)

土壙墓51 (第73図、図版7-6)

尾根の東斜面、海拔129m付近に位置する土壙墓である。主軸は等高線に直交する。斜面上位から2か所で平石を「V」字状に敷き、東小口側には平石1個を置くという特異な構造をもつ。これらは棺台と考えられ、底面は斜面下位の東に向かって低くなるが、東小口の石材で棺の高さを調節しているようである。詳細な時期は不明であるが、古墳時代と思われる。(有賀)

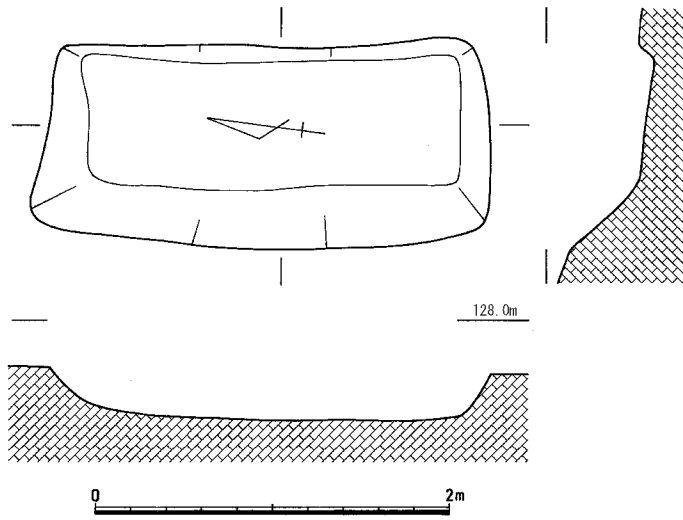
土壙墓52 (第74図)

坂田遺跡北端の丘陵東斜面に位置する。平面は長方形で、長さ250cm・幅105cmと大形である。主軸は等高線に平行し、底面は平坦で小口溝はない。遺物はないが、周辺状況から遺構の時期は古墳時代前半と考えられる。(佐藤)

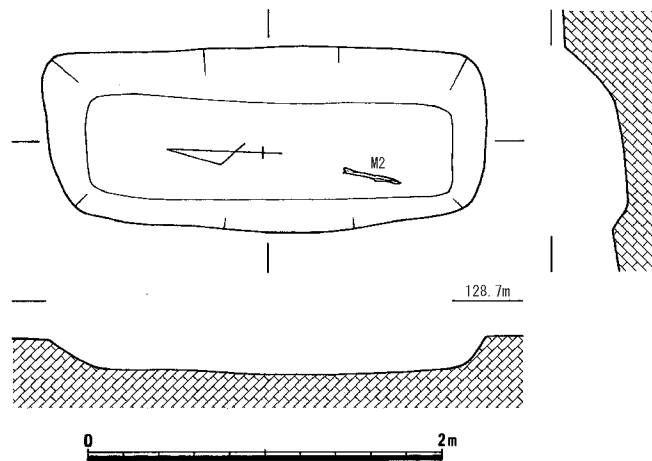
土壙墓53 (第75図、図版7-5、11)

坂田遺跡北端の丘陵尾根筋に位置する。平面は長方形で、長さ248cm・幅103cmを測る。主軸は等高線に平行し、底面は平坦で小口溝はない。注目点として、鉄矛M2が床面直上から出土しており、被葬者に副葬されていたものと考えられる。矛の柄や石突は認められなかった。M2は全長317.8mmで、

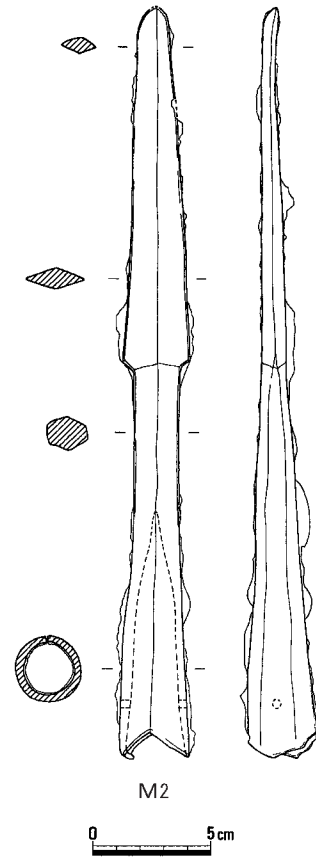
鎬式といわれる刃部断面形が菱形をなすタイプである。これらから、遺構の時期は古墳時代中期と考えられる。(佐藤)



第74図 土壙墓52 (1/40)



第75図 土壙墓53 (1/40)・出土遺物 (1/3)

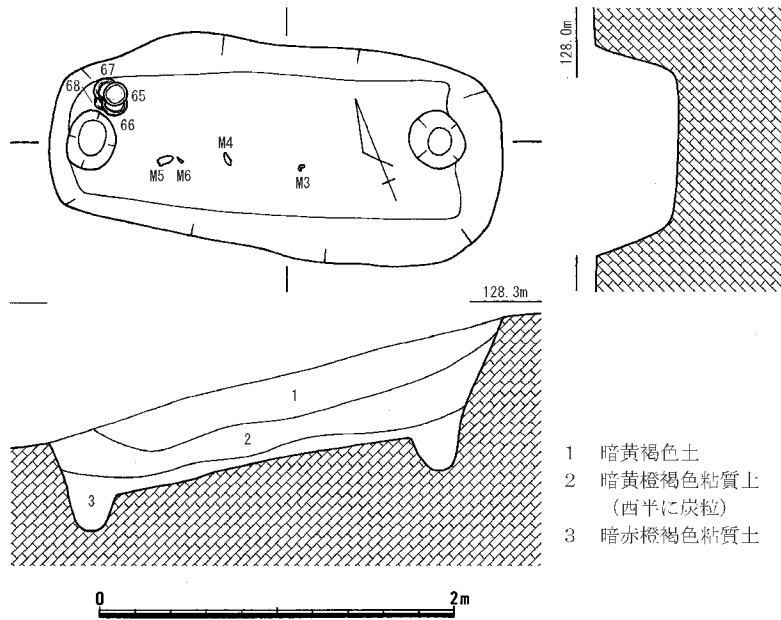


土壙墓54 (第76図、図版8-1・2、11)

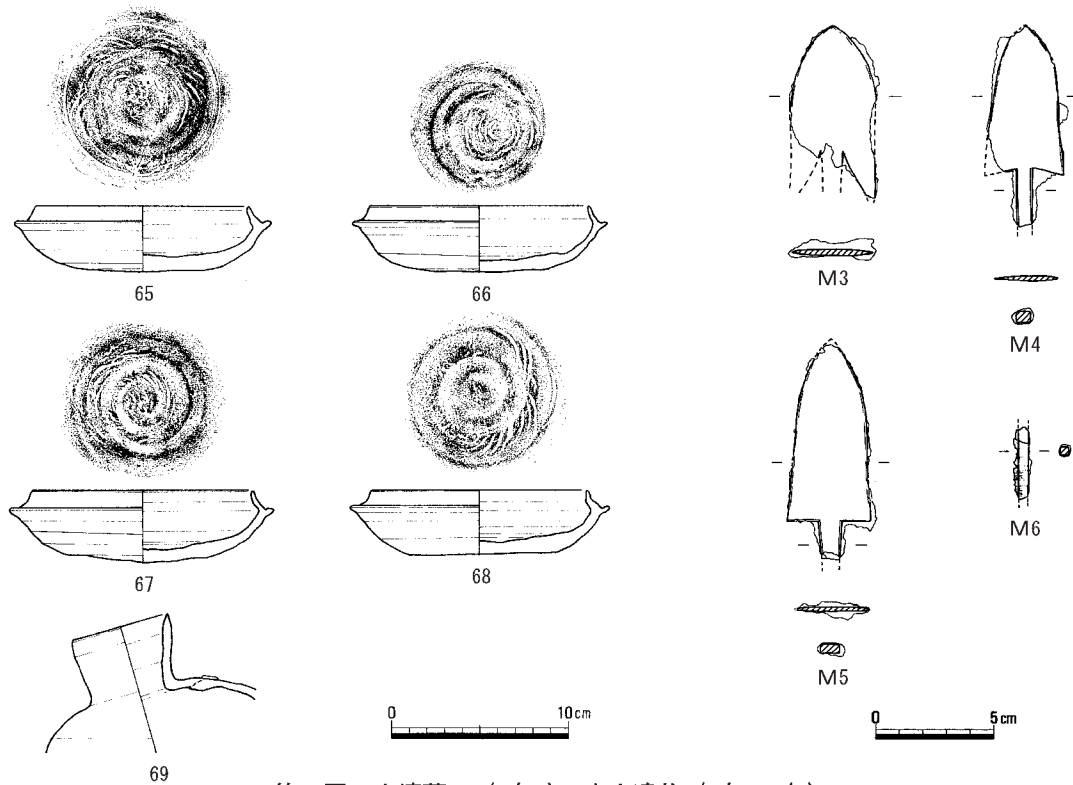
尾根の西斜面、海拔128m付近に位置する土壙墓である。主軸は等高線に直交する。掘り方は平面長方形で、底面が斜面下位の西に向かって低くなる。底面両端には円形の掘り込みがみられ、一種の小口溝と考えられる。規模は掘り方上面で長さ256cm・幅117cmを測る。底面の北西隅から、須恵器の杯身65~68が重なり合うように出土した。いずれも底部内面に当て具痕を残しており、その上からナデ

消しているものもあった。田辺編年のTK43型式と考えられる。また、埋土中からは平瓶69が出土した。他に、M3~M5の有茎平根式の鉄鏃3点がみられた。M6はその茎の一部であり、木質が残存している。出土遺物などから、遺構の時期は古墳時代後期、6世紀後葉頃と思われる。

(有賀)

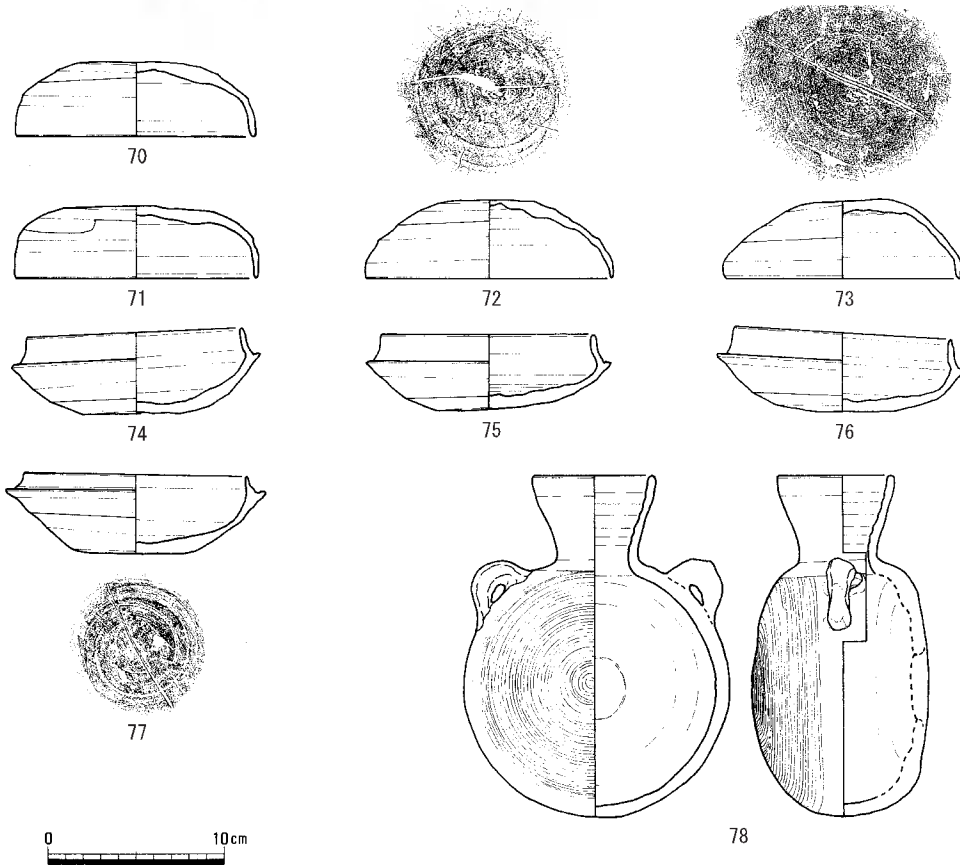
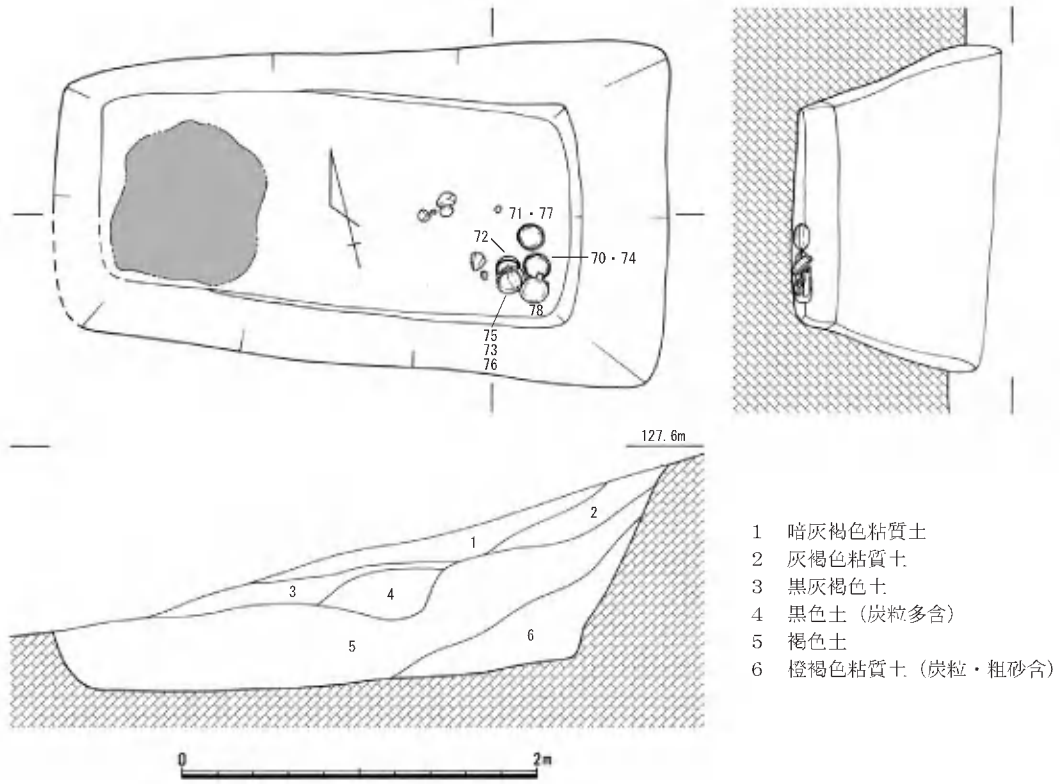


- 1 暗黄褐色土
- 2 暗黄橙褐色粘質土 (西半に炭粒)
- 3 暗赤橙褐色粘質土



第76図 土壙墓54 (1/40)・出土遺物 (1/4・1/3)





第77図 土壙墓55 (1/40)・出土遺物 (1/4)

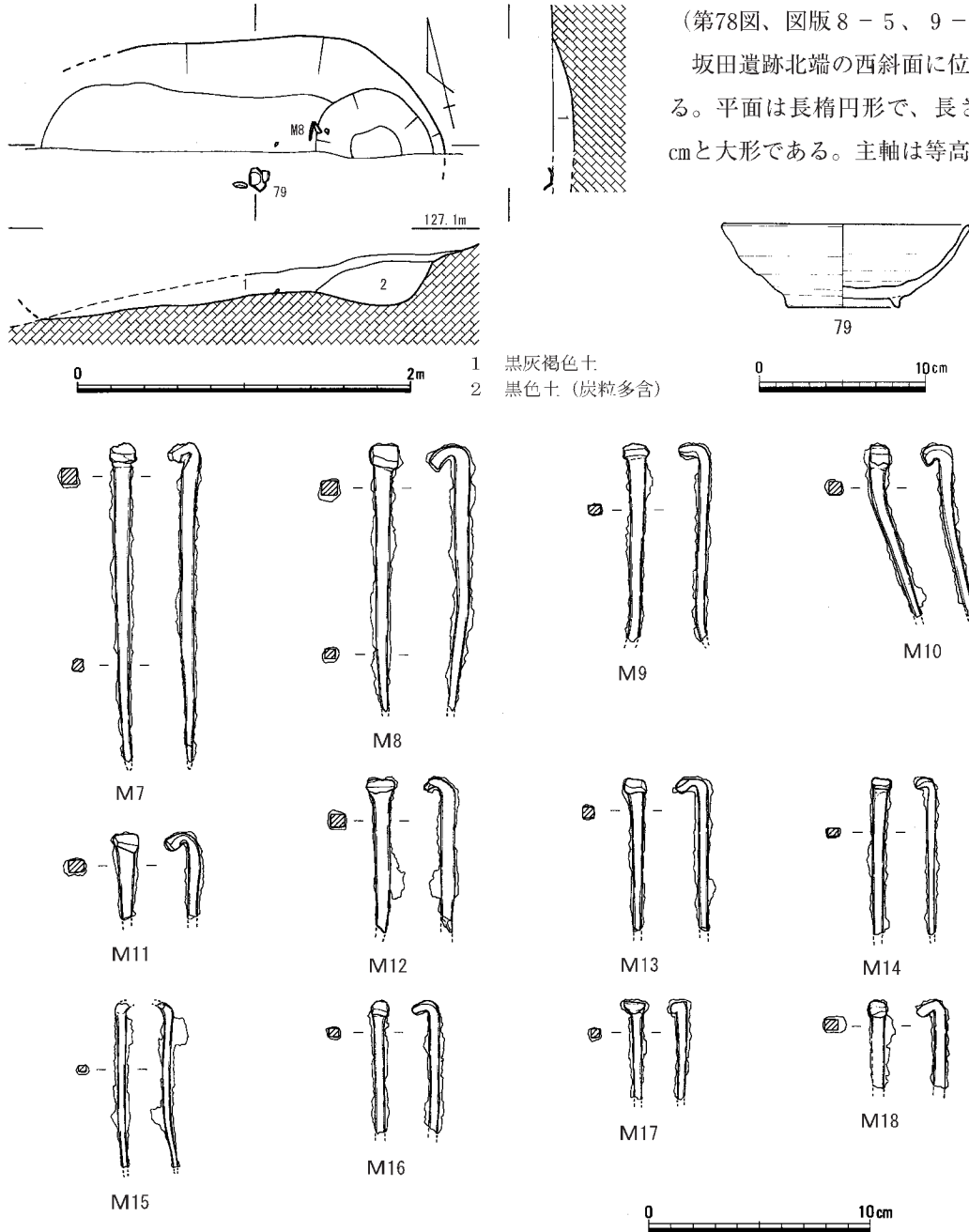
土壙墓55 (第77図、図版8-3~5、11)

坂田遺跡北端の西斜面に位置する。平面長方形で、長さ348cm・幅186cmと極めて大形である。主軸は等高線に直交する。底面は平坦で西側にわずかに傾斜する。埋葬頭位は東と考えられ、南東部で須恵器の杯70~77・提瓶78が副葬された状態で出土した。また、底面西側には直径90cmほどにわたり炭粒が薄く散布し、掘り方内部で何かを燃やす行為が行われたと考えられる。土層のうち、1・2層が流土、3・4層が土壙墓56の埋土、5・6層が土壙墓55の埋土で、木棺痕跡は分からなかった。また、周辺に区画溝なども確認できなかった。時期は、副葬品から6世紀後葉と考えられる。(佐藤)

土壙墓56

(第78図、図版8-5、9-1)

坂田遺跡北端の西斜面に位置する。平面は長楕円形で、長さ250cmと大形である。主軸は等高線に



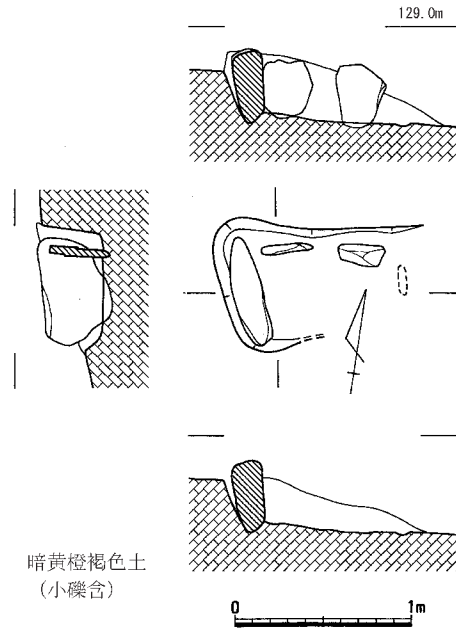
第78図 土壙墓56 (1/40)・出土遺物 (1/4・1/3)

直交する。土壙墓55の上面に築かれており、その窪みを利用したものと思われる。埋葬頭位は東と思われ、一段掘り窪められている。埋土中から棺釘の可能性が高い鉄釘M7～M18が出土している。また、副葬品と考えられる土師質土器碗79が掘り方上面から出土している。時期は遺物から鎌倉時代と考えられる。(佐藤)

## 2 箱式石棺墓

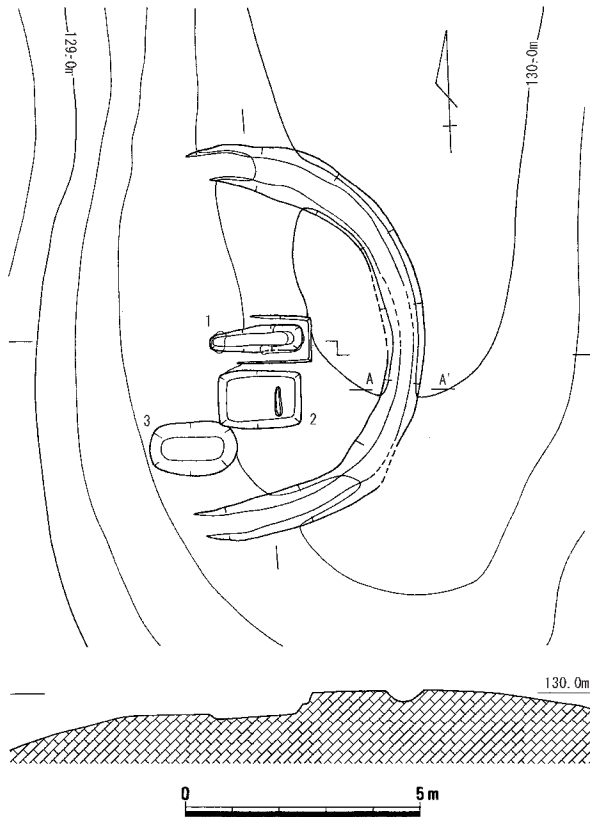
### 箱式石棺墓1 (第79図、図版9-2)

尾根の東斜面、土壙墓17の北に位置する。海拔128.5m付近で検出し、主軸は等高線に直交する。東および南側は石材が抜き取られ、消失している。石棺は、短辺に1枚の石を立て、長辺に側石を据えて構築している。掘り方は平面長方形で、残存長120cm・幅69cmを測る。詳細な時期は不明であるが、古墳時代と思われる。(有賀)



第79図 箱式石棺墓1 (1/40)

## 3 坂田3号墳

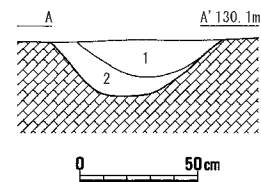


第80図 坂田3号墳 (1/150)・周溝断面 (1/30)

### 1 立地と構造

(第80図、図版9-3)

坂田遺跡北端の丘陵尾根筋に位置する。直径約7mの円墳であるが、墳丘盛土は調査着手前から認められず、もともと低い墳丘だったと思われる。周囲に幅70～100cmほどの周溝を巡らすが、下方は流失している。埋葬施設は3基検出した。このうち、中央の埋葬施設1が中心埋葬施設と考えられる。(佐藤)



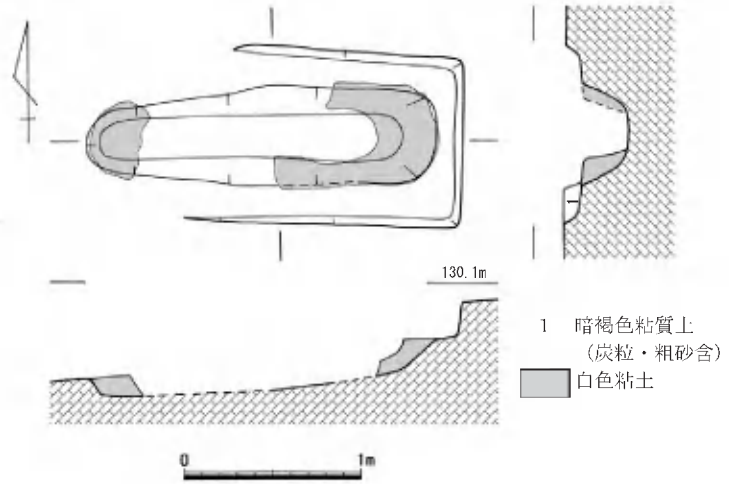
- 1 暗褐色粘質土 (炭粒・粗砂含)
- 2 褐色粘質土 (炭粒・粗砂含)

2 埋葬施設

埋葬施設 1

(第81図、図版9-3・4)

墳丘中央部に位置し、中心埋葬施設と考えられる。直上に樹木があったため、遺存状態は悪い。主軸は等高線に直交しており、ほぼ正確に東西方位を示す。掘り方は2段掘りになっている。1段目は2段目より一回り大きく、長さが推定230cm・幅100cmの平面長方形を呈する。2段目は平面長楕円形で、長軸199cm・短軸57cmを測る。掘り方の内面には、小口部分を中心に白色粘土が充填されている。底面は平坦で、西側に傾斜していることから、埋葬頭位は東と考えられる。木棺痕跡は分からなかった。また、人骨や副葬品も確認できなかった。



第81図 埋葬施設 1 (1/40)

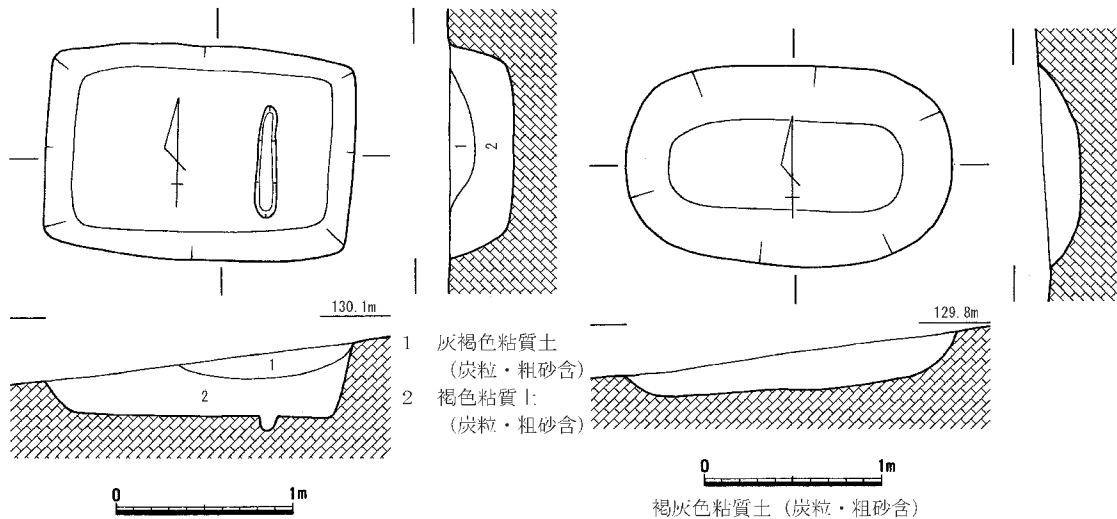
(佐藤)

埋葬施設 2 (第82図、図版9-3)

埋葬施設 1 のすぐ南側に位置する埋葬施設である。主軸は等高線に直交し、ほぼ正確に東西方位を示す。掘り方は長さ175cm・幅121cmの平面長方形を呈する。底面は平坦で、東よりに板を差し込むような溝を検出したが木棺痕跡は分からなかった。また、人骨や副葬品も確認できなかった。

埋葬施設 3 (第82図、図版9-3)

埋葬施設 2 のすぐ南西側に位置する埋葬施設である。主軸は等高線に直交し、ほぼ正確に東西方位を示す。掘り方は長径186cm・短径114cmの平面楕円形を呈する。底面は平坦で、木棺痕跡は分からなかった。また、人骨や副葬品も確認できなかった。



第82図 埋葬施設 2・3 (1/40)

### 3 時期

坂田3号墳では、埋葬施設1～3や周溝から、築造時期を示すような遺物は全く出土していない。このため、構造や立地、周辺の状況から年代を推定せざるを得ない。構造では、中心埋葬施設の埋葬施設1に白色粘土が用いられている点が注目される。また、墳丘が小規模で低平なこと、近親者のものと思われる埋葬施設2・3が同一墳丘内にあることも特徴的である。さらに、周辺に古墳時代前半と推定される土壙墓群があることも参考になる。これらの状況証拠から、坂田3号墳の築造時期は、古墳時代前半と推定したい。(佐藤)

## 第5節 小結

坂田遺跡では、弥生時代中期～古墳時代初頭、奈良時代、平安時代末期～鎌倉時代の遺構・遺物を確認した。このうち、弥生時代～古墳時代初頭の生活遺構は希薄で、おもに墓域として利用されている。奈良時代の遺物も少なく、当時の状況ははっきりしない。平安時代末期～鎌倉時代になると、谷部を中心に集落域として利用されており、比較的まとまった量の遺構・遺物を検出した。なお、谷部包含層を中心に、わずかながら炉壁・鉄滓などが出土している。このため、周辺に古代～中世の製鉄・鍛冶遺構が存在する可能性を念頭において調査したが、確認できなかった。

坂田墳墓群については、弥生時代中期中葉～後期、弥生時代終末期～古墳時代初頭、古墳時代前～中期、古墳時代後期の4時期の墳墓群を確認した。このうち、弥生時代中期中葉～後期では計38基の土壙墓を検出した。これらは、丘陵尾根筋や斜面に展開するもので、特定の区画や集中はない。また、副葬品もほとんどなく、特定個人に富や権力が集中することのない均質的な社会であったことが分かる。なお、わずかに出土した副葬品に完形の磨製石剣があり、注目される。同時期の集落は、国司尾遺跡や宮ノ上遺跡で営まれており、地形によって墓域と集落域を使い分ける概念が弥生時代中期段階に確立していたことが分かる。弥生時代終末期～古墳時代初頭の墳墓群は、丘陵の東斜面中腹を全長約29m・全幅3～5m・高さ2～3mにわたって断面L字形にカットして平坦面を確保し、土壙墓6基を構築したものである。これは、墳丘こそたないが、人為的に作り出された場の中に土壙墓を集中して築くという意味で、一種の区画墓と呼べよう。その場合、同時期の集落が東方の宮ノ上遺跡に展開していることから、それを意識してこの場所に築かれたと考えられる。このように、弥生時代の集落と墓域の構造と変遷を一体的に捉えることができたことは、特筆すべき成果といえる。

古墳時代前～中期については、土壙墓9基・箱式石棺墓1基を検出した。そのほとんどに副葬品がないため、詳細な時期は不明であるが、弥生時代のものとは比べ墓壙掘り方の大形化傾向が窺える。また、石蓋土壙墓や床面に石をV字状に置くもの、箱式石棺など、埋葬施設がバラエティに富むのも特徴的である。わずかに出土した副葬品のうち注目されるのが、舶載品と考えられる鉄矛である。鉄矛の岡山県内での出土例は15例ほどあるが、いずれも卓越した古墳の副葬品である。本例のように土壙墓から出土することは特異で、渡来文化に関わりをもつ被葬者像が想定される。古墳時代後期については、大形の土壙墓2基を検出した。いずれも土壙墓としては県内最大級のものであり、注目される。

坂田3号墳は、土壙墓群と同じ丘陵上に築造された小規模な円墳であることが判明した。遺物がないため、時期ははっきりしないが、古墳時代前半と想定される。(佐藤)

## 第5章 宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群

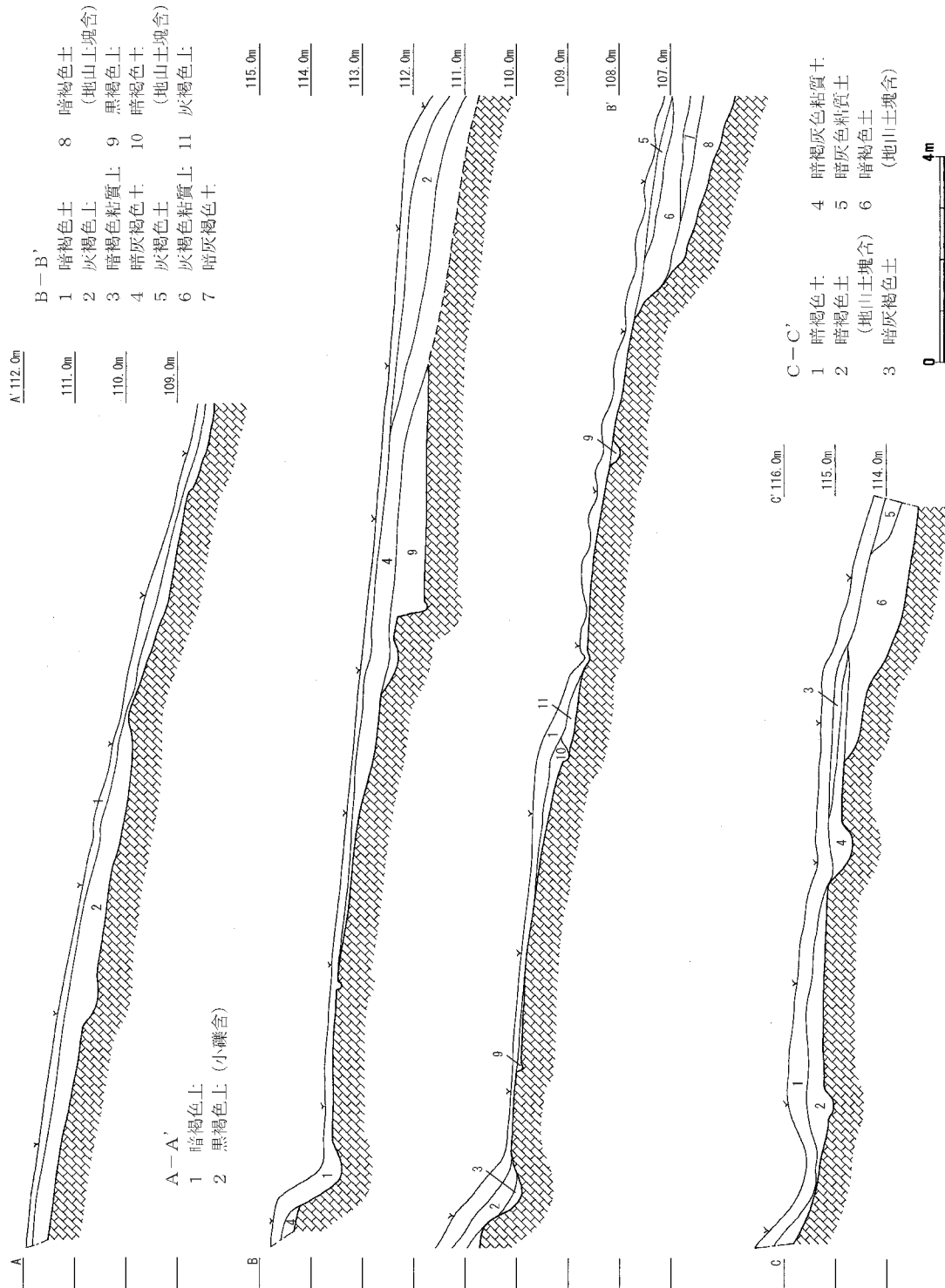
### 第1節 調査の概要

宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群は、滝川へ向かって北東にのびる丘陵に位置する、弥生時代中期～中世の集落遺跡と古墳群である。集落は、主に尾根筋から南東の緩斜面にかけて展開し、古墳群は先端の頂部から東斜面に形成されている。調査前には、散布地と古墳1基が周知されていたが、トレンチ調査の結果、著しい開墾にもかかわらず



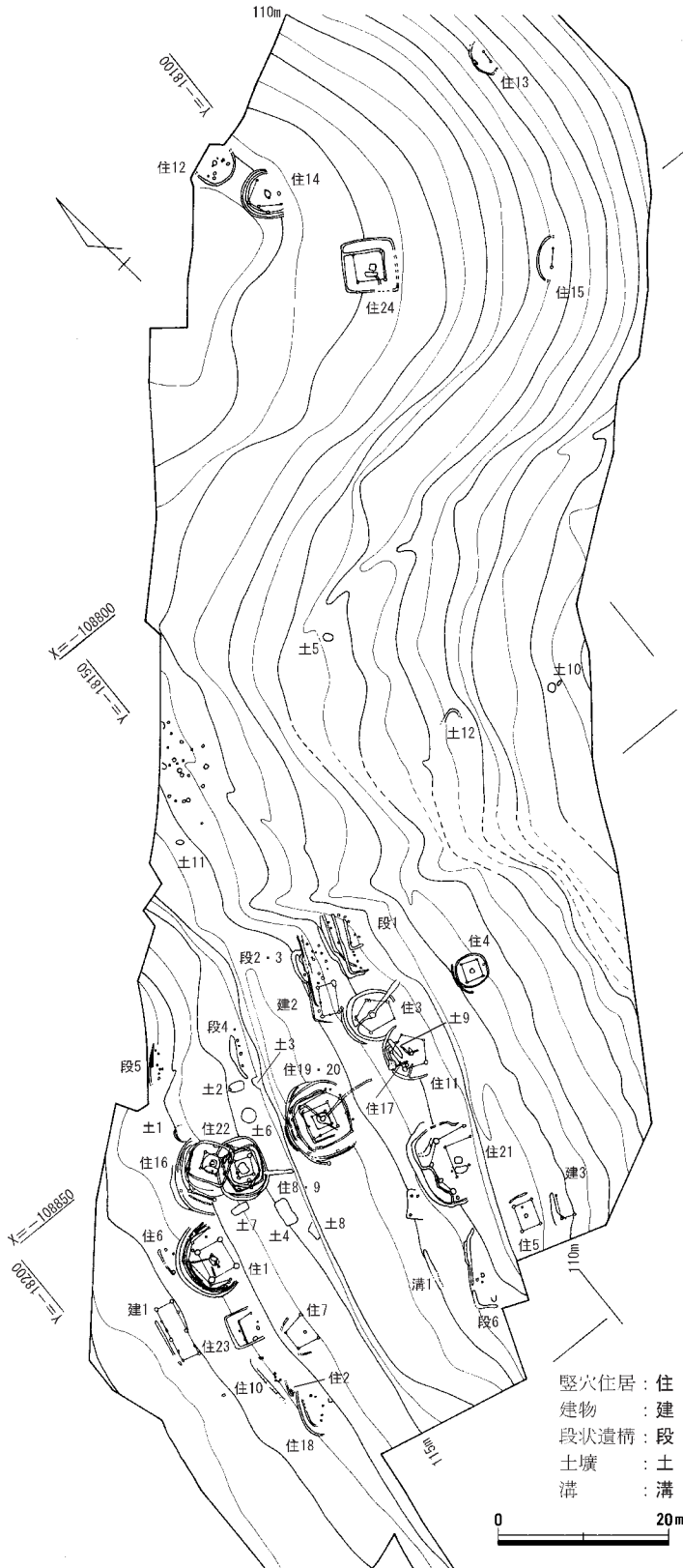
第83図 宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群全体図 (1/1,000)

ず、ほぼ全面に遺構が確認された。ただし、調査区の南端は遺構が確認されず、谷地形となることも判明したので、全面調査は行わず、調査残土の置き場とした。調査の結果、弥生～古墳時代後期に営まれた坂田墳墓群との関連を考えさせる集落が明らかとなったことは興味深い。また、宮ノ上1号墳では、竪穴式石塚が残存しており、2面の鏡などが出土した。さらに、3基の古墳が新たに確認されるなど、勝間田地域の歴史を考察する上で重要な資料が得られた。(柴田)



第84図 トレンチ断面図 (1/120)

## 第2節 弥生時代～古墳時代前期の遺構・遺物



第85図 弥生時代～古墳時代前期遺構全体図 (1/800)

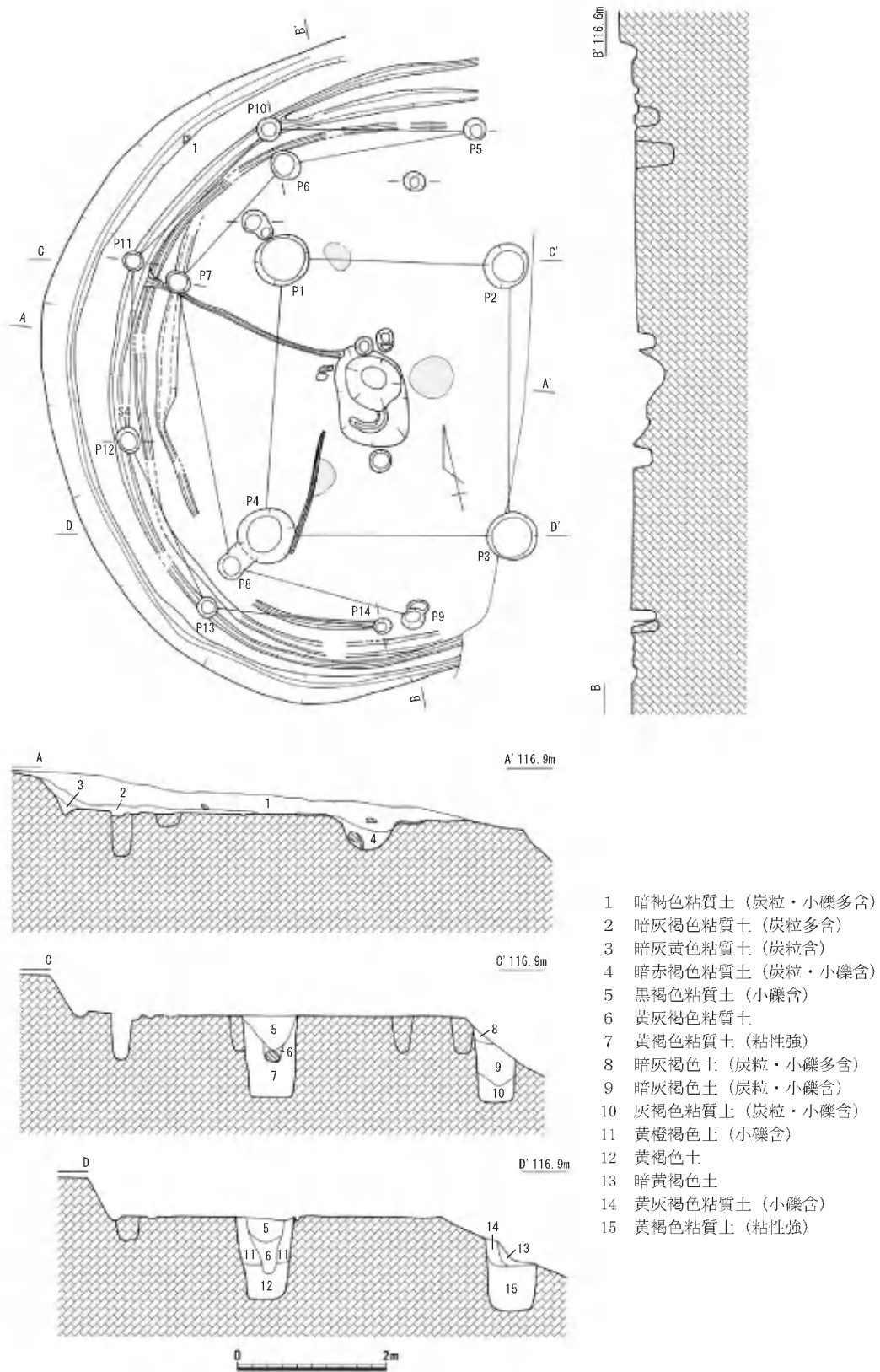
検出遺構は、弥生時代中期～古墳時代初頭に属し、竪穴住居24軒・建物3棟・段状遺構6基・土壇12基・溝1条を数える。尾根上の坂田墳墓群と時期が重なる集落と考えられ、その関係が注目される。弥生時代中期では、同じ丘陵の国司尾遺跡にも集落が営まれているが、当遺跡では比較的大形の住居が確認された。また、弥生時代末～古墳時代初頭にかけても、大形住居を含む集落が形成されている。さらにこの時期には、東部瀬戸内や山陰など他地域との関係を窺わせる要素を有する住居や土器が検出されたことは、当時の社会を解明する上で興味深い。(柴田)

### 1 竪穴住居

竪穴住居1 (第86・87図、図版13-1、21、24)

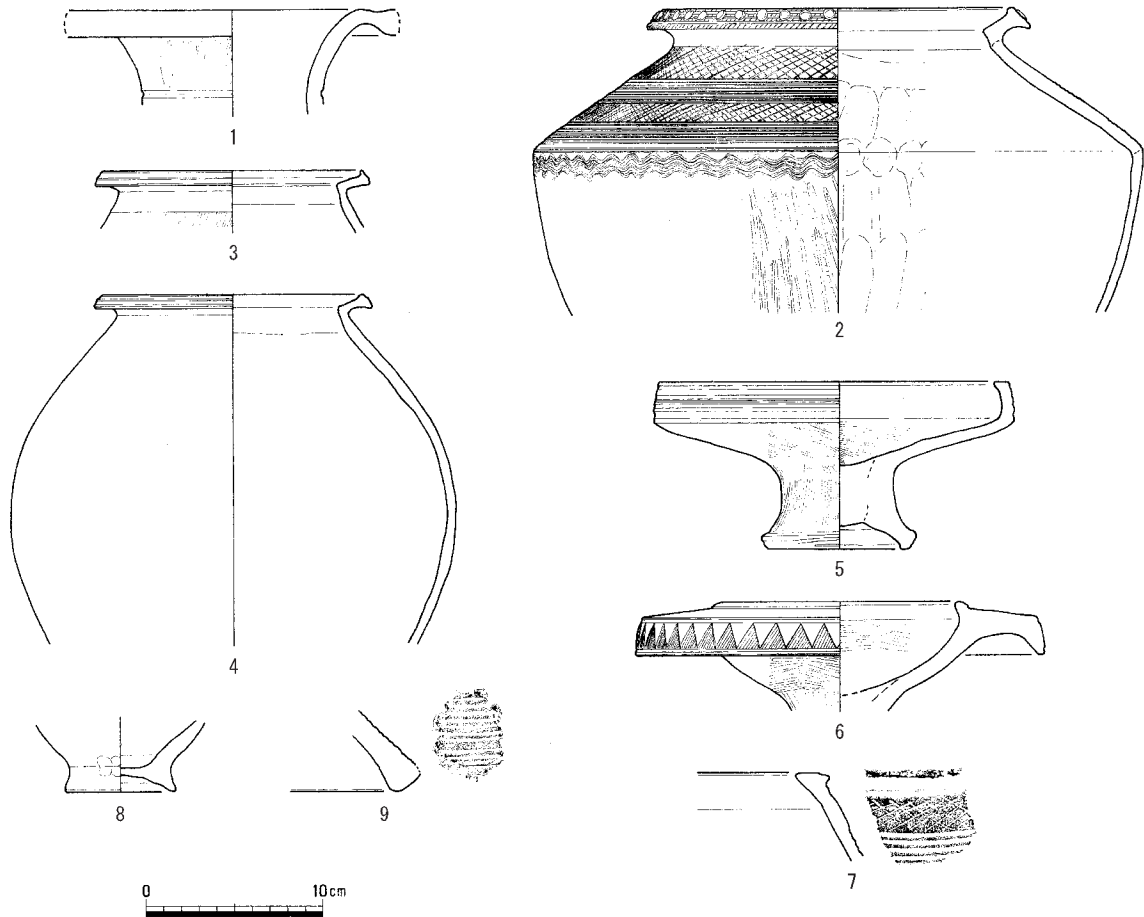
調査区西部の平坦地に位置する、円形の竪穴住居である。東側は後世の削平を受けているが、復元径は9m近くに達する大形住居であったと考えられる。壁体溝は4条確認でき、最低3回の建替えが認められる。外側の壁体溝に伴う柱穴はP5・P10～P14までの6本を確認し、削平部分を含め全8本と推定される。径60～80cmのP





- 1 暗褐色粘質土 (炭粒・小礫多含)
- 2 暗灰褐色粘質土 (炭粒多含)
- 3 暗灰黄色粘質土 (炭粒含)
- 4 暗赤褐色粘質土 (炭粒・小礫含)
- 5 黒褐色粘質土 (小礫含)
- 6 黄灰褐色粘質土
- 7 黄褐色粘質土 (粘性強)
- 8 暗灰褐色土 (炭粒・小礫多含)
- 9 暗灰褐色土 (炭粒・小礫含)
- 10 灰褐色粘質土 (炭粒・小礫含)
- 11 黄橙褐色土 (小礫含)
- 12 黄褐色土
- 13 暗黄褐色土
- 14 黄灰褐色粘質土 (小礫含)
- 15 黄褐色粘質土 (粘性強)

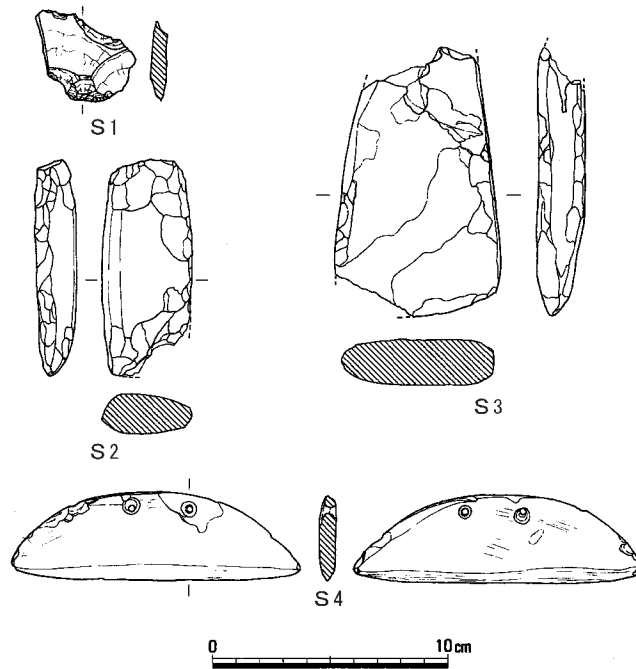
第86図 竪穴住居 1 (1/80)



1～P 4は、内側の壁体溝に伴う4本柱と考えられる。P 5～P 9も8本柱を構成するうちの5本であると思われる。中央穴は平面楕円形で、付近から幅5 cm程度の浅い溝が2条のびる。中央穴から鐙形高杯6が、埋土中から壺1・2、甕3・4などが出土した。他に、楔形石器S 1や扁平片刃石斧S 2・3、石包丁S 4が出土した。住居の時期は弥生時代中期後葉と思われる。(有賀)

竪穴住居 2 (第88図)

調査区西部に位置し、竪穴住居18に切られる。平面形は隅丸方形を呈する。東側の大部分が後世の削平により壊されており、南西隅しか残存してないため、規模は不明である。床面で柱穴2

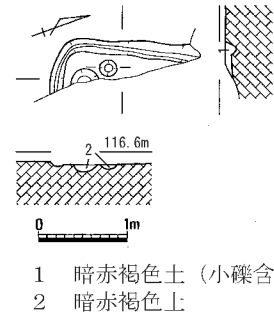


第87図 竪穴住居 1 出土遺物 (1/4・1/3)

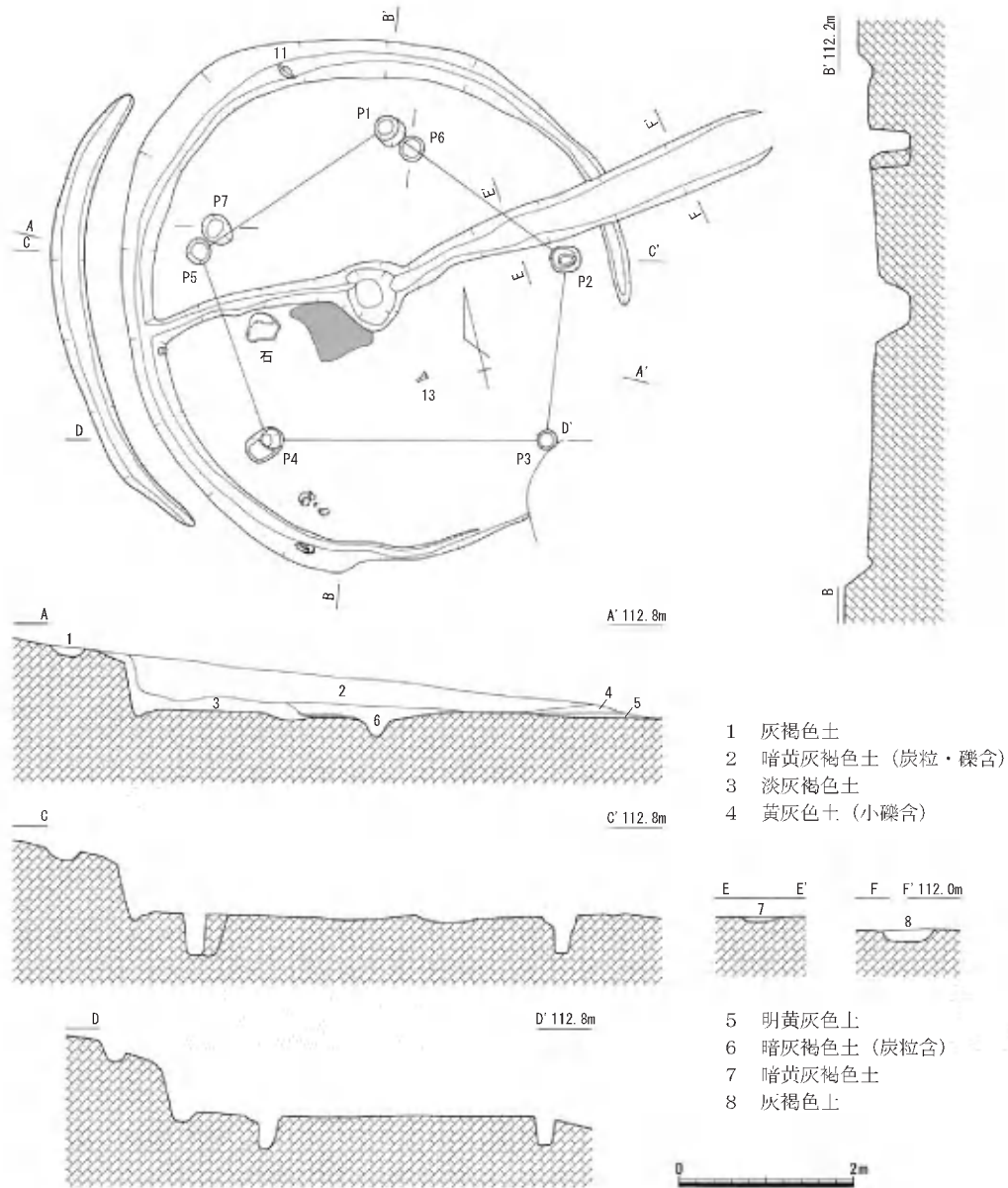
本を確認した。詳細な時期は分からないが、切り合い関係などから弥生時代中期後葉から後期と考えられる。(有賀)

竪穴住居 3 (第89・90図、図版13-2、21)

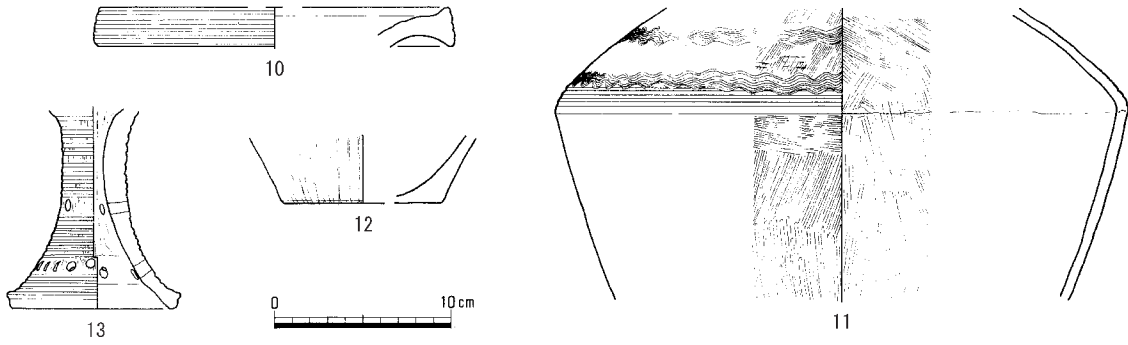
調査区南部の中央に位置する、円形(径620cm)の竪穴住居で、山側には壁体から40cm離れて弧状の溝が伴う。支柱穴は5本で、P3とP4の柱間は他と比べてやや長い。西の壁体溝から中央穴、中央穴から屋外へと溝が伸びるが、両者が同一機能であるかどうかは不明である。中央穴は平面楕円形で、深さは38cmを測る。この西縁には炭が集



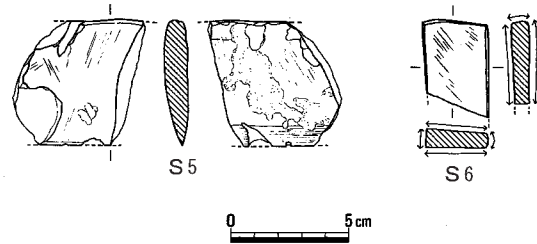
第88図 竪穴住居 2 (1/80)



第89図 竪穴住居 3 (1/80)



中して分布し、近くに台石が置かれている。床面から高杯13、壁体溝から壺11が出土している。埋土からは土器の他に、石包丁S5、砥石S6が出土した。遺物などから、住居の時期は弥生時代後期前葉と思われる。(柴田)



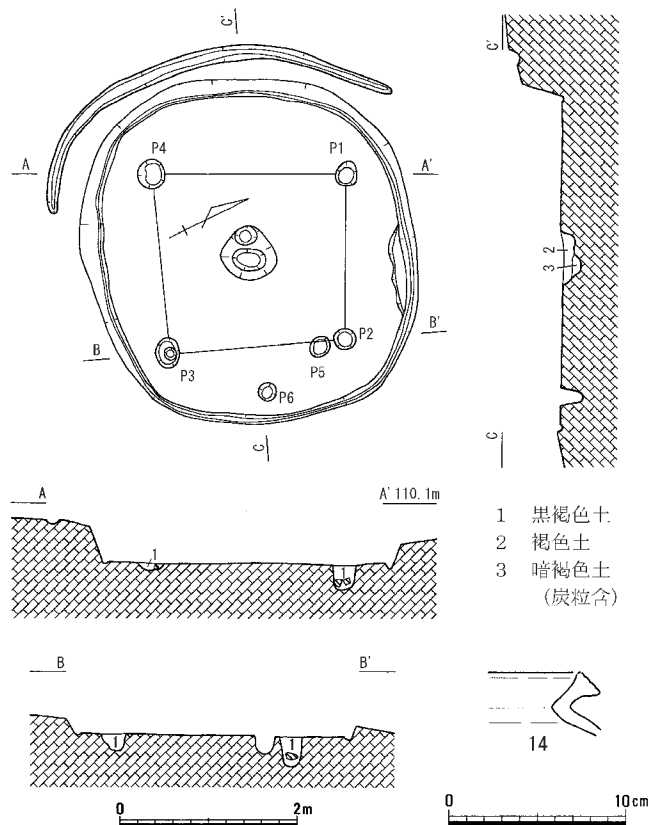
竪穴住居4 (第91図)

調査区南部の東寄りに位置する、円形(径388cm)の竪穴住居で、山側には壁体から20cm離れて弧状の溝が伴う。主柱穴は4本で、P3・4の深さはかなり浅いが、深いP1・2には磔が置かれ、その上面で比べると4本ともほぼ同じ深さになっている。中央穴は平面楕円形で、西側にピット状の段を形成する。深さは22cmを測る。埋土からは甕14が出土した。遺物は少ないが、住居の時期は弥生時代中期後葉と思われる。(柴田)

第90図 竪穴住居3出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居5 (第92図)

調査区の南東端に位置する、削平された竪穴住居で、床面は残存していない。かろうじて壁体溝の一部と4本の主柱穴と中央穴が確認された。柱間は等高線に沿った南北方向が長くなっている。中央穴は平面楕円形で、残存する深さは10cmを測り、柱穴と比較すると浅くなっている。壁体溝や柱穴の埋土からは、弥生土器の小片が出



第91図 竪穴住居4 (1/80)・出土遺物 (1/4)

土したにすぎない。住居の時期は判断が困難だが、弥生時代後期の可能性がある。(柴田)

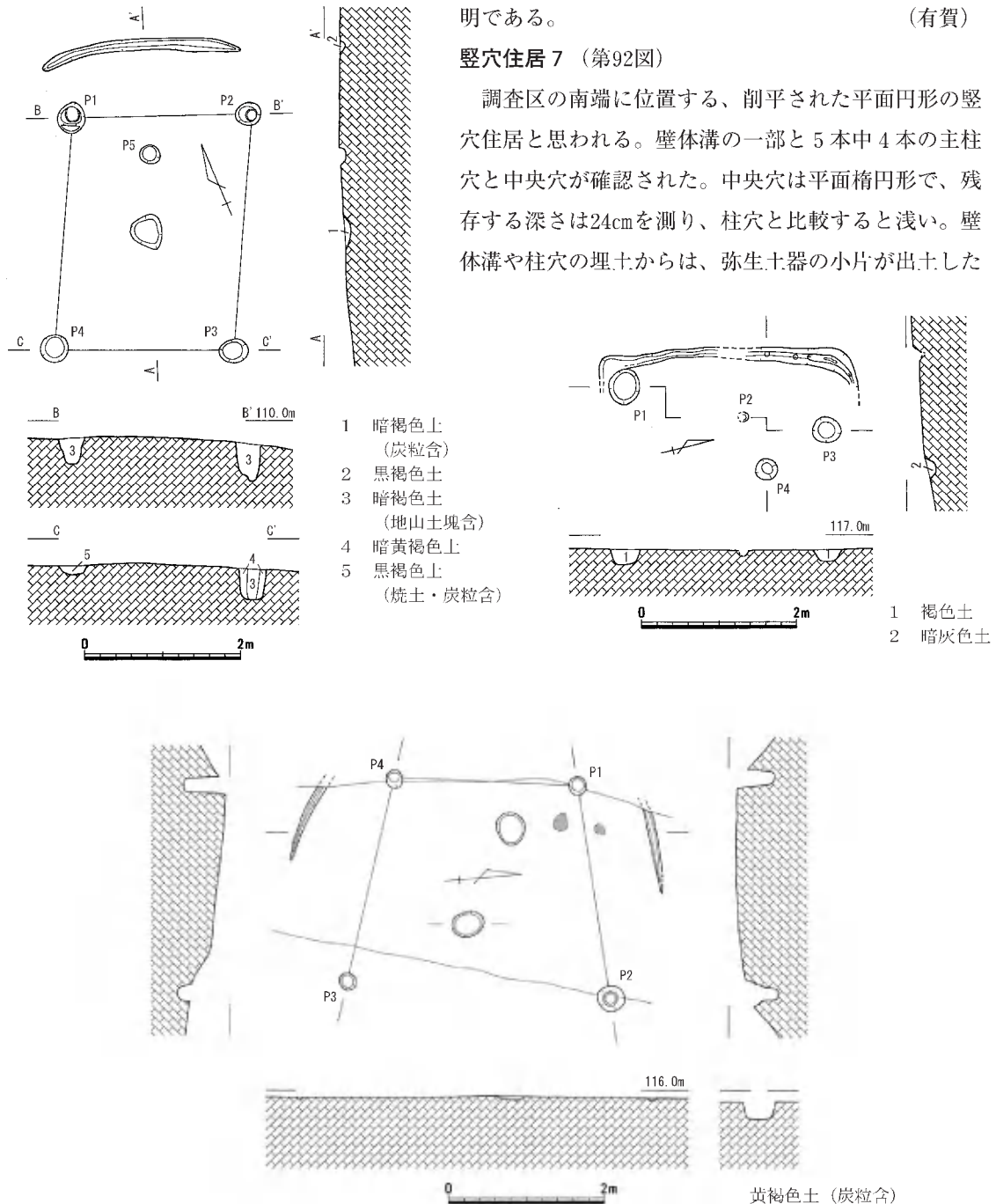
竪穴住居6 (第92図)

竪穴住居1の西に位置する隅丸方形の竪穴住居である。西側の一边で浅く壁体溝が残存するものの、他は削平され消失している。西辺で3.3mを測る小形の住居である。床面で柱穴4本を検出したほか、壁体溝の底面で2つの小さな円形ピットを確認した。竪穴住居10でもみられた杭列の一部と考えられる。

詳細な時期については、遺物の出土がないため不明である。(有賀)

竪穴住居7 (第92図)

調査区の南端に位置する、削平された平面円形の竪穴住居と思われる。壁体溝の一部と5本中4本の支柱穴と中央穴が確認された。中央穴は平面楕円形で、残存する深さは24cmを測り、柱穴と比較すると浅い。壁体溝や柱穴の埋土からは、弥生土器の小片が出土した

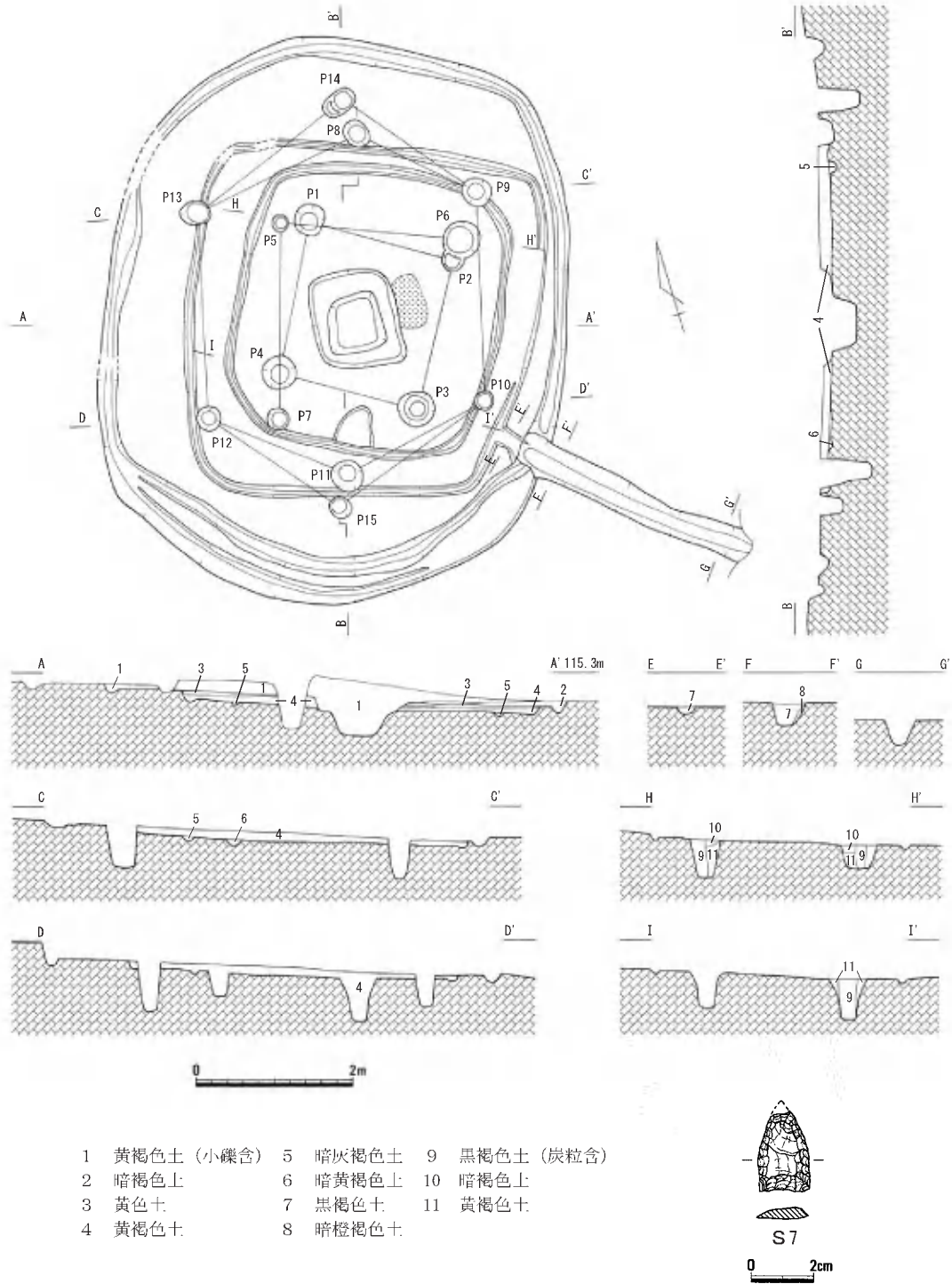


第92図 竪穴住居5～7 (1/80)

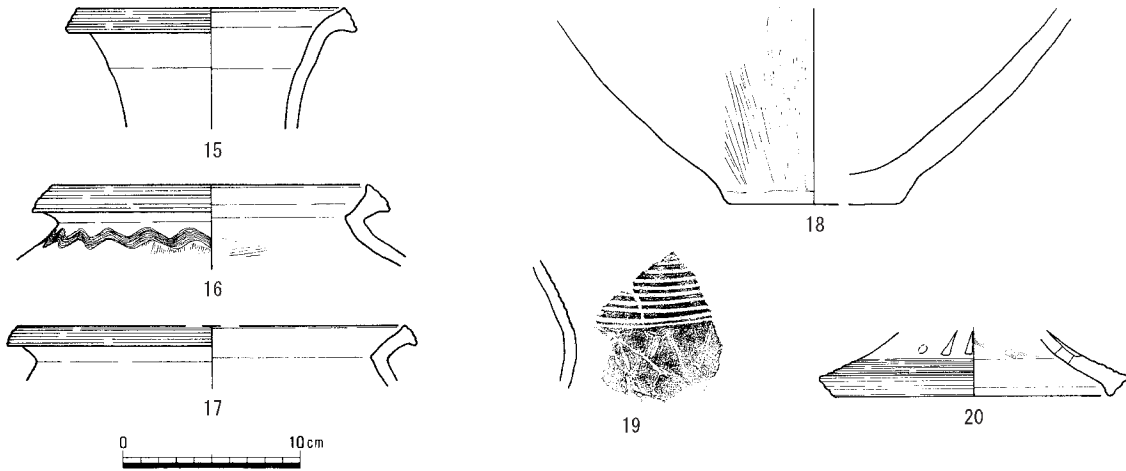
にすぎない。住居の時期については判断が困難だが、弥生時代後期の可能性がある。(柴田)

竪穴住居 8・9 (第93・94図、図版13-3)

調査区南部の西寄りに位置する住居で、平面隅丸方形の住居 8 a・8 b から平面楕円形の住居 9 へと順次拡張している。住居 8 の支柱穴は 4 本で、1 回の拡張が認められる。柱穴もこれに伴い立て替



第93図 竪穴住居 8・9 (1/80)・竪穴住居 8 出土遺物 (1/2)

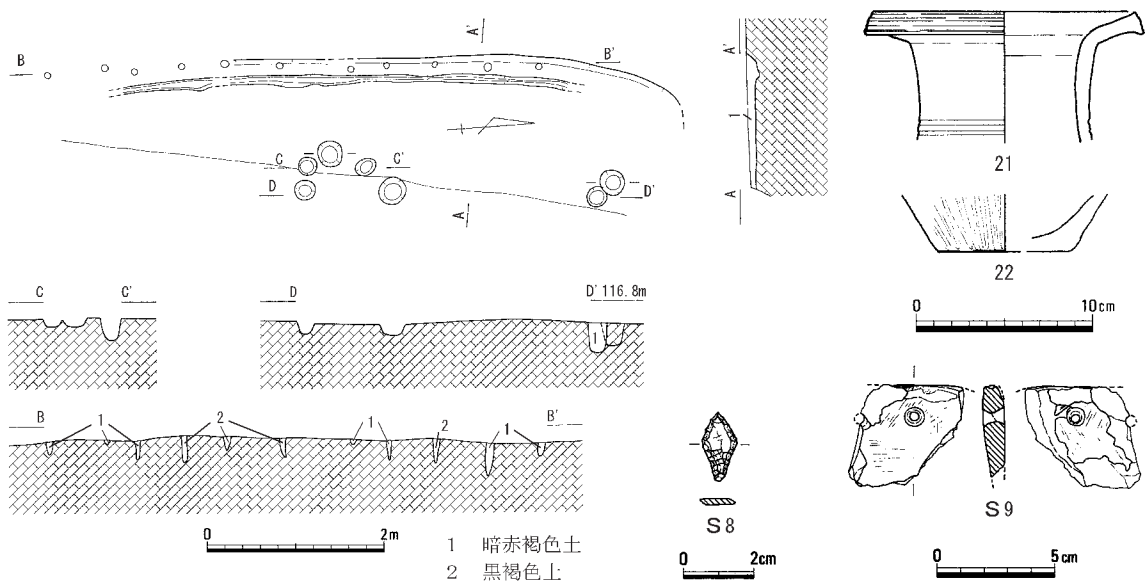


第94図 竪穴住居9出土遺物 (1/4)

えられているようである。住居8に伴う中央穴は明らかでない。住居8bには壁体溝南東部から屋外へ伸びる溝が取り付けられている。住居9の主柱穴は6本で、長軸側2本が拡張に伴って立て替えられている。中央穴は平面方形で、二段掘りである。壁体溝南東部には、屋外へ伸びる溝を引継いで再掘削している。住居9は壁体溝から壺18・19、埋土からは壺15、甕16・17、高杯20などが出土した。出土遺物などから、住居9は弥生時代後期前葉と思われ、住居8は中期後葉の可能性はある。(柴田)

竪穴住居10 (第95図)

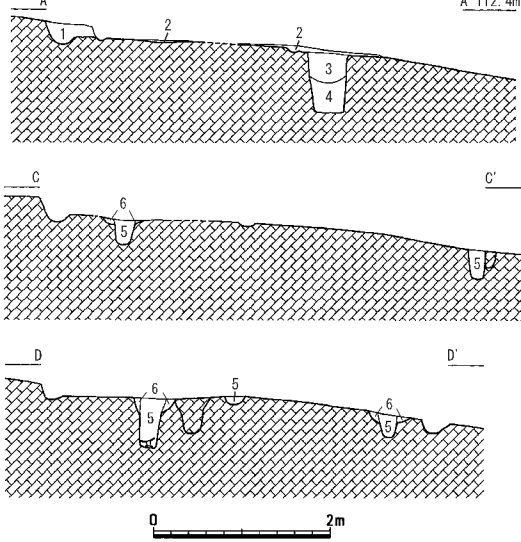
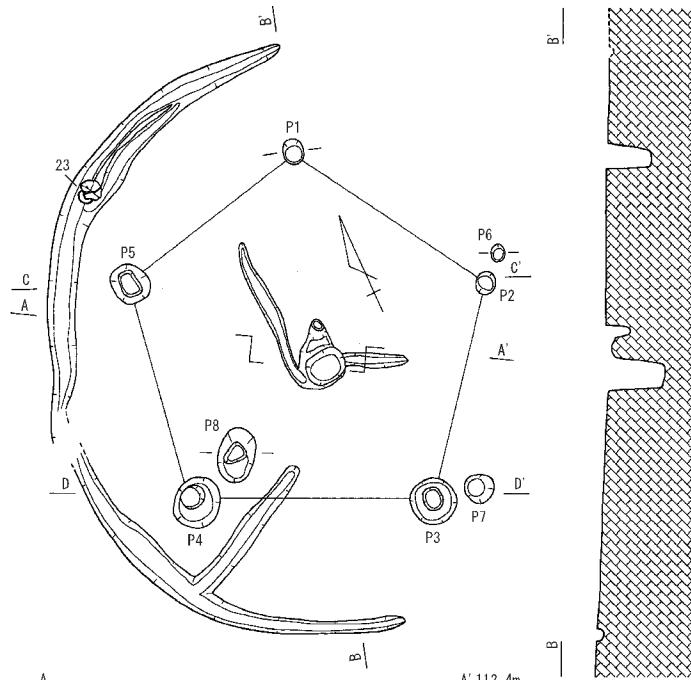
東側の大部分が後世の削平により消失しているが、隅丸方形の竪穴住居であると判断できる。西辺には、壁体から20cm離れて溝が伴う。その壁体溝に沿うように、約60cm間隔で径8cmの円形ピットが検出された。断面は先がやや尖っており、何らかの機能を有する杭を打ち込んだものと思われる。壺21・22のほか、石鏃S8と石包丁S9が出土した。時期は弥生時代後期前葉である。(有賀)



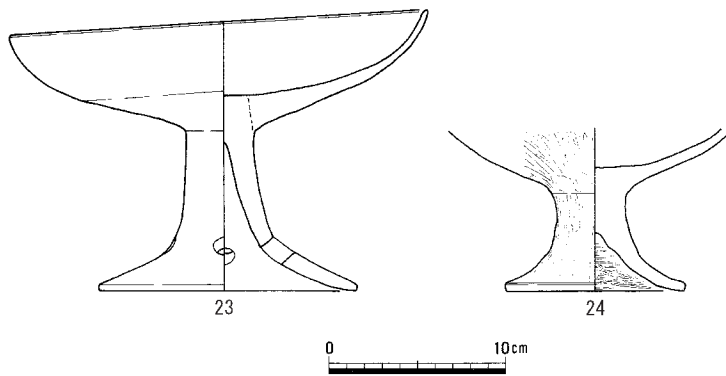
第95図 竪穴住居10 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2・1/3)

竪穴住居11 (第96図、図版21)

調査区南部の中央に位置する、円形(径672cm)の竪穴住居で、支柱穴は5本である。住居3を切っているが、住居17には切られている。壁体溝南西部から溝が伸びているが、中央穴には取り付かない。また、中央穴には2条の短い溝が取り付いている。中央穴は平面楕円形で、深さは72cmを測る。北側には小さなピットを伴う。壁体溝から高杯23、P4から高杯24がいずれも杯部を上にして出土している。遺物などから、住居の時期は弥生時代後期中葉と思われる。(柴田)



- 1 暗灰褐色土
- 2 黄灰褐色土
- 3 灰褐色土
- 4 暗灰褐色土
- 5 灰褐色土
- 6 明黄褐色土

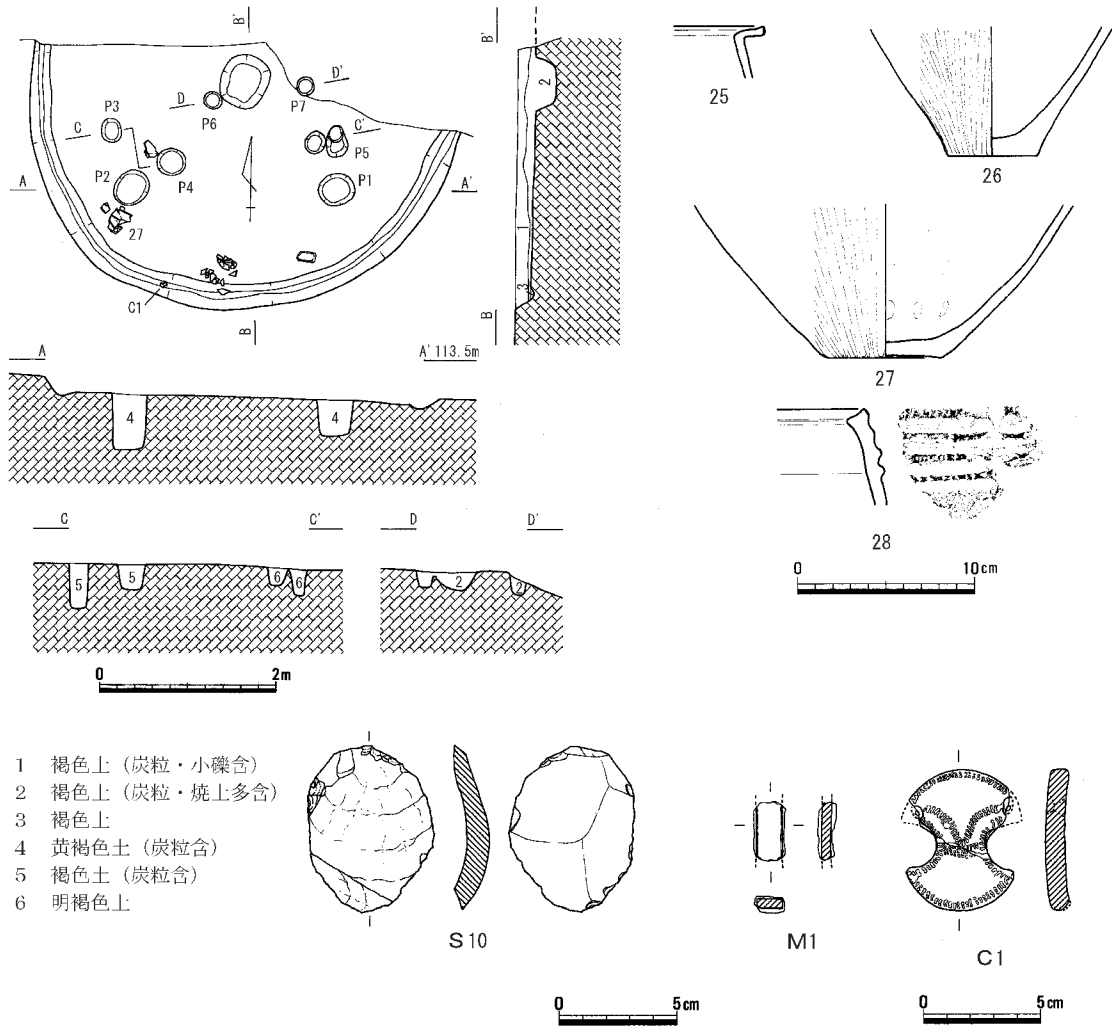


第96図 竪穴住居11 (1/80)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居12 (第97図、図版24)

調査区の北端、尾根の先端に位置する、竪穴住居である。北半部を現代の造成により欠損している。当住居は宮ノ上1号墳の下から出土した。平面は円形(径490cm)と推定され、深さは約20cmを測る。壁体溝を有し、柱穴の深さは、30~50cmを測る。支柱穴は4本と考えられる。中央穴には炭や焼土が見られ、中央穴を挟んで左右対称にピットを配している。南側の床面直上には、若干の土器溜まりが見られたほか、壁体溝の中から完形の分銅形土製品C1が1点出土している。そのほかには、鉄器の小片M1や剥片S10、土器などが出土している。時期は、弥生時代中期中葉頃と考えられる。(山崎)





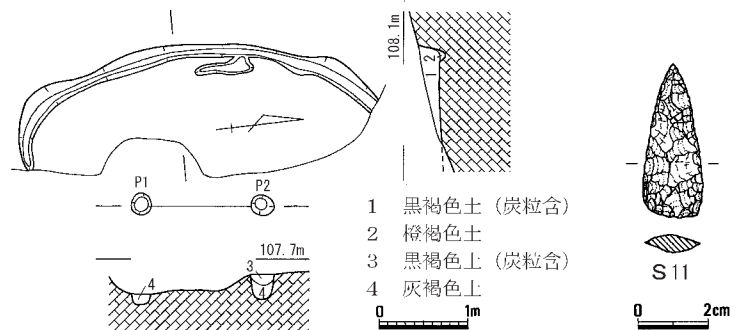
第97図 竪穴住居12 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

竪穴住居13 (第98図)

調査区北東端の斜面に位置する竪穴住居で、大半が流失している。やや隅丸方形を呈する壁体溝と柱穴2本が検出できた。埋土からは土器がほとんど確認されなかったが、石鏃S11が出土している。出土遺物が少なく、住居の詳細な時期は不明である。(柴田)

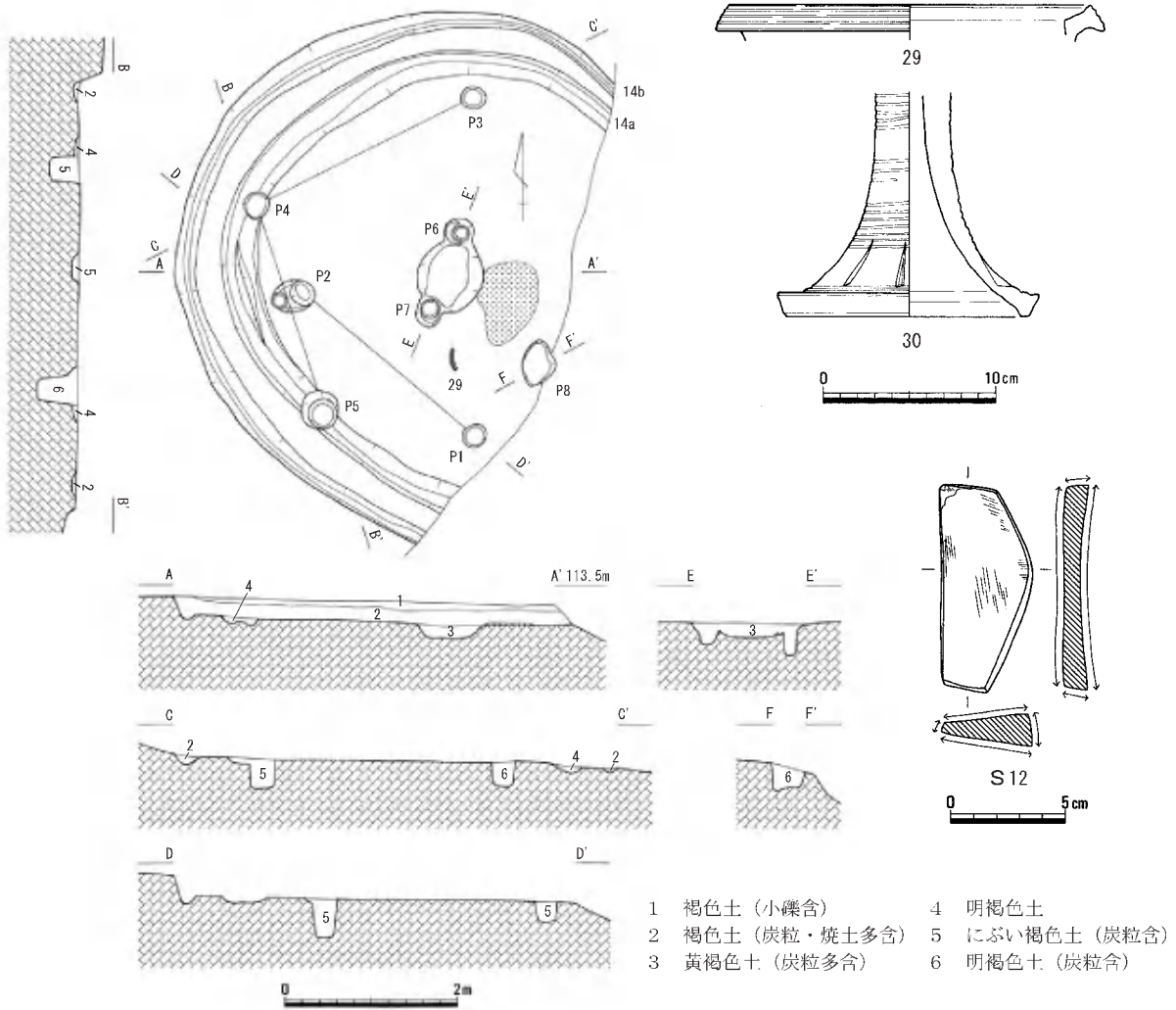
竪穴住居14 (第99図)

調査区北端部に位置する、竪穴住居で、東半分を現代の造成により欠損している。当住居は宮ノ上1号墳の下から出土した。平面は円形(径600cm前後)と推定され、深さは約25cmを残す。壁体溝が2条確認された。2棟の住居(14a・

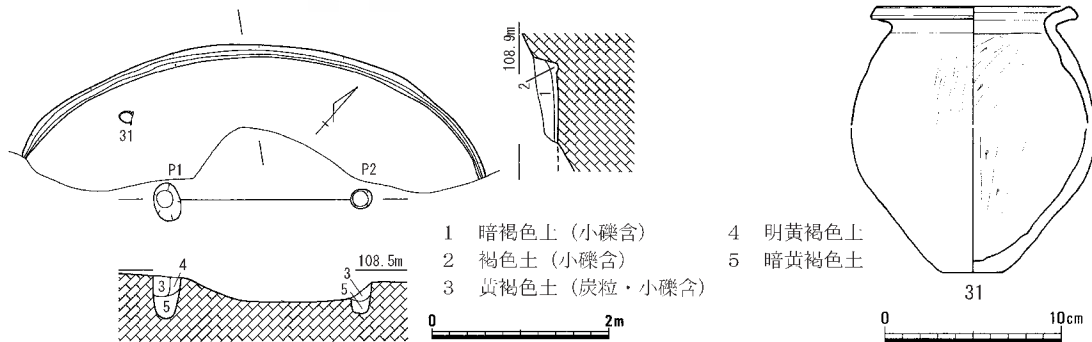


第98図 竪穴住居13 (1/80)・出土遺物 (1/2)

14b) が切り合っているものと考えられるが、住居の切り合いは不明確である。支柱穴の数は定かではない。柱穴の深さは、30～50cmを測る。中央穴とその周囲には炭や焼土が見られ、中央穴を挟んで左右対称にピットを配している。遺物は外側の壁体溝から砥石 S12などが出土している。時期は、弥生時代後期前葉頃と思われる。(山崎)



第99図 竪穴住居14 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)



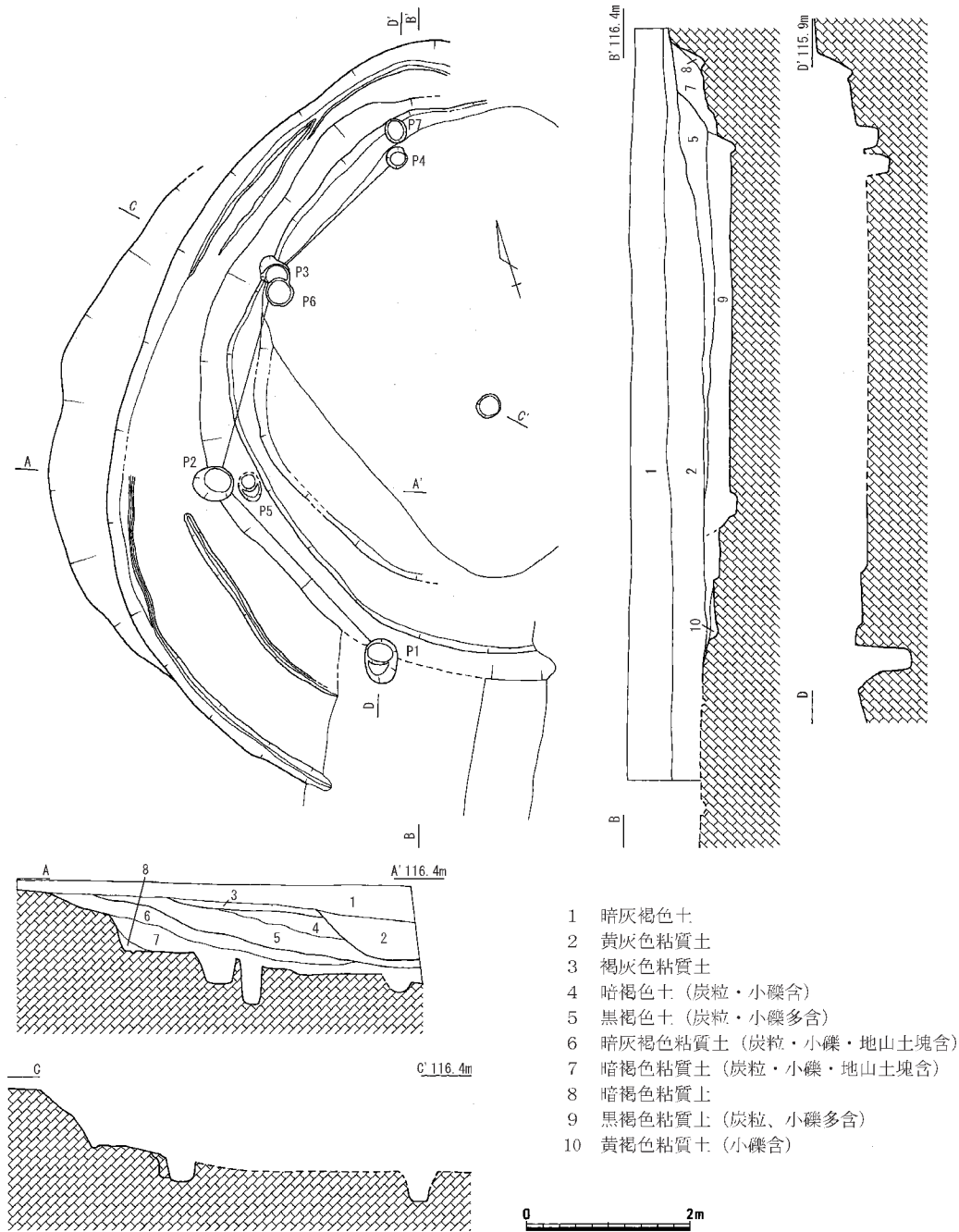
第100図 竪穴住居15 (1/80)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居15 (第100図、図版21)

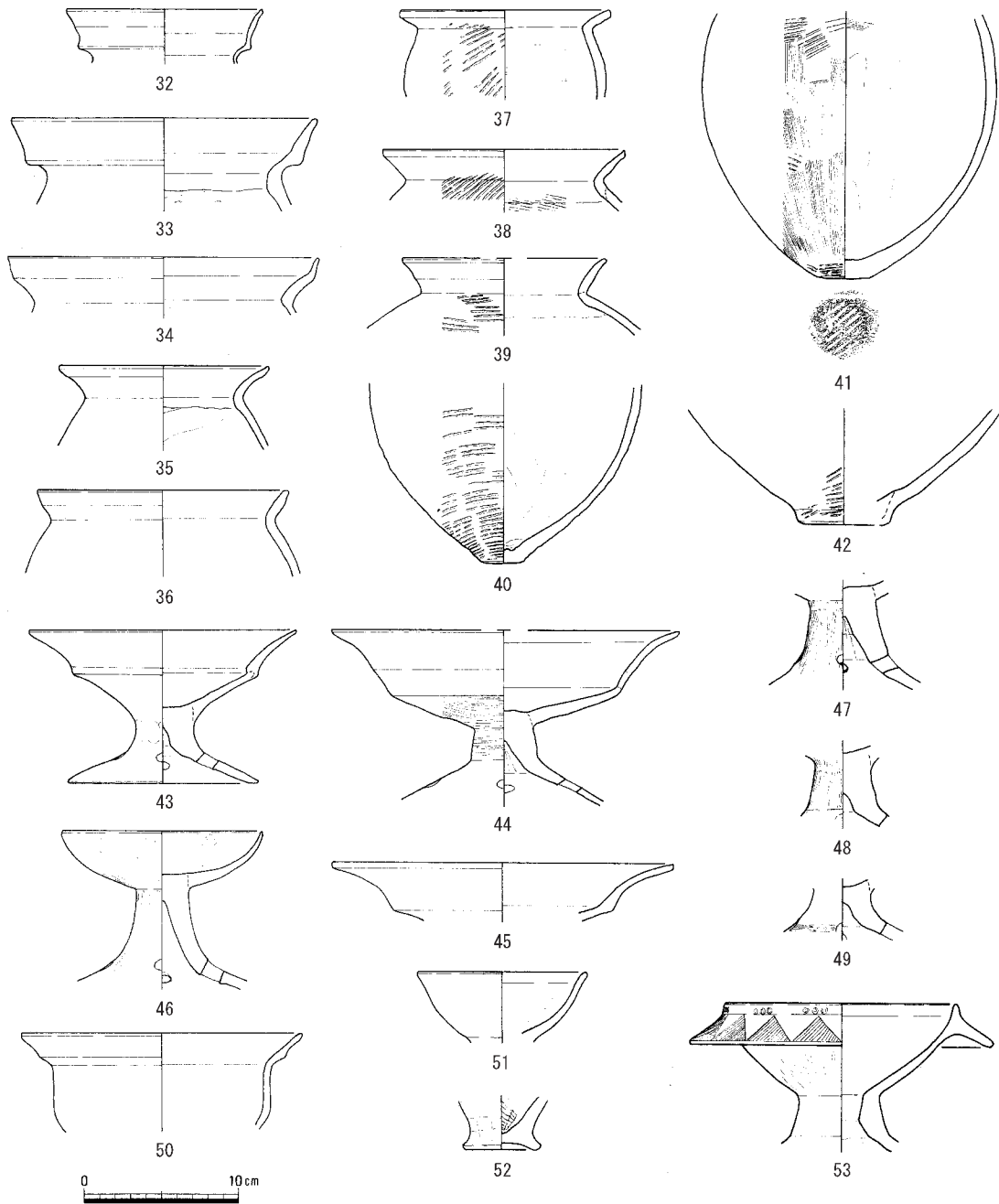
調査区北部の東斜面に位置する竪穴住居で、大半が流失している。円形を呈する壁体溝からは径500~600cmと推定できる。2本の柱穴が検出できたが、中央穴は削平されている。床面からは甕31が出土している。出土遺物から、住居の時期は弥生時代後期前葉と思われる。(柴田)

竪穴住居16 (第101~103図、図版13-3、21)

調査区の南西に位置する。東半を削平されており、遺存状態は悪い。また、同じ場所で拡張・重複しているため、個々の平面プランも読み取りにくい。このうち、最大拡張時の住居は平面隅丸方形で、

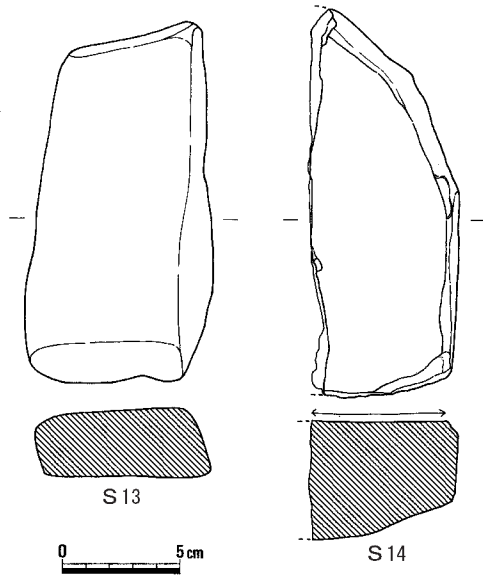


第101図 竪穴住居16 (1/80)

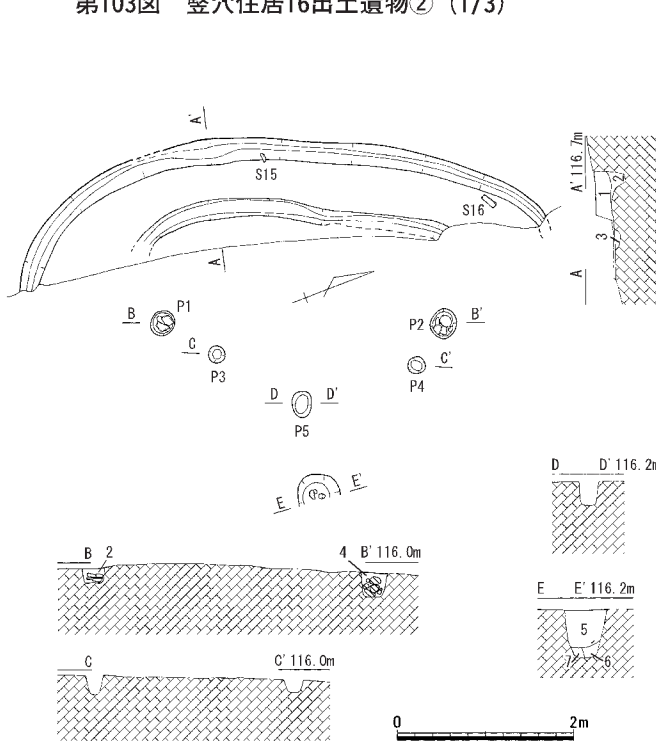


第102図 竪穴住居16出土遺物① (1/4)

長径965cm以上と想定される。主柱穴はP 1～P 4で、壁面に沿って複数本の主柱が立つようである。また、南西側には高床部がある。この住居の廃絶後、同じ場所で規模を縮小した竪穴住居が構築されている。この縮小住居は、平面隅丸方形で直径約500cmと想定される。土層断面では入れ子状に観察でき、第101図B-B'の9層が縮小住居の埋土である。遺物は埋土中から多数出土している。このうち、畿内系の叩き成形の甕37～42が注目される。遺構の時期は弥生時代終末期と考えられる。(佐藤)



第103図 竪穴住居16出土遺物② (1/3)



第104図 竪穴住居17 (1/80)

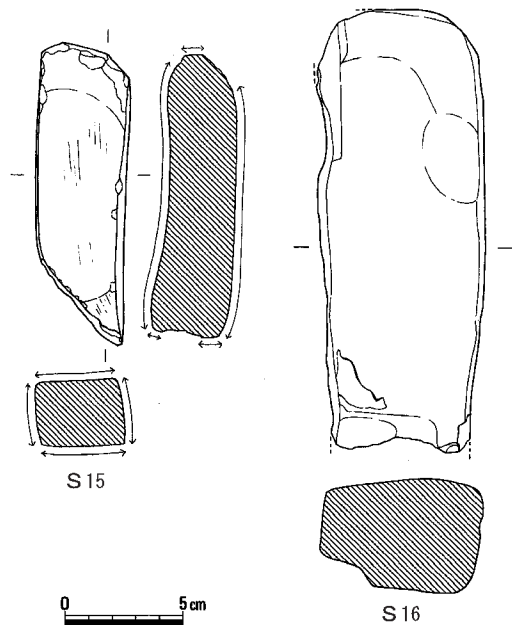
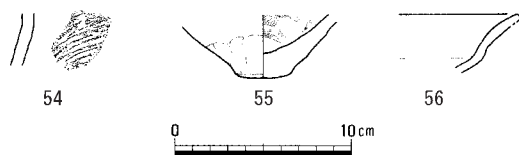
竪穴住居17 (第104図)

調査区南部の中央に位置する、方形(一辺262cm)の小形竪穴住居である。住居11を切るが、土壙9には切られている。柱穴は2本検出されたが、中央穴は認められなかった。切り合いなどから、住居の時期は弥生時代後期末頃と推測される。(柴田)

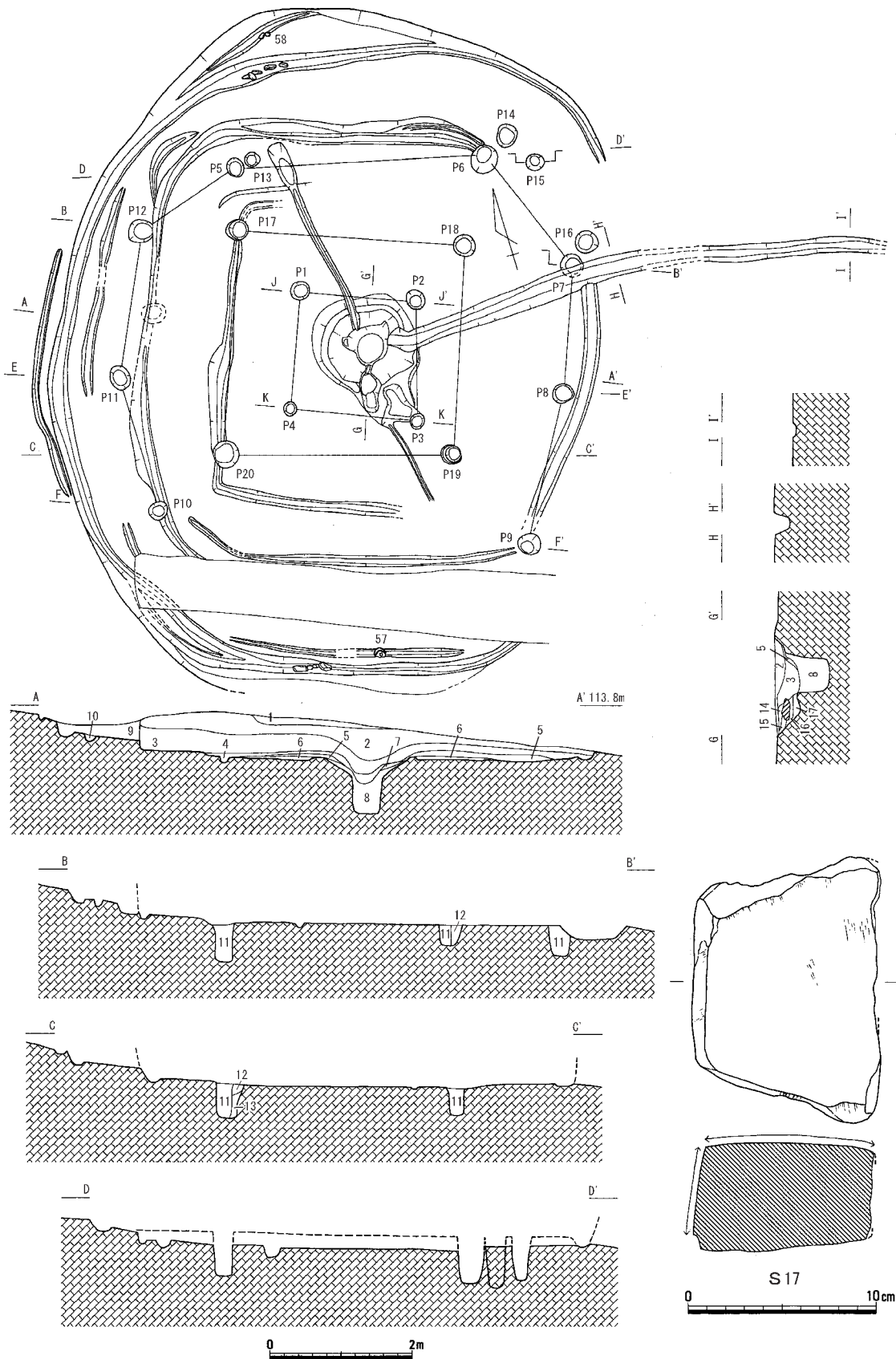
竪穴住居18 (第105図)

調査区西部に位置する、隅丸方形の竪穴住居である。壁体溝を2条確認し、建替えが認められた。P1・2は外側の壁体溝に伴い、根石をもつ。床面で砥石S15が、埋土から甕54・55と高杯56が出土した。時期は弥生時代後期末である。(有賀)

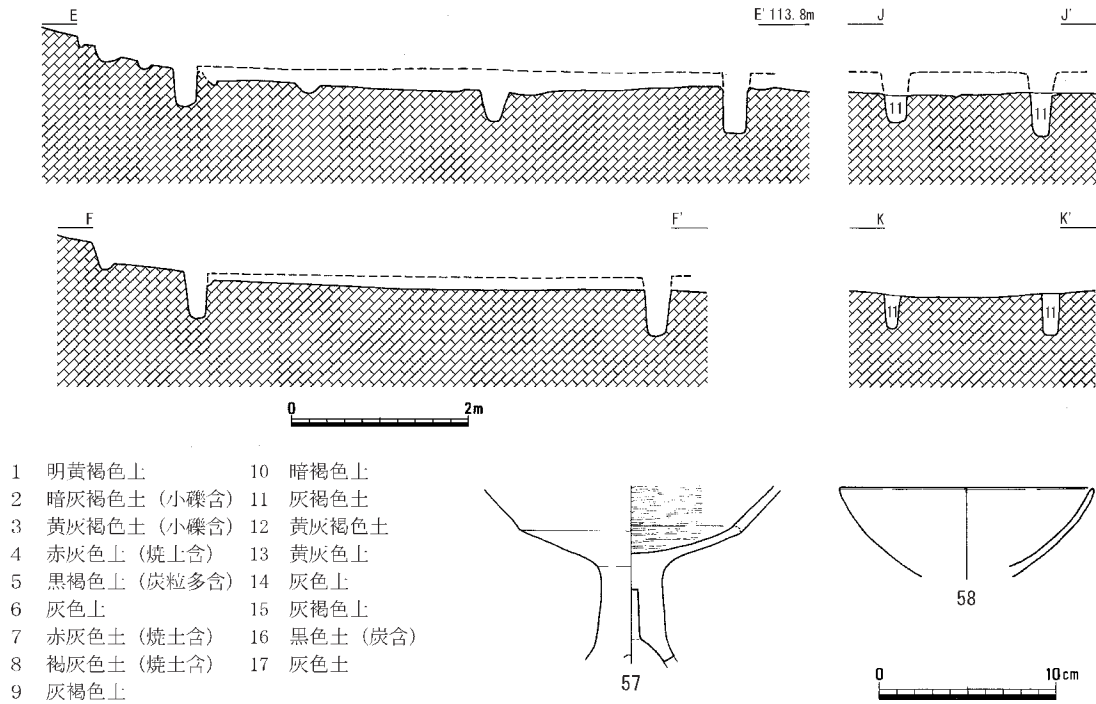
- 1 暗赤褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 暗赤褐色土
- 4 灰色粘質土
- 5 暗赤褐色土
- 6 暗黄褐色粘質土
- 7 黒褐色粘質土



第105図 竪穴住居18 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)



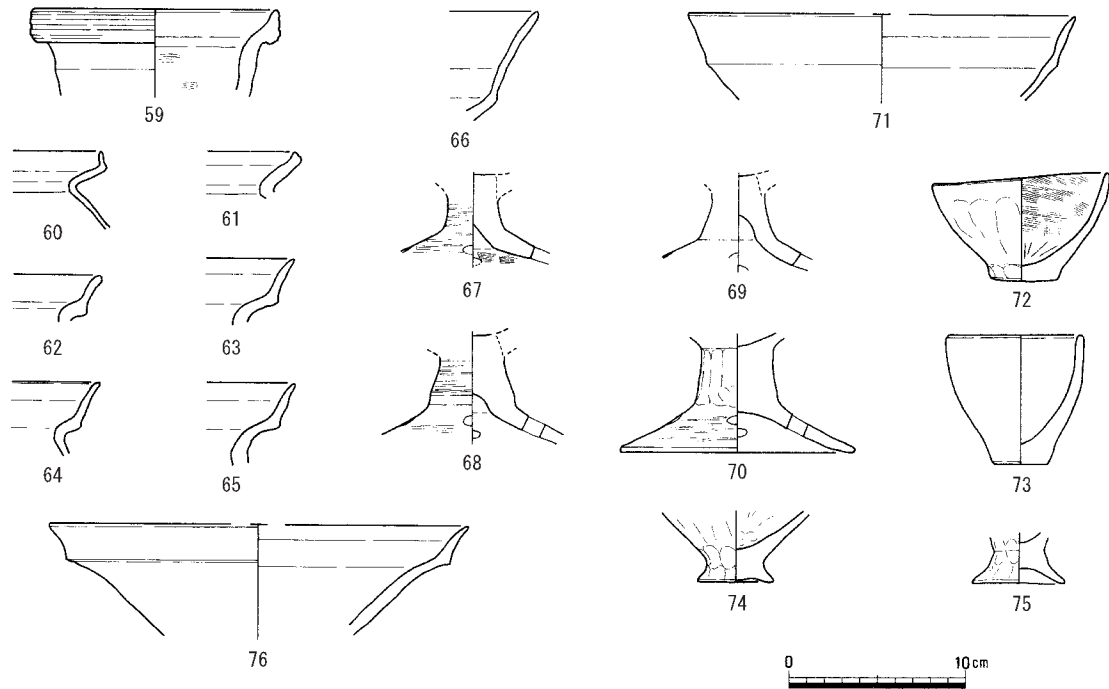
第106図 竪穴住居19・20 (1/80)・竪穴住居20出土遺物① (1/3)



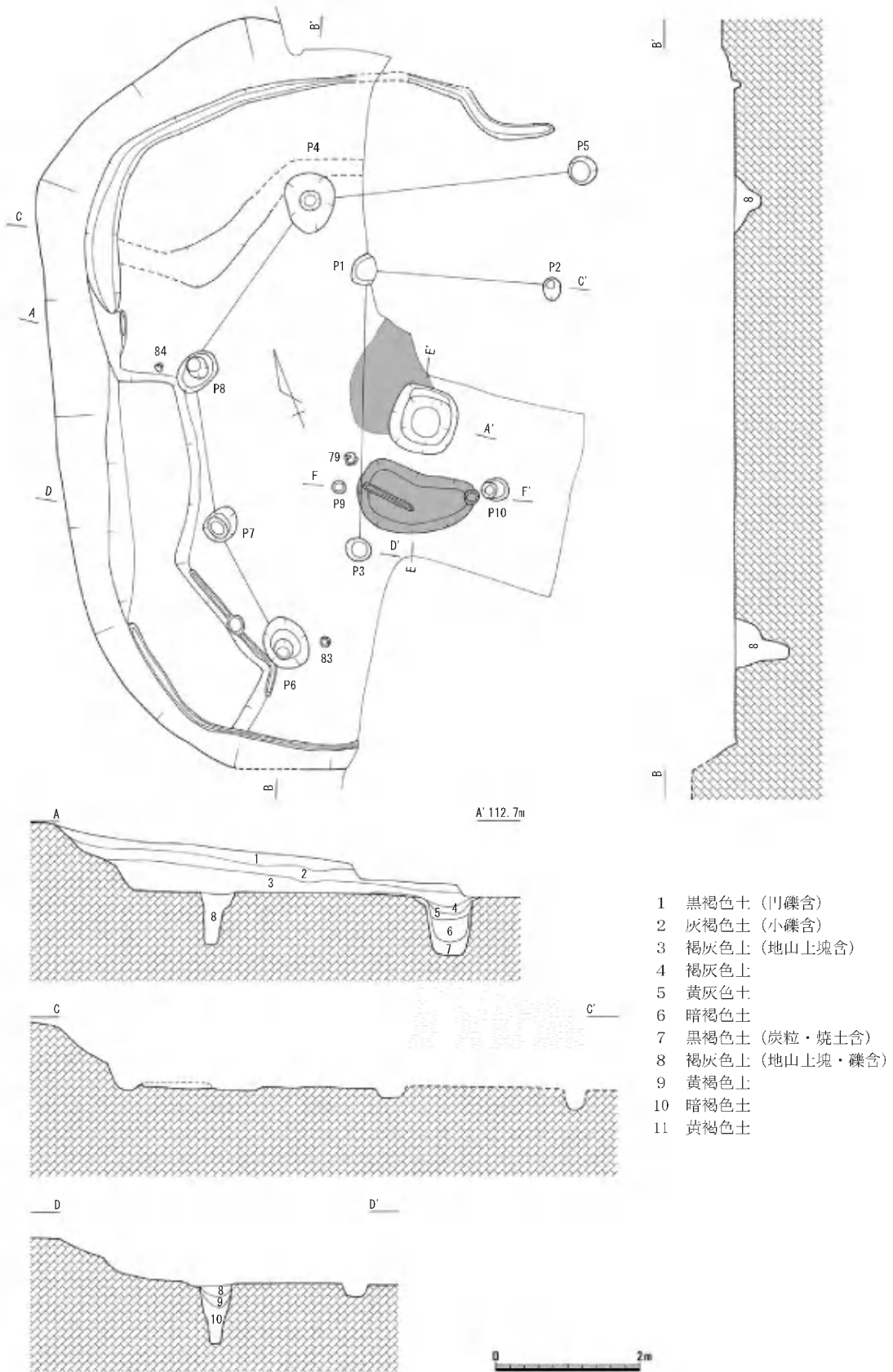
第107図 竪穴住居19・20 (1/80)・竪穴住居19出土遺物 (1/4)

竪穴住居19 (第106・107図、図版14-1~3)

調査区南部の中央に位置する、平面楕円形 (長径965cm) の竪穴住居で、住居20に切られている。主柱穴は、中央に4本、壁寄りに10本と推測される。壁体溝が複数確認され、4回程度の拡張が行わ



第108図 竪穴住居19・20出土遺物② (1/4)



第109図 竪穴住居21 (1/80)



れたと考えられる。中央穴は住居20の中央穴のため不明である。南側の壁体溝からは、高杯57が杯部を下にして、また北側では鉢58が出土した。さらに、北側では5個の円礫、南側では4個の円礫が並んだ状態で出土している。P11からは、高杯66・71、器台76が出土している。遺物などから、住居の時期は弥生時代末～古墳時代初頭と思われる。(柴田)

**竪穴住居20** (第106～108図、図版14-1、21)

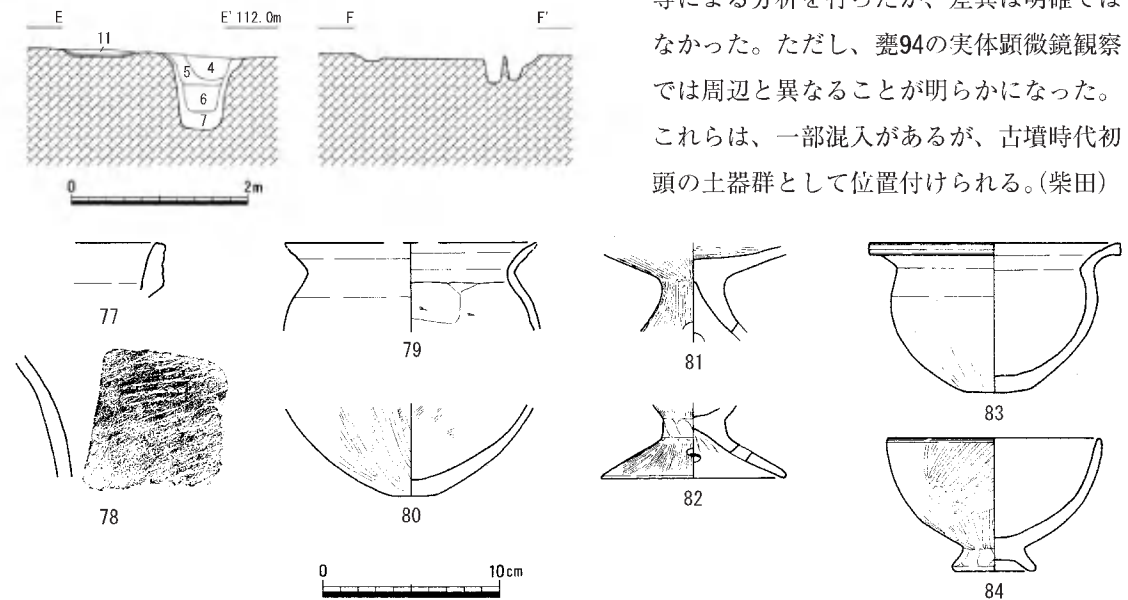
調査区南部の中央に位置する、平面隅丸方形(一辺642cm)の竪穴住居で、住居19を切っている。高床部を四周に有するとみられ、床の低い方に溝が巡る。主柱穴は4本で、高床部の角付近に設けられていると考えられる。中央穴は平面円形で、周囲に土手が形成されている。また、中央穴には3条の溝が取り付け、東の溝は屋外へ伸びている。土器は小片が多く、すべて埋土中からの出土である。遺物などから、住居の時期は古墳時代初頭と思われる。(柴田)

**竪穴住居21** (第109～112図、図版14-4～6、22)

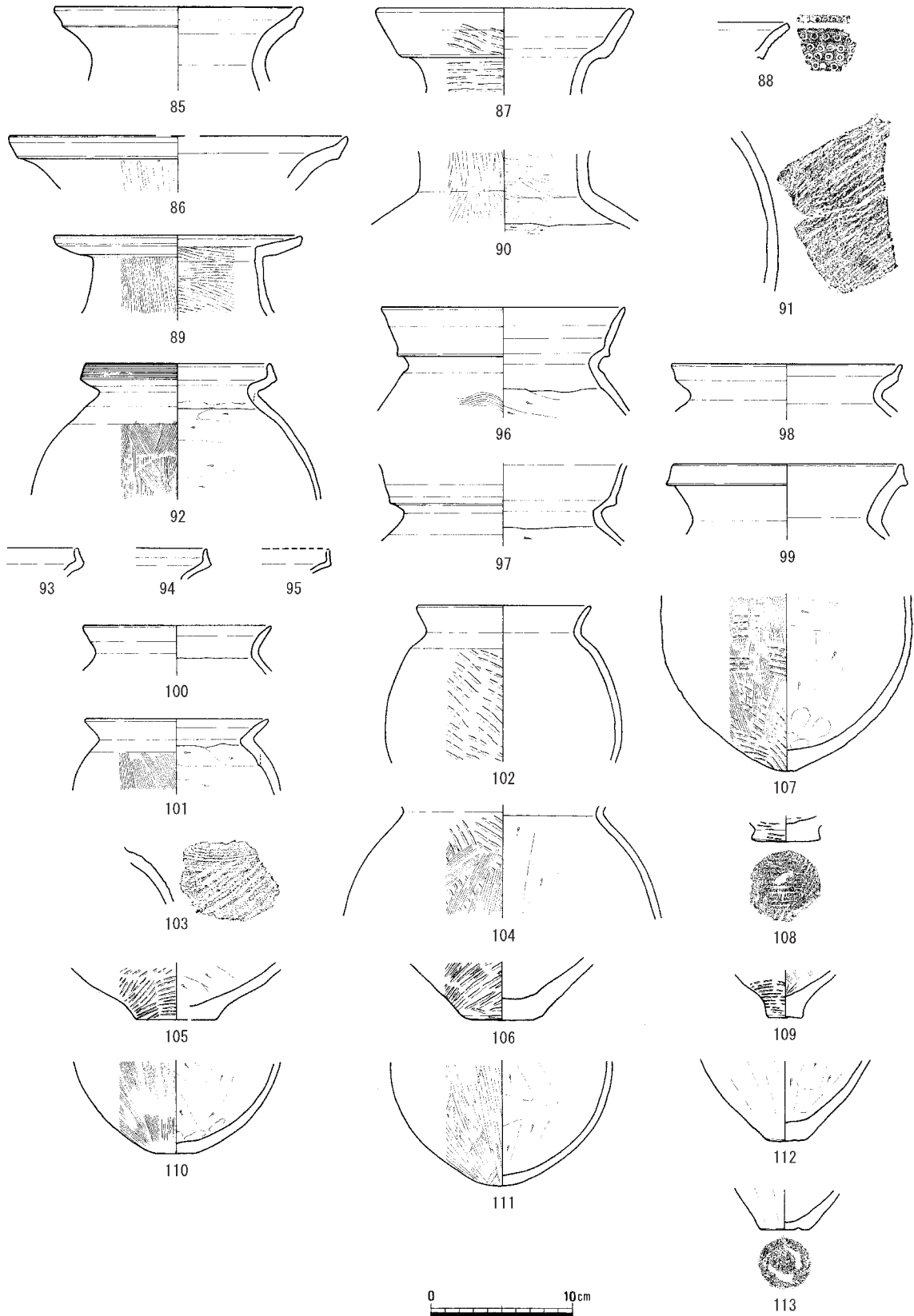
調査区南部の中央に位置する、平面隅丸方形(一辺1042cm)の大形竪穴住居である。主柱穴は中央4本、壁寄り8本と推測される。2箇所の高床部が残存し、柱の位置で屈曲、あるいは途切れている。類似する高床部を設ける美作の例としては津山市の大田十二社5号住居址がある。中央穴は平面方形で、深さが85cmを測る。この北側には炭が堆積した部分があり、南には炭が堆積した楕円形の浅い土壌が併設される。この楕円形土壌の東西には、ピットも検出された。床面から、甕79・鉢83・台付鉢84、P1から壺77・78が出土した。鉢83については、蛍光X線による胎土分析を行い、当該期の周辺出土土器とは若干異なることが判明した。遺物などから、住居の時期は弥生時代後期末と思われる。

この埋土上層(1層)を中心に、比較的多くの土器が出土した。これらには、器形や調整技法などに他地域からの影響が看取される土器もある。讃岐系の壺89・高杯114、吉備南部系の甕92～95・大形の鉢136・137、山陰系の甕96・97・鼓形器台141～143、東部瀬戸内地域の特徴を持つ甕106・108・109・113、有孔鉢135、但馬・丹波系の器台138・139などである。一部の胎土については、蛍光X線

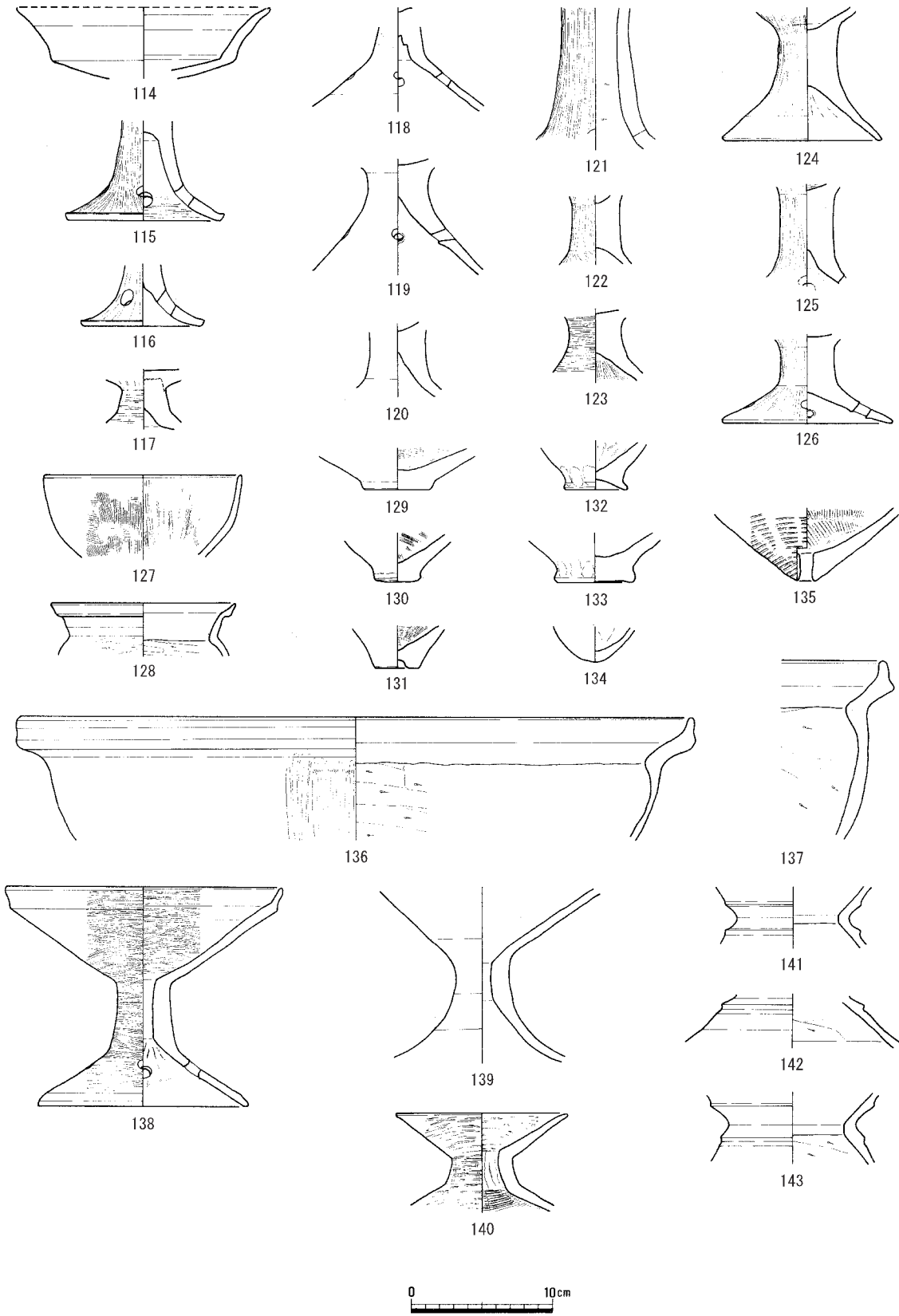
等による分析を行ったが、差異は明確ではなかった。ただし、甕94の実体顕微鏡観察では周辺と異なることが明らかになった。これらは、一部混入があるが、古墳時代初頭の土器群として位置付けられる。(柴田)



第110図 竪穴住居21 (1/80)・出土遺物 (1/4)



第111図 竪穴住居21上層出土遺物① (1/4)



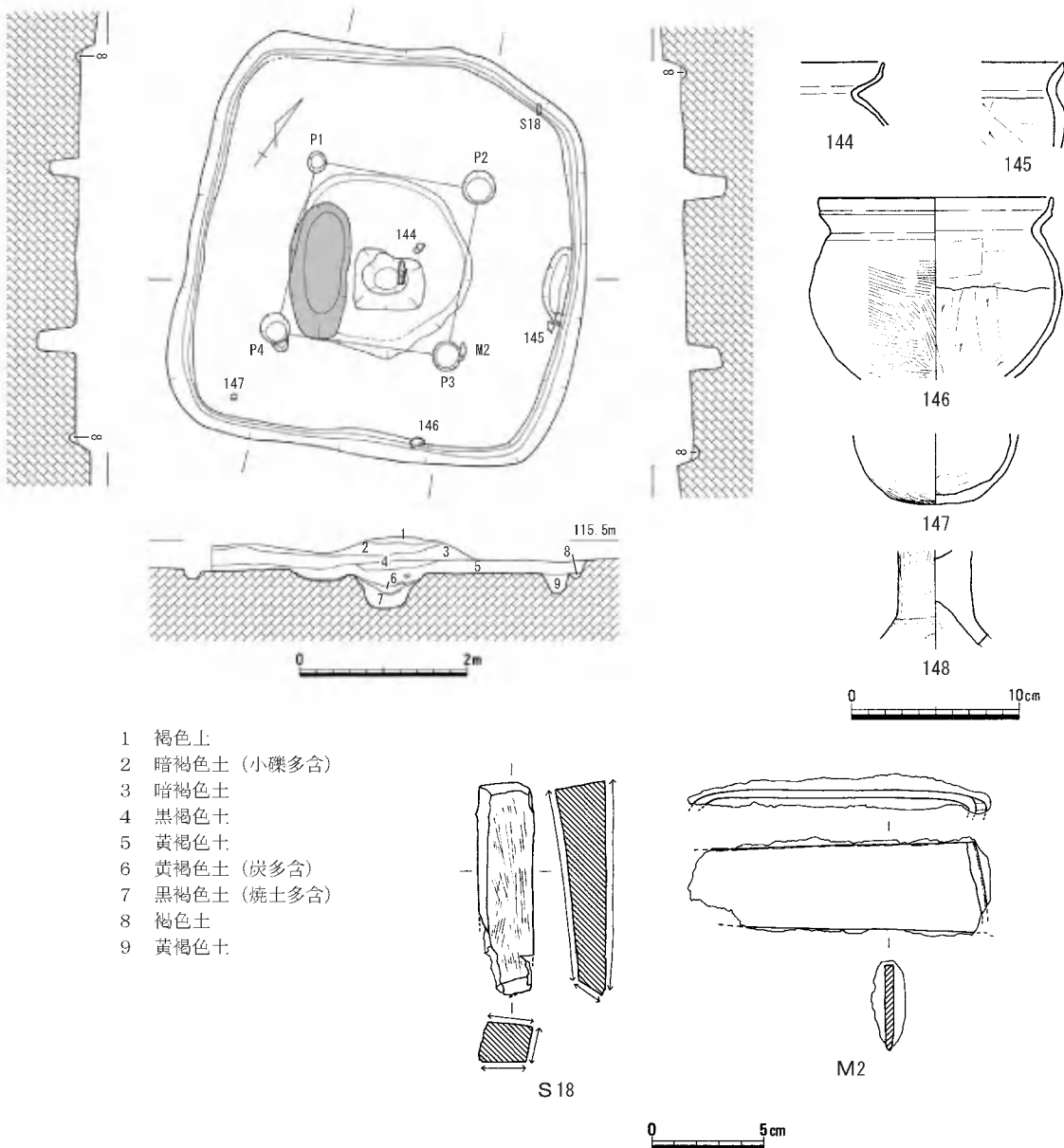
第112図 豎穴住居21上層出土遺物② (1/4)

竪穴住居22 (第113図、図版13-3、15-1~3、22、24)

調査区南部の西寄りに位置する平面隅丸方形(一辺495cm)の竪穴住居で、住居8・9・16を切る。床面中央がわずかに低く、その周りに4本の主柱穴が検出された。中央穴は平面方形で、南西に炭が堆積した楕円形の浅い土窟が伴う。第7層中は焼土が多く、上面も焼土の堆積である。第6層には炭が多く、中央穴上の5層には炭化材が含まれ、この材の放射性炭素年代測定を行った。また、東壁に楕円形の土窟が設けられている。床面や壁体溝から甕144~146、鉢147、砥石S18、鉄鎌M2、中央穴から高杯148が出土している。遺物などから、住居の時期は古墳時代初頭と思われる。(柴田)

竪穴住居23 (第114図、図版22)

調査区西部に位置する、方形の竪穴住居である。東辺は後世の削平により消失しているが、規模は一辺4.2mを測る。西辺から約1.4m離れて、平行する溝を検出した。この溝より西では一段高く貼床

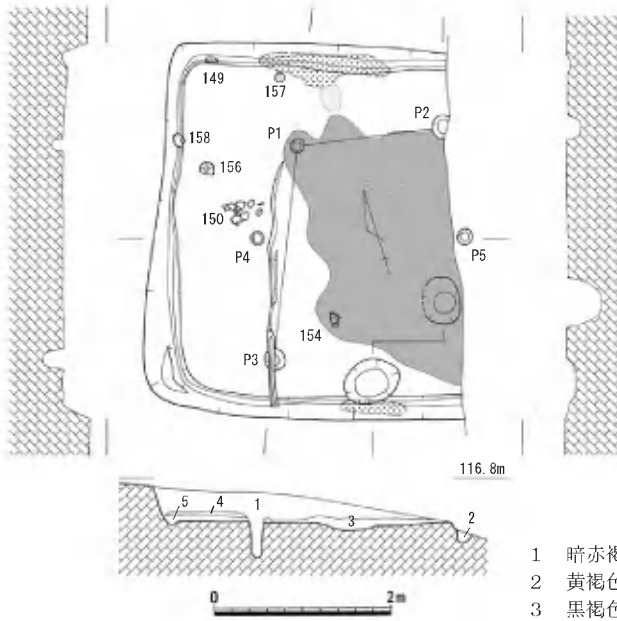


第113図 竪穴住居22 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/3)

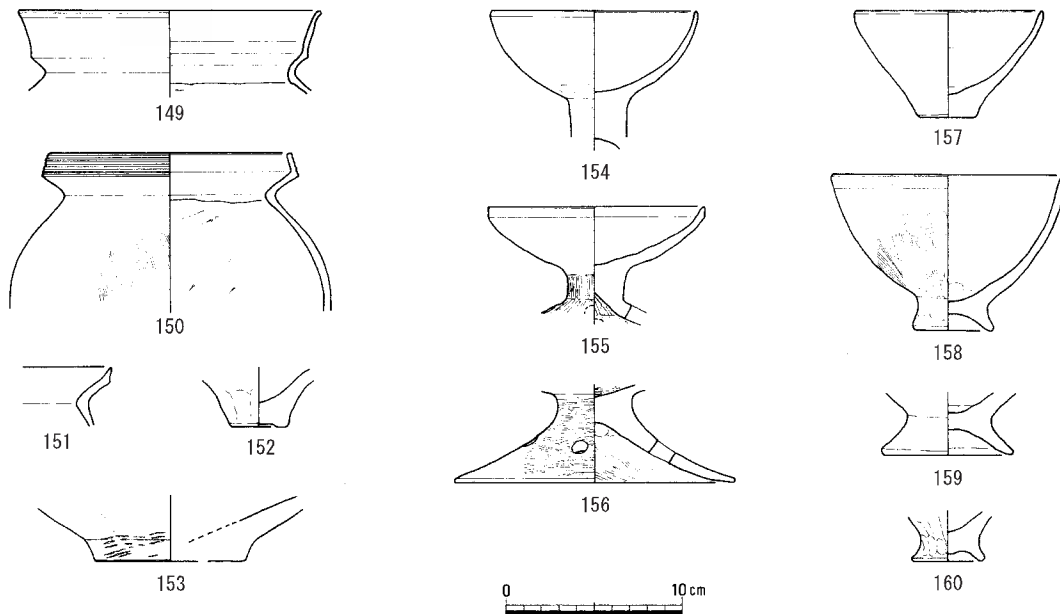
されている。床面には中央部や北辺を中心に広く焼土が認められ、焼失住居である可能性が高い。また、床面には多数の土器が残されていた。甕149・150や高杯154・156、鉢157、台付鉢158などである。主柱穴は4本もしくは2本と考えられる。P1からP3と確認できなかったもう1本の場合と、P4とP5の2本柱の場合とが推定される。時期は、古墳時代初頭と思われる。(有賀)

竪穴住居24 (第115図、図版15-4~6)

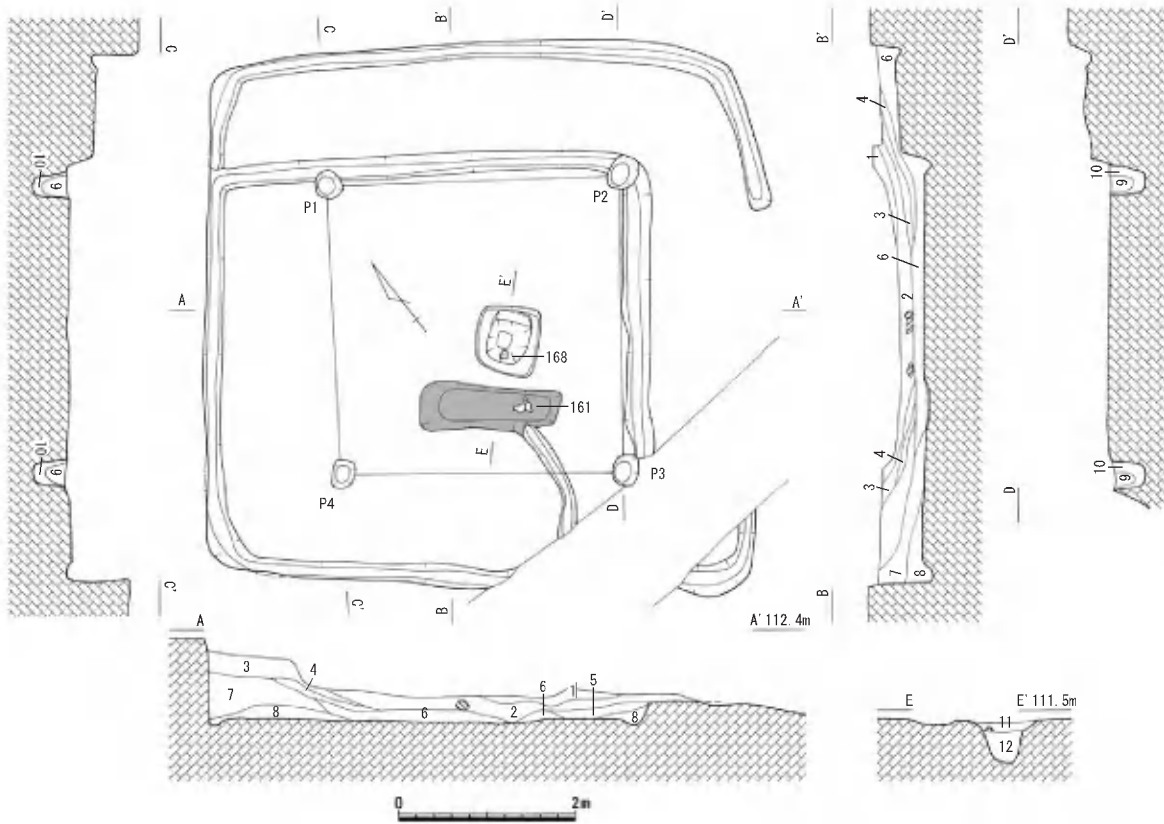
調査区北部の中央に位置する、平面方形(一辺635cm)の竪穴住居で、岩脈上に掘り込まれている。2辺に高床部を設け、床の低い方に溝が施される。主柱穴は4本で、内3本がこの溝にかかっている。



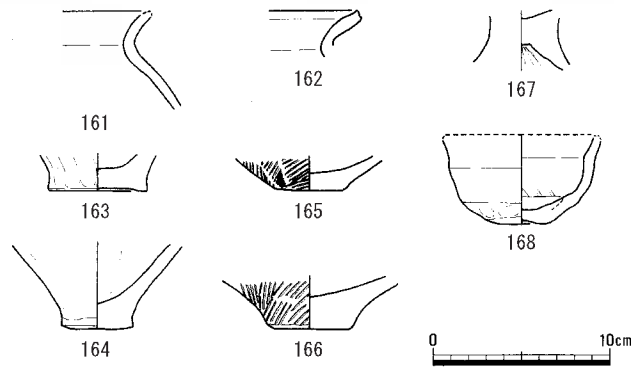
中央穴は平面方形で、南西には炭が堆積した楕円形の浅い土壇が伴う。西側2辺の壁に沿って分布する初期堆積の第7層は、地山の礫が主体である。これが、本来の壁の高さを示すものか、屋根構造の一端を示すものかは不明である。中央穴上層からは、鉢168が口縁を下にした状態で、また楕円形土壇からは甕161が破片で出土している。遺物などから、住居の時期は古墳時代初頭と思われる。(柴田)



第114図 竪穴住居23 (1/80)・出土遺物 (1/4)



- |        |               |
|--------|---------------|
| 1 明褐色土 | 7 暗黄褐色土       |
| 2 黒褐色土 | (地山礫多含)       |
| 3 黄褐色土 | 8 灰褐色土        |
| 4 黒褐色土 | 9 褐灰色土 (小礫含)  |
| (炭粒含)  | 10 灰黄色土       |
| 5 黄褐色土 | 11 黒褐色土 (炭粒含) |
| 6 暗褐色土 | 12 黄灰褐色土      |

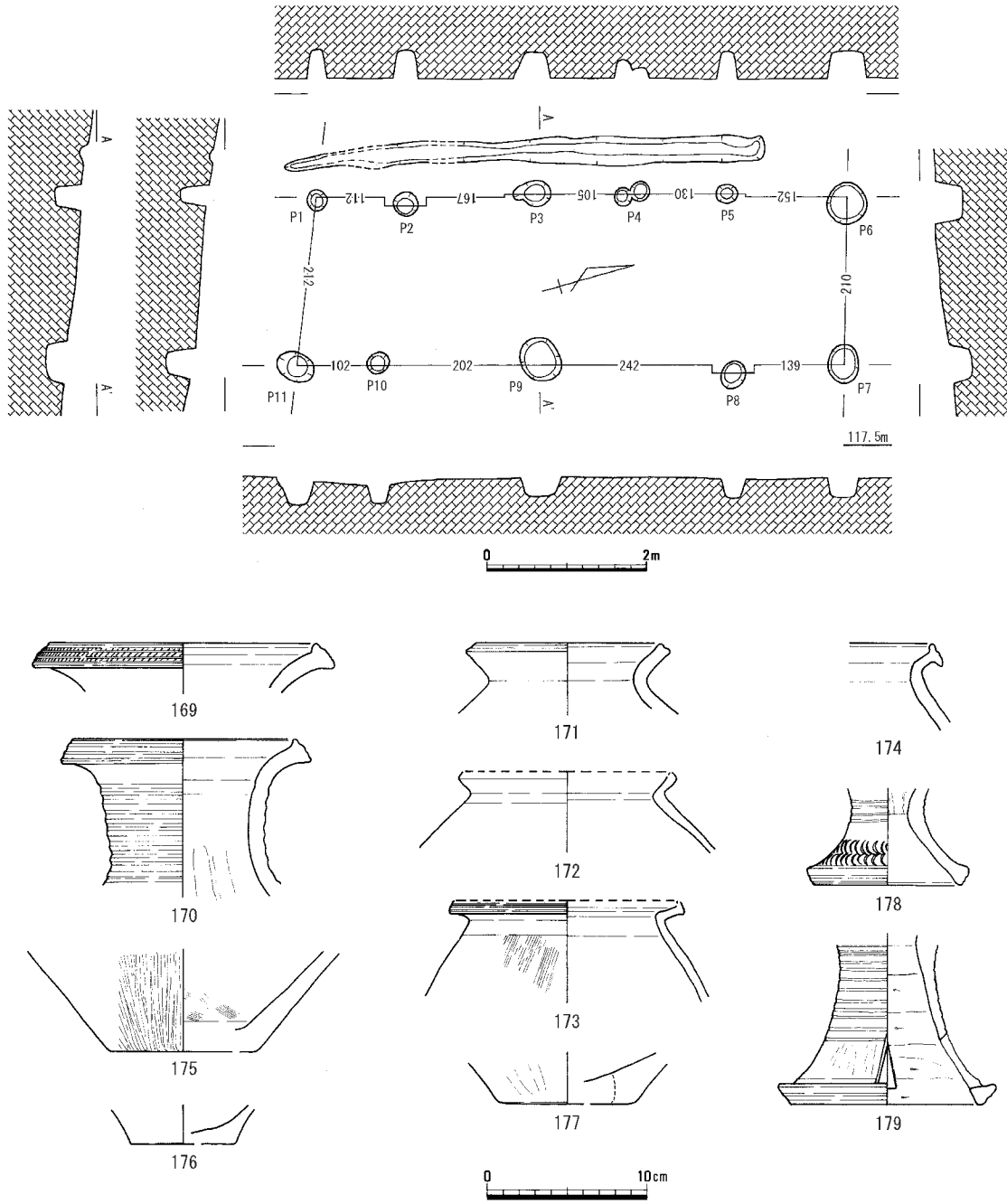


第115図 竪穴住居24 (1/80)・出土遺物 (1/4)

## 2 建物

### 建物1 (第116図)

調査区西部、竪穴住居1の西に位置する。梁行1間×桁行5間、もしくは梁行1間×桁行1間の長方形掘立柱建物が想定される。前者はP1からP11までの柱穴を伴い、後者はP3・6・7・9の4本の柱穴を伴う。柱穴の規模は、後者の4本が径約40cmで他の柱穴に比して大きく、弥生土器を含んでいる。この場合、梁行210cm・桁行390cmを測り、床面積は8.19㎡となる。また、この建物には山側に長軸と平行して溝が走る。溝は長さ600cm・幅約20～40cmで「U」字形の断面形を呈し、建物に付

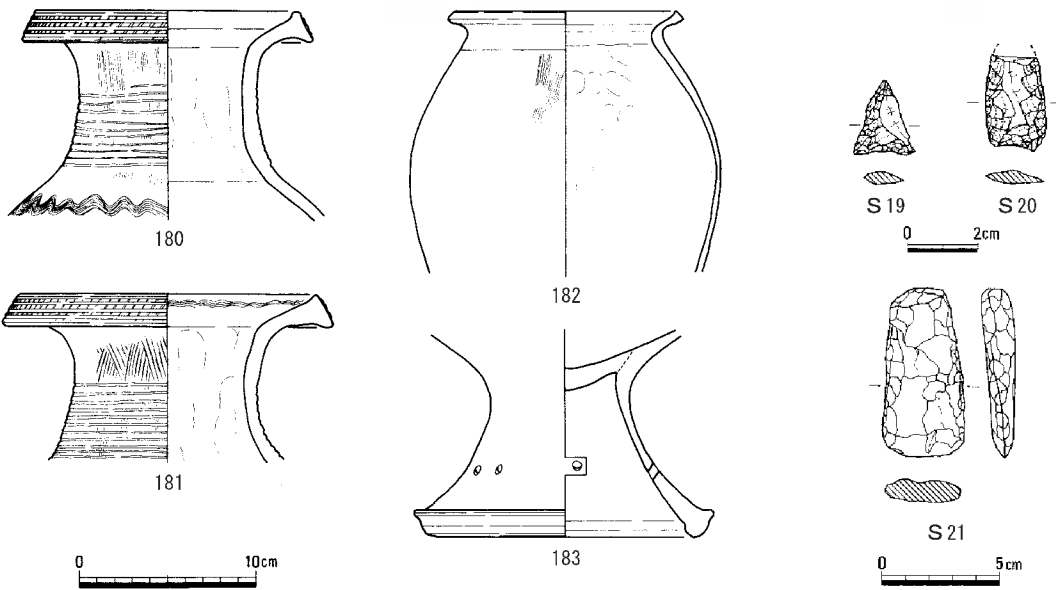
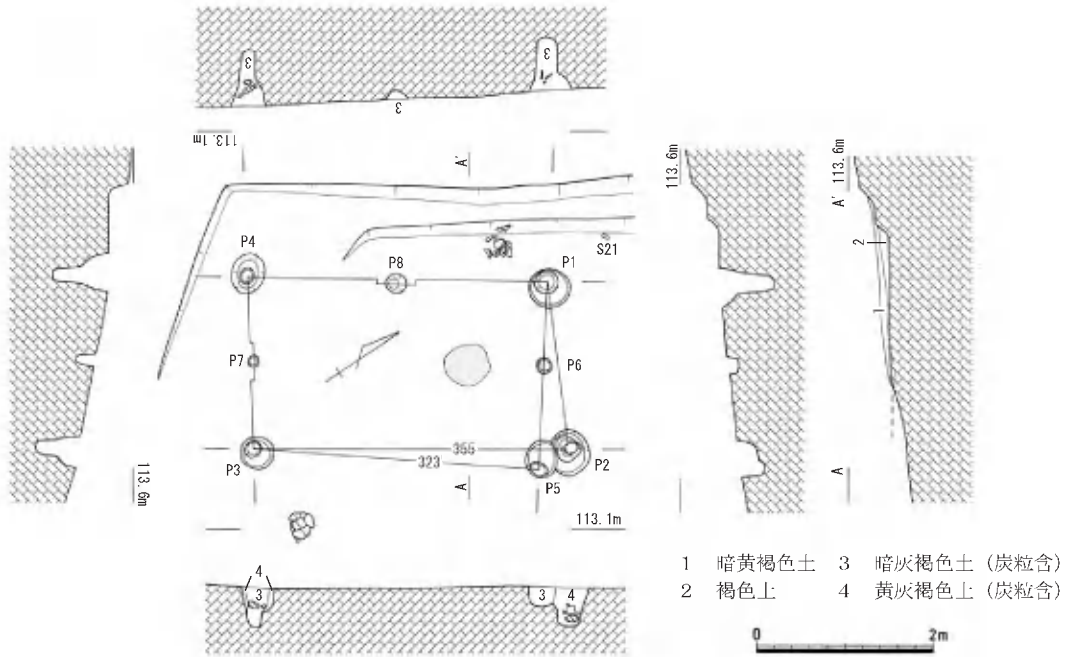


第116図 建物1 (1/80)・出土遺物 (1/4)

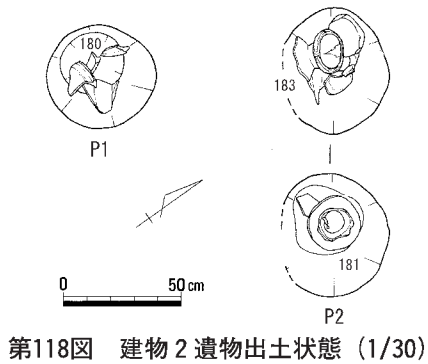
随するものと考えられる。類例が奈義町野田遺跡で見られる。この溝からは、壺169・170や甕171～174、高杯178・179が出土した。時期は弥生時代中期後葉と思われる。(有賀)

建物2 (第117・118図、図版16-1～3、22)

調査区南部の中央に位置する1×2間の建物である。段状遺構2のいずれかの段階に形成した面に建てられている。主柱の間には3本の小さなピットが確認され、本来4本が存在すると考えられる。北寄りの底面には、被熱による円形を呈する変色面(厚さ3～4cm)が認められる。建替えが行われ、



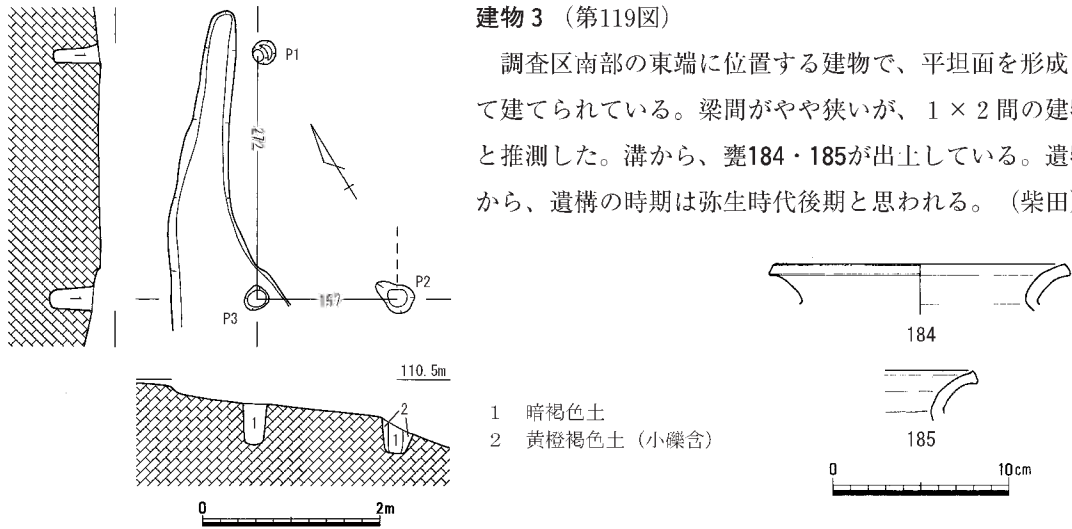
第117図 建物2 (1/80)・出土遺物 (1/4・1/2・1/3)



第118図 建物2 遺物出土状態 (1/30)

北東の柱はP 2 からP 5 へ移っている。P 2 はその際に  
 磔を置き、その上に壺口頸部181を逆さにし、さらに台  
 付鉢の脚部183や甕182、磔を埋め込んでいる。建物廃棄  
 時にも同様の行為が行われ、P 1 では壺の破片180が埋  
 め込まれていた。埋土中からは、この他に石鏃S 19・20、  
 磨製石斧S 21が出土している。遺物から、遺構の時期は  
 弥生時代中期後葉と思われる。(柴田)





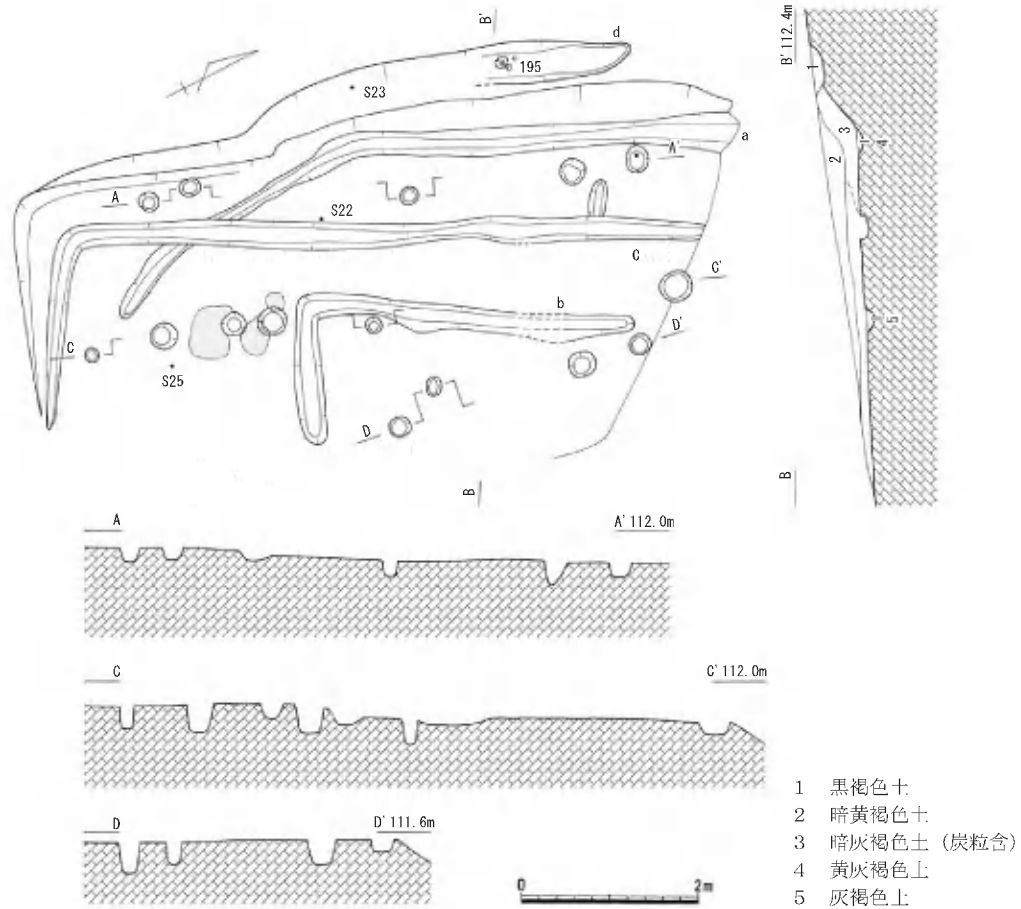
建物3 (第119図)

調査区南部の東端に位置する建物で、平坦面を形成して建てられている。梁間がやや狭いが、1×2間の建物と推測した。溝から、甕184・185が出土している。遺物から、遺構の時期は弥生時代後期と思われる。(柴田)

第119図 建物3 (1/80)・出土遺物 (1/4)

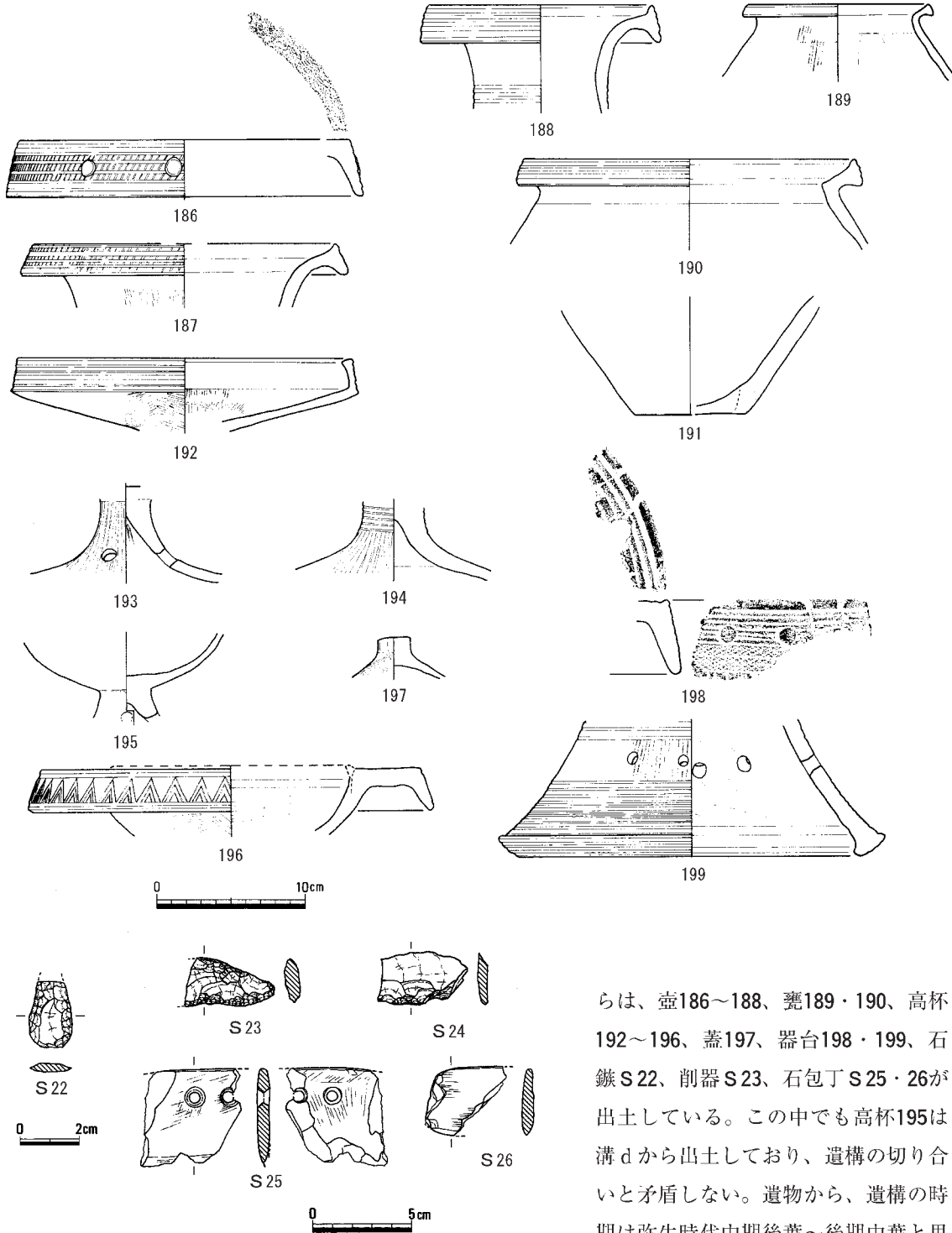
### 3 段状遺構

段状遺構1 (第120・121図、図版16-4)



第120図 段状遺構1 (1/80)

調査区南部中央に位置し、山側に「L」字形を呈する溝など4条が残存する。北側を削平されて全容が不明だが、南北820cm以上を測る。切り合い関係からは、緩やかな弧状を呈する溝aから「L」字形の溝b→溝c、さらに溝dへの順が想定できる。柱穴が検出されたが、建物は認識できなかった。Cに関係すると思われる南側の底面には、被熱による変色面（厚さ2～4cm）が認められた。埋土か



らは、壺186～188、甕189・190、高杯192～196、蓋197、器台198・199、石鏃S22、削器S23、石包丁S25・26が出土している。この中でも高杯195は溝dから出土しており、遺構の切り合いと矛盾しない。遺物から、遺構の時期は弥生時代中期後葉～後期中葉と思われる。(柴田)

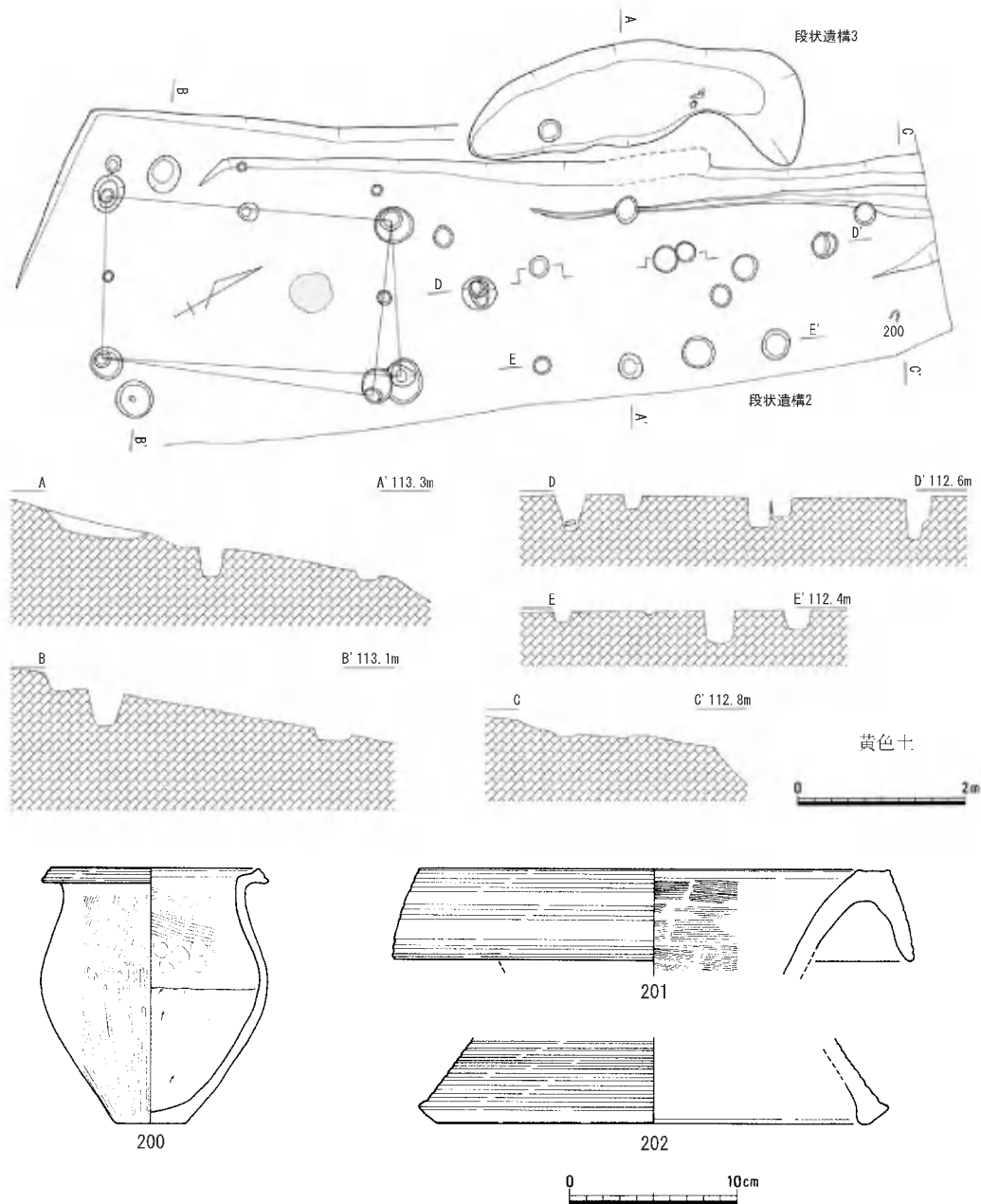
第121図 段状遺構1出土遺物(1/4・1/2・1/3)

段状遺構 2 (第122図)

調査区南部の中央に位置する段状遺構で、段状遺構 3 に切られる。山側には溝が残存する。複数回の掘り替えが想定され、最終段階には建物 2 が伴うと思われる。北側を削平されて全容が明らかでないが、南北で 880cm 以上を測る。建物 2 の北にも柱穴が検出されたが、建物や他の被熱面を確認することはできなかった。甕 200 が出土しており、遺構の時期は弥生時代中期後葉と思われる。(柴田)

段状遺構 3 (第122図)

調査区南部の中央に位置する溝で、段状遺構 2 を切っている。流失部分が多く詳細は不明であるが、山側に掘削された溝の可能性があり、段状遺構と考えた。器台 201・202 が出土しており、遺構の時期



第122図 段状遺構 2・3 (1/80)・出土遺物 (1/4)

は弥生時代中期後葉と思われる。

(柴田)

段状遺構 4 (第123図)

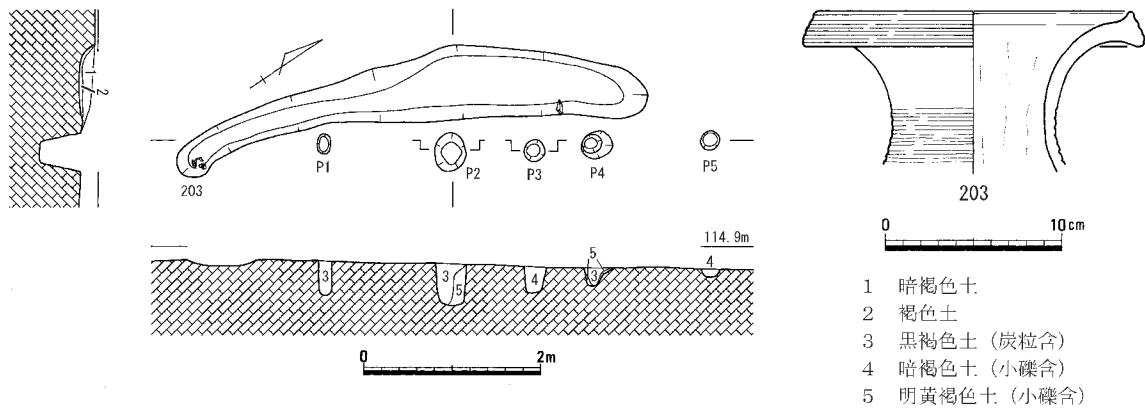
調査区南部中央に位置する溝で、山側に掘削された溝の可能性があり、段状遺構と考えた。東側は後世の開墾によって、崖面になっている。南側がわずかに湾曲するが、ほぼ溝の方向に沿って5本の柱穴が検出された。柱の平面形や間隔などにばらつきがあり、列を成すか、建物であるのかは不明である。埋土から壺203が出土しており、遺構の時期は弥生時代中期末～後期初頭と思われる。(柴田)

段状遺構 5 (第124図)

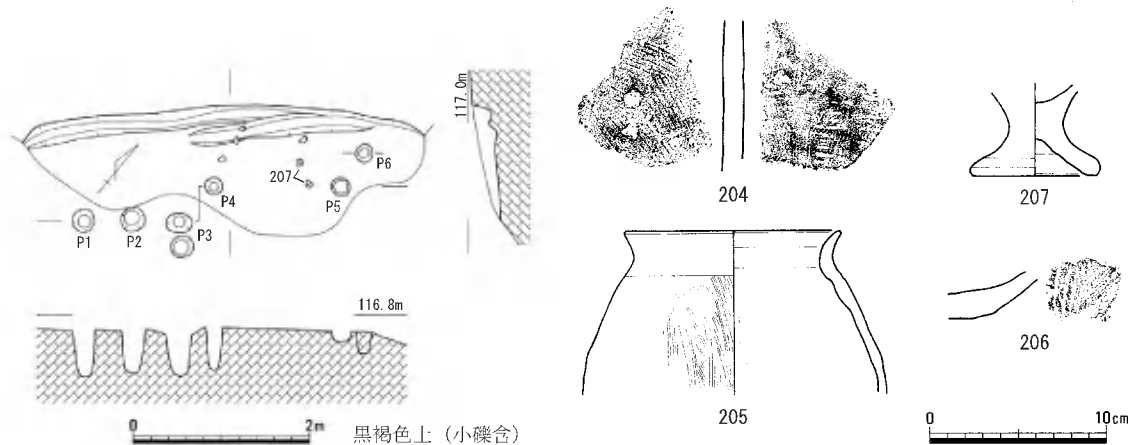
調査区南部の東端に位置する段状遺構で、山側に溝2条が検出された。南東側は流失しているが、若干の平坦面と柱穴が確認できた。柱穴については比較的深いものもあるが、建物などの一部であるかどうかは不明である。底面からは台付鉢207、P2からは壺204、甕205・206が出土しており、遺構の時期は弥生時代後期末頃と思われる。(柴山)

段状遺構 6 (第125図)

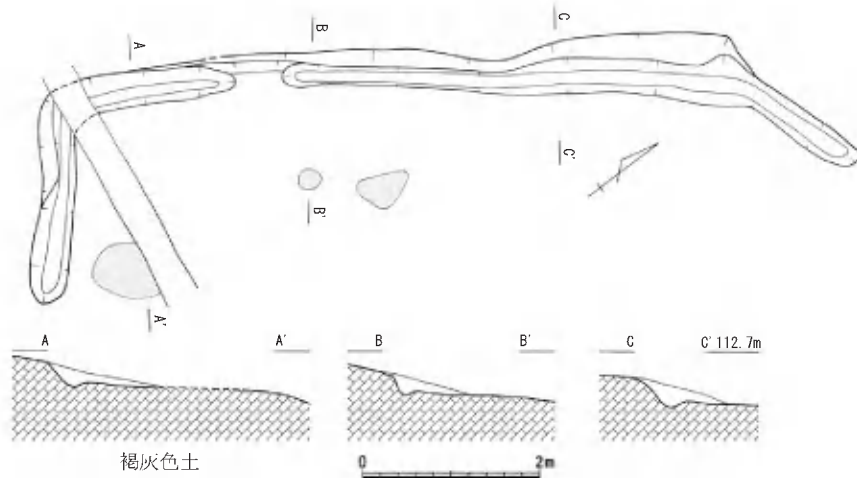
調査区南部の南端に位置する段状遺構である。山側に「L」字形を呈する溝が検出されたが、これに伴うと考えられる柱穴は確認できなかった。溝の北端はわずかに屈曲している。底面の東側は既に流失しているが、南端と中央付近に、被熱による変色面(厚さ2cm)が3箇所認められた。出土遺物



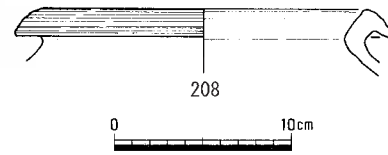
第123図 段状遺構 4 (1/80)・出土遺物 (1/4)



第124図 段状遺構 5 (1/80)・出土遺物 (1/4)



は少なく、甕208を図示した。これから考えると、遺構の時期は弥生時代後期前葉以降と思われる。(柴田)



第125図 段状遺構6 (1/80)  
・出土遺物 (1/4)

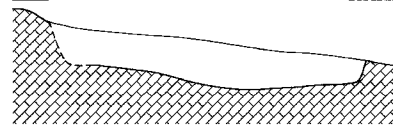
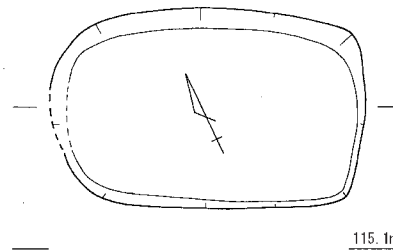
#### 4 土壇

##### 土壇1 (第126図)

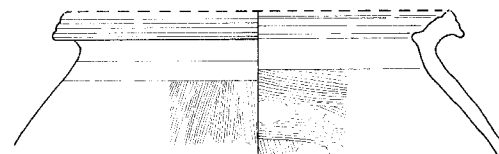
竪穴住居16の北に位置する、長楕円形の土壇である。残存部の長軸は195cmを測る。底面には掘り方に沿って幅15cm程度の溝を検出した。時期は弥生時代と思われるが、詳細は不明である。(有賀)

##### 土壇2 (第127図)

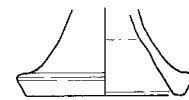
調査区南部、段状遺構4の南西に近接する土壇である。掘り方平面形は楕円形で、長さ178cm、幅113cm、深さ39cmを測る。掘り方の長軸方向は等高線に直交している。床面は北西側がやや高く、中央付近がわずかにくぼんでいる。出土遺物は少ないが、甕209、高杯210を図示した。これらから考えると、遺構の時期は弥生時代中期後葉と思われる。(柴田)



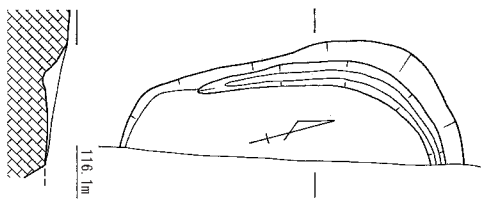
暗黄褐色土 (炭粒含)



209



210



暗灰色土

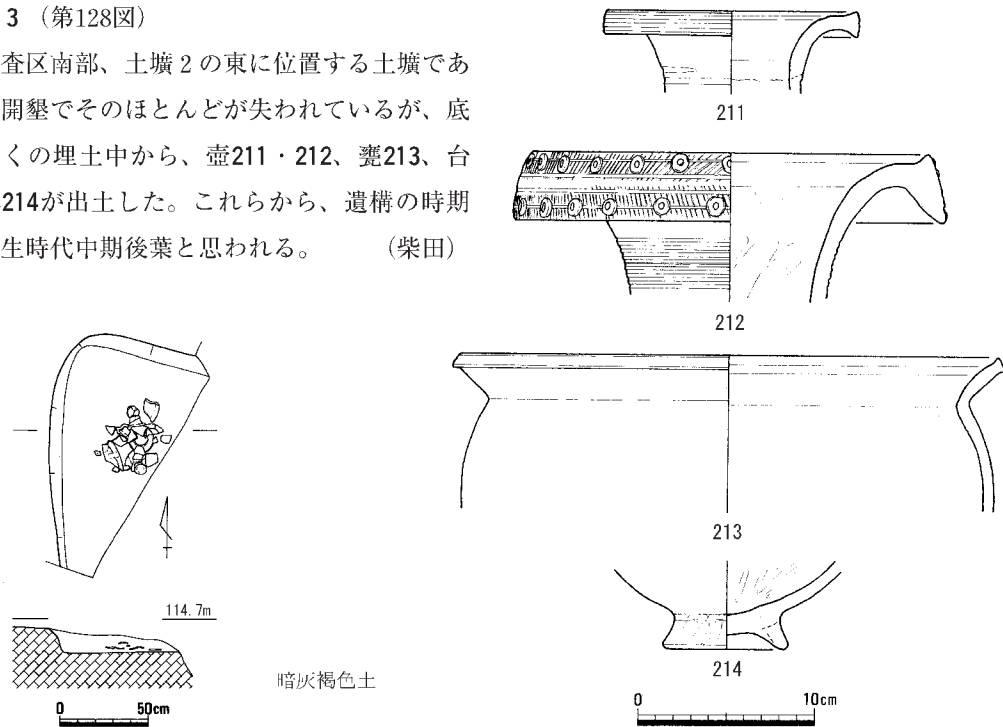


第126図 土壇1 (1/40)

第127図 土壇2 (1/40)・出土遺物 (1/4)

土壌3 (第128図)

調査区南部、土壌2の東に位置する土壌である。開墾でそのほとんどが失われているが、底面近くの埋土中から、壺211・212、甕213、台付鉢214が出土した。これらから、遺構の時期は弥生時代中期後葉と思われる。(柴田)

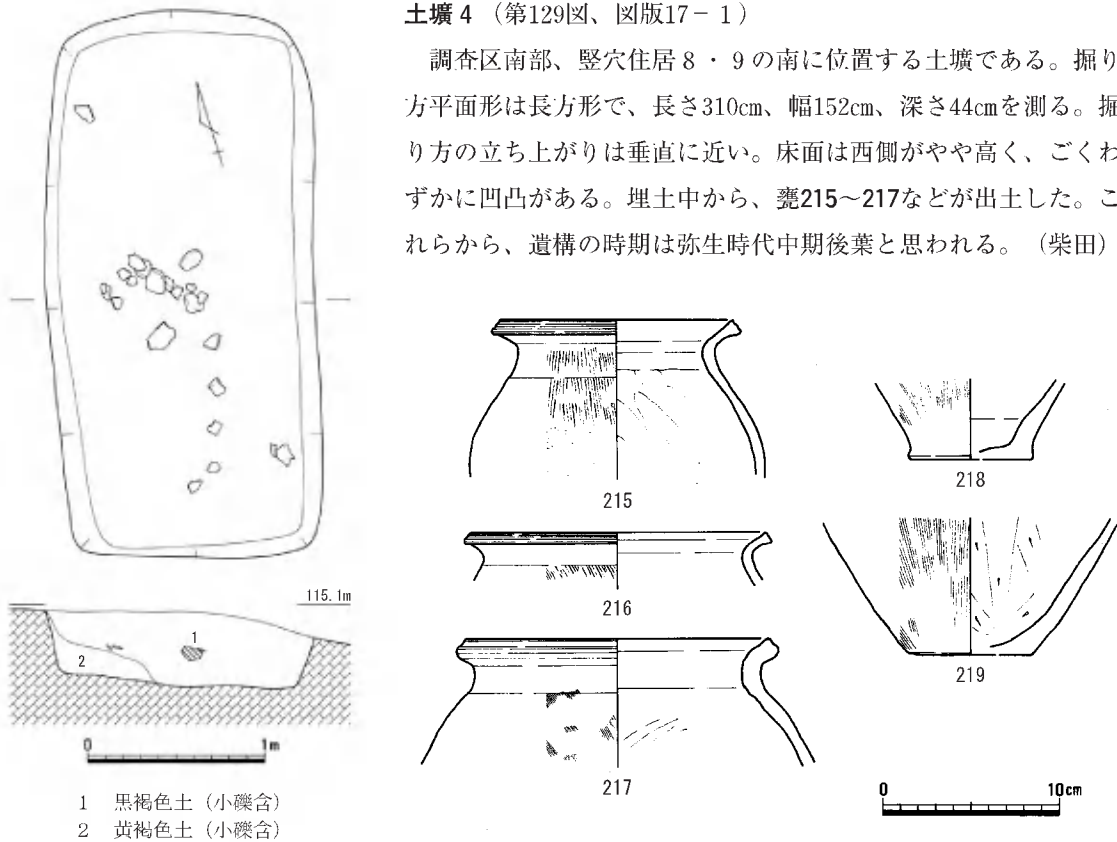


暗灰褐色土

第128図 土壌3 (1/40)・出土遺物 (1/4)

土壌4 (第129図、図版17-1)

調査区南部、竪穴住居8・9の南に位置する土壌である。掘り方平面形は長方形で、長さ310cm、幅152cm、深さ44cmを測る。掘り方の立ち上がりは垂直に近い。床面は西側がやや高く、ごくわずかに凹凸がある。埋土中から、甕215～217などが出土した。これらから、遺構の時期は弥生時代中期後葉と思われる。(柴田)

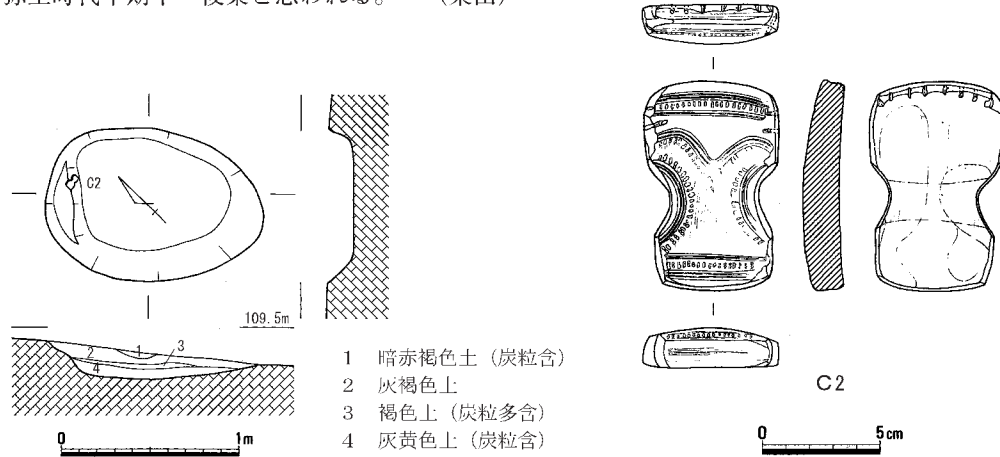


- 1 黒褐色土 (小礫含)
- 2 黄褐色土 (小礫含)

第129図 土壌4 (1/40)・出土遺物 (1/4)

土壌5 (第130図、図版17-2・3)

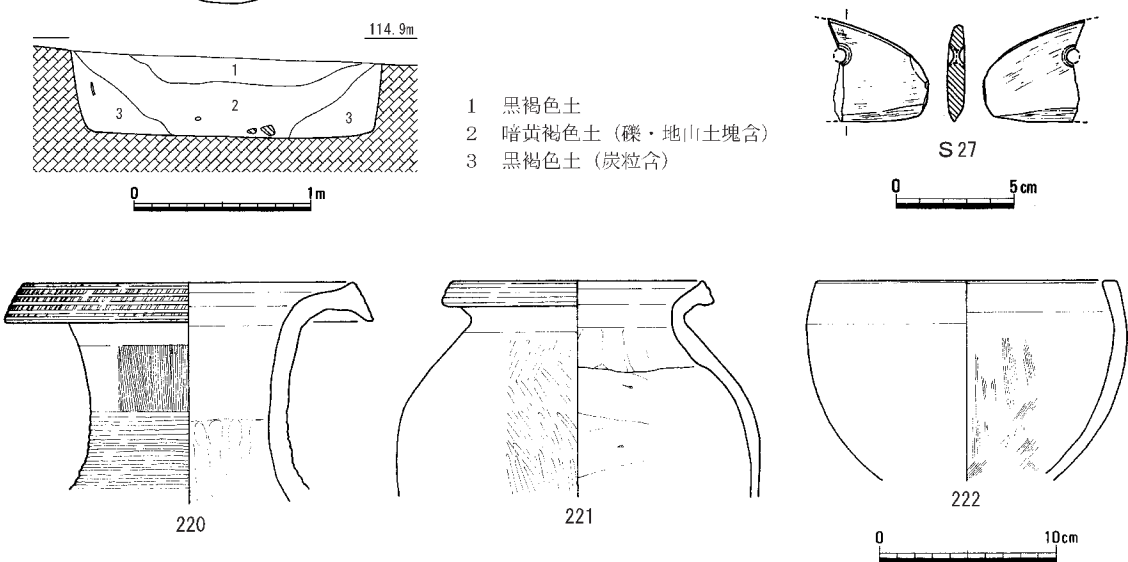
調査区中央に位置し、上部は開墾でかなり削平されている。掘り方平面形は楕円形で、長さ123cm、幅86cm、深さ20cmを測る。第3層上面から、分銅形土製品C2が、裏面を上に向けて出土した。他に小片の上器が出土しているが、これらから遺構の時期は弥生時代中期中～後葉と思われる。(柴田)



第130図 土壌5 (1/40)・出土遺物 (1/3)

土壌6 (第131図、図版22)

調査区南部、竪穴住居8・9の北に位置する土壌である。掘り方平面形は径176cmの円形で、深さ48cmを測る。掘り方の立ち上がりは垂直に近く、床面はほぼ水平である。埋土中からは礫とともに、壺220、甕221、鉢222、石包丁S27などが出土した。これらから、遺構の時期は弥生時代後期初頭と思われる。(柴田)



第131図 土壌6 (1/40)・出土遺物 (1/4・1/3)

土壙7 (第132図)

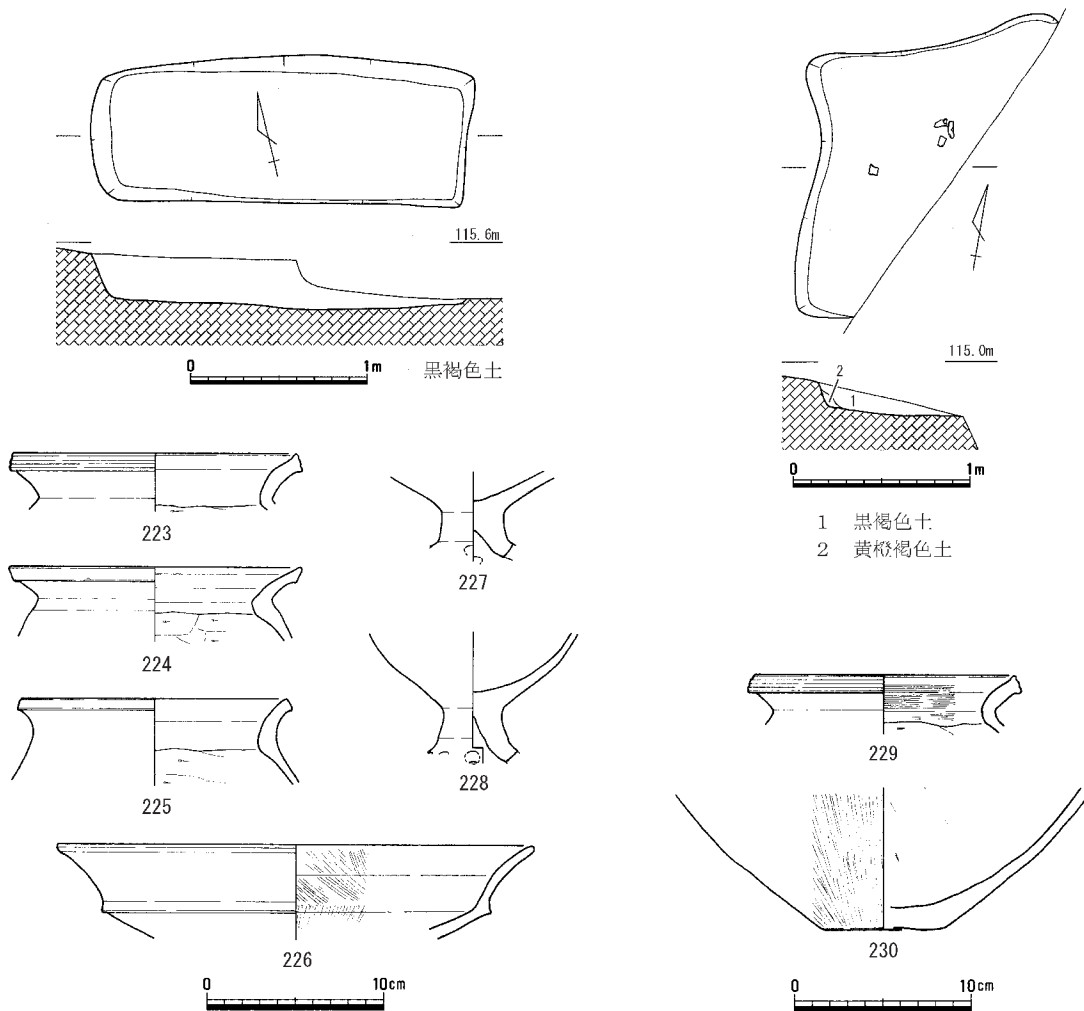
調査区南部、竪穴住居8・9の南に近接する土壙である。南半分は開墾でかなり削平されている。掘り方平面形は長方形で、長さ213cm、幅84cm、深さ31cmを測る。掘り方の長軸方向は等高線に直交している。床面はほぼ水平である。埋土中からは、甕223～225、高杯226～228などが出土している。これらから考えると、遺構の時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭と思われる。(柴田)

土壙8 (第133図)

調査区南部、土壙4の南に近接する土壙である。遺構の東半分程度は、開墾で削平されていると推測される。掘り方平面形はやや不整な方形で、一辺150cm、深さ20cmを測る。床面はほぼ水平になると見られる。埋土中からは、壺230、甕229などが出土している。これらから考えると、遺構の時期は弥生時代後期末頃と思われる。(柴田)

土壙9 (第134図)

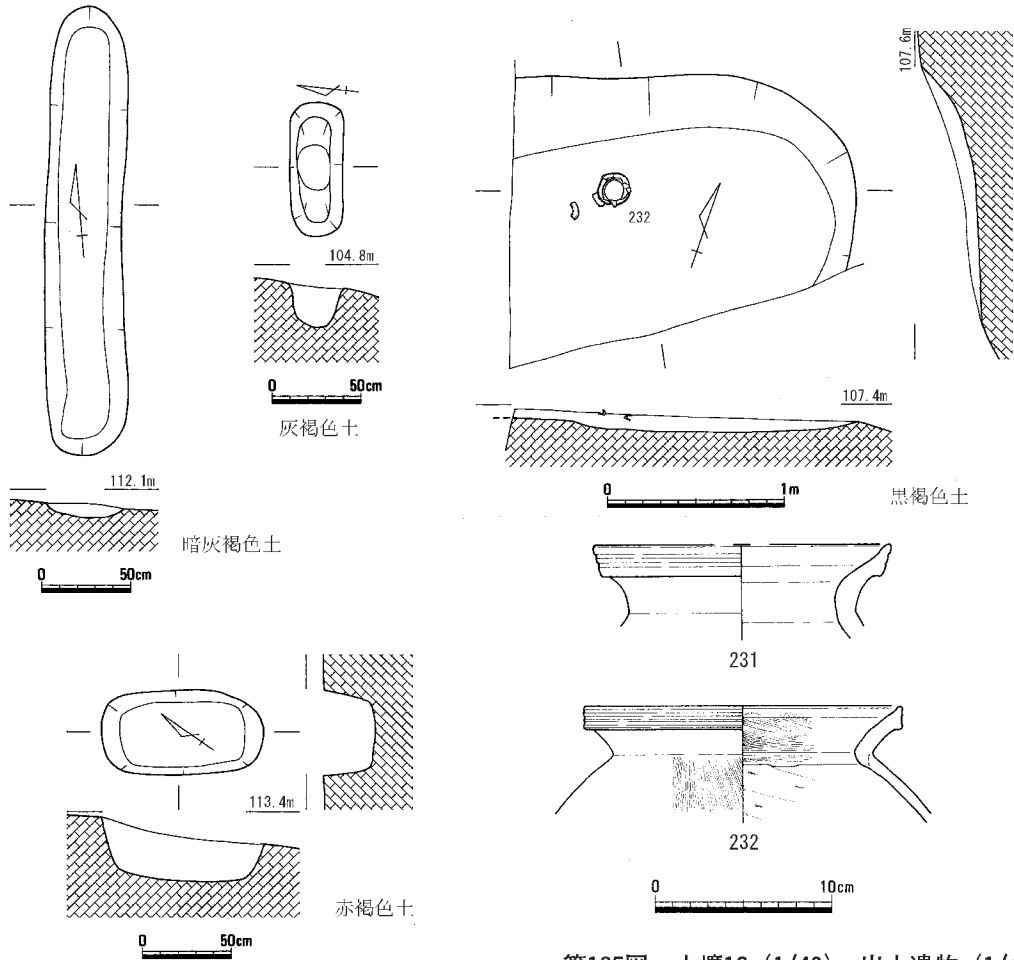
調査区南部中央、竪穴住居11・17を切る溝状の土壙である。掘り方平面形は楕円形で、長さ253cm、幅43cm、深さ8cmを測る。横断面形は皿状を呈する。出土遺物はほとんどなく、遺構の切り合いから考えると、時期は弥生時代後期末～古墳時代初頭の可能性がある。(柴田)



第132図 土壙7 (1/40)・出土遺物 (1/4)

第133図 土壙8 (1/40)・出土遺物 (1/4)





第134図 土壌9～11 (1/40)

第135図 土壌12 (1/40)・出土遺物 (1/4)

土壌10 (第134図)

調査区中央の東端に位置する土壌で、長さ75cm、幅30cm、深さ24cmを測る。出土遺物はないが、時期は弥生時代の可能性がある。(柴田)

土壌11 (第134図)

調査区中央の西端に位置する土壌で、長さ91cm、幅48cm、深さ36cmを測る。断面形は箱形を呈する。出土遺物はないが、時期は弥生時代の可能性がある。(柴田)

土壌12 (第135図)

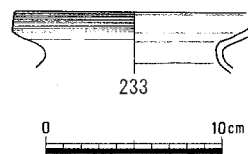
調査区中央に位置する土壌で、開墾でほとんど削平されている。掘り方平面形は楕円形で、深さ32cmを測る。掘り方の立ち上がりは緩やかである。埋土中からは、甕231・232が出土し、これらから遺構の時期は弥生時代後期末頃と思われる。(柴田)



5 溝

溝1 (第136図)

調査区南端に位置する溝である。等高線に平行し、

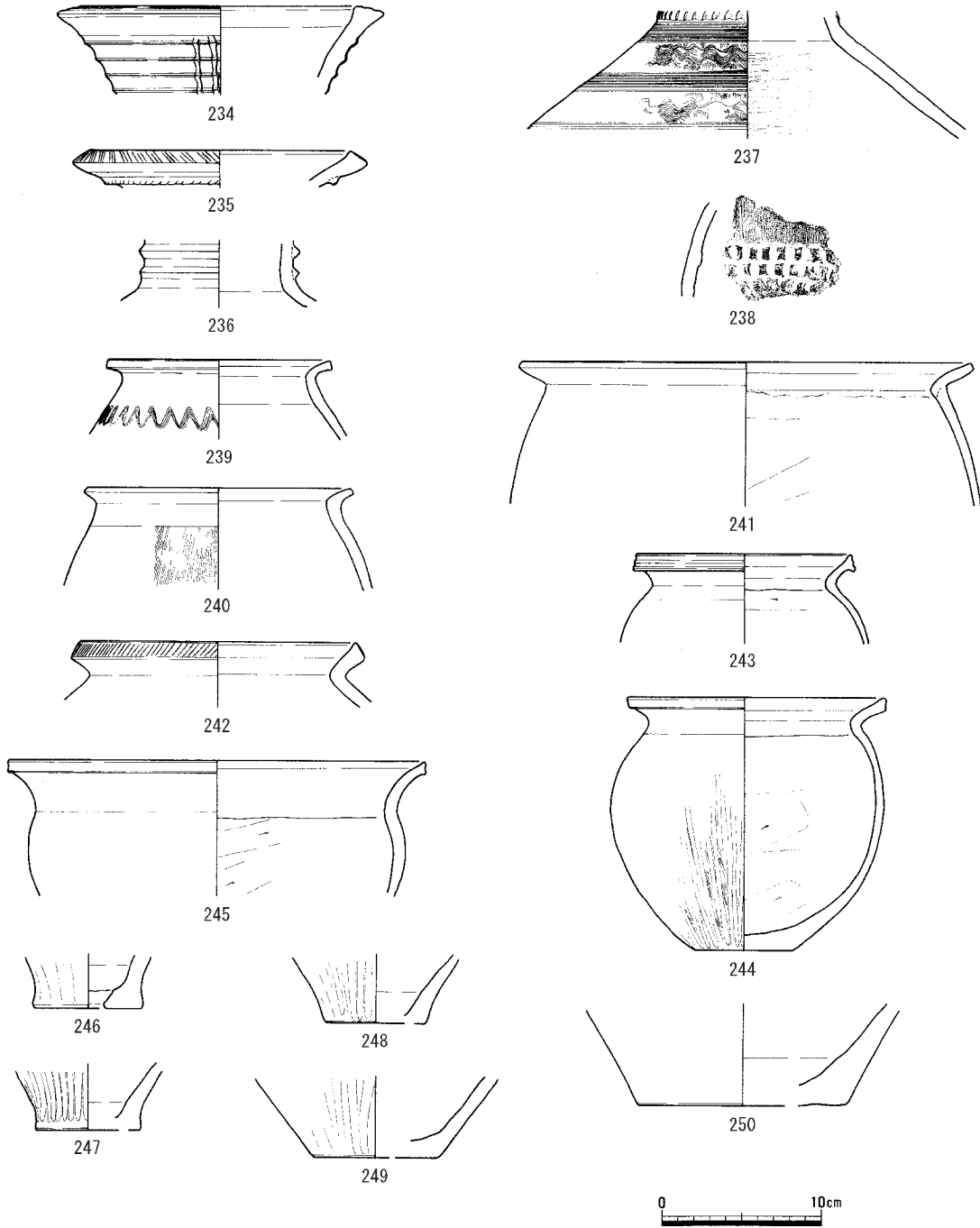


第136図 溝1 (1/80)・出土遺物 (1/4)

延長は512cm以上、深さは8cmを測る。断面形は皿状を呈する。段状遺構の山側の溝である可能性もある。埋土中からは甕233が出土しており、遺構の時期は古墳時代初頭と思われる。(柴田)

6 その他の遺構・遺物

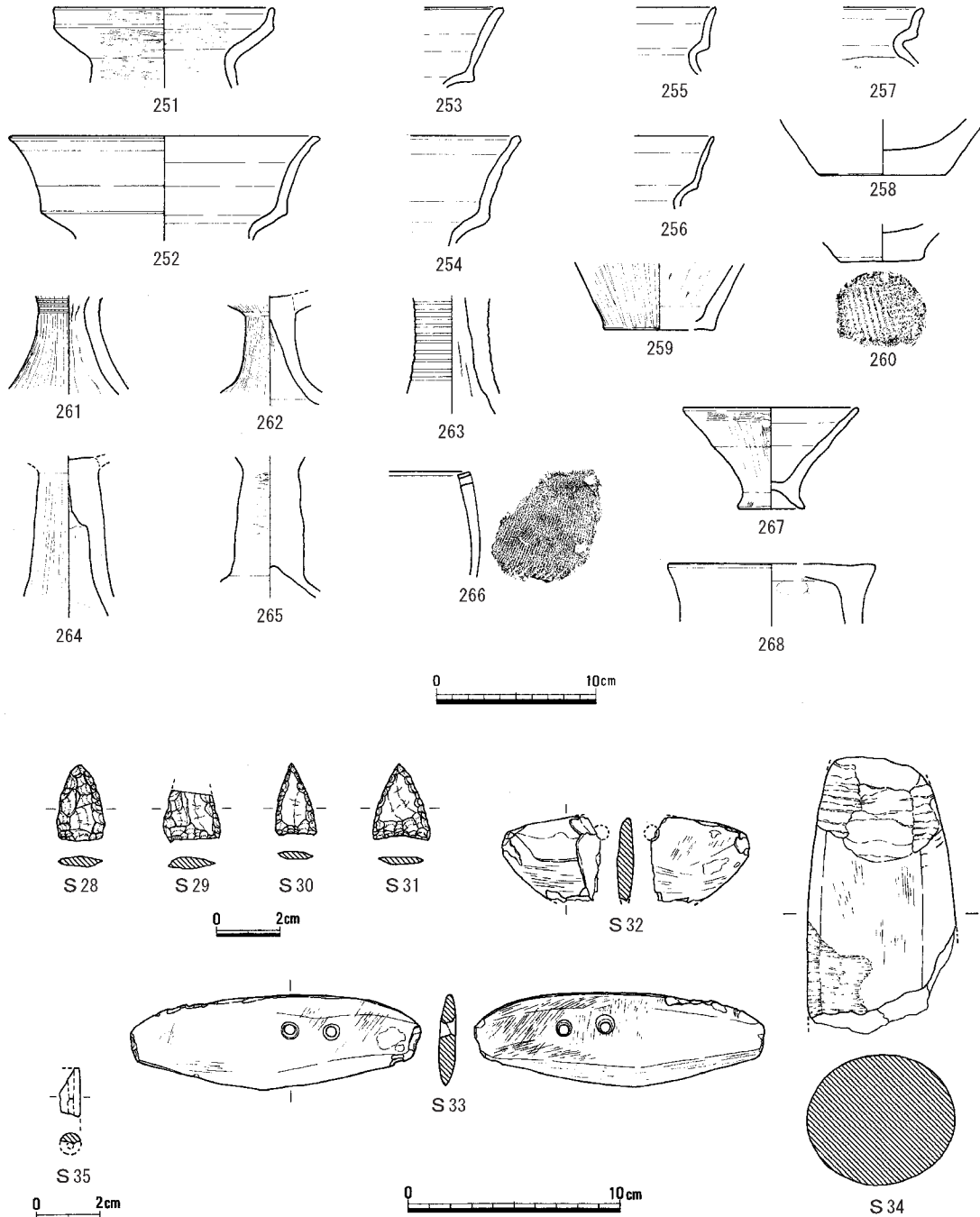
調査区中央の海拔110m以下の谷部(土壙5・10・12周辺)で、部分的にしか残存していなかったが、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての包含層が確認された。出土遺物については、第137・



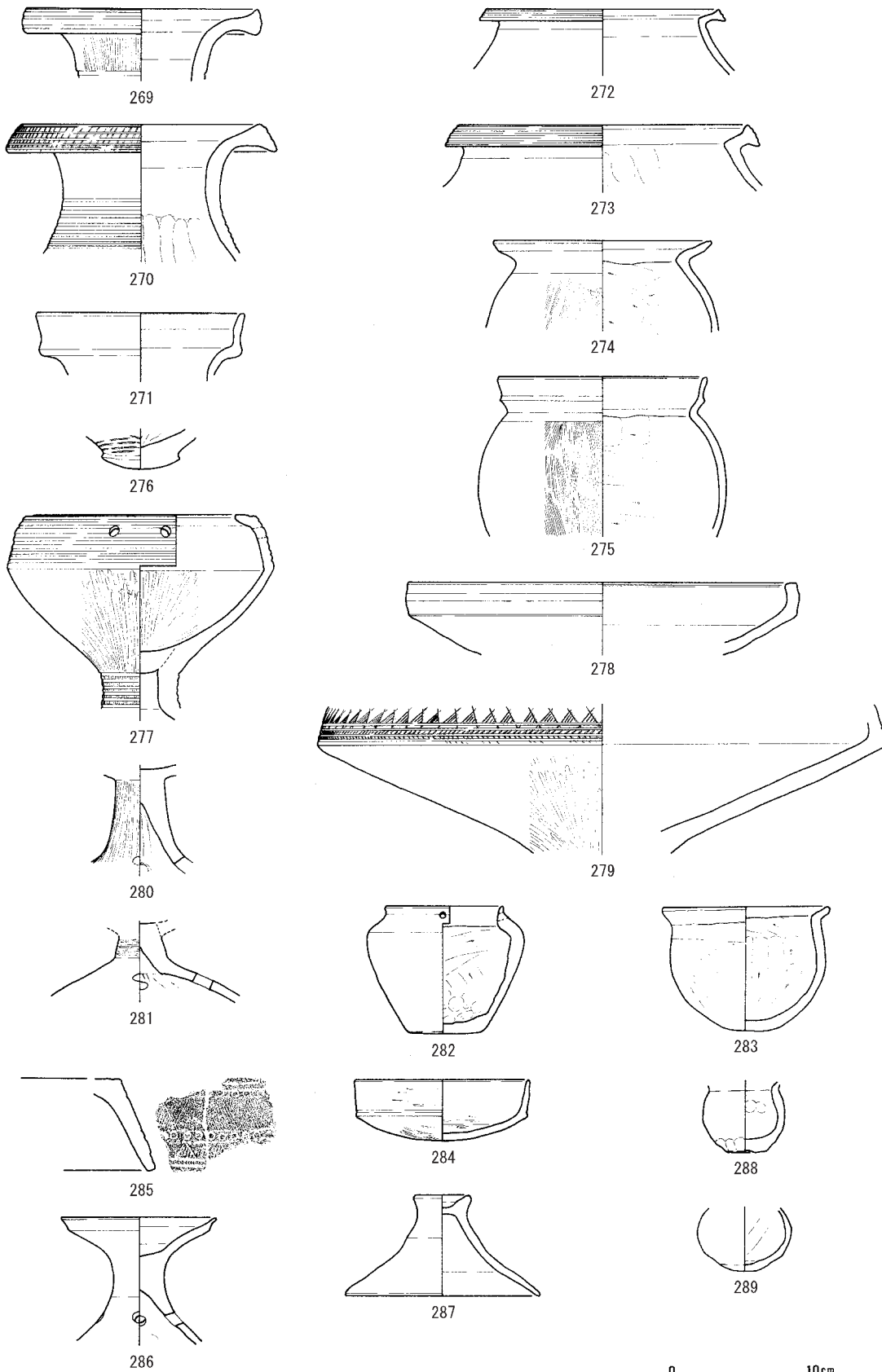
第137図 その他の遺物① (1/4)

138図に示している。壺234～238、甕239～242、鉢266、器台268などは、概ね弥生時代中期中葉～後葉と思われ、中葉でも古い様相を示すものもある。甕243～245、高杯261～263、台付鉢267などは後期前半、壺251～254、甕255～257、高杯264～265などは古墳時代初頭に位置付けられる。土器以外では、石鏃S28～31、石包丁S32・33、磨製石斧S34、管玉S35などの石製品が出土している。

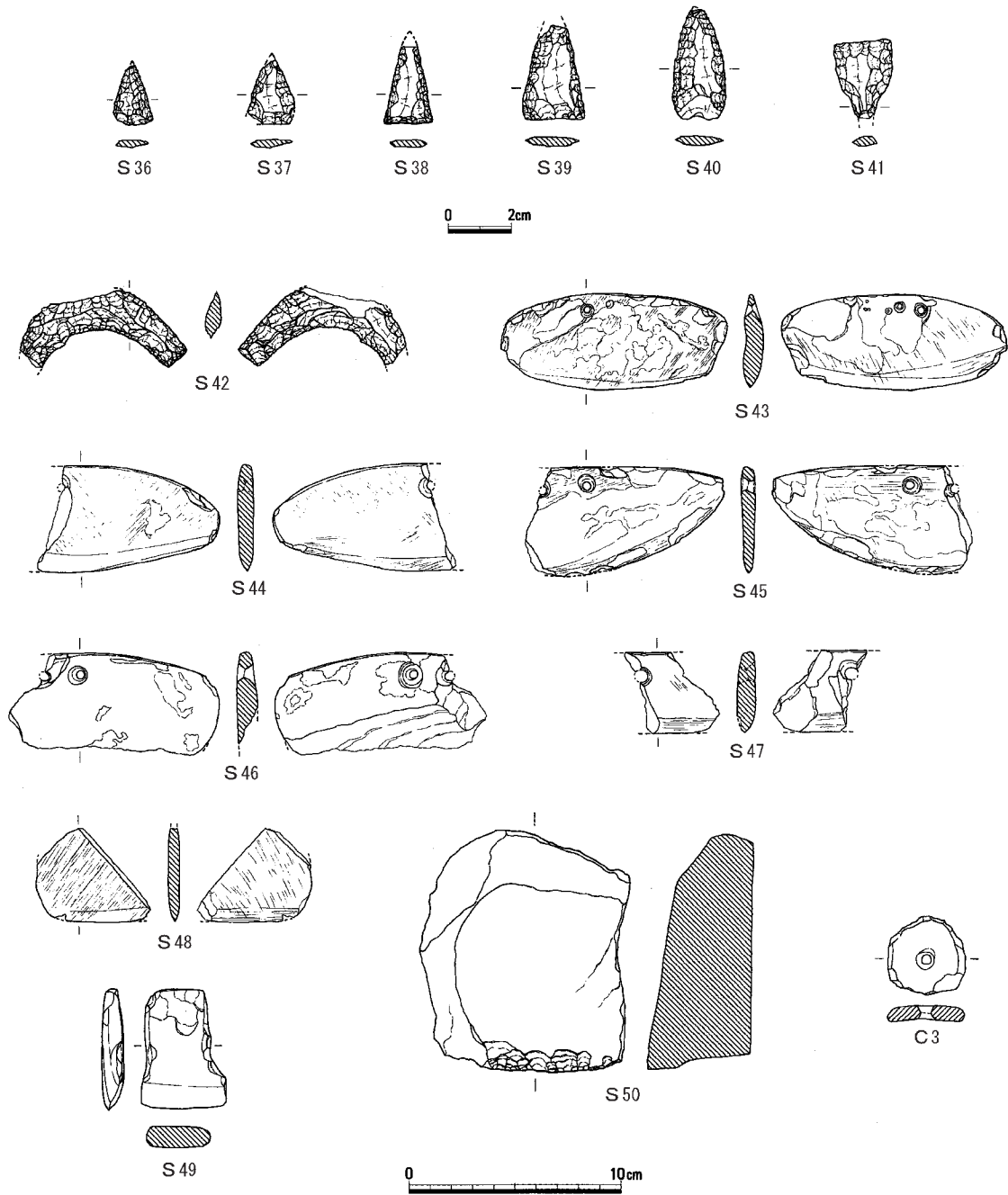
その他の遺物については、第139・140図に示している。弥生時代中期としては、壺269、甕272・273、高杯277～279、器台285、蓋287など、後期としては、壺270、高杯280・281、鉢282・288などが



第138図 その他の遺物② (1/4・1/2・1/3)



第139図 その他の遺物③ (1/4)

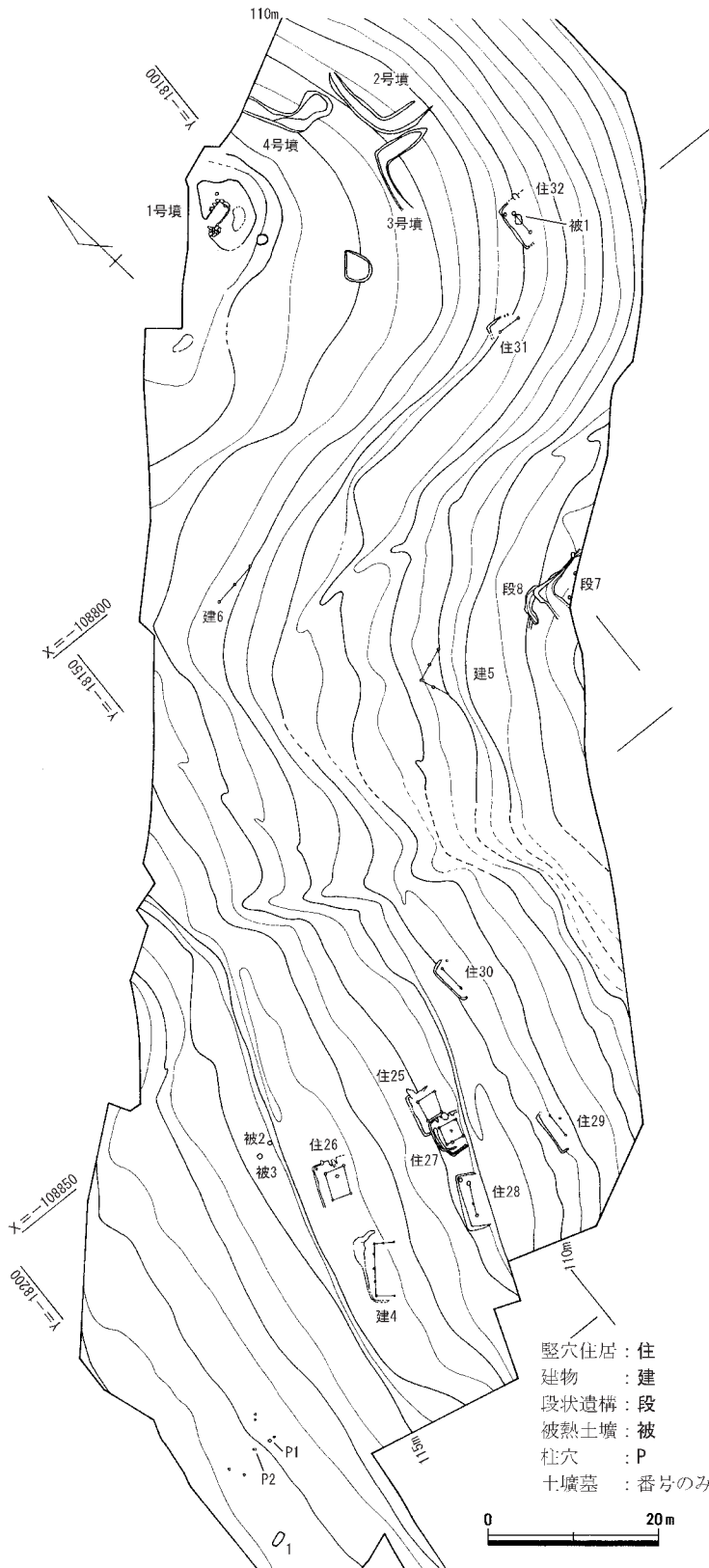


第140図 その他の遺物④ (1/2・1/3)

ある。壺271、甕274～276、鉢283・284・289、小形器台286は、おおむね古墳時代初頭と思われる。土器以外では、石鏃S36～40、石錐S41、石小刀S42、石包丁S43～48、扁平片刃石斧S49、石核？S50、土製紡錘車C3などを図示した。S42は、外刃の半分と先端は欠損するが、内刃には突起が残存する。これは出土地点などから、竪穴住居12に伴う可能性が高いと考えられる。

なお、図示できなかった遺物も含め、全体を通して、弥生時代後期中葉～後葉と認められる遺物が比較的少ない傾向があると感じられた。(柴田)

第3節 古墳時代後期以降の遺構・遺物



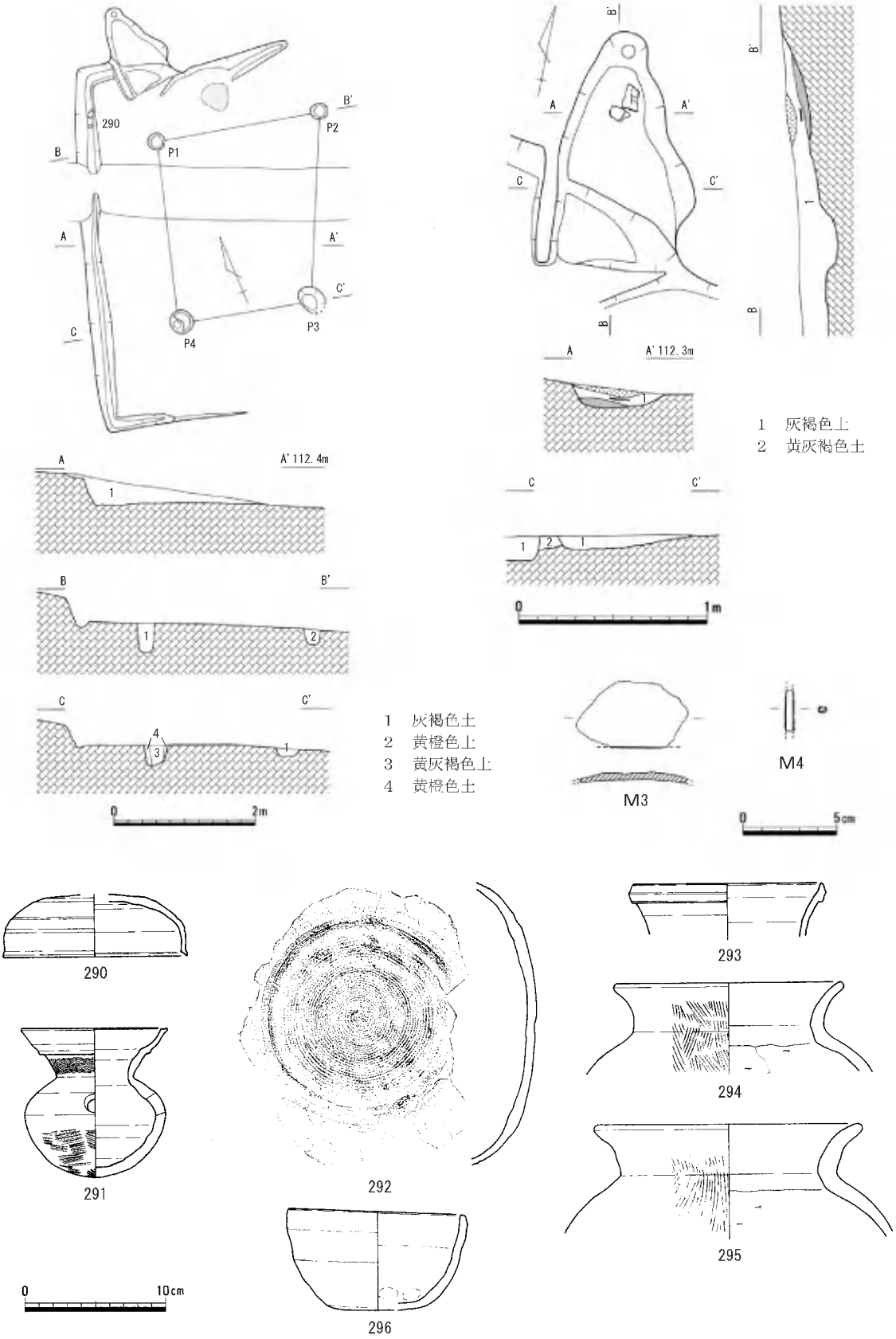
第141図 古墳時代後期以降遺構全体図 (1/800)

検出遺構は、古墳時代後期のものがほとんどで、堅穴住居8軒・建物3棟・段状遺構2基・被熱土壇3基・土墳墓1基を数える。この内、建物1棟、被熱土壇2基と土墳墓は古代末～中世に属する。前節同様に尾根上の坂山墳墓群と重なる時期があり、関係が注目される。住居では、これまで美作地域で確認されていなかった6世紀前半のものがあり、注目される。7世紀代には、段状遺構が谷部に形成され、出土遺物などから製鉄を行っていたと考えられる。古代末～中世の実態があまり明らかなでないが、包含層からは比較的遺物が出土している。(柴田)

1 堅穴住居

堅穴住居25 (第142図、図版17-4・5、23)

調査区南部の中央に位置する、平面方形(一辺515cm)の堅穴住居で、住居27に切られる。主柱穴は4本であるが、P3・4間は短い。カマドは、燃烧部が北壁中央付近にあるが、煙道は北西隅近くから外へ延びる構造である。煙道先端には炭が堆積し、その上に土師器甕の破片が出土した。さらに、上層に焼土も認められるが、被熱による変色は確認できなかった。壁体溝からは杯蓋290が、埋土上層



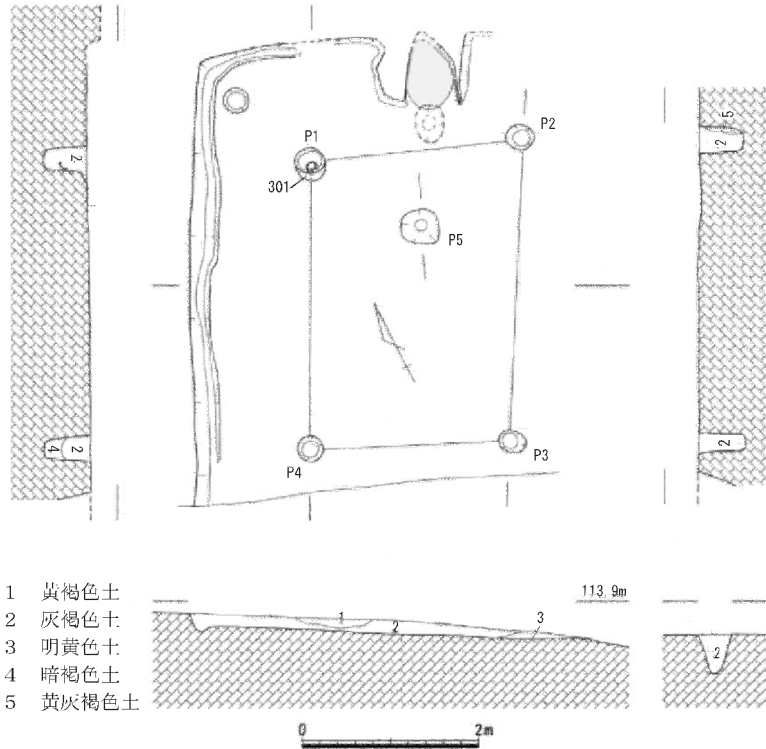
第142図 豎穴住居25 (1/80・1/30)・出土遺物 (1/4・1/3)

からは甕291、提瓶292、他に甕293、土師器の甕294・295、鉢296、鉄器M 3・4が出土した。遺物などから、遺構の時期は古墳時代後期前半と思われる。(柴田)

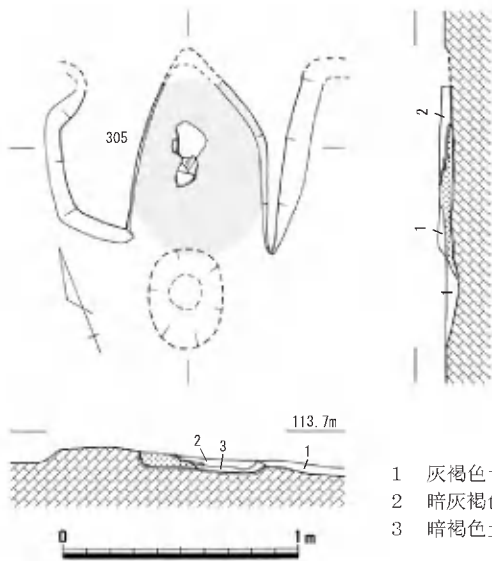
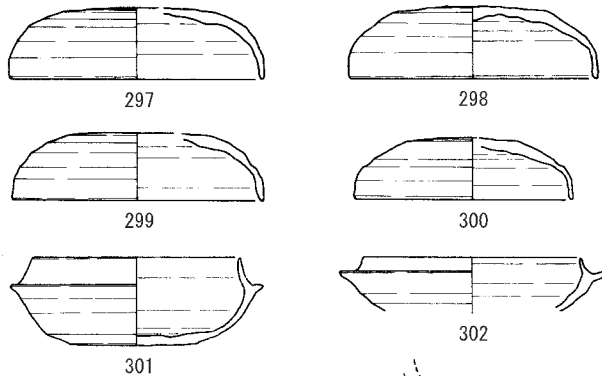
**竪穴住居26** (第143図、  
図版23)

調査区南部の中央に位置する、平面方形(一辺525cm以上)の竪穴住居である。主柱穴は4本で、南北の柱間が長い。カマドの南には、P 5 (深さ44cm)、北西隅にも浅いピット(深さ1cm)が検出された。カマドは北壁中央に作り付けられる。

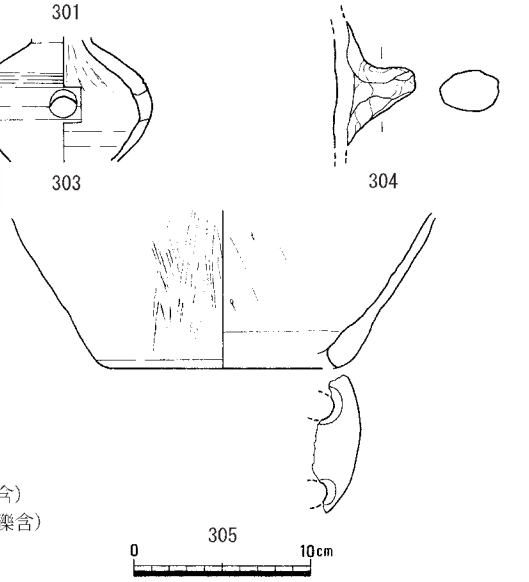
燃焼部には焼土が堆積し、その上から土師器甕305が出土した。また、燃焼部前面には、浅いくぼみが検出された。P 1 から杯身301、埋土中からは杯蓋297~300、杯蓋302、甕303、土師器の甕304が出土した。遺物などから、遺構の時期は古墳時代後期前半以降と思われる。(柴田)



- 1 黄褐色土
- 2 灰褐色土
- 3 明黄色土
- 4 暗褐色土
- 5 黄灰褐色土



- 1 灰褐色土 (小礫含)
- 2 暗灰褐色土 (小礫含)
- 3 暗褐色土



第143図 竪穴住居26 (1/80・1/30)・出土遺物 (1/4)

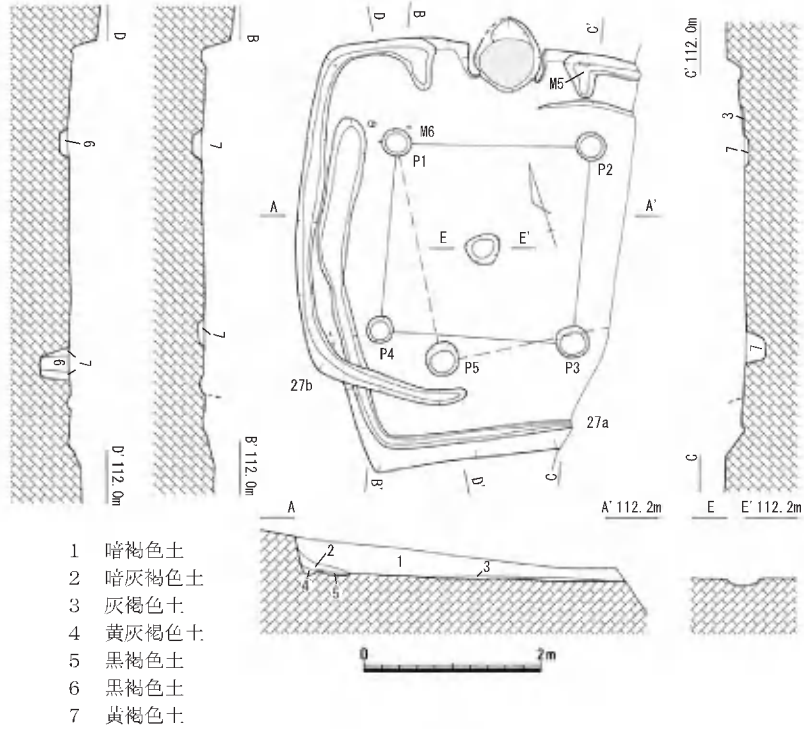


竪穴住居27 (第144・145

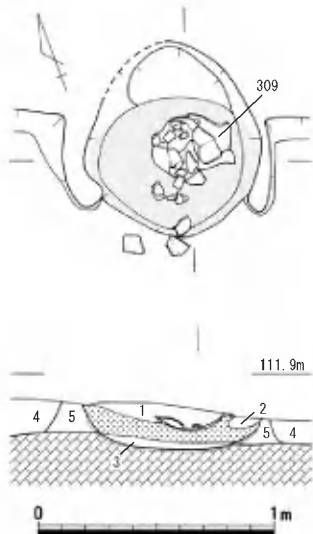
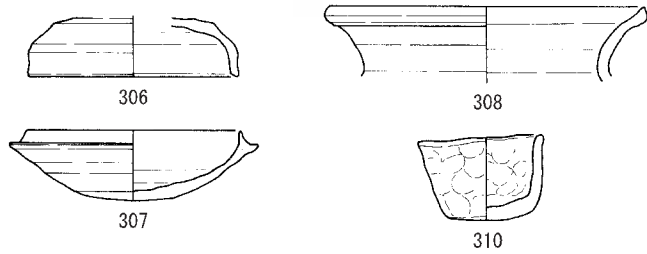
図、図版17-4・6、  
23、24)

調査区南部の中央に位置する、平面方形の竪穴住居で、住居25を切る。建替えが認められ、P1・5を主柱穴とする27aは一辺390cmで、カマドは残存していない。27bは一辺410cmで、4本の主柱穴と中央に浅いピットが検出された。カマドは北壁中央にあり、

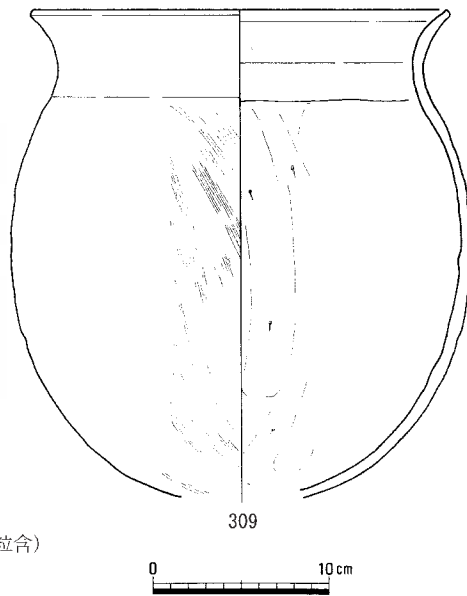
両脇の壁体溝は「L」字形に屈曲し、東側では鉄鎌M5が出土した。P1周辺の床面では、M6の他に鉄滓も確認できた。埋土からは杯306・307、甕308、土師器鉢310、土製紡錘車C4が出土した。両者の出土遺物は大きな時期差は認められず、遺構の時期は古墳時代後期後半と思われる。(柴田)



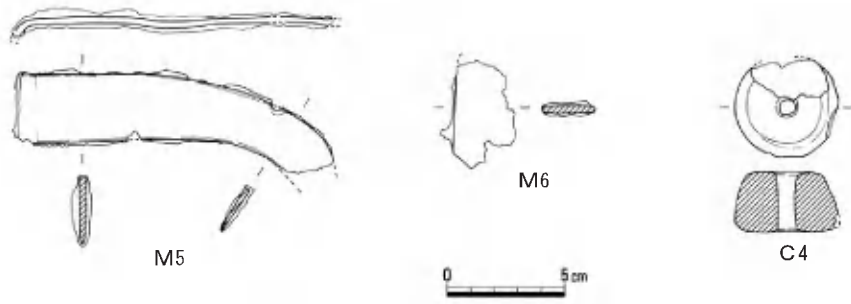
- 1 暗褐色土
- 2 暗灰褐色土
- 3 灰褐色土
- 4 黄灰褐色土
- 5 黒褐色土
- 6 黒褐色土
- 7 黄褐色土



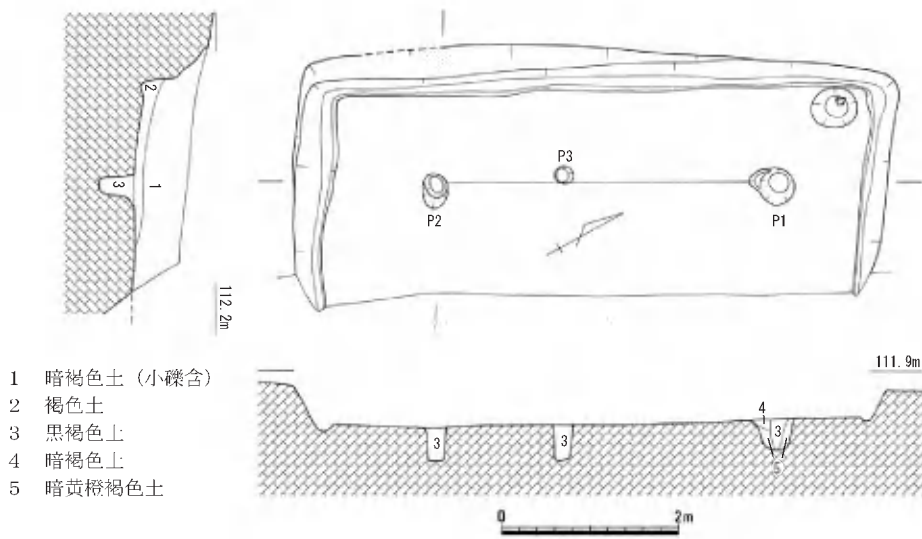
- 1 黄褐色土
- 2 黄褐色土
- 3 灰褐色土 (炭粒含)
- 4 暗褐色土
- 5 淡黄褐色土



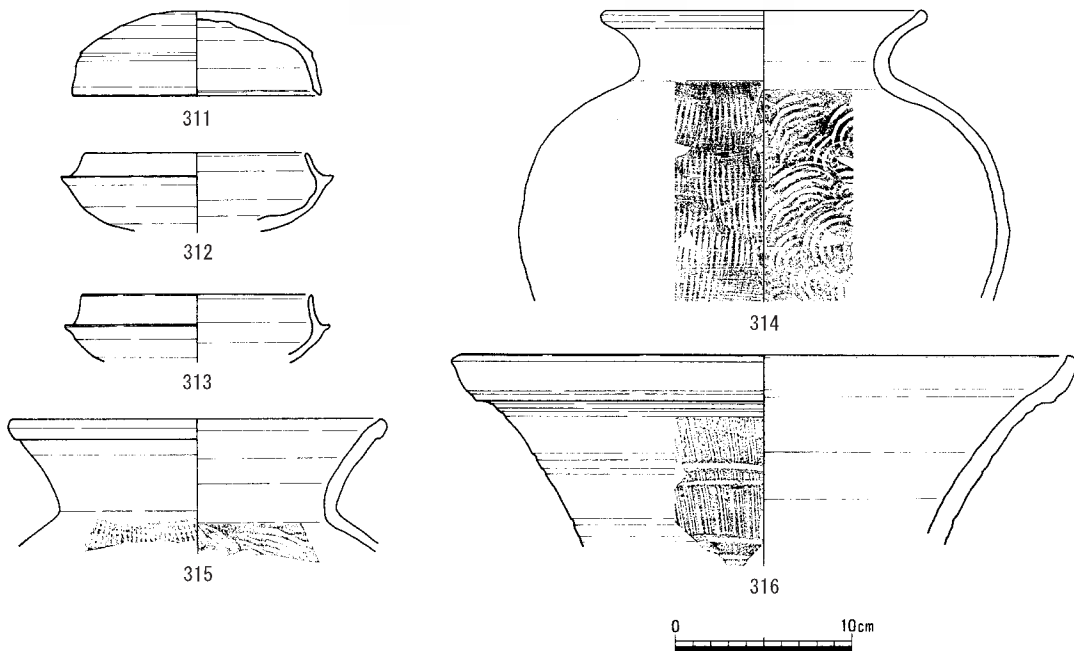
第144図 竪穴住居27 (1/80・1/30)・出土遺物① (1/4)



第145図 竪穴住居27出土遺物② (1/3)



- 1 暗褐色土 (小礫含)
- 2 褐色土
- 3 黒褐色土
- 4 暗褐色土
- 5 暗黄橙褐色土



第146図 竪穴住居28 (1/80)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居28 (第146図、図版23)

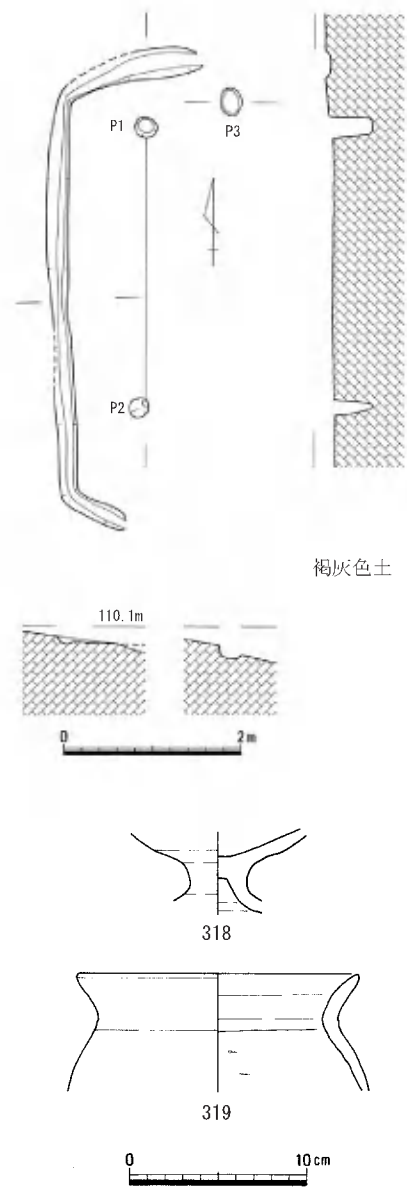
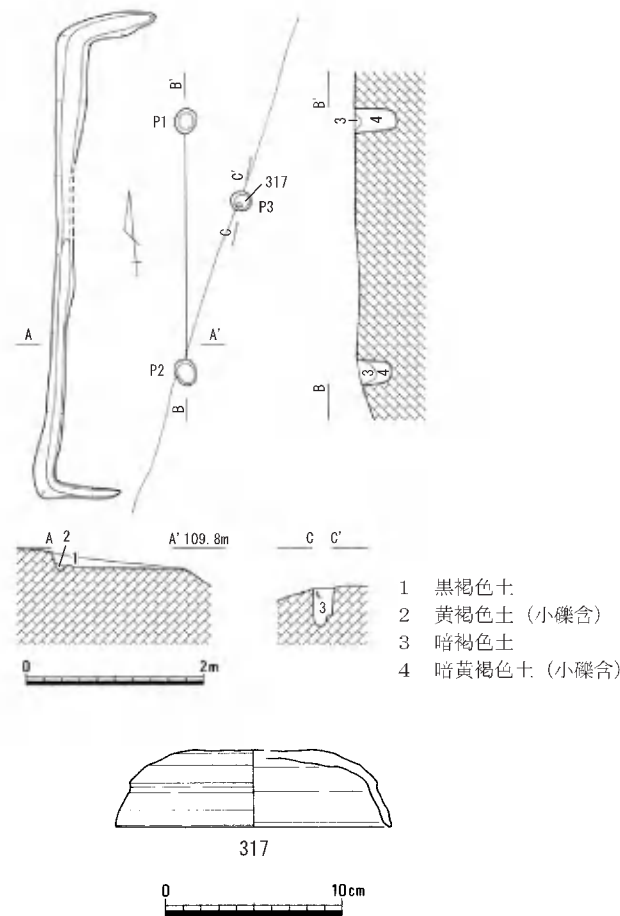
調査区南部の南端に位置する、平面方形(一辺673cm)の竪穴住居である。東側の大半が削平され、カマドの存在は確認できなかった。支柱穴のうち2本と、北西隅にも浅いピット(深さ13cm)が検出された。床面から杯蓋311が出土し、杯312・313、甕314~316は埋土中からの出土である。314や315などは新しい時期の埋没過程の混入で、遺構の時期は古墳時代後期前半と思われる。(柴田)

竪穴住居29 (第147図)

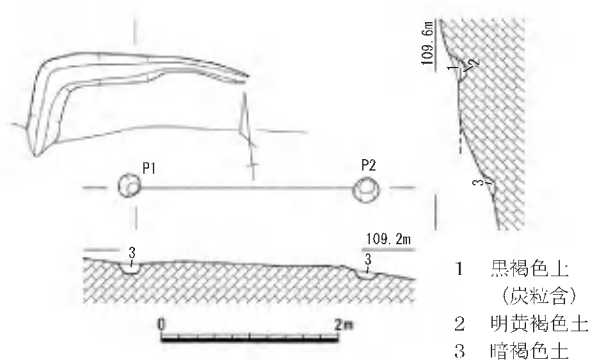
調査区南部の南端に位置する、平面方形(一辺549cm)の竪穴住居である。大半が削平され、カマドの存在は確認できなかった。支柱穴のうち2本と、中央付近にはP3が検出された。このP3からは、杯蓋317が出土した。出土遺物などから、遺構の時期は古墳時代後期前半と思われる。(柴田)

竪穴住居30 (第148図)

調査区南部の中央に位置する、平面方形(一辺540cm以上)の竪穴住居である。大半が削平されており、カマドの存在は確認できなかった。支柱穴のうち2本と、北壁付近にはP3が検出された。埋土中からは、高杯318、土師器甕319が出土した。出土遺物などから、遺構の時期は古墳時代後期末と思われる。(柴田)



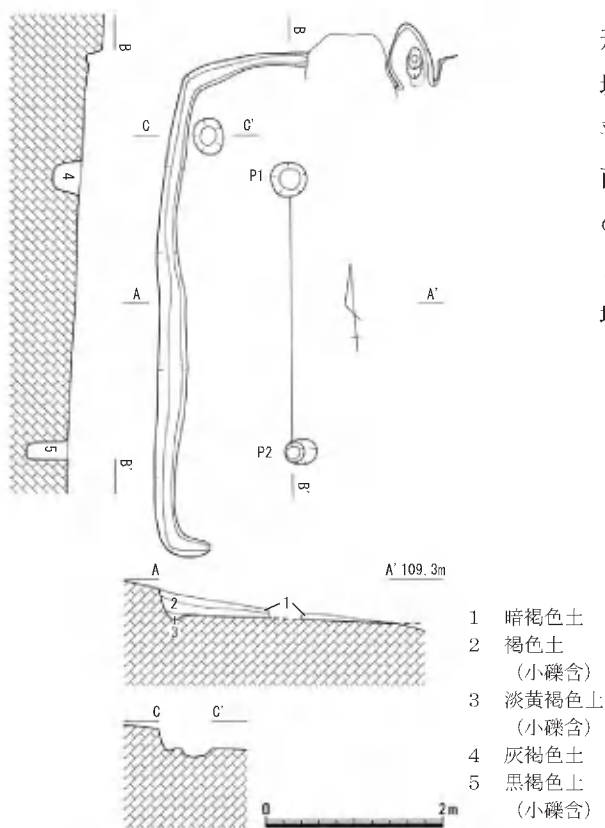
第147図 竪穴住居29 (1/80)・出土遺物 (1/4) 第148図 竪穴住居30 (1/80)・出土遺物 (1/4)



第149図 竪穴住居31 (1/80)

竪穴住居31 (第149図)

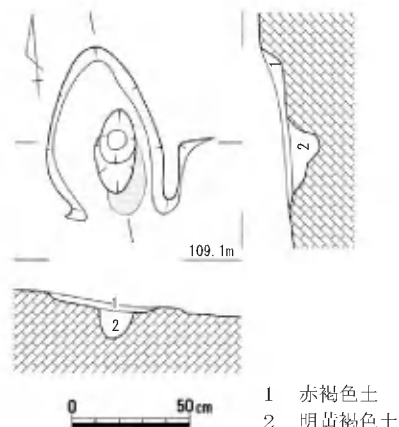
調査区北部の東寄りに位置する、平面方形と思われる竪穴住居である。わずかに床面が残るが、大半が流失しており、カマドの存在は確認できなかった。支柱穴のうち2本が検出された。埋土中からの出土遺物はないが、遺構の時期は古墳時代後期の可能性が考えられる。(柴田)



第150図 竪穴住居32 (1/80・1/30)

竪穴住居32 (第150図)

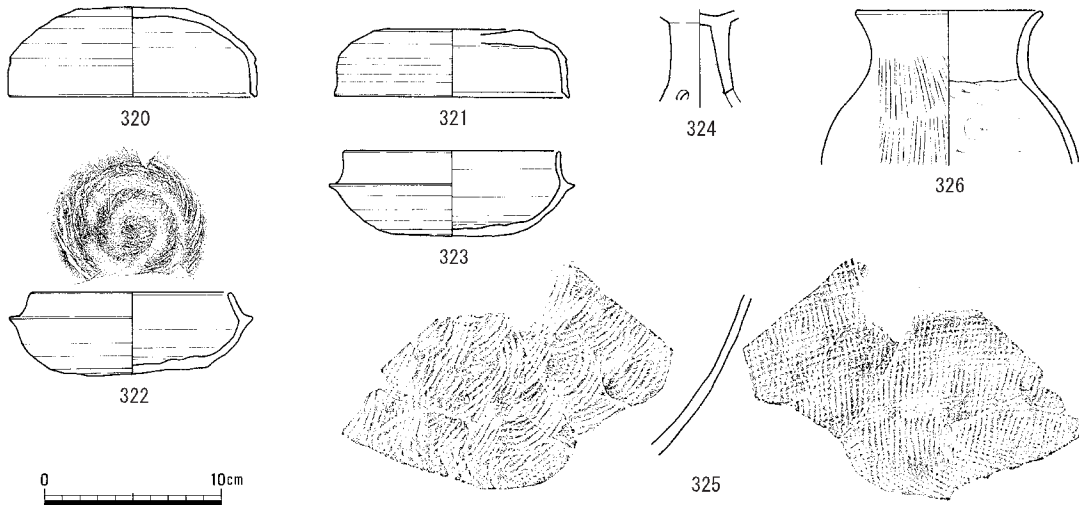
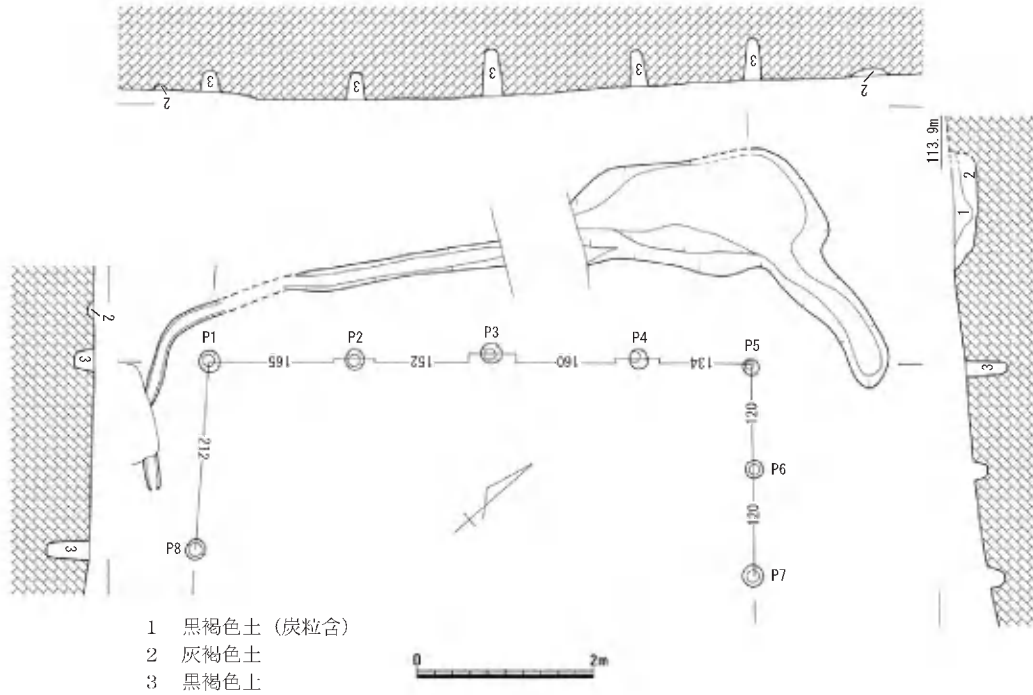
調査区北部の東寄りに位置する、平面方形(一辺569cm)の竪穴住居である。この埋土を被熱土壌1が切っている。大半が削平されているが、支柱穴のうち2本と、北西隅にも浅いピットが検出された。カマドの燃焼部中央には、小さなピットも確認できた。切り合いなどから、遺構の時期は古墳時代後期後半と思われる。(柴田)



2 建物

建物4 (第151図、図版18-1)

調査区南部の中央に位置する建物である。遺構の上部は後世の開墾でほとんど削平されているが、北西の山側に「コ」字形を呈する溝が検出され、斜面を段状に造成した面に建てられたと考えられる。南東側では、建物を構成する柱穴が確認できなかった。桁行は612cm、梁間は現状で240cmを測る。柱穴からの出土遺物はないが、主に溝の膨らんだ場所から杯320~323、高杯324、甕片325、土師器甕326などが出土した。これらの遺物から、遺構の時期は古墳時代後期後半頃と思われる。(柴田)



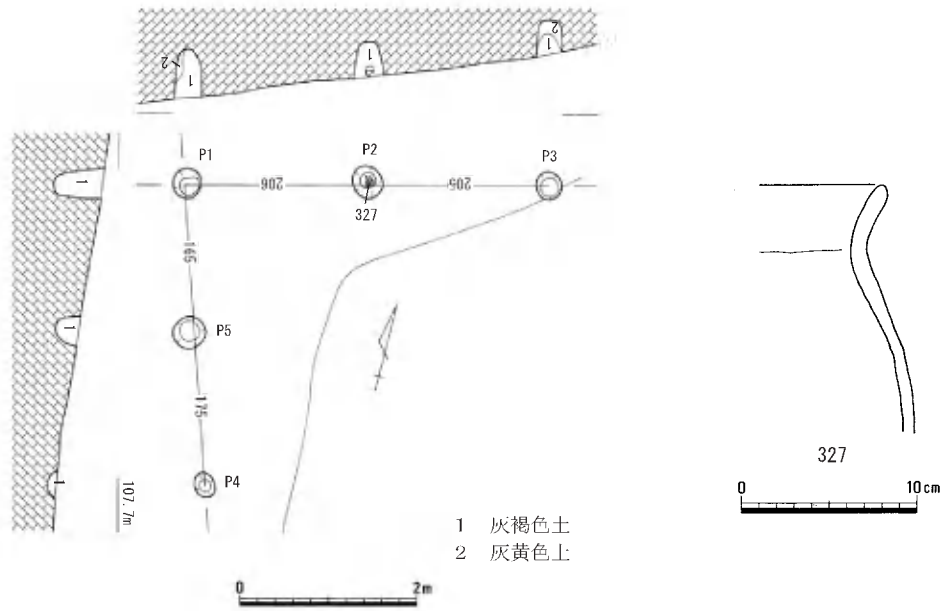
第151図 建物4 (1/80)・出土遺物 (1/4)

建物5 (第152図)

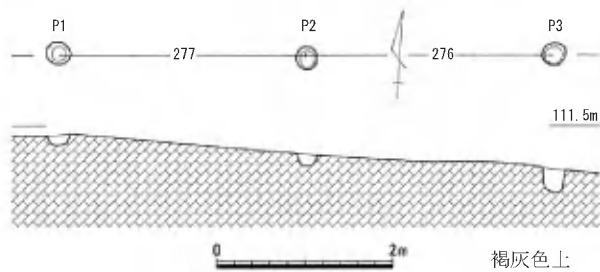
調査区中央の谷部に位置する建物である。遺構の南東部は後世の開墾で削平されており、建物を構成する柱穴が確認できなかった。現状で、桁行は411cm、梁間は340cmを測る。P2の埋土上層には鉄滓があり、その上から土師器甕327が出土した。土層を区別できなかったが、これらは柱の抜けた穴に入れられたと思われる。遺物などから、遺構の時期は古墳時代後期末と思われる。(柴田)

建物6 (第153図)

調査区中央の西寄りに位置する。柱列の可能性もあるが、南部が削平されたと考えた。P1埋土から勝間田焼碗の小片が出土しており、遺構の時期は平安時代末～鎌倉時代初頭と思われる。(柴田)



第152図 建物5 (1/80)・出土遺物 (1/4)



第153図 建物6 (1/80)

### 3 段状遺構

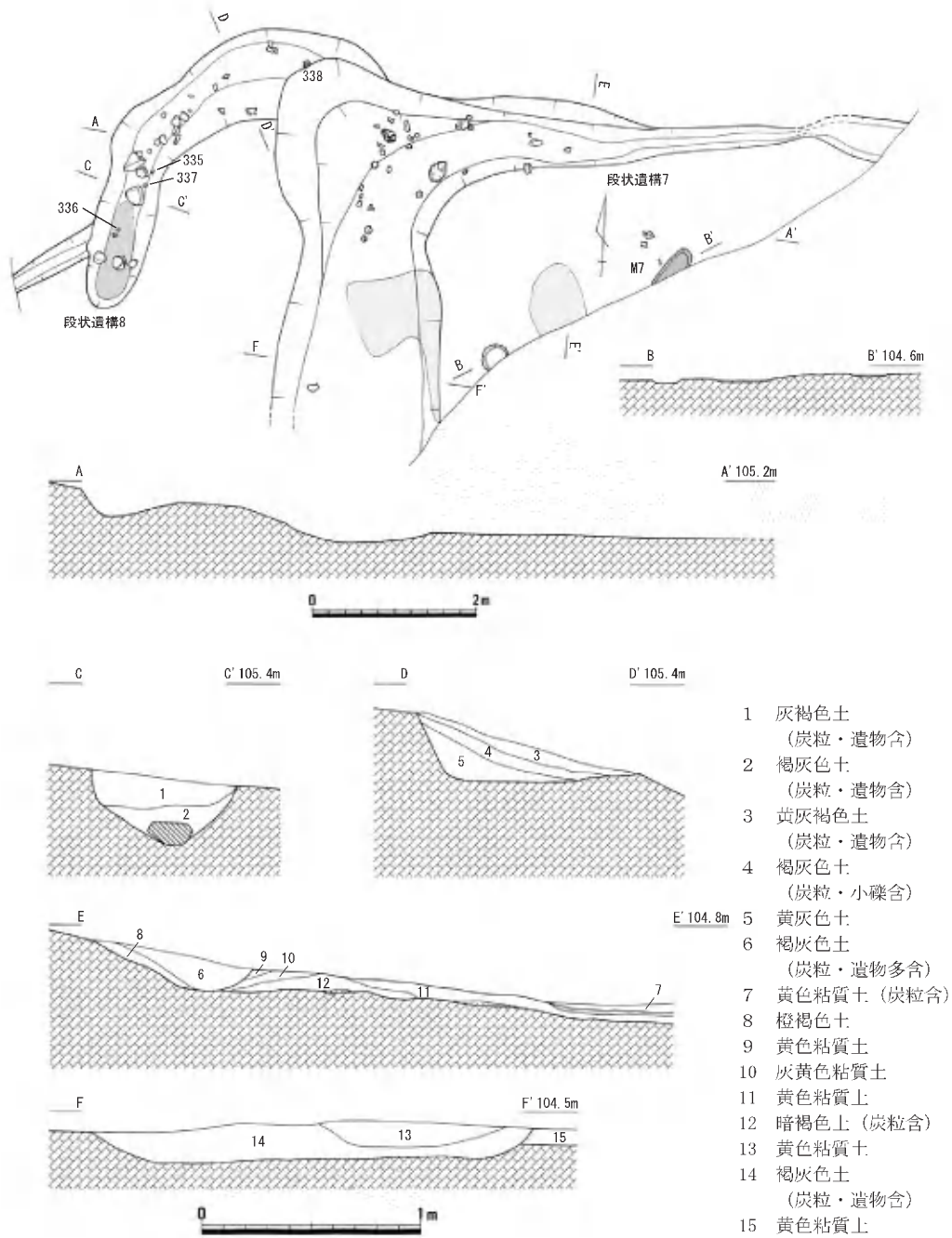
段状遺構7・8 (第154・155図、図版18-2・3)

調査区中央の谷部に面する段状遺構である。段状遺構7の床面は、地山と同質の粘質土が貼られている。この面では楕円形の被熱面と炭の堆積した小土壙が検出された。一方、この溝に切られた不整形の被熱面がどのように関連するかは不明である。段状遺構8は溝のみで、段状遺構7の一部の可能性もある。両方の溝からは、図示した土器の他に炉壁や鉄鉞石が出土しており、製鉄に関する遺構である可能性が高い。遺物から、遺構の時期は古墳時代後期末と思われる。(柴田)

### 4 被熱土壙

被熱土壙1 (第156図)

調査区北部に位置する被熱土壙で、竪穴住居32の埋土を切っている。平面は長方形で、長さ110cm、幅85cm、深さ12cmを測る。埋土のほとんどが炭層である。掘り方底面の北東部と壁の一部が、被熱により赤く変色している。遺構の切り合いなどから、時期は古墳時代後期末の可能性がある。(柴田)



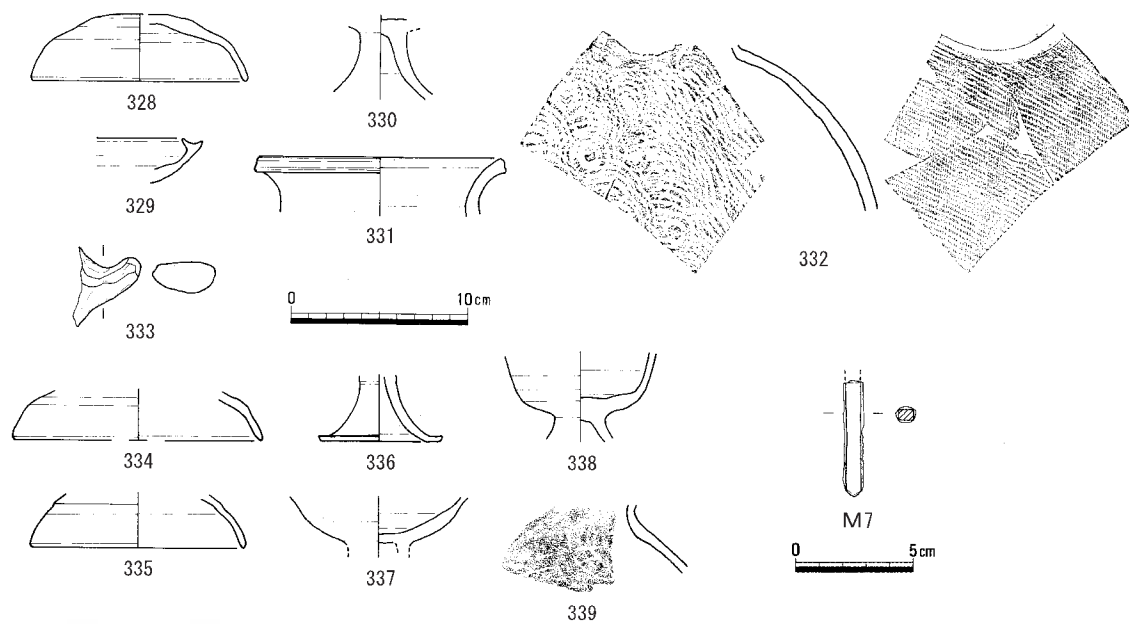
第154図 段状遺構7・8 (1/80・1/30)

被熱土壌2 (第157図)

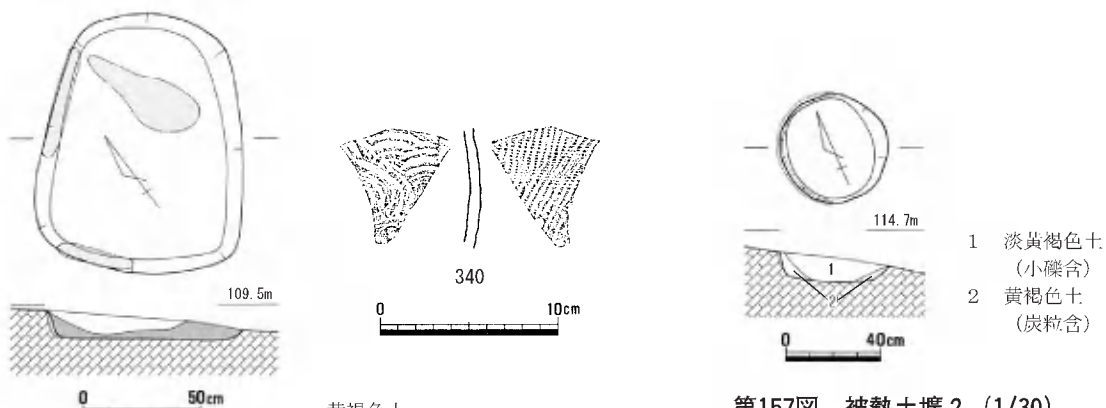
調査区南部に位置する被熱土壌である。平面は円形で、径46cm、深さ13cmを測る。山側の壁のみが、被熱により赤く変色している。時期は平安時代末以降の可能性はある。(柴田)

被熱土壌3 (第158図、図版18-4)

調査区南部に位置する。掘り方は円形で、径65cm、深さ13cmを測る。検出面で、環状の被熱面と角礫、その内側に炭の堆積が認められる。周辺からは鍋341・342なども出土しており、遺構の機能を考える上で注目される。出土遺物から、遺構の時期は鎌倉時代後期と思われる。(柴田)

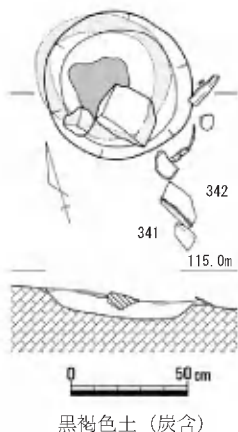


第155図 段状遺構7・8出土遺物 (1/4・1/3)

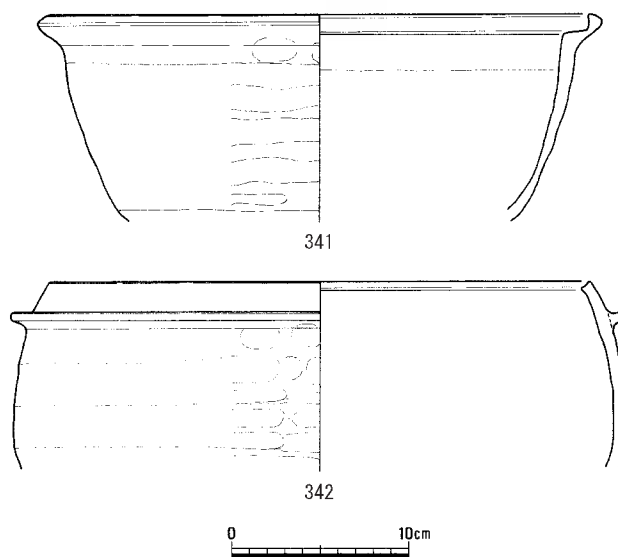


第156図 被熱土壇1 (1/30)  
・出土遺物 (1/4)

第157図 被熱土壇2 (1/30)



第158図 被熱土壇3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

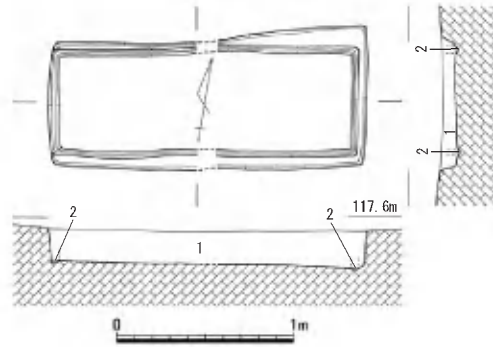




## 5 土壙墓

### 土壙墓1 (第159図)

調査区の南端に位置する。平面長方形で、長さ180cm・幅80cmを測る。主軸は等高線に直交する。底面は平坦で、壁体沿いに木棺痕跡が確認できた。その内寸は長さ164cm・幅55cmを測る。人骨や遺物は認められなかった。時期は不明であるが、埋土が暗灰褐色土で弥生～古墳時代の埋土と異なることから、中世の可能性が考えられる。(佐藤)

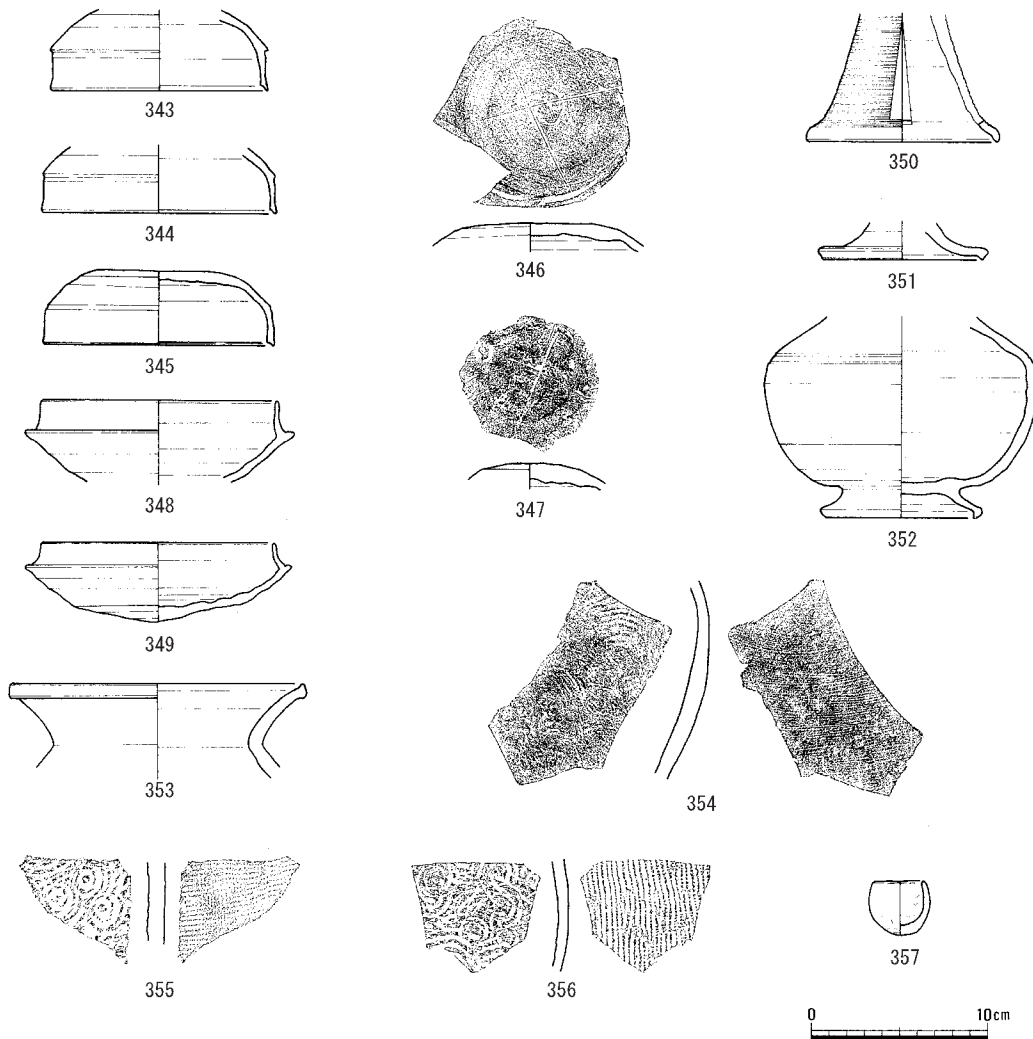


- 1 暗灰褐色土 (炭粒含)
- 2 暗褐色土

第159図 土壙墓1 (1/40)

## 6 その他の遺構・遺物

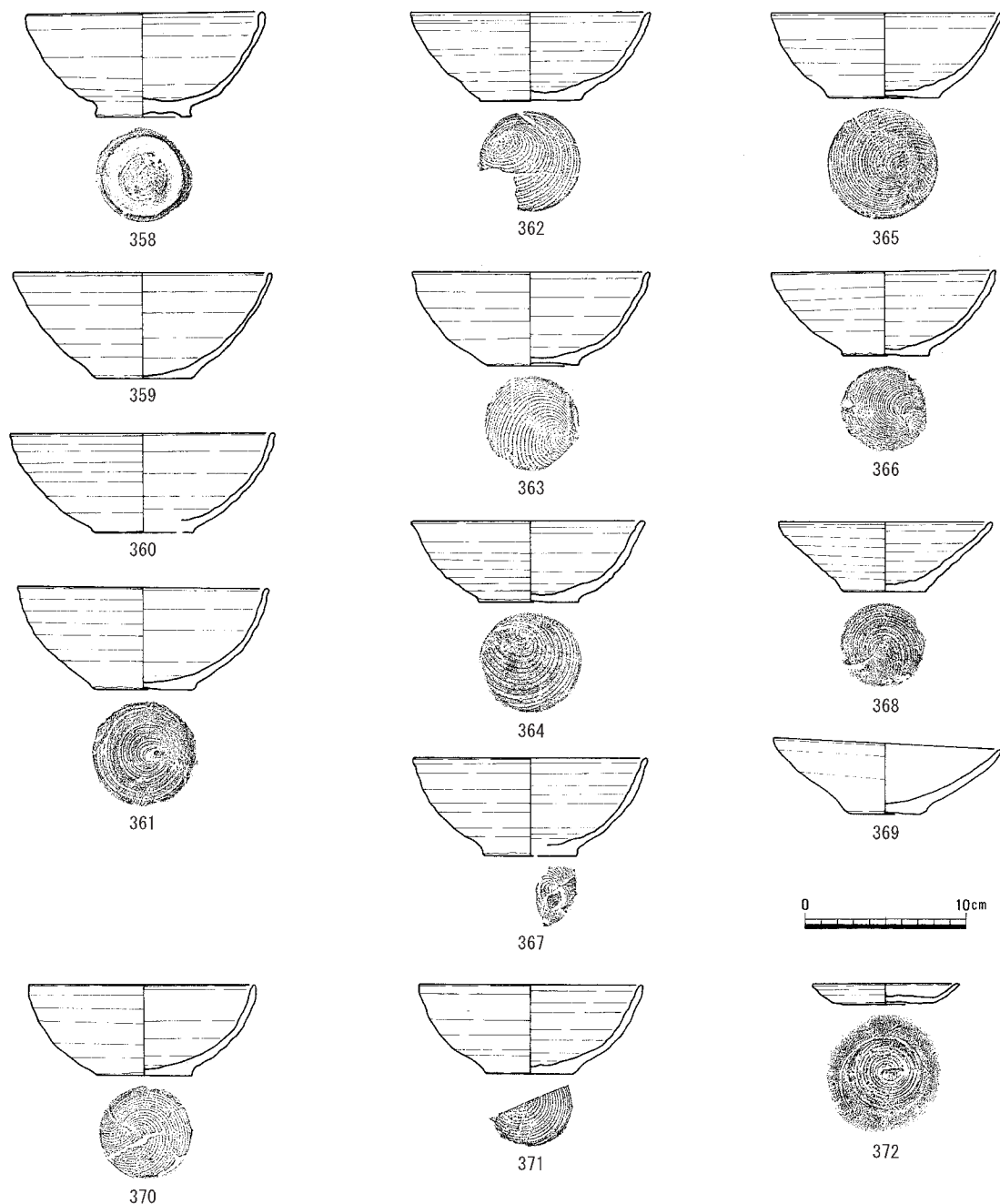
その他の遺構としては、古墳時代後期のたわみと古代末の柱穴がある。たわみは、調査区北部中央の竪穴住居24上層のくぼみで、焼土や須恵器片とともに鉄鏃M8が出土した。柱穴1・2は、調査区



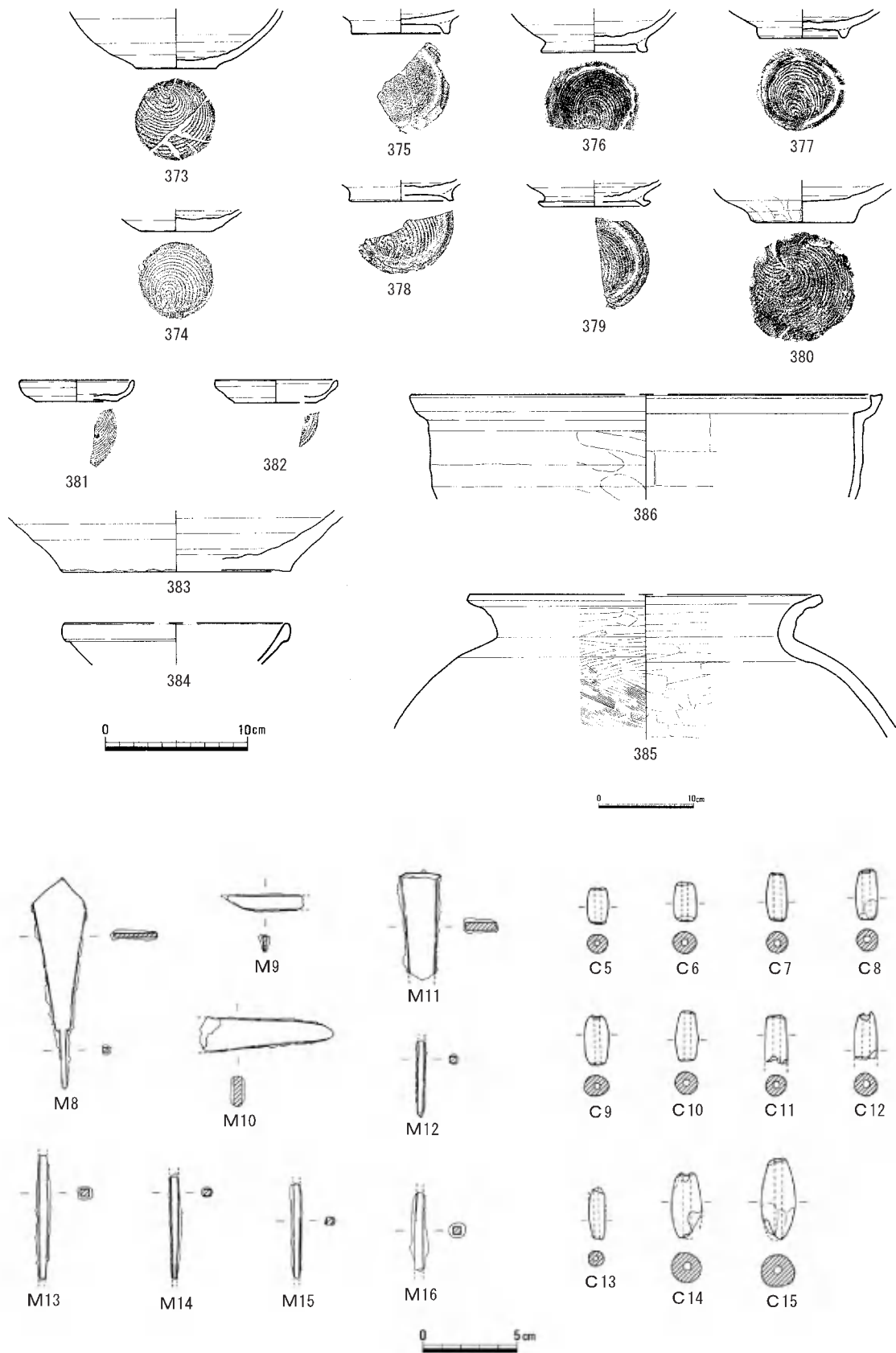
第160図 その他の遺物① (1/4)

南西端に位置する。どちらも平面楕円形で、径40×26cm、深さ30cmを測り、建物を構成する可能性もある。柱穴1では、勝間田焼の椀などを複数重ね、椀で蓋をしたような状態で出土した(図版18-5)。358は高台付勝間田椀で、359~367は体部が丸味をもつ勝間田椀、368・369は体部がまっすぐ外へのびるやや浅い土師器杯である。柱穴2からは、勝間田椀370・371と小皿372が出土している。

古墳時代中期以降のその他の遺物については、第160・162図に示した。土師器は破片が多く、掲載は須恵器などに偏っている。古墳時代中期~後期では、杯蓋343~347、杯身348・349、高杯350・351、高台付壺352、甕353~356、手捏ね土器357を図示した。346・347は「×」のヘラ記号が認められる。



第161図 その他の遺物② (1/4)



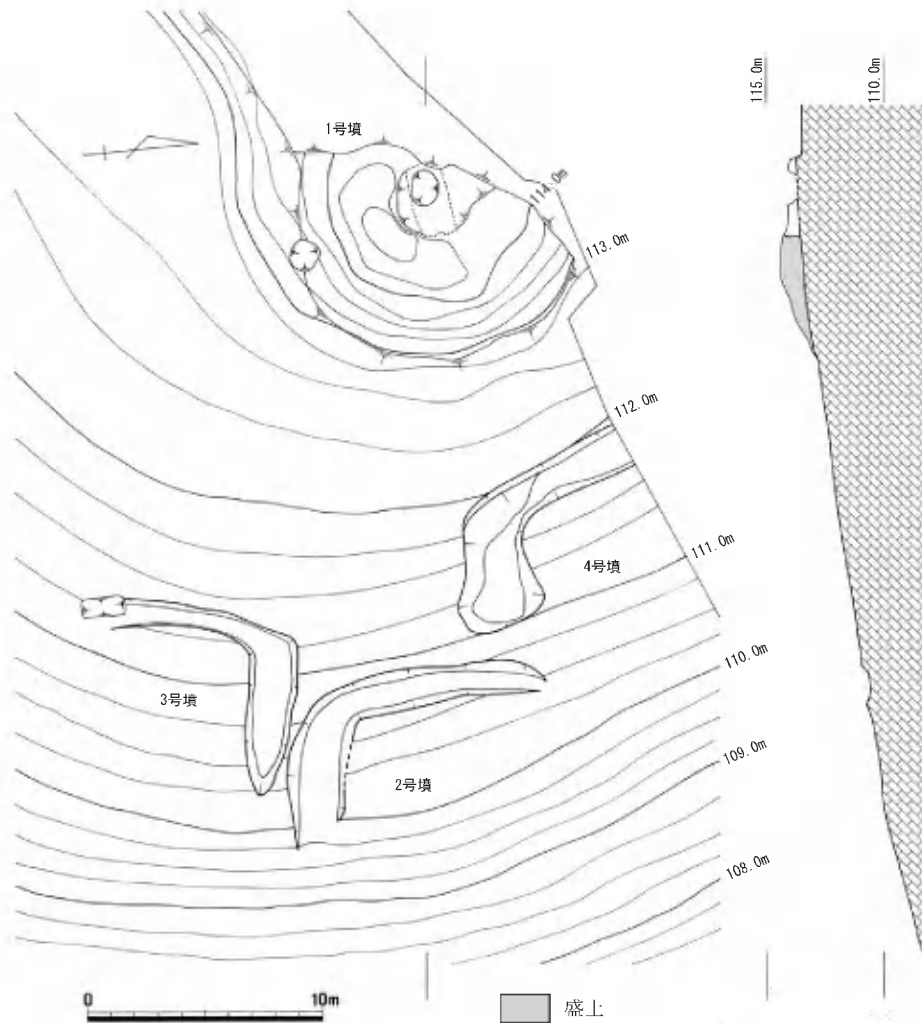
第162図 その他の遺物③ (1/4・1/6・1/3)

中世の遺物では、勝間田焼の椀や甕が圧倒的に多いが、ここでは高台付椀を多く示した。また、陶磁器類はかなり少なく、図示できた白磁椀384の他には出土を見ない。

金属製品は時期が明らかでないが、M 9～16を掲載した。土製品については、中世と思われる土鍾C 5～15の他には出土しなかった。(柴田)

### 第4節 宮ノ上古墳群

今回の調査では、宮ノ上遺跡の調査とあわせて周知の遺跡とされていた宮ノ上古墳(宮ノ上1号墳)の調査を行った。その際に、周囲の隣接地点から宮ノ上2号墳・3号墳・4号墳となる3基の古墳が新規に発見され、宮ノ上古墳群の実態が判明した。宮ノ上古墳群は小矢田地区の丘陵上に位置する、総計4基の古墳群である。宮ノ上古墳群の付近一帯は近世から現代の開発で大きく地形の改変を受けており、かつての古墳群の全貌は定かではない。2号墳・3号墳・4号墳の墳丘はすでになく、宮ノ上1号墳も周囲に大幅な削平を受け原形を留めていない。(山崎)

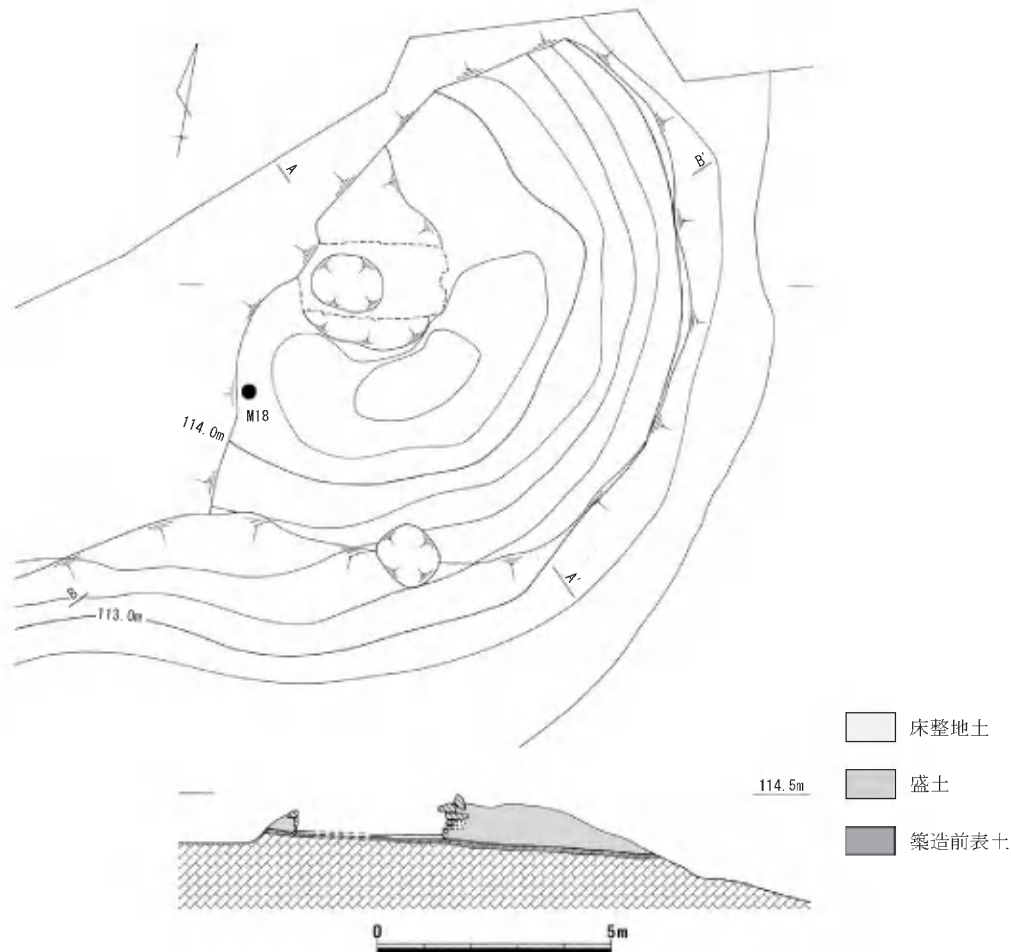


第163図 宮ノ上古墳群全体図 (1/300)

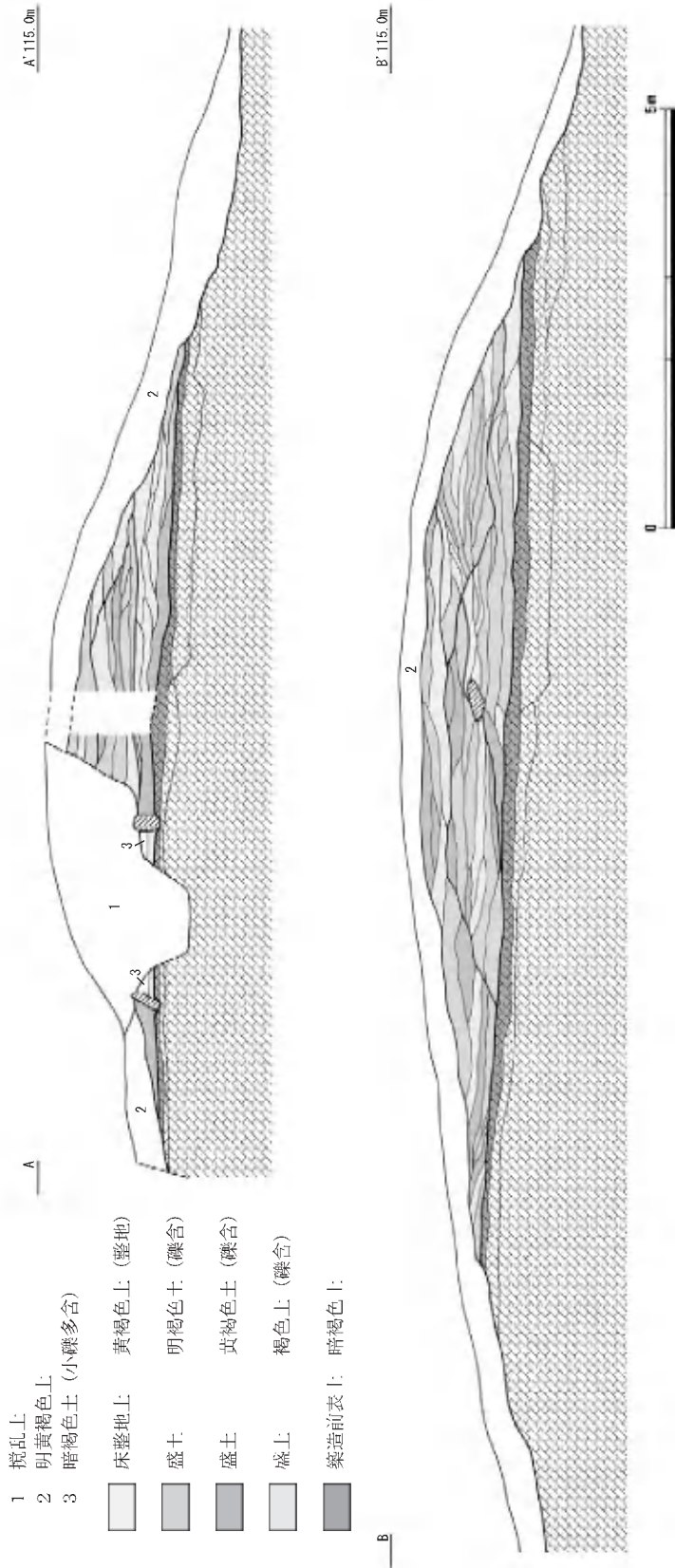
## 1 宮ノ上1号墳

### 1 立地と構造 (第164・165図、図版19-1・2)

宮ノ上1号墳(以下、1号墳)は、尾根筋の先端、海拔113~115m付近に立地している。調査前の状況は、近世から現代の開発により、墳丘の西側半分がすでに消滅し、墳丘の周囲も大幅な削平を受け、墳丘の原形は留めていない。墳丘頂部には大きな攪乱層を伴い、埋葬施設の石材が墳丘の周囲に散乱する状況であった。地元住民によれば、古墳の上には火災の際に使用する‘半鐘’が建てられていたようで、頂部の攪乱層は明治の頃に建てられていた半鐘台の支柱の痕跡と思われる。また、その時の工事に際してかどうかはわからないが、古墳からは大刀などの鉄器類が見つかったことが今日に伝わっている。現在、それらの遺物の消息は不明である。1号墳の調査に際しては、墳丘の形状(以下、墳形)の特定が困難であったため、墳丘周囲の調査もあわせて行った。しかし、墳形の手掛かりとなるような、周溝の痕跡や埴輪などは、見られなかった。残存する1号墳の盛土の幅は、東西方向に9.2m、南北方向に最大幅12mを測り、平面の形状は円形をなす。墳丘の高さは、旧表土層面から約1.5m、現在の地表面までは約2.0mを測る。



第164図 宮ノ上1号墳 (1/150)



第165図 宮ノ上1号墳墳丘断面図 (1/80)

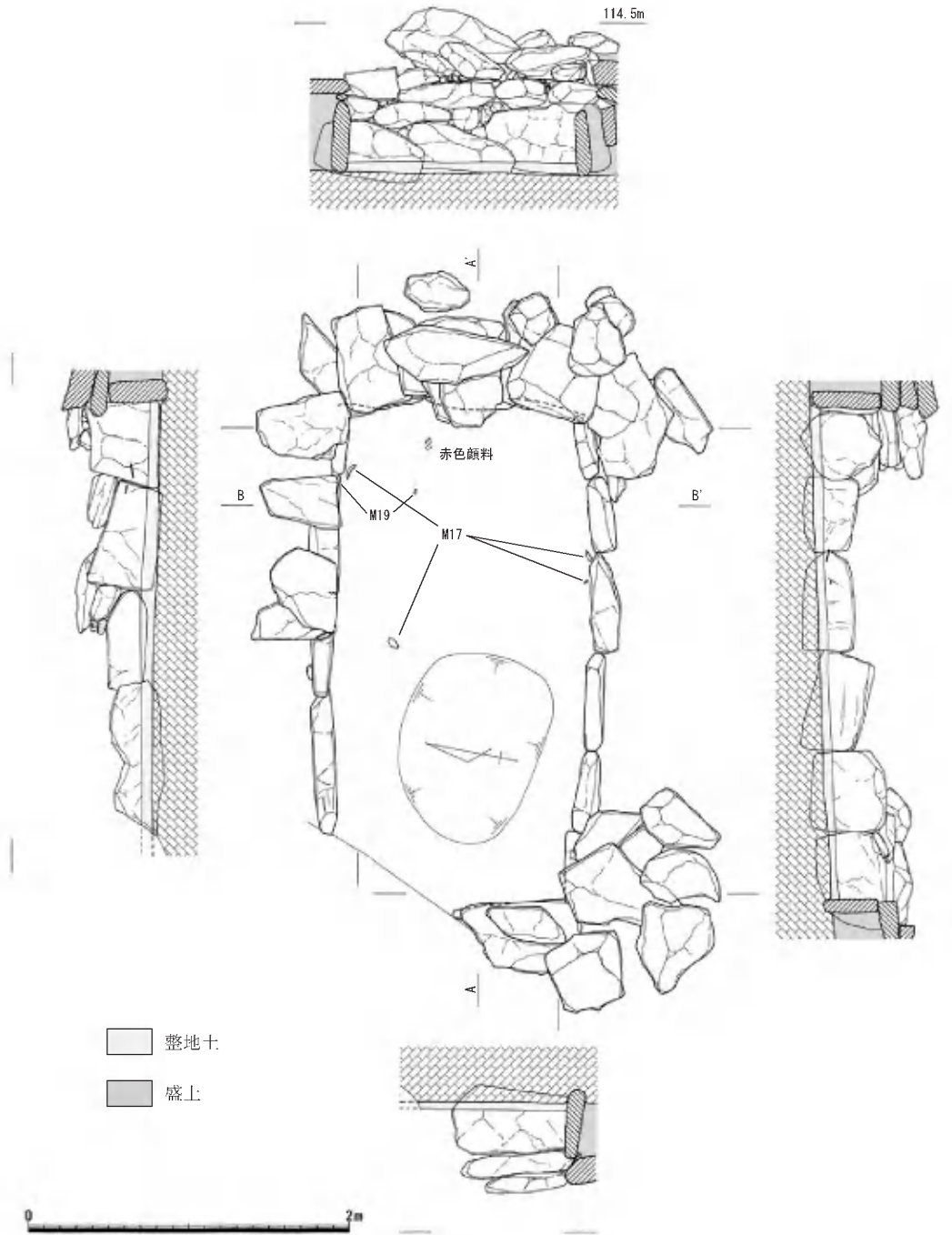
墳丘に2本のトレンチを入れ土層の観察を行ったところ、黒褐色を呈する旧表土層の上に、やや黄色味を帯びた明褐色土と黒味を帯びた褐色土を互層状に積み上げていく状況が確認された。盛土の単位は、10~20cmの厚みを最小の単位（1単位）とし、墳丘の底面に近づくほど厚めの盛土を行っている。

盛土の積み上げの状況は判然としない部分も多いが、10~20単位の盛土ごとに、基層となる盛土面を形成し、墳丘を順次構築していったと考えられる。調査結果からは4つの大きな盛土の単位（群）を確認することができた。また、墳丘裾部の土層の観察を行ったが、墳端の手掛かりとなるような、盛土の痕跡などは確認されていない。埋葬施設周辺部の盛土の状況は、埋葬施設の周囲に墓壇が見られないことや、埋葬施設の構築に併行した盛土の積み上げが想定されることから、埋葬施設の製作とともに墳丘の構築も進められたと考えられる。盛土から遺物などは見られなかった。

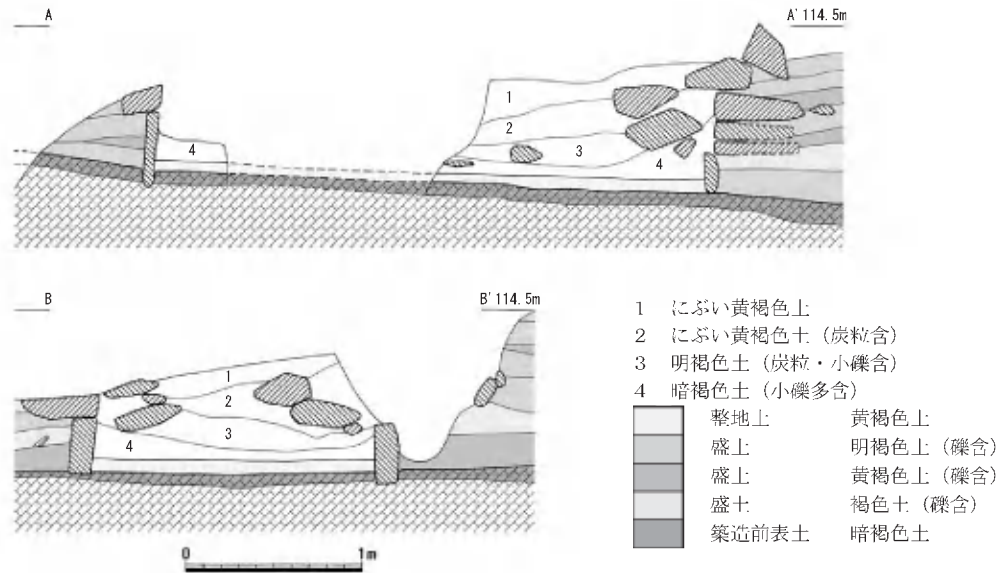
(山崎)

2 埋葬施設 (第166・167図、図版19-3、20-1~3)

埋葬施設は上部を大きく欠損している。埋葬施設の主軸の方向は、 $N-79.5^{\circ}-E$ を測る。埋葬施設の内法は、最下段の基底石を基準として、全長が308cm、幅は東壁が142cm、西壁が140cm (復元値)を測る。石室の平面形状は、幅広い長方形を呈している。埋葬施設は、基底石に割石などの板状の石を立て並べ、その上に扁平な石を小口積みにして壁面を構築する。周囲には裏込めの石材も見られる。埋葬施設のコーナーは、小口壁と側壁がほぼ直角に組み合わせり、南東隅の上部では、両壁にやや斜



第166図 埋葬施設 (1/40)



第167図 埋葬施設断面図 (1/40)

めに石を架け渡している部分も見られる。北西隅の欠損部分に石材の抜き取り痕跡は見られなかった。埋葬施設は後世に床面自体が大きく掻き乱された状況が確認され、構築時の床面は、現在の検出面よりも若干上に位置していたと考えられる。(山崎)

### 3 出土遺物 (第168図、図版23、24)

古墳に伴う遺物は、埋葬施設の床面近くから、獣帯鏡M17、鉄鎌M19、赤色顔料(水銀朱)が、埋葬施設外の墳丘流出土中から、内行花文鏡M18、石杵S51が出土している。

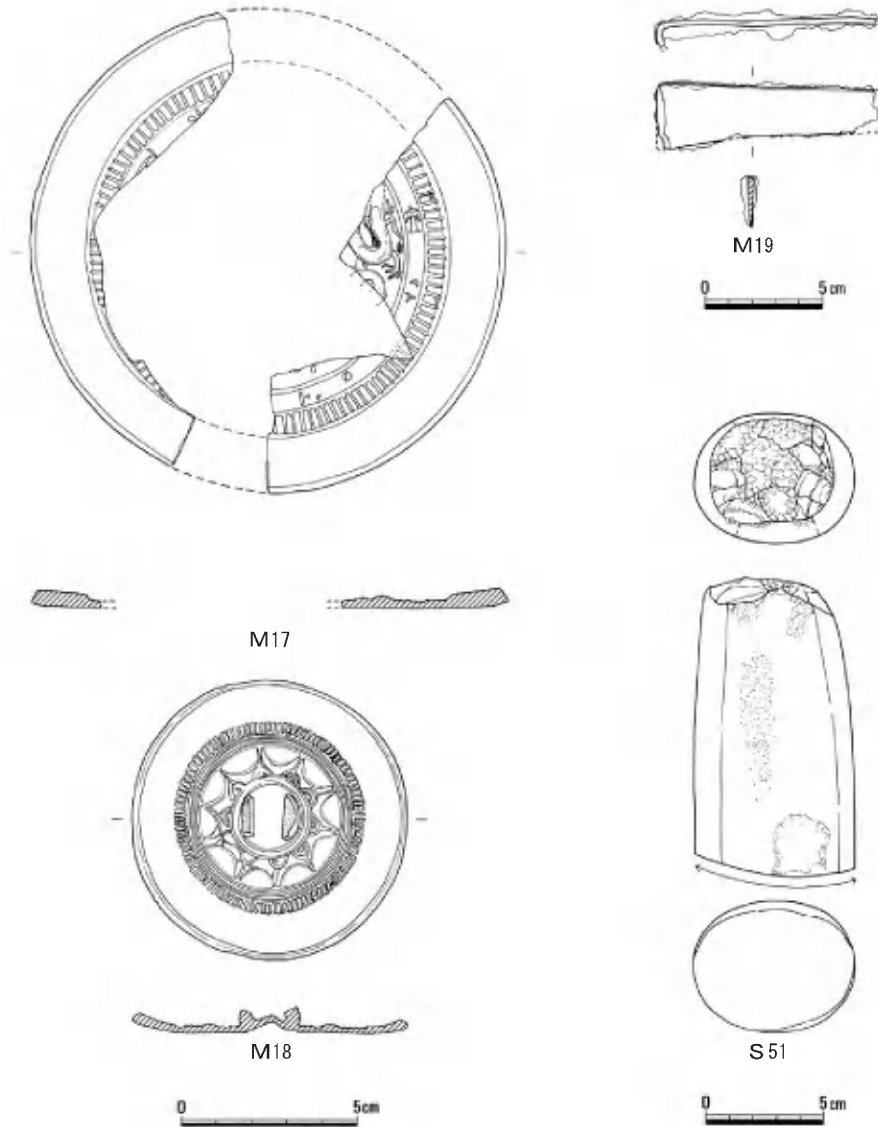
M17は獣帯鏡。鏡の直径は、復元径で13.4cm、厚みは4.7mmを測る。鈕の部分は欠損している。鏡背面の内区は、内側から、獣文帯-圈帯-銘帯-櫛歯文帯の文様構成をなす。外区は素文で平縁。獣文帯には神獣と乳の浮彫表現が見られ、乳間に図像を配した、六像式である可能性が高い。図像には輪郭線をとまわず、上方作系の鏡と考えられる。銘帯には「宜」と「子」の字と字間の小乳が見られる。鏡背面には“手ずれ”による磨滅や赤色顔料(水銀朱・ベンガラ)の付着がある。鏡式は「六像B式上方作系浮彫式獣帯鏡」と考えられる<sup>(1)</sup>。

M18は内行花文鏡。鏡の直径は9.5cm、厚みは2.6mmを測る。鏡背面の内区は内側から、内行花文帯-圈帯-櫛歯文帯の文様構成をなす。外区は素文で斜縁。内行花文帯は、十花文で、二重の円弧文の上部に一本の直線を配した単位文様が花文間に見られる。現在、国内でこの鏡の類例は確認されていない。外区は斜縁で倣製鏡の可能性も指摘される。外面には獣帯鏡とおなじく赤色顔料(水銀朱・ベンガラ)が付着しており、埋葬施設内にあった可能性も考えられる。

M19は鉄鎌。残存長9.5cm、幅2.8cm、厚み2.5mmを測る。刃部の約半分を大きく欠損しており、端部には、折り返しが見られる。細身の鎌で、時期は古墳時代中期ごろと思われる。

S51は石杵。全長12.6cm、幅6.8cm、厚み5.5cm、を測る。形状は楕円形の棒状で一方の面にすり面をもつ。石材は閃緑岩。古墳に伴う事例は、4世紀の森尾古墳(兵庫県)、5世紀の野中古墳(奈良県)などがあり、古墳時代前期から中期にかけて見られている。(山崎)





第168図 宮ノ上1号墳出土遺物 (1/2・1/3)

#### 4 まとめ

1号墳の墳形は、盛土が円形に残存する点などから、直径が12～13m前後の円墳と考えられる。埋葬施設は、横穴式石室の可能性も考慮したが、石材の欠損部分が県内でも少数例の横穴式石室の左片袖にあたる点や<sup>(2)</sup>、獣帯鏡などの古い要素から、竪穴式石槨（竪穴式石室）と考えている。築造時期は、鏡や鉄鎌などの遺物、2号墳の埴輪の時期、須恵器類が一点も出土していないことを考慮して、5世紀の中頃、古墳時代中期の前半（4～5期<sup>(3)</sup>）に1号墳の築造時期を求めておく。（山崎）

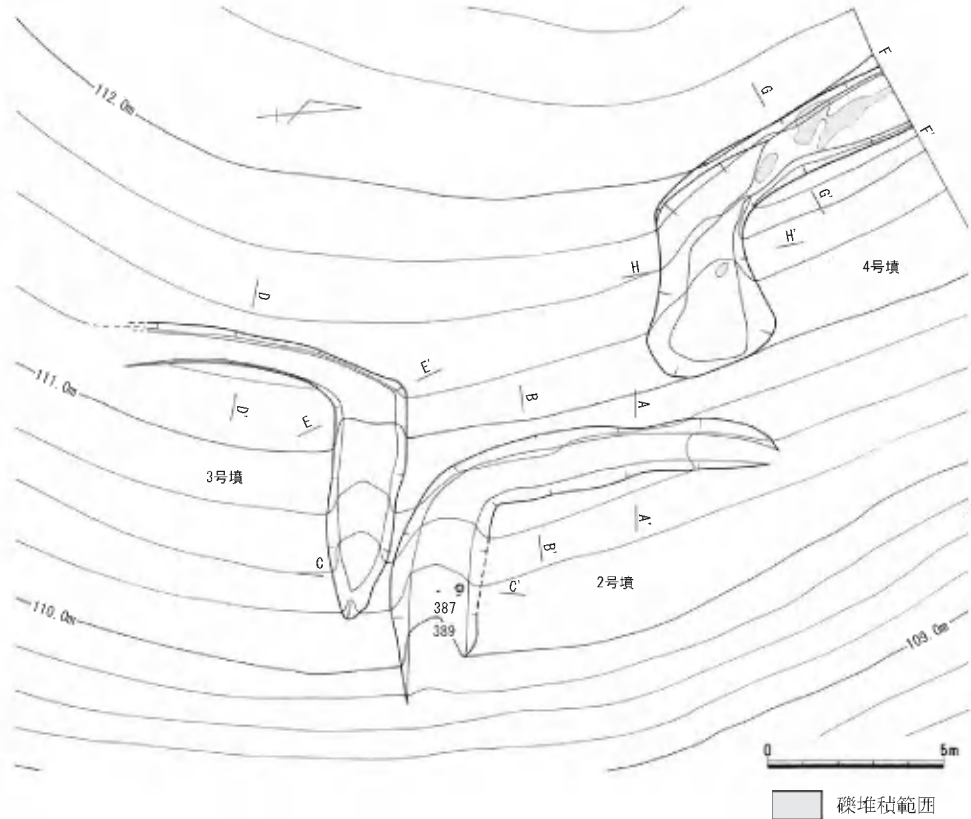
#### 註

- (1) 鏡式の判定は、森下章司氏の御教示による。
- (2) 亀山行雄「岡山県内の横穴式石室」『論争吉備』シンポジウム記録1 考古学研究会 1999
- (3) 近藤義朗編『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社 1991 によっている。

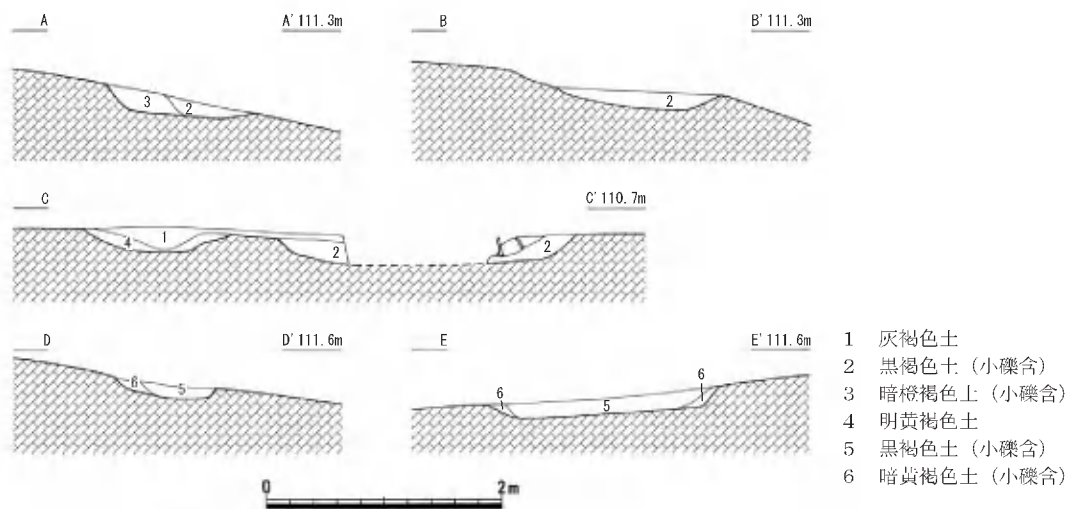
## 2 宮ノ上2・3・4号墳

### 1 立地と構造 (第169~172図、図版20-4~6)

宮ノ上2~4号墳は、尾根先端の東斜面、海拔110~112m付近に位置する。1号墳との間は5~15mを測る。比較的浅い「L」字形の溝だけが近接して検出されたにすぎないが、規模や出土遺物など



第169図 宮ノ上2~4号墳 (1/200)

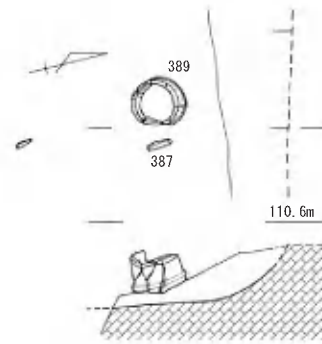


第170図 宮ノ上2・3号墳断面図 (1/60)

から古墳の周溝と考えた。詳細は不明だが、いずれも一辺10m足らずの方墳と推測される。2号墳の北端は、地山の様子から、ここで東へ屈曲する可能性が高い。また、南側では埴輪387・389が出土した。2・3号墳の直接の切り合い関係は認められない。4号墳の南辺は地山の風化で変形しており、本来の掘り方は2号墳北辺に接する程度ではないかと思われる。なお、4号墳周溝には礫の堆積が認められたが、その由来は不明である。(柴田)

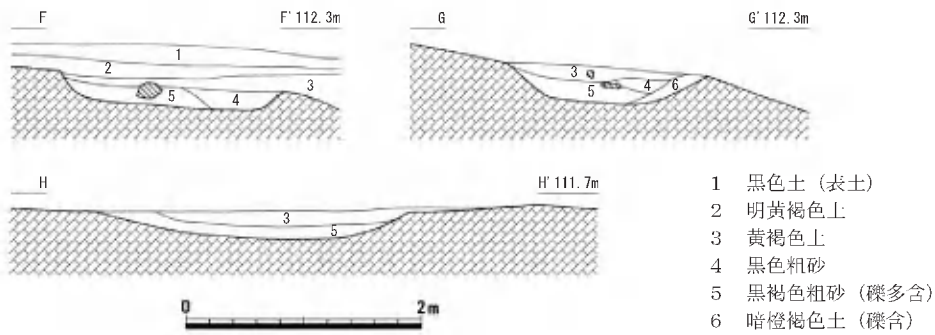
## 2 出土遺物 (第173図、図版23)

2号墳周溝から387と389、周辺から388と390が出土した。色調は橙色で、胎土中の砂粒が少ない点の特徴的である。これらのいずれかが同一個体である可能性も十分想定される。387・388は朝顔形埴輪で、内外面とも粗いハケメ、肩部内面にはユビナデが施される。389は円筒埴輪(部)で、黒斑が見られる。390は基底部

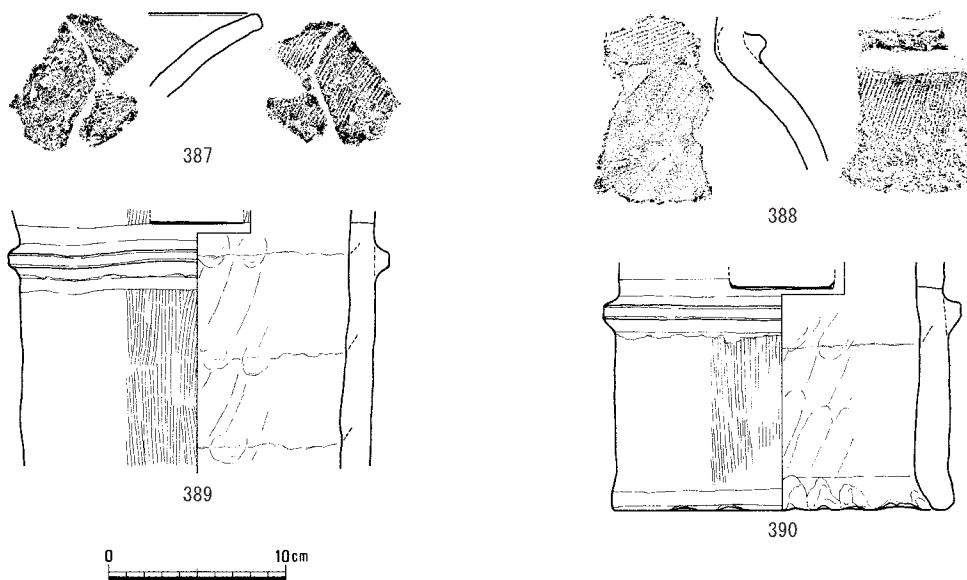


黒褐色土 (小礫含)

第171図 2号墳埴輪出土状態 (1/80)



第172図 4号墳断面図 (1/60)



第173図 2号墳・周辺出土遺物 (1/4)

で、底径は18.6cm、突帯までの高さは10cmを測る。円筒部外面は粗いタテハケのみ、内面はユビナデが見られる。スカシは方形で、2方向に施される。(柴田)

### 3 時期

2号墳等から出土した埴輪は、底部径がやや小さいが、上方への開きは顕著でないと言える。また、外面は1次調整のみであるが、黒斑と方形スカシについては古い要素を有する。これらに基づいて詳細な時期を示すことは困難であるが、2号墳はおよそ5世紀後半に位置付けられると考える。3・4号墳については、2号墳とあまり時期差はないと思われる。(柴田)

## 第5節 小結

ここまで報告したように、宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群では、後世の削平にもかかわらず、比較的良質な集落と古墳群が確認できた。ここでは、時期ごとにその概要を示す。

弥生時代中期中葉～後葉では、堅穴住居5軒、建物2棟、段状遺構2～4基、土壙4基を数える。当該時期に関しては、国司尾遺跡でも集落が確認されており、相互の関係を考える必要がある。このうち中期中葉については、尾根先端の頂部に住居が1軒のみであるが、鉄器などが出土しており注目される。また中期後葉では、国司尾遺跡の集落を含めても、比較的大きな住居が現れている。出土遺物では、特有の分布を示す石小刀や平面形の異なる分銅形土製品2点が特筆される。

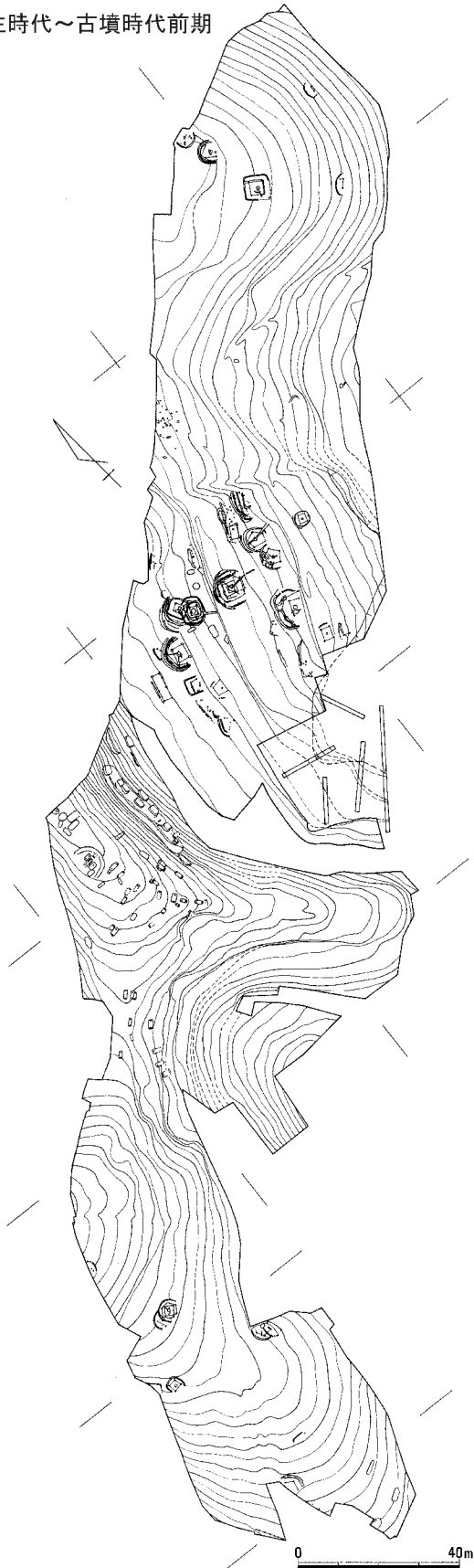
弥生時代後期～古墳時代初頭では、詳細な時期が不明のものを含めて、堅穴住居19軒、建物1棟、段状遺構3～4基、土壙8基、溝1条を数える。後期中葉までは、ほぼ均等な遺構数が確認されると考えるが、後期後葉では集落が一時断絶する可能性がある。後期末～古墳時代初頭には、再び集落が形成される。各時期で堅穴住居4～5軒が確認され、高床部を有する大形住居も含まれる。これらには、播磨地域との関連を示す可能性のある中央土壙を設けるものもあり、また周辺地域からの搬入あるいは影響を受けた土器も出土している。美作東部では、弥生時代末から古墳時代初頭の集落は、小規模なものが点在しているが、当時の社会を考える上で、本例は興味深い資料である。

古墳時代中期の集落は確認できなかったが、尾根先端に小規模な4基の古墳で構成された古墳群が認められた。1号墳は、墳丘盛土と特異な形態の堅穴式石槨が残存しており、獣帯鏡や内行花文鏡、鉄鎌、石杵が出土した。2～4号墳は小規模な方墳で、周溝のみだが、2号墳には埴輪が伴うことが明らかになった。時期の確定は困難であるが、当地域ではほとんど明らかになっていない、古墳時代中期の古墳群の可能性が高く、国司尾遺跡の土壙墓との関連も検討する必要がある。

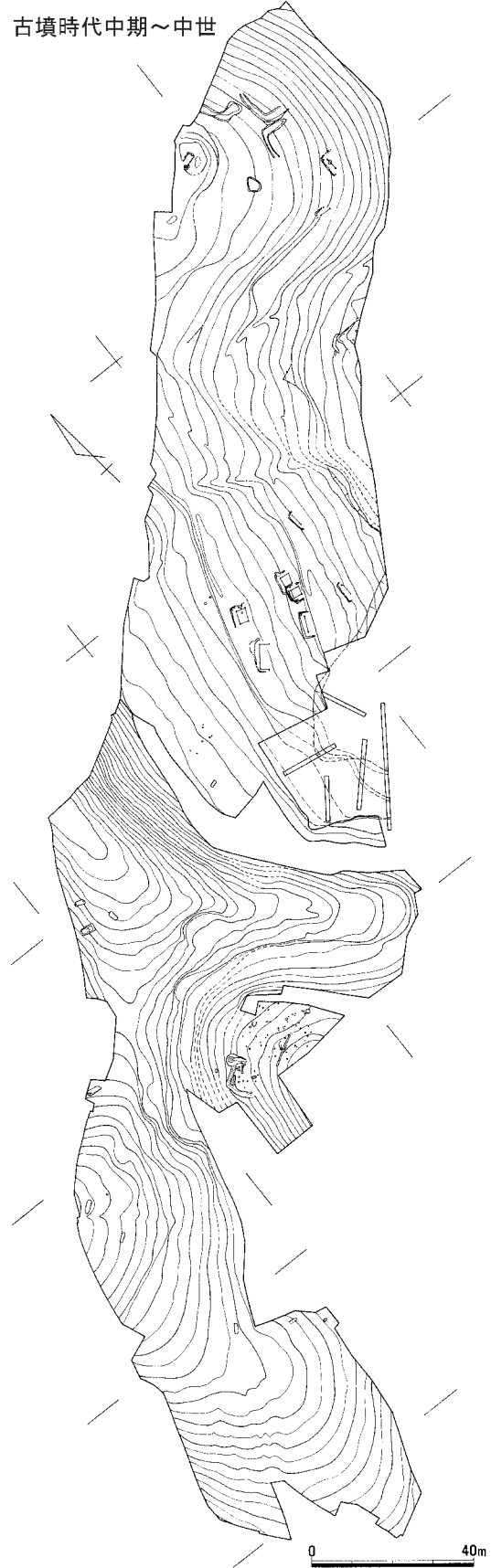
古墳時代後期になると集落が形成されるが、このなかには美作地域で確認されていなかった6世紀前半の集落が含まれる。遺構は、堅穴住居8軒、建物2棟、段状遺構2基、被熱土壙1基を数える。6世紀の前半と後半では、住居数はほぼ同じようである。7世紀前半には、段状遺構や被熱土壙などが確認され、鉄鉱石を原料とする小規模な製鉄が行われていたことが明らかとなった。

古代末～中世では、建物1棟、被熱土壙2基、土壙墓1基を数える。土器などは一定量出土しているが、削平や流失による影響が大きいと推測され、遺構から判断される集落の実態は不明である。なお、当遺跡の集落に関する調査成果は、集落遺跡としての資料を得ただけではなく、同一丘陵の坂田墳墓群とも関連する可能性が高い点で注目される。(柴田)

弥生時代～古墳時代前期



古墳時代中期～中世



第174図 調査遺跡遺構全体図 (1/1,600)

## 第6章 まとめ

### 第1節 まとめ

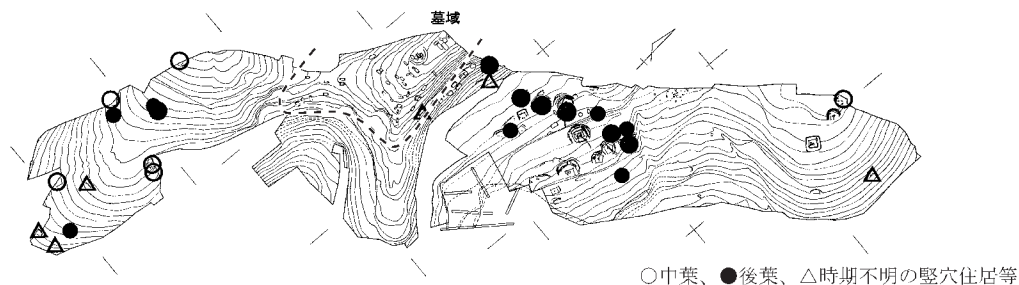
今回報告した遺跡の発掘調査では、後世の削平にもかかわらず、弥生時代～古墳時代と古代末～中世の集落や墓域が明らかになり、また相互の関連性についても考察可能な成果が得られたことは重要である。ここではそれらを時期別に概観し、簡略ではあるが、気付いた点をできる限り指摘したい<sup>(1)</sup>。

#### 1 弥生時代中期

集落形成は中葉から始まると考えられる。国司尾遺跡と宮ノ上遺跡で竪穴住居等が確認され、坂田墳墓群では土壙墓群が検出された。中葉では国司尾遺跡の方が多く、後葉には宮ノ上遺跡で遺構数が増加する。分布状態などを勘案すると、基本的な集落構成としては、2軒程度の竪穴住居に対し、ほぼ同数の建物や段状遺構が伴うとみられる。墳墓の遺物はほとんどなく、時期限定が困難である。

住居規模では、ほとんどが一辺あるいは径4～6mにおさまるが、後葉の宮ノ上住居1a（以下本節ではこのように遺構を表記する）のように径868cmを測る大形の住居もある。また、被熱面を伴う建物や段状遺構は、竪穴住居と異なる機能が想定される「方形竪穴状遺構」に該当すると思われる。この他に、焼失住居である国司尾住居6の中央穴底面に石の剥片などが並んでいることは興味深い。焼失理由にもよるが、中央穴の機能あるいは住居廃棄に伴う行為を示唆する例である。遺物では、宮ノ上遺跡の石小刀S42や分銅形土製品C1・C2が特筆される。S42は宮ノ上住居12に伴う可能性が高く、内刃全体におよぶ細かな剥離は、用途・使用方法を考える上で重要である。分銅形土製品は、2点とも遺構からの出土である。文様が周縁をめぐる点は、吉備地域以外に多い特徴で、加えて上半部に眉状文を施すものは、点数こそ少ないが播磨や因幡地域に多い。

坂田墳墓群は、土壙墓の分布状態から大きく3群に分けられる。国司尾遺跡の北に位置する鞍部のA群（坂田土壙墓1～9）と、頂部付近のB群（坂田土壙墓10～36）、東斜面のC群（坂田土壙墓37・38）である。この中には後期の土壙墓が多く含まれている可能性が高いが、時期限定が困難なため、ここで一括して述べておきたい。土壙墓の主軸方向は、一部を除き原則として等高線に沿っている。尾根方向との関係で見ると、平行するものはA群では尾根筋上に集まり、B群では東斜面に集まっている。一方、直交するものはA群の斜面部とB群の尾根筋を中心として認められる。このような類型



第175図 弥生時代中期遺構全体図 (1/3,000)

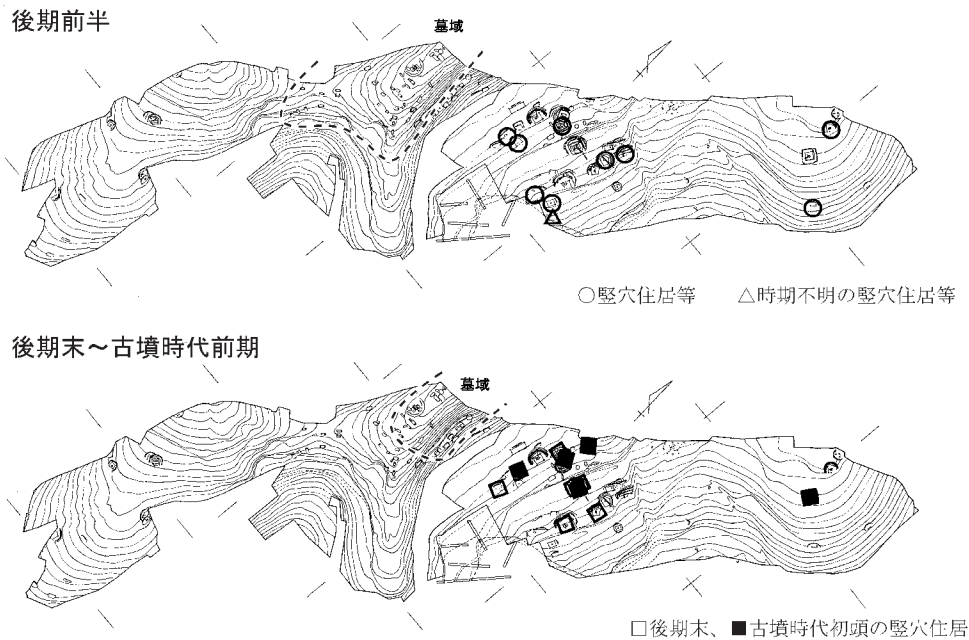
化が、時期や集団とどの程度有効に関連するかわからないが、集落との位置関係や遺構数を勘案すると、A群と国司尾遺跡、B・C群と宮ノ上遺跡との関係を考えることが合理的と思われる。遺物では、坂田土壙墓16出土の磨製石剣S3が注目される。県内において、墓からの出土としては打製石剣の例が1例あるが、磨製石剣では本例が初めてである。

## 2 弥生時代後期～古墳時代前期

宮ノ上遺跡では引き続き集落が形成されているが、国司尾遺跡では遺構は確認されなかった。丘陵頂部周辺も引き続き墓域である。集落は、この期間を通して安定した遺構数を保つわけではなく、後葉に属する確実な遺構は確認されなかった。住居に関して言えば、時期不明の4軒を除き、後期前葉～中葉では6軒、後期末で4～5軒、古墳時代初頭で4～5軒を数える。基本的な集落構成は、竪穴住居3軒前後を核とするが、これに伴う建物や段状遺構の詳細は不明である。

後期末以降のほとんどの住居は、平面形が隅丸方形や方形になり、一辺9mを越える大形住居や高床部を有する住居も存在する。そして、方形の中央土壙の南に楕円形土壙が併設される住居が目目される。中央土壙は二段掘りで、楕円形土壙内には炭が堆積している点の特徴である。このような2種類の土壙を中央に設ける住居は、弥生時代中期～古墳時代初頭の播磨地域で多く確認され、土壙については、「燃焼施設」として分類・編年も試みられている<sup>(2)</sup>。それによると、当遺跡では明確な土手が確認できなかったが、宮ノ上住居21・24がB5類、宮ノ上住居22がB6類に該当し、弥生時代後期末～古墳時代初頭に位置付けられる<sup>(3)</sup>。宮ノ上住居23はC2類に相当し、それらより新しいと考えられている。この中央土壙の編年観と今回の出土土器の編年観とは矛盾は示さないと思われる。なお、こうした住居は、これまでに岡山県内でも確認されている<sup>(4)</sup>。また、住居構造と呼応するかのように、この時期には、周辺地域の特徴を有する土器が出土している。これについては、次節で詳述する。

坂田墳墓群では、平坦面を形成した東斜面に土壙墓6基が確認された。副葬品などは認められなかったが、比較的規模の大きい土壙墓である。平坦面上の堆積土からは古墳時代初頭の土器が出土してお



第176図 弥生時代後期～古墳時代前期遺構全体図 (1/3,000)

り、丘陵頂部からの流れ込みの可能性も否定できないが、土壙墓の時期あるいは下限を示すと思われる。丘陵頂部には、**坂田3号墳**と土壙墓群（**坂田土壙墓45**ほか）が検出された。今回の調査区域から外れた丘陵最高所には**坂田1・2号墳**が所在し、3号墳の北にまとまった土壙墓群も古墳の可能性が考えられるが、詳細は明らかでない。

### 3 古墳時代中期

この時期と考えられる集落は確認できなかったが、**国司尾遺跡**で土壙墓4基、**坂田墳墓群**で土壙墓1基、尾根先端に**宮ノ上古墳群**が形成されている。

**国司尾遺跡**と**坂田墳墓群**では、5世紀中葉から末にかけて単発的に土壙墓がみられる。**国司尾土壙墓1**の副葬品である須恵器の壺**49**は陶器TK73型式に相当するものである。遺構に伴わない遺物にも、陶質土器の特徴を持つ**71**があることと併せて非常に注目される。また、**坂田土壙墓53**からは鉄矛**M2**が出土している。鎬式鉄矛で、県内においては総社市随庵古墳出土のものに類似する<sup>(5)</sup>。

**宮ノ上古墳群**は丘陵の先端に位置し、小規模な4基の古墳で構成されている。**1号墳**は、墳丘盛土と特異な構造の堅穴式石槨が残存していた。当古墳群は5世紀中葉～末頃にかけて築造されたと考えられているが、同時期と思われる**国司尾土壙墓1～3**が須恵器を伴う一方で、古墳には須恵器が伴わない可能性があり、時期確定や埋葬のあり方などについてさらに検討が必要である。

### 4 古墳時代後期

**宮ノ上遺跡**では再び集落が形成される。中でも6世紀前半の集落は、美作地域では未検出であり、新たな資料として注目される。

6世紀前半の集落は、現状で調査区南側のみで確認された。**宮ノ上住居25**が最も古く、カマド構造に特徴があり、燃烧部は北壁中央付近に位置するが、煙道が北西隅付近から屋外へ延びる「L字形カマド」の可能性もある。**宮ノ上住居26・28・29**はこれより新しい時期と考えられ、床面や柱穴の出土遺物のみで判断するとTK10型式並行期と推測される。しかし、床面近くの埋土に新しい要素を持つ遺物が多く認められることから、遺構の埋没速度だけでなく、遺物や遺構の時期も再検討する余地がある。このことは、**坂田土壙墓55**に副葬された須恵器群にも言えるであろう。後半では、時期が確定できない住居もあるが、調査区北側にも住居が存在する可能性がある。以上から、初期を除くと集落は2軒程度の住居を基本として構成されていると考えられる。

7世紀前半では住居と建物以外に、谷部に面して段状遺構が確認された。**宮ノ上段状遺構7・8**では、鉄滓や炉壁、鉄鉾石などが出土し、遺跡内で小規模な製鉄が行われていた可能性が高い。床面には被熱面などが残存していたが、構造は明らかにできなかった。この時期の美作地域では、このような製鉄に関連する堅穴住居と段状遺構で構成された集落が確認されている<sup>(6)</sup>。また、**宮ノ上住居27**の床面からも鉄滓が出土しており、6世紀後半にも何らかの製鉄工程を行っていた可能性が考えられる。

集落の存続期間内である6世紀前半では、**国司尾遺跡**で土壙墓1基、後半では**坂田墳墓群**で土壙墓2基が検出されている。いずれも集落からやや離れていたり、集落と反対の西斜面に位置するなど、集落との関連性をどの程度認めるかは検討を要するであろう。

### 5 古代末～中世

おおむね平安時代末から鎌倉時代の集落と考えられる。特に**宮ノ上遺跡**では削平や流失による影響が大きいと推測され、遺物の出土量に比べて検出された遺構は少なく、その実態は必ずしも明らかでない。



そうした中で検出された宮ノ上柱穴1・2では、勝間田焼の椀や土師器の杯などがまとまって出土した。椀には高台が付くものもあり、口径は14～16cmで、器高5～6.5cmを測る。これらは進上谷窯の資料に類似し<sup>(7)</sup>、土師器杯はその前半とされる津山市美作国府の井戸皿の資料に類似する<sup>(8)</sup>。一方、国司尾遺跡と坂田遺跡からもまとまった資料が出土した。椀の口径は15～15.5cmであるが、器高が4～4.8cmと低く、底部が丸みを帯びている。これらは銅倉窯<sup>(9)</sup>の資料に相当し、宮ノ上遺跡の資料より新しく、集落の開始時期が異なる可能性がある。なお、後者には、日本海側に広く分布する台付皿(柱状高台皿)が含まれ、坂田遺跡の台付皿(柱状高台皿)は、美作国府跡のSK810<sup>(10)</sup>出土のものと同様類似している。SK810では進上谷窯に相当するとみられる勝間田焼椀が相伴しており、台付皿(柱状高台)と勝間田焼の年代観にあまりズレはない<sup>(11)</sup>。しかし、坂田遺跡の場合、現状では若干のズレが生じることになり、今後詳細な検討が必要である<sup>(12)</sup>。(柴田)

註

- (1) 本書の時代・時期区分、参考文献については、凡例に示した。
- (2) 小柴治子「『1〇(いちまる)型中央土坑』の変遷—和久遺跡検出資料の検討—」  
『水野正好先生古稀記念論文集 続文化財学論集第二分冊』文化財学論集刊行会 2003
- (3) 宮ノ上住居20は楕円形土壙が確認できていないが、土手を有する中央土壙の南に炭が認められており、B5類の可能性はある。
- (4) 勝央町では、小中遺跡や弥平治遺跡がある。岡山県南部では主要な遺跡として、足守川加茂B遺跡、足守川矢部南向遺跡、津寺遺跡、加茂政所遺跡、北部では谷尻遺跡などがある。いずれの住居も弥生時代後期から古墳時代初頭であるが、特に後期末から古墳時代の住居が多い。
- (5) 鎌木義昌ほか『総社市随庵古墳』総社市教育委員会 1965
- (6) 勝央町では、福吉丸山遺跡、津山市では、狐塚遺跡、アモウラ東遺跡、大畑遺跡、深山河内遺跡、大開遺跡などがある。
- (7) 伊藤晃「第十一章 窯業」『岡山県の考古学』近藤義郎編 1987
- (8) 平岡正宏「美作の古代末から中世の土器—勝間田焼椀を中心として—」  
『中近世土器の基礎研究Ⅸ』日本中世土器研究会 1993
- (9) 山磨康平「山ノ奥遺跡整地層出土の土器について」『山ノ奥遺跡 池東・益田遺跡』  
岡山県埋蔵文化財発掘調査報告180 岡山県教育委員会 2004
- (10) 坂本心平『美作国府跡—日本生命社宅新築に伴う発掘調査—』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第56集  
津山市教育委員会 1995
- (11) 台付皿(柱状高台)は11世紀後半から13世紀後半にかけて使用され、高台が高く、端部が発達する変化を想定されている。坂田遺跡例は「Ⅱ類」に相当し、12世紀前半にあてられる。  
八峠興「柱状高台考」『中世土器研究論集』日本中世土器研究会 2001
- (12) 窯跡の採集資料などから生産地編年を試みた團氏は、進上窯を12世紀前半とし、伊藤氏より古く考える見解を示している。  
團正雄「勝間田古窯跡群の動態—採集資料の紹介から—」  
『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』古代古備研究会 2002

## 第2節 弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器

宮ノ上遺跡では、弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての集落が確認された。これまで、美作地域における当該期の土器編年は、大田十二社遺跡の資料に基づく中山氏による編年が基礎となっている<sup>(1)</sup>。ここで対象とする時期は、ほぼ大田十二社4式に相当すると考えられるが、中山氏は4式を上東遺跡編年<sup>(2)</sup>でいうオノ町Ⅱ式から下田所式に、続く5式についても亀川上層式に下らない時期であると示している。当遺跡では、少量ながら「吉備型甕」も出土しており、遺構別の土器群にその同伴の有無や、遺構の切り合いなどが確認できた。そこで、大田十二社4式が細分できる可能性を考えながら<sup>(3)</sup>、**豎穴住居16・19・20～24**、**豎穴住居21上層**の出土土器を検討したい。ただし、ごく限られた断片的な資料であり、どの器種においても完形のものほとんど無く、詳細な検討による編年を組み立てることは困難である。今後の資料の蓄積により十分な検討がなされることを期待したい。

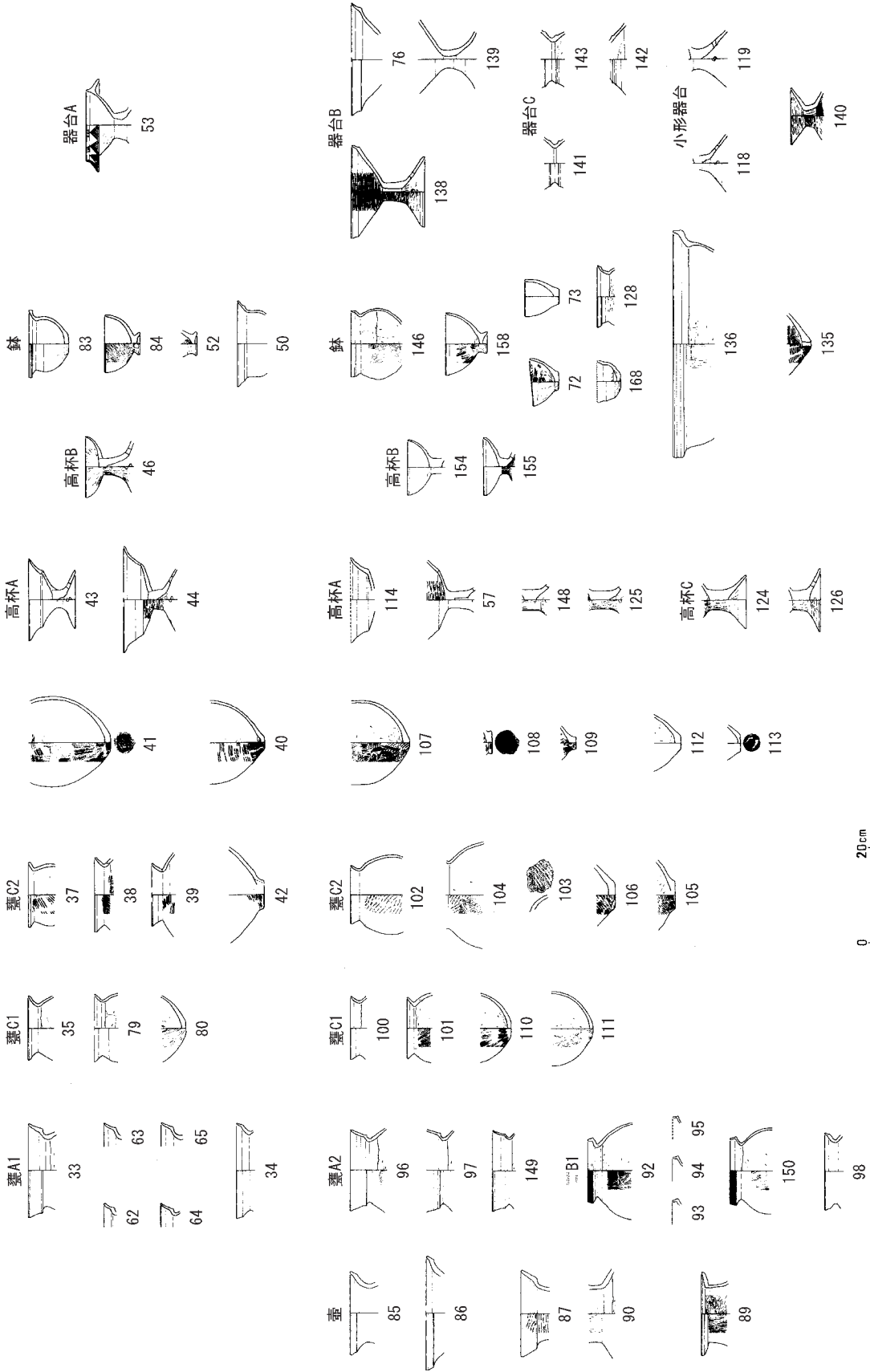
### 1 土器の分類と編年

出土した器種の多い**豎穴住居16**と**豎穴住居21上層**、**豎穴住居23**の出土土器を中心に分類する。

壺はあまり掲載できなかったが、**豎穴住居21上層**で出土している。口縁端部が上方に短くのびる**85・86**、二重口縁の**87**などがあり、非在地系と思われる。**87**は頸部から口縁部にかけてタタキが確認される。内傾する頸部から水平方向に口縁部が屈曲する**89**は東部瀬戸内（四国）系の壺である<sup>(4)</sup>。

甕については、二重口縁のもの（甕A類）、口縁端部を上方に屈曲させるもの（甕B類）、「く」字形に屈曲し口縁部が外反するもの（甕C類）などがある。甕A類には、在地の**33**（甕A1類）と山陰系の**32・96・97・149**（甕A2類）があげられる。甕A1類は、屈曲部が厚くて、稜が鈍く、大田十二社4a式に相当する。甕A2類はいずれも端部を丸くおさめ、外方へ反っており、松井編年<sup>(5)</sup>XI期に相当すると考えられる。**96**は灰白色を呈し、胎土は在地ではない可能性もある。甕B類は**豎穴住居16**では確認されなかった。口縁部にクシ描き沈線を施す甕B1類は吉備型甕である。黄白色系の**93・94・95**と赤橙色系の**92・150**があり、製作地の相違を示唆するかもしれない。口縁部は内傾する特徴があり、**92～94**では立ち上がりが短く、器壁は厚い。これらは、高橋編年<sup>(6)</sup>X期におさまる。甕C類では、内面にヘラケズリが施される**35・100・101**（甕C1類）、内面がナデかハケメで外面にタタキが認められる**37・38・39・102**（甕C2類）がある。甕C2類には、右上がりのタタキや左上がりのタタキ、水平方向のタタキが見られ、口縁部外面にもタタキが認められるものもある。これ以外に胴部調整や底部などで見ると、外面にタタキの後ハケメを施す**41・107**のような東部瀬戸内系の甕では、わずかに平底を形成する前者は播磨の長越遺跡I式<sup>(7)</sup>、讃岐の下川津Ⅲ式新段階～Ⅳ式<sup>(8)</sup>に、尖底で内面ヘラケズリの後者は長越Ⅱ式、下川津Ⅴ式に相当する。また、内面のヘラケズリについては、**豎穴住居21上層**のものに目立って認められる。なお、**38・42**の胎土は在地ではない可能性もある。

高杯については、杯部口縁が強く外反するもの（高杯A類）、杯部が碗状のもの（高杯B類）、杯部は不明だが、脚の柱部が中実のもの（高杯C類）などがある。高杯A類の**43・44**は短脚である。**44**は高橋編年IXb・c期におさまる、大田十二社4a式にも見られる。杯部はわからないが**122・125**はXb期に類似するものがある。また**114**は、東部瀬戸内系の高杯の可能性を考えたが、鉢の可能性もある。高杯B類には、長脚の**46**、短脚の**155**と柱部中実の**154**がある。**46・154**は大田十二社4b式に類似するが、**46**については一貫東遺跡Ⅲ式<sup>(9)</sup>（大田十二社3式）の土器群でも認められている器形であ



0 20cm

第177図 宮ノ上遺跡の弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器 (1/12)

る。高杯C類には124・126があり、大田十二社4bから5式にかけて存在する。

鉢については、吉備南部系と思われる大形の136・137、口縁部が屈曲し外反する83、口縁端部をわずかに外へつまむ小形の168、体部から口縁部へ内湾しながらのびる72・73・157、内湾する体部に台が付く84・158などがある。このような鉢は、高橋編年ではXb期まで見られる。また、135のような外面にタタキが施され、尖底の底部に穿孔を施す有孔鉢は、播磨周辺でよく出土している器種である<sup>(10)</sup>。

器台については、口縁部下を庇状に拡張する53（器台A類）、漏斗状の体部に「ハ」字に開く裾部を持つ138・139（器台B類）、鼓形器台141・142・143（器台C類）などがある。器台B類は、但馬・丹波など近畿北部地域に多く見られ、播磨でも出土している。口縁部形態では新相の特徴を示し、庄内並行期の兵庫県口阪本遺跡土坑301<sup>(11)</sup>や片引遺跡A区<sup>(12)</sup>出土のものに類似している。これまでも美作地域で出土しているが、県南部では出土が確認されていない器種である。器台C類は筒部のみであるが、松井編年XI期以降に相当し、3点とも灰白色を呈し、在地の胎土ではない可能性もある。小形器台には、裾が大きく「ハ」字に広がり器高の高い118・119、脚が低い140がある。

以上から、**竪穴住居16と竪穴住居21上層、竪穴住居23の土器については、竪穴住居16**（大田十二社4a式、高橋編年IXb・c期、長越I式、下川津Ⅲ～Ⅳ式）が古く、**竪穴住居21上層・23**（大田十二社4b式、高橋編年Xa・b期、松井編年XI期、長越II式、下川津V式）が新しいという関係が成り立つと考えられる。

この他の遺構については、**竪穴住居19の57**は高杯A類の長脚で高橋編年Xa期に類似するものがあり、**76**は器台B類である。**竪穴住居20の60**は甕B1類の白色系で高橋編年X期におさまり、**63～65**は甕A類で大田十二社4b式に相当する。また、**70**は高杯C類である。両住居は切り合い関係があるが、土器については大きな違いは認められない。**竪穴住居21**は、床面から6点の土器が出土している。中でも鉢83は、高橋編年IX期におさまると考えられ、上層の土器との関係に矛盾はないようである。**竪穴住居22**は、床面などから5点の土器が出土している。**144**は、表面が摩滅しておりクシ描き沈線の有無が確認できないが、甕B1類とは異なる可能性がある。**148**の高杯については高橋編年Xb期に類似するものがあり、遺構の切り合いとも矛盾しない。

## 2 美作東部の集落

当該期の美作東部の集落としては、勝央町小中遺跡<sup>(13)</sup>・弥平治遺跡<sup>(14)</sup>、美作市（旧美作町）狼谷遺跡<sup>(15)</sup>、津山市一貫東遺跡・天神原遺跡<sup>(16)</sup>・上部遺跡<sup>(17)</sup>・竹ノ下遺跡<sup>(18)</sup>・大田十二社遺跡・二宮遺跡<sup>(19)</sup>、鏡野町（旧奥津町）久田原遺跡<sup>(20)</sup>などがある。小中遺跡は、宮ノ上遺跡から滝川を挟んだ北の丘陵に位置する。後期では中葉頃の遺構が多く、大田十二社4a式と考えた時期に並行する遺構もある。山陰系土器は確認されていないが、東部瀬戸内系の土器は出土している。弥平治遺跡と狼谷遺跡では、検出遺構・遺物はあまり多くないが、その他の遺跡では比較的まとまった資料が確認されている。

一貫東遺跡は勝間田盆地の西に所在する小盆地をのぞむ丘陵上に位置する。後期全般にわたって竪穴住居と貯蔵穴が検出されている。中でも、貯蔵穴SC15・98は大田十二社3～4a式に、貯蔵穴SC10は4b式に相当すると思われる。前者では山陰系の土器が認められるが、東部瀬戸内系の甕は見られない。ただし、他の器種においてその可能性のある土器は確認できる。天神原遺跡は津山市街地北東の丘陵上に位置し、眼下に吉井川の支流である加茂川を臨むことができる。高床部を持つ隅丸方

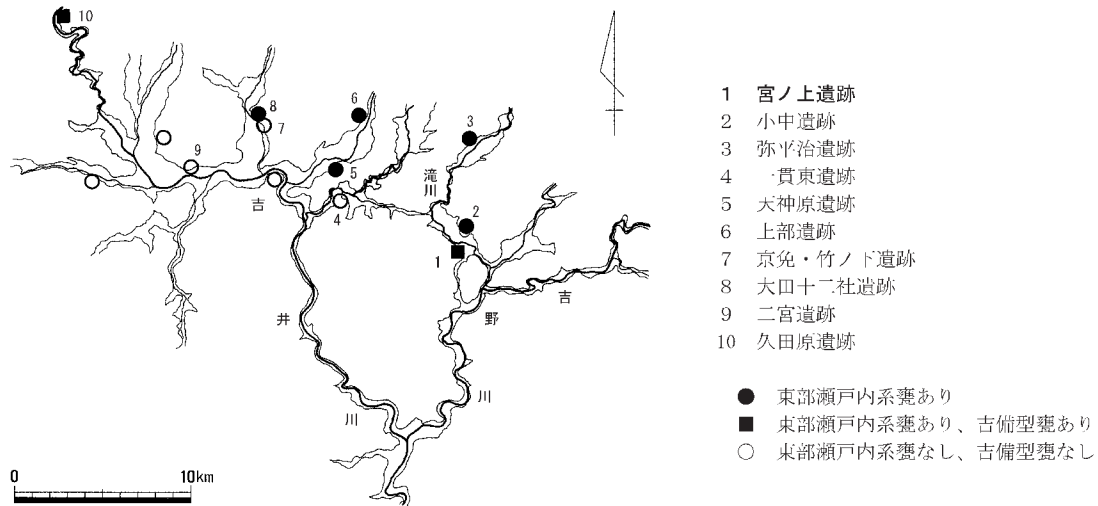
形の竪穴住居などが検出され、溝からはまとまった土器が出土している。住居12・15・溝土器溜No.1・2の遺物の多くは大田十二社4 a式に相当し、溝土器溜No.3はそれより新しい。これらは東部瀬戸内系の土器が中心で、吉備型甕（祖形を含む）や山陰系の土器をほとんど伴わない点特徴的である。上部遺跡は、天神原遺跡からさらに加茂川を上流に遡った丘陵上に位置する。平面円形の大型住居SH103が目され、住居内や排水溝内の出土土器は大田十二社4 b式を中心としている。この住居を切るSH102は多角形の高床部を有する住居で、壁体溝から出土した小形壺は高橋編年X a・b期に相当する可能性がある。吉備型甕は確認できないが、山陰系や東部瀬戸内系の土器が出土している点においては本遺跡と類似している。なお、東部瀬戸内系の土器が非常に目立つ点や、住居構造などから、天神原遺跡とともに加茂川流域の特異性が浮かび上がる。

竹ノ下遺跡は津山市街北部の河岸段丘上に位置する。大田十二社4式に相当する時期の竪穴住居が検出され、すぐ北の京免遺跡からは山陰系の土器が出土している。大田十二社遺跡は京免・竹ノ下遺跡の北の丘陵上に位置する。主に竪穴住居と袋状土壙が検出され、出土土器は当地域の基準資料となっている。ここでも吉備型甕（祖形を含む）は確認できないが、山陰系や東部瀬戸内系の土器などが出土している。二宮遺跡は、西方から津山市街地へ入る手前の丘陵上に位置する。この丘陵のすぐ南には東へ流れる吉井川が迫っている。岡の札地区で16基の袋状ピットと竪穴住居などが検出されており、No.35袋状ピットは大田十二社4 b式、No.29・42袋状ピットは4 b～5式に相当する。二宮遺跡では、特徴として山陰系土器の出土が顕著である。久田原遺跡は、二宮遺跡からさらに吉井川を遡った谷底平野に位置する。当該期の遺構は少ないが、竪穴住居14や土壙117は大田十二社4 b式に相当し、山陰系土器が認められる。遺構に伴わない土器の中には、東部瀬戸内系の土器がわずかにあるが、吉備型甕が目立つ点特徴である。

### 3 集落と交流経路

以上のように、弥生時代後期末（大田十二社4 a式）から古墳時代初頭（大田十二社4 b式～5式）における美作東部の土器様相は、基本的に山陰地域あるいは東部瀬戸内地域の影響を受けている。山陰の影響については、この前の時期までも認められるが<sup>(21)</sup>、弥生時代末に東部瀬戸内色が多くの遺跡で一斉に現れることが特に注目される点である。これが、播磨北西部との関係によるものか、瀬戸内沿岸地域との直接的な関係によるものかは検討する必要がある<sup>(22)</sup>。この際、津山市街地を中心として、その東にあたる小中遺跡（滝川流域）や天神原遺跡（加茂川流域）のように山陰色が薄く、東部瀬戸内色の濃い集落や、一貫東遺跡や京免・竹ノ下遺跡のように東部瀬戸内の影響が薄い集落も存在するなど多様性が感じられる。

古墳時代初頭の土器様相も同様な状況を呈すると思われる。ただし、現状では美作東部の中心である津山市域において、弥生時代後期末以降の吉備型甕（祖形を含む）の出土が確認できない状況にある中で、周辺の宮ノ上遺跡や久田原遺跡ではそれが出土していることは留意する必要がある。これは、播磨北部を経由する交通路の他に、吉井川・吉野川水系に沿った交通路も当然存在したことを意味すると考える<sup>(23)</sup>。吉井川下流では、高下遺跡の発掘調査が行われており、東部瀬戸内（四国）系の土器が多く出土していることが注目される<sup>(24)</sup>。この点を重視すると、宮ノ上遺跡の東部瀬戸内系の土器は吉備南部系の土器とともにこの経路で北上したと想定され、他遺跡の東部瀬戸内系土器についてもその可能性が考えられる<sup>(25)</sup>。しかし、これらの地域の土器が美作中核で留まることはあまりなく、周辺部で多く確認されることは興味深い。また、両時期を通して、津山市街地から西の吉井川本流域



第178図 美作東部の集落遺跡分布（弥生時代後期末～古墳時代初頭）

では、東部瀬戸内系土器よりも山陰系土器が顕著で、東ではその逆となる傾向も指摘できる。

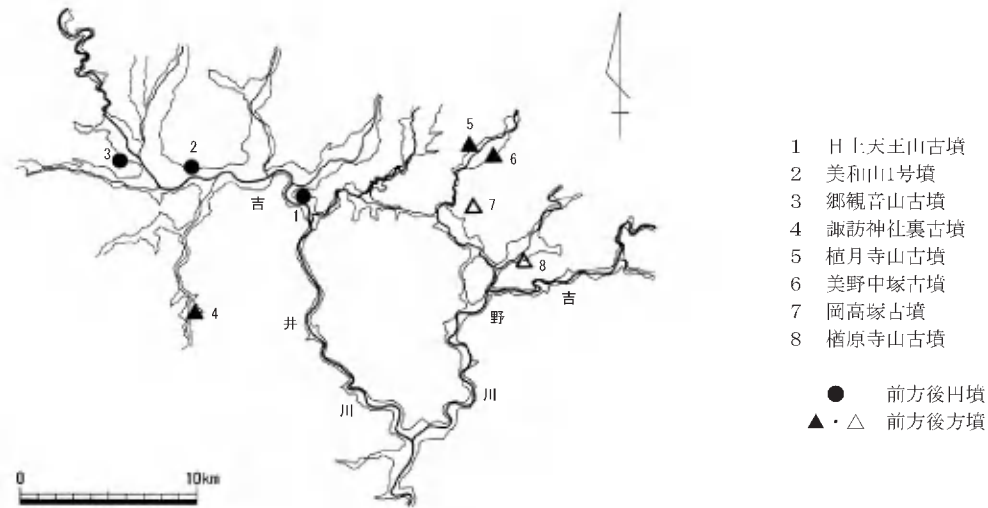
現在どれだけ全容が把握できているのかわからないが、この時期における美作の集落のほとんどが立地環境を同じくしている点も注意したい。それは各小盆地の端の丘陵上であり、河川に向かって両側から丘陵がのびて狭くなるような地点であることが多い。言い換えれば、各小盆地の出入り口と考えられる場所であり、交通の要衝である。これらの集落は、何らかの形で河川交通とも関わっていたと考えられ、地理的要因や関わり方が土器様相に影響しているのではないだろうか。

#### 4 まとめ

ここまで、ごくわずかな資料からではあるが、土器の観点から美作東部地域と主に東部瀬戸内沿岸地域との関連性について考えてみた。要約すると、①弥生時代後期末になると、東部瀬戸内系の土器が当地域の集落から出土し始める（特に東の地域）、②古墳時代初頭にもそれが引き継がれるが、宮ノ上遺跡のように美作中枢の周辺地域では吉備型甕など吉備南部系の土器が入り込む、③こうした土器のあり方から、点在する集落が吉井川・吉野川水系によって繋がる、という3点である。

吉井川流域の集落については、岡山県中山間部の遺跡が必ずしも明らかでないため、南北の繋がりを連続して検討することは困難である。しかし、吉井川水系の交通路を確保さえすれば、美作地域は、峠を挟みながら小さな谷底平野を結ぶ陸路を利用する播磨北部を経由することなく、短時間で直接瀬戸内海へ出入りでき、多量の物資等の輸送が可能になることは明白である。それに伴って、中継基地のような集落が川沿いに点在しながら営まれている可能性は十分に考えられよう。

次に、古墳時代初頭と考えられる古墳を取り上げてみたい<sup>(26)</sup>。美作東部で、古く位置付けられている前方後円（方）墳には、日上天王山古墳（墳長56.9m）、美和山1号墳（墳長80m）、植月寺山古墳（前方後方墳、墳長91.5m）、諏訪神社裏古墳（前方後方墳、墳長約51.4m）、郷観音山古墳（墳長約43m）がある。古墳の分布を見ると、吉井川本流と支流との合流地点に前方後円墳が築造され、周辺や外部へつながる地域に前方後方墳や若干小規模な前方後円墳が築造されていることがわかる。日上天王山古墳は中でも最たる例で、東西南北すべての交通路の結節点に配置されており、これ以上は無い優れた立地と言える。この古墳と関連する可能性の高い集落が、今回ここで取り上げた各遺跡で



第179図 美作東部の前方後円(方)墳分布(古墳時代初頭)

あると考えられる。つまり、日上天王山古墳は、東部瀬戸内系土器と山陰系土器が交錯する地域を背景として、吉井川経由でこの地域と瀬戸内沿岸を結ぶ河川交通の出入り口に位置しているわけである。そして、吉井川下流には浦間茶白山古墳などが築造されていることも深く関係していると思われる。日上天王山古墳に続くといわれる美和山1号墳は、山陰側から来ると美作中枢部への入り口にあたり、吉井川と皿川・久米川の合流点近くに配置されている。特に皿川は、遡ると旭川水系地域へ向かうことも可能で、吉井川を使わない備前南部から山陰への交通路も存在することがわかる。諏訪神社裏古墳はそのような意味で築造されていると思われる。

これらに遅れて、美作中枢部の東に位置する地域でも、岡高塚古墳(前方後方墳、墳長50.5m)や楯原寺山古墳(前方後方墳、墳長46m)が築造される。これは、宮ノ上遺跡で見られたような、周辺地域での吉備型甕の出現という新たな事象に対応していると考えられる。おそらく、美作中枢を介さない、吉井川から分岐する吉野川～梶並川～滝川の河川交通の掌握に関わる集団関係の動態を示唆するもので、岡高塚古墳の立地や埋葬施設の構造などはきわめて象徴的であると考えられる。

周辺地域や遠隔地と関わる土器の動きや影響は、何らかの形で行われた人や物資の動きを反映していると考えられる。しかし、その実像を明らかにすることは非常に困難な作業であり、さまざまな類型を想定し、それぞれについて検証されなければならない。ここでは、遺跡に表れた日常生活の土器の動きや影響が、頻繁に繰り返された集団の往来や、それに伴う集団の滞在・移住、つまりは経路基地としての集落形成の結果であると仮定しておきたい。当然、この背景には物資等の輸送にまつわる集団間の経済的関係や、それをめぐる政治的関係が存在すると考えられる。

瀬戸内海沿岸の陸路や航路は、物流や政治・軍事などのあらゆる面において、近畿と北部九州の間を結ぶ最も主要な東西交通路であることは言うまでも無い。一方、日本海沿岸も、重要な東西交通路として古くから機能し、独特な地域圏を形成していた。ところが、弥生時代末から古墳時代初頭にかけて、山陽・近畿北部・北部九州において山陰系土器が分布するようになる。同じ頃、岡山県内では、東部瀬戸内系の土器が大きな河川を北へ遡上するような分布を示している。おそらく、従来の東西の物資の流れに加えて、山陰と山陽という南北の物流が新たに大規模あるいは組織的、恒常的に行われ

た可能性を認めてもよいと思われる。その要となったのが、ひとつには瀬戸内海との分岐点となる吉井川下流域であろう。このような交通路の確保がどのように行われ、またそれを行いだたのがどんな主体であったのかについては、初期の前方後円墳築造前後という時代性を考えると大変興味深く、今後さまざまな観点から検討する必要がある<sup>(27)</sup>。(柴田)

## 註

- (1) 中山俊紀ほか「大田十二社遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第10集 津山市教育委員会 1981
- (2) 柳瀬昭彦ほか「川入 上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977
- (3) 大田十二社遺跡の袋状貯蔵穴E55と袋状貯蔵穴E29は4式の基礎資料であるが、E55の甕などの口縁部は直立に近く、厚いものや上半が特に外反するが短いものが多く、E29は全体に外傾し、長くのびるものが多い。高杯についても時期差が認められるようである。このような点から、今回は敢えて大田十二社4式を、E55を基礎とする4a式とE29の4b式に分けた。また、5式とされるE22についてもE30・60などよりもE29に近いと思われ、4b式と考えた。
- (4) 壺や甕が中心となるが、器形や外面にタタキが認められるものについて、播磨や讃岐などの播磨灘沿岸の土器の特徴とし、ここでは東部瀬戸内系土器とした。今後、播磨南部や山間部の播磨北部、讃岐などの区別を明確にする必要がある。
- (5) 松井潔「東の土器、南の土器—山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態—」『古代吉備』第19集 1997
- (6) 高橋護「弥生時代終末期の土器編年」『研究報告9』岡山県立博物館 1988  
高橋護「土師器の編年—中国・四国」『古墳時代の研究6』 1991
- (7) 松下勝「播磨・長越遺跡—昭和49・50年度調査報告書—」『兵庫県文化財調査報告書』第12冊 兵庫県教育委員会 1978
- (8) 大久保徹也ほか『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡—第2分冊—』香川県教育委員会 (財)香川県埋蔵文化財調査センター 本州四国連絡橋公団 1990
- (9) 湊哲夫「一貫東遺跡—津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告9—」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第43集 津山市教育委員会 1992
- (10) 「神戸市西区 玉津田中遺跡—第6分冊—」『兵庫県文化財調査報告』第135-6冊 兵庫県教育委員会 1996  
甲斐昭光ほか「赤穂市周世入相遺跡」『兵庫県文化財調査報告』第70冊 兵庫県教育委員会 1990  
種定淳介ほか「七日市遺跡(I)—第2分冊—(弥生・古墳時代遺跡の調査)」『兵庫県文化財調査報告』第72-2冊 兵庫県教育委員会 1990
- (11) 『丹波・山阪本遺跡』西紀丹南町教育委員会 1981
- (12) 松下勝ほか「筒江遺跡群I—和田山工業団地建設に伴う発掘調査報告書—」『兵庫県文化財調査報告』第31冊 兵庫県教育委員会 1985
- (13) 浅倉秀昭ほか「小中遺跡 白途古墳群 小中古墳群 湯ヶ谷古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』117 岡山県教育委員会 1997
- (14) 中野雅美ほか『弥平治・能部遺跡』  
広域農道美作台地地区勝央町地内埋蔵文化財発掘調査委員会 1983
- (15) 下澤公明ほか「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7 岡山県教育委員会 1975
- (16) 下澤公明ほか「中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査4」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』7 岡



山県教育委員会 1975

- (17) 安川豊史「上部遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第30集 津山市教育委員会 1990
- (18) 中山俊紀ほか「京免・竹ノ下遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第11集 津山市教育委員会 1982
- (19) 高畑知功ほか「二宮遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』28 岡山県教育委員会 1978
- (20) 江見正己ほか「久田原遺跡 久田原古墳群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』184 岡山県教育委員会 2004
- (21) 中山俊紀「津山の弥生土器4」『年報 津山弥生の里第7号』津山弥生の里文化財センター 2000
- (22) タタキが認められる甕などは播磨系土器とされ、播磨北西部を経由して美作東部に入り込む考え方もある。しかし、播磨だけでなく四国の甕の系譜も、備前南東部の吉井川から北上した可能性もあると思われ、特徴が乏しい場合は注意が必要である。なお、陸路の多い播磨北西部経路（後の出雲街道）は有用ではあるが、舟運を中心に考えると主要道としては不向きであり、主要道として確立するのは、馬を利用する交通手段の普及に関係すると想定している。
- (23) 備前中部から美作西部では真庭市（旧北房町）桃山遺跡・谷尻遺跡、真庭市（旧湯原町）ヒロダン・小坂向遺跡などがある。前2遺跡では弥生時代末から古墳時代にかけて山陰系や東部瀬戸内系、吉備型甕が多く出土している。後者では山陰系が多く、吉備型甕なども出土しているが、東部瀬戸内色はうかがえない。また、旧落合町や旧久世町の遺跡があまりよくわからないが、東部瀬戸内系の土器はここでは確認されていない。このことから、東部瀬戸内系土器の経路には複数あり、備前南部を北上する場合と、播磨北西部から西進する場合、備前南部から北上する場合などが考えられる。
- (24) 内藤善史ほか「高下遺跡 浅川古墳群ほか 楯原古墳群 根岸古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』123 岡山県教育委員会 1998
- (25) 美作には但馬・丹波系土器なども入っていることが明らかで、播磨北西部経路を否定するものではなく、ここでは吉井川を強調して記述している。
- (26) 古墳の記述については、以下の文献を参照した。  
安川豊史「第7章 美作」『前方後円墳集成 中国四国編』近藤義郎編 1991  
『美作の首長墳』近藤義郎監修 倉林眞砂斗 澤田秀実 編集 2000  
倉林眞砂斗ほか『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集  
津山市教育委員会 日上天王山古墳発掘調査委員会 1997  
『岡山市 浦間茶臼山古墳』近藤義郎・新納泉 編 1991
- (27) 「徐州系」銅鏡の分布や流通とも関連性があるのではないだろうか。日本での上方作系獣帯鏡の分布は、近畿地方集中ではなく、西日本に分散している。また、中小規模の墳墓や古墳から出土することが多いようである。続く魏晋代の規矩鏡が日本海側で多いことも注目される。  
岡村秀典「特別寄稿 浮彫式獣帯鏡と古墳出現期の社会」  
『出雲における古墳の出現を探る—松本古墳群シンポジウムの記録—』出雲考古学研究会 1992  
森下章司「山東・遼東・楽浪・倭をめぐる古代銅鏡の流通」  
『東アジアと『半島空間』—山東半島と遼東半島—』千出稔 宇野隆夫編 2003  
なお、宮ノ上1号墳出土の獣帯鏡は内区がほとんど失われ、銘文の詳細が不明であるが、六像B式上方作系浮彫式獣帯鏡の可能性もある。また、岡山県内で出土している浮彫式獣帯鏡5面のうち、吉井川流域あるいは近辺出土とされるものは4面である。

### 第3節 美作地域の中期古墳の展開と宮ノ上古墳群

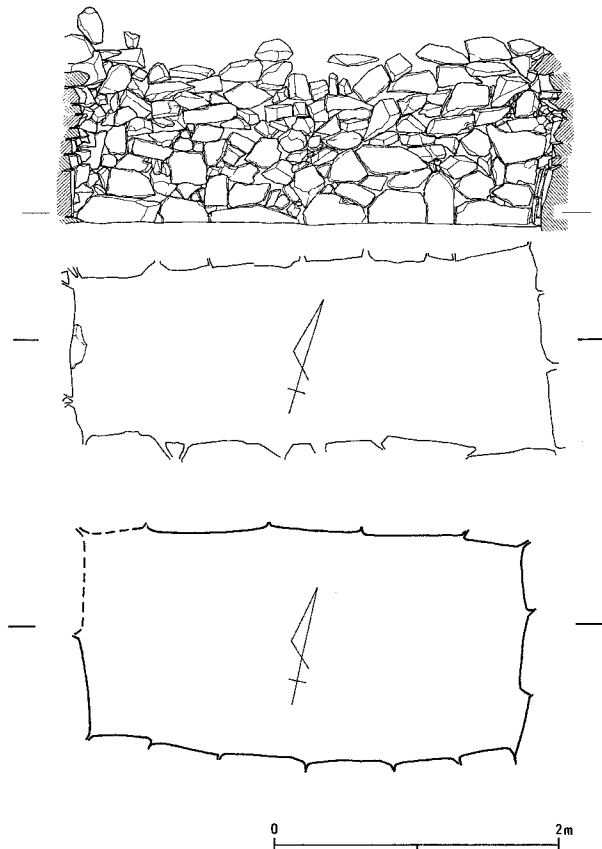
宮ノ上古墳群（以下、古墳群）は、第5章・第4節で、すでに示したように、古墳時代中期（5世紀）の段階に、尾根上に連続して築造された古墳群といえる。本節においては、古墳群のなかで中心的な役割をなす、宮ノ上1号墳（以下、1号墳）に焦点をあて、古墳群と古墳群の築造された段階の美作地域の諸古墳の動向について考えていきたい。

#### 1 宮ノ上1号墳の検討

1号墳に関しては、調査時の段階から基底石に板状の石を立て並べた埋葬施設の構築がみられる点、竪穴式石槨（竪穴式石室）にしては広めの床面を持つ点など、構造上の諸特徴が留意されてきた。1号墳の埋葬施設の床面は、全長3.08m、幅1.42mを測り、縦横の比率が2：1をなす、幅の広い長方形の床面で、その類例は県内でもほとんど知られていない。現在では、備前市の鶴山丸山古墳〔円墳、最大長68m、前期末<sup>(1)</sup>〕や美咲町（旧柵原町）の王子中古墳〔円墳、径40m、前期後半〕が示されるのみである。王子中古墳の埋葬施設は全長3.4m、幅は東壁1.42m・西壁1.14mを測り、床面の縦横の比率は2：1をなしている。幅の広い長方形の床面で<sup>(2)</sup>最下段の基底石には大形の割石を立て並べている（第180図）。基底石の上部には扁平な石材を、やや持ち送り状に積み上げ、埋葬施設を構築している。埋葬施設の主軸方向は、王子中古墳が「N-68°-E」、1号墳が「N-79.5°-E」を示す。上記のように、両古墳の床面の形状（縦横の比率）や埋葬施設の構築法、主軸方向など、両古墳の各要素は実に近似した状況を示している。また、1号墳に関しては石室の東部分の床面で赤色顔料（水銀朱）を検出しており、王子中古墳とおなじ北東方向への埋葬頭位が想定される。

埋葬頭位に関しては、北条芳隆（北条1987）や君島敏行（君島2000）の成果を参考にすると、県内の主要古墳の埋葬頭位は、北から北西方向のあいだを示す一群が存在する一方で、君島が着目するように、北東方向を示す一群が存在している。倉林眞砂斗（倉林1997）は、美作における、埋葬施設の長軸方向は、一般的に東西方向が優位であると指摘している。

ここで、上述した古墳と同じ、滝川・梶並川・吉野川流域の各古墳を見てい



第180図 埋葬施設の床面の比較（1/50）  
（上：王子中古墳、下：宮ノ上1号墳）

く。埋葬頭位に関しては、岡高塚古墳〔前方後方墳、墳長56m、前期後半〕は「N-61.5° - E」、榎原寺山古墳〔前方後方墳、墳長46m、前期中葉〕は「N-42° - E」、落山古墳〔円墳、径約12m、中期前半〕は「N-71° - E」、月の輪古墳〔円墳、径60m、中期前半〕は「N-55° - E」を測り、諸古墳は近似した値を示している（第181図）。

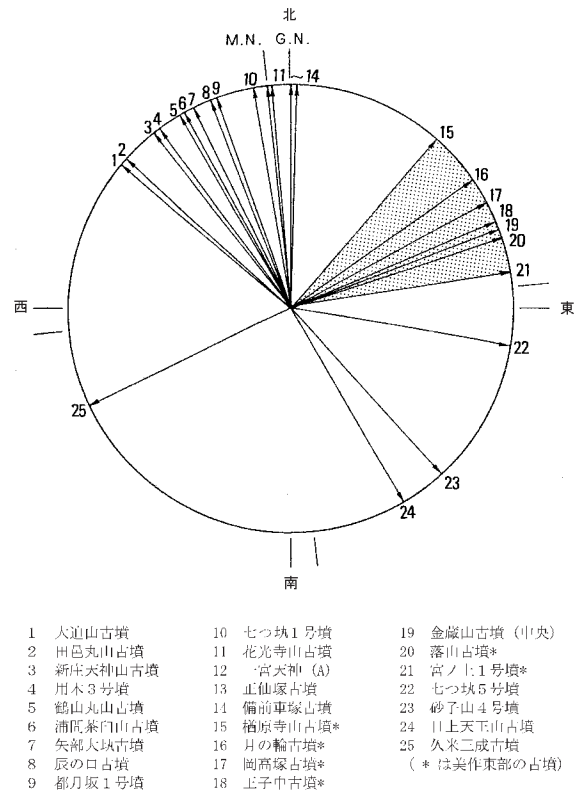
上記の事例は、美作東部の連続する水系のなかで、前期中葉から中期前半（2期～5期）の各古墳が、類似した北東方向の埋葬頭位を指向する興味深い内容といえる。また、埋葬施設内の状況では、榎原寺山古墳、宮ノ上1号墳や落山古墳、月の輪古墳からは、鉄鎌などの鉄製農耕具類や儀礼的要素の強い赤色顔料（水銀朱）が共通して出土するなど、埋葬頭位以外の共通面も多分に見られる。宇垣匡雅（宇垣2001）は、古墳時代の中期初頭から前半期の金蔵山古墳や月の輪古墳などの埋葬頭位が東へ向くのは、前期古墳の、‘北頭位の原則’の効力低下であると、吉備の（前期の小規模古墳などに見られる）一般的な埋葬頭位への回帰であると指摘している。そうした指摘に対しても、上記の内容が示す同一地域内での類似した埋葬頭位や埋葬施設内の共通点は、大きな示唆をふくむ内容といえる。

以上からは、前期中葉から中期前半における、美作東部の諸古墳間の、①埋葬頭位の類似（北東方向への指向）、②埋葬施設内にみられる鉄製農耕具類や赤色顔料などの共通する要素、③宮ノ上1号墳と王子中古墳とが類似した石室の特徴を持つ点、などが示される。

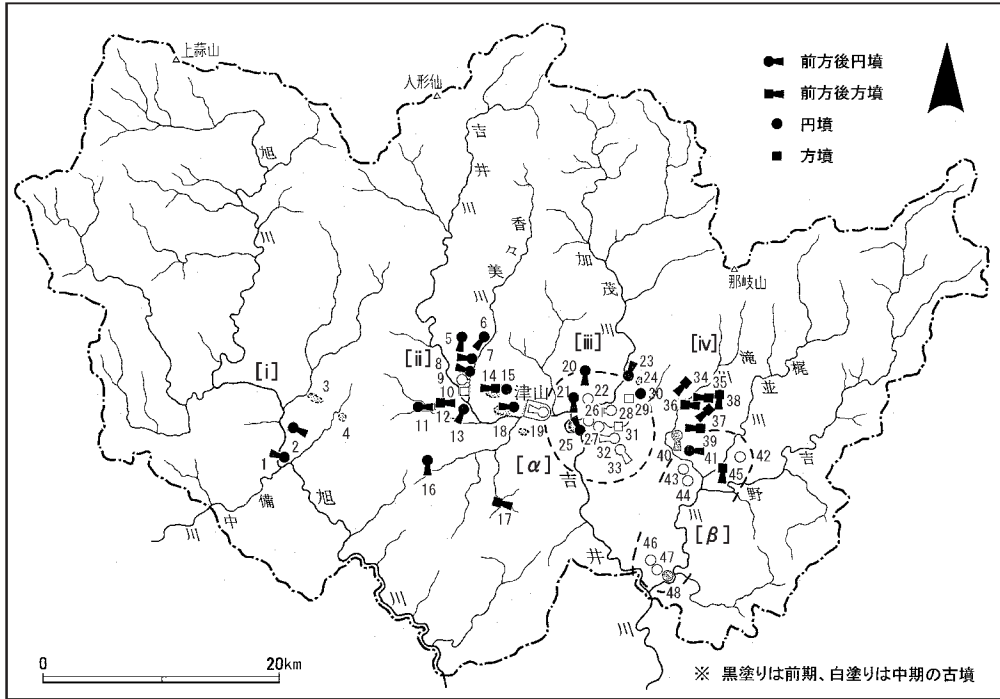
## 2 美作地域の中期古墳の展開

美作地域の古墳研究に関しては、近藤義朗（近藤1991他）や安川豊史（安川1992他）、倉林眞砂斗（倉林1997、2000他）、澤田秀実（澤田2000他）、小郷利幸（小郷1990他）等の業績に負うところが大きい。とりわけ、前期古墳の動向に関しては、先学の研究の蓄積や倉林や澤田などの近年の精力的な研究があり、未調査の古墳も含め、古墳間の関係の解明が進みつつある。その一方で、美作の中期古墳に関しては、古墳そのものの数が少ないことや、調査例も限られるなど、断片的な把握に止まっている現状が示される。以下においては、今回の宮ノ上古墳群の調査成果を踏まえ、概略的ながら美作の中期古墳の展開をおとしてみることにしたい。

美作地域における前期古墳の分布は、美作の西部にあたる、旭川流域〔i〕と、中部にあたる、香々美川流域〔ii〕と加茂川流域〔iii〕（吉井川は両流域に関係）、東部にあたる滝川・梶並川・吉野川流域〔iv〕、に諸古墳のまとまりが見られる（第182図）。上記のまとまりの間には、倉林（倉林1997、2000）が、古墳間の距離や位置関係に着目しているように、5 kmないしは6 km程度の空間的な空白域



第181図 主要古墳の埋葬頭位の比較  
（君島2000に加筆）



西部	旭川流域	1 川東車塚古墳	2 天塚古墳	3 中原古墳群*	4 元定古墳群
中部	香々美川流域 (吉井川流域も含む)	5 土居妙見山古墳	6 赤峪1号墳	7 竹田妙見山古墳	8 古川3号墳
		9 伊勢領大塚古墳*	10 伊勢領方墳*	11 岡5号墳	12 久米三成4号墳
		13 郷観音山古墳	14 田邑丸山2号墳、ほか	15 田邑丸山1号墳	16 奥の前1号墳
		17 諏訪神社裏古墳			
		18 美和山1号墳、ほか	19 十六夜山古墳*	20 正仙塚古墳	21 兼田丸山古墳
加茂川流域 (香々美川との中間部、 吉井川流域も含む)	22 橋本塚1号墳*	23 近長四ツ塚2号墳	24 才の峪古墳群	25 日上天王山古墳、ほか	
	26 飯塚古墳*	27 長畝山2号墳*	28 井口車塚古墳*	29 河面丸山1号墳*	
	30 近長丸山1号墳、ほか	31 西吉田北1号墳*	32 茶山1号墳	33 貫東1号墳	
	34 植月寺山古墳	35 美野中塚古墳	36 西宮神社裏古墳	37 田井高塚古墳	
滝川・梶並川・吉野川流域	38 美野高塚古墳	39 岡高塚古墳	40 琴平山古墳	41 殿塚古墳	
	42 上経塚1・2号墳*	43 宮ノ上1号墳*	44 落山古墳*	45 橋原寺山古墳	
	46 釜の上古墳*	47 月の輪古墳*	48 王子中古墳	(*は中期の古墳)	

第182図 美作地域の前・中期の主要古墳の分布 (1/600,000)

が認められる。また、西部や中部では前方後円墳が多数をしめる一方で、東部では植月寺山古墳などの前方後方墳の集中が見られるなど、美作の大きな特徴が示される。そうした、美作東部の状況は、前方後方墳に見られる墳形の一致と、その空間的なまとまりを一体的に把握できる好例で、古墳の凝集の要因が、地形に代表される自然的な制約のみならず、人為的な要素（政治的な因果関係など）に基づく可能性を大きく示す内容といえる。

つづく、中期古墳の分布は、西部の旭川流域では目立った中期古墳のまとまりは見られず、美作のおもな中期古墳のまとまりは、中部の香々美川・加茂川流域 [α] (吉井川流域を含む) と、東部の滝川・梶並川・吉野川流域 [β]、に見ることができる。そうした美作地域での中期古墳の状況は、前期までの古墳系列の縮小ないしは断絶が予測され、古墳の築造数はおおむね減少傾向を示し、古墳の規模も総じて縮小傾向にあるといえる。

上記の内容を地域別に示すと、中部の香々美川流域では、前期には、竹田妙見山古墳〔前方後円墳、墳長36m、前期前半〕、赤峪古墳〔前方後円墳、墳長45m、前期前半〕や土居妙見山古墳〔前方後円

墳、全長25m、前期後半]などが見られる一方で、中期には、伊勢領方墳〔方墳、全長21m、前期末～中期初頭〕、伊勢領大塚古墳〔帆立貝形古墳、全長37m、中期前半〕が見られるのみである。

また、香々美川と加茂川の間部や加茂川流域では、前期には、美和山1号墳〔前方後円墳、墳長80m、前期前半〕や日上天王山古墳〔前方後円墳、墳長56.9m、前期後半〕、正仙塚古墳〔前方後円墳、全長56m、前期末〕などの、墳丘長が50mを超える比較的規模の大きな古墳が見られる一方で、中期では、一貫東1号墳〔前方後円墳、墳長30m、中期前半〕や河面丸山1号墳〔方墳、21m、中期前半〕、橋本塚1号墳〔円墳、径30.2m、中期中頃〕、井口車塚古墳〔帆立貝形古墳、墳長35m、中期後半〕、飯塚古墳〔円墳、径35m、中期後半〕など、前期と比較して、規模の縮小が見られる。

東部では、前期の諸古墳に対して<sup>(3)</sup>、中期古墳は、宮ノ上古墳群、落山古墳、上経塚1号墳〔方墳、墳長22m、中期前半〕や南部の月の輪古墳のみで、月の輪古墳をのぞいては、いずれも小規模な古墳といえる。宮ノ上古墳群（1号墳）の被葬者像に関しては、出土遺物や古墳の立地から、美作東部の勝間田盆地一帯を支配した首長層の存在が想定される。それは、王子中古墳との関係ですでに示したように、吉野川流域南部の勢力と関係をもった人物であったとも考えられる。

以上のように、美作の中期古墳の展開は、中部では前期と比較して古墳数の減少や規模の縮小は見られるが、西部や東部と比較してみても、中期古墳の大多数が中部に展開している現状が示される。また、小郷（小郷2003）が加茂川流域の橋本塚1号墳の畿内的要素や、周辺の西吉田1号墳や長畝山2号墳から出土した、鉄器生産に関わる鍛冶具の渡来的な要素に着目し、加茂川流域の重要性を喚起しているように、美作地域における中期古墳の主体は、美作の中部地域とその中核をなす加茂川流域一帯に存在していると見て大過ないといえよう<sup>(4)</sup>。（山崎）

## 註

- (1) 各古墳の編年は、近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社 1991、や各報告書などの年代観によっている。
- (2) 床面の面積は、王子中古墳が約4,82㎡ (3.4×1.42)、宮ノ上1号墳は約4,37㎡ (3.08×1.42)である。
- (3) 美作東部の前期古墳に関しては、第1章「地理的・歴史的環境」などですでに示しているのので、ここでは省略する。
- (4) 以上、雑駁な議論になってしまったが、宮ノ上古墳群の特性やその評価、美作の中期古墳の大まかな様相に関しては不十分なながらも示せたと思う。本文中にも示したように、美作の中期古墳の実態は良くわかっておらず、今後の調査に期待するところが大きい。今後は、今回の調査で得られた知見や反省点を踏まえ、より多角的かつ柔軟な視点で、各古墳間の関係の解明に努めていきたいと思う。

## 【引用・参考文献】

- 安川豊史「美作」近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編 山川出版社 1991  
 宇垣匡雅「吉備南部における古墳時代前半期小墳の埋葬頭位」『古代吉備』第23集 2001  
 小郷利幸「橋本塚古墳群をめぐる諸問題」『橋本塚古墳群』津山市教育委員会 2003  
 近藤義郎監修・倉林真砂斗・澤田秀実 編『美作の首長墳』吉備人出版 2000  
 倉林真砂斗「美作地方における政治勢力と諸関係」『日上天王山古墳』津山市教育委員会他 1997  
 葛原克人・古瀬清秀・乗岡実・行田裕美編『吉備の古墳』上・下 吉備人出版 2000  
 君島敏行「岡高塚古墳の堅穴式石槨をめぐる諸問題」近藤義郎監修『美作の首長墳』吉備人出版 2000  
 北条芳隆「墳丘と方位からみた七つ塚1号墳の位置」『七つ塚古墳群』七つ塚古墳群発掘調査団 1987  
 新納泉・松木武彦『吉備地域における『雄略朝』期』の考古学的研究』岡山大学文学部 2001  
 広瀬和雄・岸本道昭・宇垣匡雅・大久保徹也・中井正幸・藤沢敦『古墳時代の政治構造』青木書店 2004  
 ※紙面の制約もあり、主要文献のみを記載した。また、第1章などと重複するものは割愛してある。了承願いたい。

# 付載1 宮ノ上遺跡出土土器・埴輪の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所 白石 純

## 1. 分析の目的

宮ノ上遺跡出土の弥生時代終末から古墳時代初頭の土器および宮ノ上2号墳周辺出土の埴輪について自然科学的な胎土分析を実施し、以下のことについて検討した。

(1) 宮ノ上遺跡出土土器で弥生時代終末と古墳時代初頭の土器のあいだで胎土に差異がみられるか。

外面タタキ技法の壺・甕類が遺構・時期別により胎土に違いがあるかどうか。津山市内出土のほぼ同時期の土器と比較し、胎土差がみられるか調べた。

(2) 宮ノ上2号墳周辺から出土している埴輪は、津山市内の古墳出土のものと比較し胎土差があるかどうか検討を行った。

## 2. 分析方法・試料

胎土の分析方法には、二つの方法を採用した。

一つは、蛍光X線分析法で、胎土中の成分(元素)量を調べる方法である。この方法は、分析試料を一部破壊して測定した。以下に試料作製、測定装置、方法、について述べる。

試料の作製方法は、土器表面の汚れを除去し、乾燥(80℃で1時間)したものをタンゲステンカーバイト製の粉砕容器に詰め、試料粉砕機により約200メッシュほどに細かく粉砕し粉末試料にする。この粉末試料を塩化ビニール製のリング(直径約25mm、厚さ約2mm)に詰め、油圧式成形機で約15t圧力を加えコイン状に成形したものを、蛍光X線分析装置の測定試料とした。分析装置はエネルギー分散型卓上型蛍光X線分析計SEA2010L(セイコーインスツルメンツ社製)を使用した。測定条件は、X線照射径:10mm、電流:50~200mA、電圧:50KV・15KV、測定時間:200秒、測定室:真空で測定した。また、各元素の定量値は、地質調査所のJA-1標準試料を用いて検量線を作成し求めた。測定した元素はSi(珪素)、Ti(チタン)、Al(アルミニウム)、Fe(鉄)、Mn(マンガン)、Mg(マグネシウム)、Ca(カルシウム)、Na(ナトリウム)、K(カリウム)、P(リン)、Rb(ルビジウム)、Sr(ストロンチウム)、Zr(ジルコニウム)の13元素である。このうちRb、Sr、Zrの3元素は微量元素であり単位はppmである。

もう一つは、実体顕微鏡を用いた土器表面の砂粒観察である。これは、胎土に含まれている砂粒(岩石・鉱物)の種類、含有量を肉眼観察により判別し、どのような地質基盤の粘土を用いているか調べる方法である。

分析試料は、表1に示した66点の試料で、弥生・土師器64点、埴輪2点である。

## 3. 分析結果

### (1) 蛍光X線分析法

第1図K-Ca散布図は、同じ遺跡出土の弥生時代終末と古墳時代初頭の土器を比較した。その結果、ほとんどの土器がCa量1%以下、K量約1%~2.2%の範囲に分布し、まとまる傾向にあった。ただ、試料番号11(鉢)・13(甕)・23(鉢)・33(甕)・62(鉢)・64(器台)がこの大きなまとまりからやや離れて単独で分布した。

第2図K-Ca散布図は、外面にタタキ技法を施す弥生終末～古墳初頭の土器で胎土に違いがみられるかどうか検討したところ、胎土的にはほぼ一つにまとまり、タタキ以外の土器とも胎土に差異はなかった。

第3図K-Ca散布図は、津山市内の弥生終末～古墳初頭の土器と比較した。その結果、両者ともほぼ重なり胎土的な差異はみられなかった。

第4図K-Ca散布図は、宮ノ上2号周辺出土の埴輪と津山市内の古墳出土の埴輪を比較した。その結果、宮ノ上2号の埴輪は、津山市内のものと胎土が完全に一致しなかったが、類似した胎土であった。

## (2) 実体顕微鏡による砂粒観察法

砂粒観察では、以下の3種類に大きく分類できた。

**ア類** …… 1mm～2mmの石英を含み、少量の長石・黒雲母も含む。また、素地土に0.5mm以下の火山ガラスを含むもの。

試料番号 7・8・9・10・14・17・19・21・22・23・25・26・27・30・31・32・33・37・38・43・45・49・50・51・52・57・58・59・62

**イ類** …… 1mm～2mmの石英を含み、少量の長石・雲母を含むもの。

試料番号 1・3・6・11・12・15・16・18・20・24・28・34・35・36・39・40・41・42・44・46・47・48・53・54・60・61・63・65・66

**ウ類** …… 1mm～2mmの石英を含み、少量の長石・黒雲母・角閃石を含むもの。

試料番号 4・29・55・64

以上のように、ア・イ類の土器が圧倒的に多く、ウ類が少ないことがわかる。なお、記載されていない試料番号は、試料の制約で表面観察ができなかった。

## 4. 考 察

宮ノ上遺跡出土土器の弥生土器、土師器、埴輪を蛍光X線分析法と実体顕微鏡観察法の2つの胎土分析法で分析したところ、以下のことが明確になった。

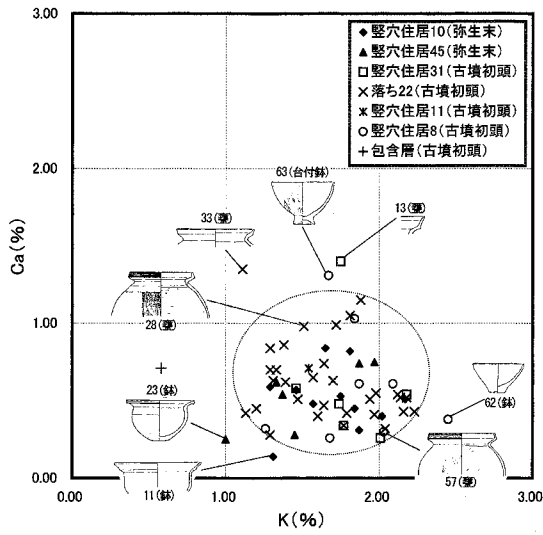
(1) 弥生土器・土師器（外面タタキが施されたものも含む）の分析では、蛍光X線分析法（以下蛍光）でほぼ一つの胎土にまとまり胎土に明確な違いがみられなかった。また、津山市内の土器と比較したところ、ほぼ同じ胎土であった。

(2) 実体顕微鏡観察では、3つの胎土に分類できア・イ類の胎土の土器がほとんどであった。また、ウ類の胎土には、角閃石を少量含み、遺跡および津山周辺の土器胎土とは異なることから、他地域からの搬入品の可能性がある。ただ、蛍光では差異がみられなかった。

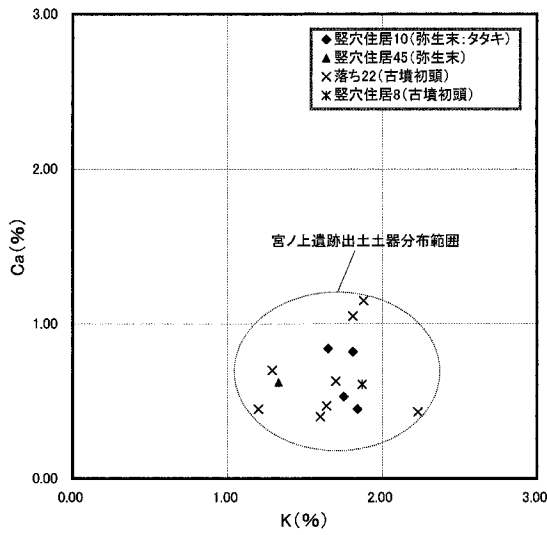
(3) 埴輪に関しても津山市内のものと類似していた。

以上のように今回の弥生・土師器の分析では、ほとんどが類似した胎土で、違いがみられなかった。そして、津山市内の土器とも類似していたことから、在地産の可能性が推定されるが、遺跡周辺の地質と比較検討する必要がある。また、ウ類の土器は他地域からの搬入の可能性もある。外面タタキ技法の土器類は、他の土器と胎土的に差異はみられなかったが、これも他地域（たとえば播磨地域）との比較が必要である。今後の課題としたい。

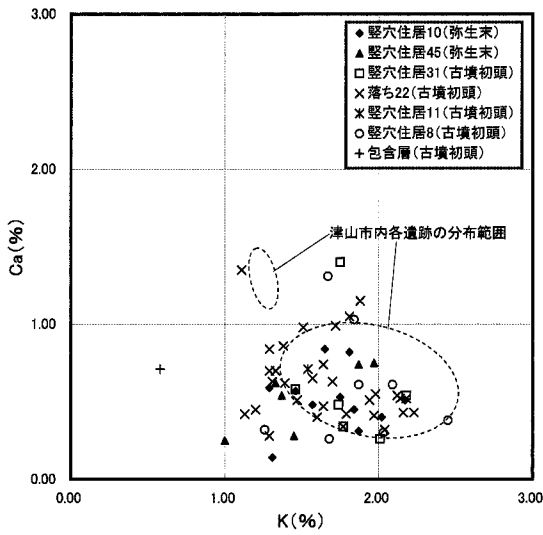
この胎土分析の機会を与えていただいた柴山英樹氏をはじめ、岡山県古代吉備文化財センターの職員の方々にはいろいろお世話になった。記して感謝致します。



第1図 弥生終末と古墳初頭土器の比較

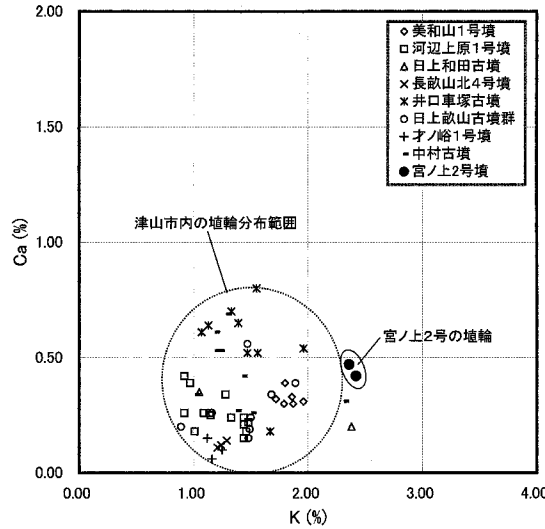


第2図 各遺構別出土の外面タタキ技法土器の比較



第3図 宮ノ上遺跡と津山市内の遺跡との比較





第4図 宮ノ上2号墳と美作地域出土埴輪の比較

第1表 宮ノ上遺跡ほか胎土分析試料一覧表(%) ただし、Rb・Sr・Zrはppm

番号	掲載番号	記載遺構	種類	器種	外面調査	内面調査	時期	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr	
1	33	竪穴住居16	弥生	甕		ケズリ	弥生末	65.41	1.10	19.66	7.18	0.08	1.47	0.51	1.74	2.17	0.45	181	115	434
2	34	竪穴住居16	弥生	甕			弥生末	66.93	1.01	21.36	3.92	0.04	1.62	0.40	2.53	2.02	0.06	199	84	195
3	38	竪穴住居16	弥生	甕	タタキ	ハケメ	弥生末	70.48	0.94	17.58	4.43	0.04	1.46	0.53	2.37	1.75	0.22	186	148	382
4	36	竪穴住居16	弥生	甕			弥生末	65.93	1.05	20.71	5.06	0.06	1.56	0.59	2.66	1.29	0.27	197	188	381
5	40	竪穴住居16	弥生	甕	タタキ	ナデ	弥生末	67.68	1.16	20.21	4.43	0.08	1.52	0.84	2.14	1.65	0.14	198	176	310
6	41	竪穴住居16	弥生	甕	タタキ・ハケメ		弥生末	67.39	1.27	19.49	5.46	0.05	1.53	0.82	2.03	1.81	0.03	193	134	386
8	42	竪穴住居16	弥生	甕	タタキ		弥生末	69.50	1.15	17.91	5.31	0.05	1.51	0.45	1.91	1.84	0.21	234	101	403
8	43	竪穴住居16	弥生	高杯			弥生末	66.11	0.95	19.92	6.31	0.05	1.59	0.31	2.54	1.87	0.17	167	84	430
9	44	竪穴住居16	弥生	高杯			弥生末	67.14	1.01	20.21	4.91	0.07	1.42	0.57	2.29	1.46	0.75	177	166	377
10	45	竪穴住居16	弥生	高杯			弥生末	65.78	1.01	20.21	6.68	0.07	1.43	0.48	2.01	1.57	0.60	137	134	398
11	50	竪穴住居16	弥生	鉢			弥生末	63.88	1.30	21.16	8.29	0.07	1.47	0.14	1.90	1.31	0.31	146	54	505
12	60	竪穴住居20	土師器	甕			古墳初頭	67.64	1.20	20.16	3.70	0.03	1.50	0.54	2.48	2.18	0.37	211	137	341
13	63	竪穴住居20	土師器	甕			古墳初頭	65.23	0.99	21.12	5.17	0.06	1.39	1.40	2.08	1.75	0.60	212	402	392
14	64	竪穴住居20	土師器	甕			古墳初頭	68.57	1.07	19.88	4.01	0.04	1.54	0.48	2.07	1.71	0.38	159	162	370
15	71	竪穴住居19	土師器	高杯			古墳初頭	70.50	1.06	18.99	2.59	0.04	1.46	0.26	2.55	2.01	0.38	174	76	412
16	68	竪穴住居20	土師器	高杯			古墳初頭	68.44	1.06	18.85	5.16	0.06	1.54	0.31	2.42	1.77	0.23	186	101	406
17	76	竪穴住居19	土師器	器台			古墳初頭	67.13	1.04	19.78	5.50	0.07	1.40	0.58	2.37	1.46	0.41	201	170	333
18	79	竪穴住居21	弥生	甕		ケズリ	弥生末	68.59	1.18	17.16	5.40	0.06	1.49	0.74	2.37	1.87	0.93	175	162	417
19	78	竪穴住居21	弥生	甕	タタキ	ナデ	弥生末	65.50	1.00	21.36	5.83	0.04	1.64	0.62	2.37	1.33	0.14	210	190	347
20	80	竪穴住居21	弥生	甕	ハケメ・ミガキ	ハケメ	弥生末	68.81	1.27	16.41	5.37	0.07	1.55	0.75	2.76	1.97	0.86	166	168	514
21	81	竪穴住居21	弥生	高杯			弥生末	67.18	1.19	18.11	7.30	0.06	1.50	0.28	2.12	1.45	0.68	131	81	455
22	82	竪穴住居21	弥生	高杯			弥生末	65.67	0.97	20.65	6.50	0.05	1.56	0.54	2.24	1.37	0.29	179	144	355
23	83	竪穴住居21	弥生	鉢	ミガキ		弥生末	64.91	1.11	20.18	8.03	0.09	1.56	0.25	2.63	1.00	0.07	95	100	478
24	85	竪穴住居21上層	土師器	甕			古墳初頭	66.49	1.11	18.61	7.57	0.08	1.45	0.32	1.77	2.04	0.37	220	104	487
25	89	竪穴住居21上層	土師器	甕	ハケメ	ハケメ	古墳初頭	70.55	1.06	18.21	4.84	0.06	1.48	0.28	1.94	1.29	0.16	158	93	434
26	87	竪穴住居21上層	土師器	甕	タタキ		古墳初頭	64.72	1.28	20.34	7.57	0.08	1.52	0.40	1.92	1.60	0.32	145	106	461
27	91	竪穴住居21上層	土師器	甕	タタキ	ナデ	古墳初頭	66.04	1.05	20.18	6.05	0.07	1.38	0.70	2.72	1.29	0.20	214	181	373
28	92	竪穴住居21上層	土師器	甕	ハケメ	ケズリ	古墳初頭	62.43	1.28	19.96	9.50	0.12	1.52	0.98	2.30	1.51	0.14	168	136	338
29	94	竪穴住居21上層	土師器	甕			古墳初頭	67.51	1.04	19.98	4.39	0.05	1.50	0.51	2.65	1.94	0.23	191	132	342
30	95	竪穴住居21上層	土師器	甕			古墳初頭	68.05	1.13	18.76	3.92	0.04	1.61	0.54	3.27	2.12	0.32	211	152	325
31	96	竪穴住居21上層	土師器	甕		ケズリ	古墳初頭	68.72	1.21	19.02	4.67	0.05	1.55	0.65	2.14	1.57	0.23	153	166	372
32	97	竪穴住居21上層	土師器	甕		ケズリ	古墳初頭	65.09	1.12	21.69	6.76	0.08	1.53	0.42	1.96	1.13	0.08	129	125	431
33	98	竪穴住居21上層	土師器	甕			古墳初頭	65.70	0.81	17.83	5.20	0.05	2.02	1.35	5.59	1.11	0.18	101	162	331
34	101	竪穴住居21上層	土師器	甕	ハケメ	ケズリ	古墳初頭	67.16	0.98	20.03	5.86	0.08	1.43	0.63	2.08	1.31	0.22	198	171	339
35	102	竪穴住居21上層	土師器	甕	タタキ		古墳初頭	65.06	1.15	19.95	6.10	0.05	1.59	0.43	2.71	2.23	0.58	188	86	465
36	104	竪穴住居21上層	土師器	甕	タタキ・ハケメ	ケズリ	古墳初頭	63.95	1.06	20.53	6.85	0.07	1.52	1.05	2.59	1.81	0.39	221	173	360
37	105	竪穴住居21上層	土師器	甕	タタキ	ケズリ	古墳初頭	68.85	1.13	18.32	5.26	0.06	1.51	0.47	2.16	1.64	0.40	227	111	391
38	110	竪穴住居21上層	土師器	甕	ハケメ	ケズリ	古墳初頭	66.65	1.05	19.41	6.17	0.10	1.56	0.70	2.45	1.33	0.39	204	197	336
39	111	竪穴住居21上層	土師器	甕	ミガキ	ケズリ	古墳初頭	69.40	1.23	18.56	5.04	0.06	1.31	0.34	1.61	1.77	0.42	221	113	465
40	107	竪穴住居21上層	土師器	甕	タタキ・ハケメ	ケズリ	古墳初頭	64.78	1.17	19.78	7.15	0.08	1.43	1.35	2.03	1.88	0.37	232	199	311
41	109	竪穴住居21上層	土師器	甕	タタキ	ハケメ	古墳初頭	73.99	1.26	13.30	4.05	0.05	1.28	0.45	1.68	1.20	0.59	113	127	427
42	113	竪穴住居21上層	土師器	甕			古墳初頭	63.60	1.12	17.85	8.38	0.08	1.50	0.42	2.72	1.79	0.36	170	97	410
43	114	竪穴住居21上層	土師器	高杯			古墳初頭	63.84	1.05	19.08	7.37	0.08	1.48	0.51	2.03	1.47	0.92	186	138	380
44	116	竪穴住居21上層	土師器	高杯			古墳初頭	63.15	1.18	20.26	6.37	0.07	1.33	0.55	2.08	1.98	0.41	204	101	470
45	119	竪穴住居21上層	土師器	高杯			古墳初頭	67.39	0.92	20.33	4.11	0.04	1.54	0.41	2.61	1.97	0.43	169	126	323
46	120	竪穴住居21上層	土師器	高杯			古墳初頭	72.88	1.07	16.84	2.88	0.03	1.32	0.74	2.11	1.64	0.35	149	160	379
47	124	竪穴住居21上層	土師器	高杯			古墳初頭	63.92	1.16	20.20	7.17	0.08	1.48	0.99	2.59	1.72	0.48	158	169	382
48	126	竪穴住居21上層	土師器	高杯			古墳初頭	65.61	1.11	19.21	5.99	0.06	1.47	0.45	2.35	2.16	0.27	221	96	151
49	130	竪穴住居21上層	土師器	鉢		ハケメ	古墳初頭	65.88	0.95	19.44	6.39	0.06	1.43	0.84	2.08	1.29	0.46	133	245	322
50	135	竪穴住居21上層	土師器	有孔鉢	タタキ	ハケメ	古墳初頭	68.76	0.91	18.87	1.58	0.05	1.63	0.63	2.13	1.70	0.31	260	121	323
51	138	竪穴住居21上層	土師器	器台			古墳初頭	62.34	1.00	21.02	6.14	0.08	1.57	0.86	1.83	1.38	0.29	253	188	332
52	139	竪穴住居21上層	土師器	器台			古墳初頭	66.85	0.99	19.59	5.95	0.08	1.39	0.62	2.36	1.39	0.53	191	160	361
53	142	竪穴住居21上層	土師器	器形器台			古墳初頭	71.22	0.99	17.14	2.97	0.03	1.54	0.52	2.63	2.18	0.53	183	123	354
54	143	竪穴住居21上層	土師器	器形器台			古墳初頭	71.41	0.96	17.59	2.96	0.03	1.27	0.52	2.07	2.11	0.58	182	126	361
55	146	竪穴住居22	土師器	鉢	ハケメ	ケズリ	古墳初頭	70.47	1.00	17.81	4.12	0.05	1.42	0.71	1.95	1.54	0.73	178	185	379
56	149	竪穴住居22	土師器	甕		ケズリ	古墳初頭	65.09	1.27	21.22	5.47	0.06	1.47	0.61	1.83	2.09	0.65	234	125	372
57	150	竪穴住居22	土師器	甕	ハケメ	ケズリ	古墳初頭	61.95	1.29	21.68	7.67	0.07	1.72	0.39	3.10	2.03	0.01	201	73	568
58	152	竪穴住居22	土師器	甕			古墳初頭	64.75	1.23	19.51	6.29	0.09	1.56	1.03	2.51	1.84	1.02	185	161	331
59	153	竪穴住居23	土師器	甕	タタキ	ハケメ	古墳初頭	68.38	0.99	18.52	5.36	0.06	1.37	0.61	2.02	1.87	0.61	245	170	387
60	154	竪穴住居23	土師器	高杯			古墳初頭	67.59	1.18	19.97	4.95	0.06	1.55	0.26	2.04	1.68	0.56	177	92	434
61	156	竪穴住居23	土師器	高杯			古墳初頭	64.61	1.14	20.94	6.39	0.05	1.52	0.32	2.99	1.26	0.65	198	133	382
62	157	竪穴住居23	土師器	鉢			古墳初頭	64.14	1.02	19.29	7.22	0.07	1.53	0.38	2.84	2.45	0.74	237	100	421
63	158	竪穴住居23	土師器	付付鉢			古墳初頭	65.53	1.08	19.31	6.13	0.08	1.60	1.31	2.55	1.67	0.56	186	170	349
64	286	その他	土師器	器台			古墳初頭	61.07	0.94	23.95	8.16	0.08	1.51	0.71	2.25	0.58	0.57	53	220	362
65	388	宮ノ上2号墳周辺	埴輪	朝顔形埴輪	ハケメ	ハケメ・ナデ	古墳中頭	63.54	1.16	22.41	6.40	0.08	1.31	0.47	2.06	2.36	0.03	280	126	527
66	390	宮ノ上2号墳周辺	埴輪																	

付載 2 国司尾遺跡・坂田遺跡・宮ノ上遺跡の自然科学分析(結果抜粋)

パリノ・サーヴェイ株式会社

表 1. 放射性炭素年代測定結果

遺跡名	掲載遺構名	試料番号		種類	補正年代 B P	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 B P	Code No.
国司尾	竪穴住居 1	No. 20住居	A	クリ	2230±40	-31.07±0.84	2330±40	IAAA-40259
国司尾	竪穴住居 6	No. 5住居	D	クリ	2070±40	-32.33±0.95	2190±30	IAAA-40258
国司尾	段状遺構 3	No. 7住居		コナラ属アカガシ亜属	2180±40	-30.58±0.84	2280±40	IAAA-40260
宮ノ上	竪穴住居22	No. 11住居		コナラ属コナラ亜属コナラ節	1920±40	-30.41±1.07	2010±30	IAAA-40261

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) B P年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

表 2. 暦年較正結果

遺跡名	掲載遺構名	試料	補正年代 (B P)	暦年較正年代 (cal)		相対比	Code No.
				cal BC	cal AD		
国司尾	竪穴住居 1	No. 20住居	2227±37	cal BC 364 - cal BC 349	cal BP 2,314 - 2,299	0.131	IAAA-40259
				cal BC 318 - cal BC 268	cal BP 2,268 - 2,218		
				cal BC 263 - cal BC 228	cal BP 2,213 - 2,178		
				cal BC 221 - cal BC 207	cal BP 2,171 - 2,157		
国司尾	竪穴住居 6	No. 5住居	2065±37	cal BC 152 - cal BC 133	cal BP 2,102 - 2,083	0.136	IAAA-40258
				cal BC 116 - cal BC 40	cal BP 2,066 - 1,990		
				cal BC 27 - cal BC 23	cal BP 1,977 - 1,973		
				cal BC 9 - cal BC 2	cal BP 1,959 - 1,952		
国司尾	段状遺構 3	No. 7住居	2184±42	cal BC 355 - cal BC 289	cal BP 2,305 - 2,239	0.536	IAAA-40260
				cal BC 257 - cal BC 247	cal BP 2,207 - 2,197		
				cal BC 233 - cal BC 174	cal BP 2,183 - 2,124		
宮ノ上	竪穴住居22	No. 11住居	1915±35	cal AD 34 - cal AD 36	cal BP 1,916 - 1,914	0.931	IAAA-40261
				cal AD 58 - cal AD 128	cal BP 1,892 - 1,822		

暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4 (Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer) を使用。計算には表に示した丸める前の値を使用している。付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$  (測定値の68%が入る範囲) を年代値に換算した値。

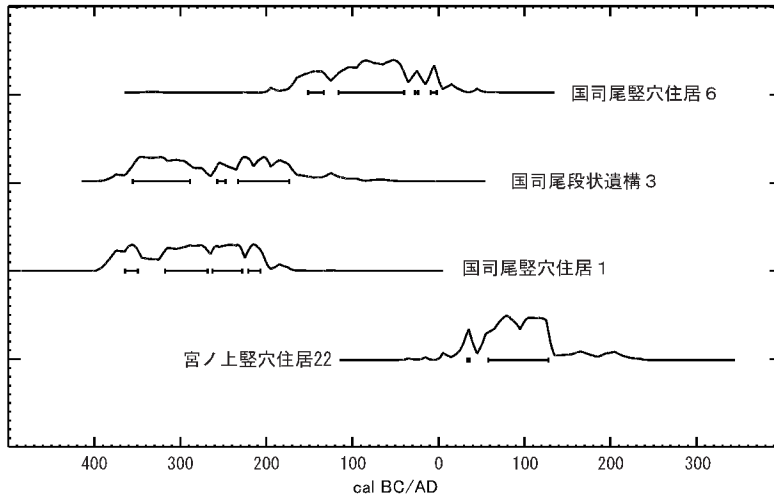


図 1 暦年較正一覧

表 3. 樹種同定結果

遺跡名	掲載遺構名	遺構	時期	取上番号		樹種
				14C用	W用	
国司尾	竪穴住居 1	No. 20住居	弥生時代中期	A	クリ	クリ
				B	クリ	
国司尾	竪穴住居 6	No. 5住居	弥生時代中期	A	サクラ属	サクラ属
				B	サクラ属	
				C	サクラ属	
				D	クリ	クリ
				E	モミ属	
				F	サクラ属	
国司尾	段状遺構 3	No. 7住居	弥生時代中期	14C用	コナラ属アカガシ亜属	コナラ属アカガシ亜属
				W用	コナラ属アカガシ亜属	
宮ノ上	竪穴住居22	No. 11住居	弥生時代末~古墳時代	14C用	コナラ属コナラ亜属コナラ節	コナラ属コナラ亜属コナラ節
				W用	コナラ属コナラ亜属コナラ節	

## 付載3 宮ノ上1号墳出土青銅鏡の分析（抜粋）

財団法人元興寺文化財研究所

### 分析結果

内行花文鏡（掲載番号M18）

鈕破断面からは主に銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）、鉄（Fe）を検出し、他にチタン（Ti）、水銀（Hg）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）を含んでいた（表1）。青銅製の鏡である。

採取試料は金属光沢をもつ粉体の状態である。銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）、ヒ素（As）、アンチモン（Sb）、銀（Ag）を検出した（表2）。赤色部分と、比較のために近傍の鏡表面とを分析した結果、赤色部分では鉄を顕著に検出しており、水銀のピークもややはっきりとしている。

この結果から、この鏡は銅、スズ、鉛を主成分とし、微量成分としてヒ素、アンチモン、銀を含むものとする。表1ではヒ素のピークは鉛と水銀のピークに重なり、確認が困難であったとみられる。鏡表面から水銀が検出されるのは水銀朱（硫化水銀；HgS）の付着による可能性が考えられる。鏡背凹部の赤色は主にベンガラ（酸化第二鉄：Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>）とみられ、水銀朱も共存している。

獣帯鏡（掲載番号M17）

鏡背縁の平滑面からは主に銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）を検出し、他に鉄（Fe）、ニッケル（Ni）、ヒ素（As）、ビスマス（Bi）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）を含んでいた（表3）。青銅製の鏡である。

採取試料は金属光沢をもつ粉体の状態である。銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）、アンチモン（Sb）、銀（Ag）を検出した（表4）。赤色部分と、比較のために近傍の鏡表面とを分析した結果、赤色部分では鉄を顕著に検出しており、水銀のピークもややはっきりとしている。

この結果から、この鏡は銅、スズ、鉛を主成分とし、微量成分としてヒ素、アンチモン、銀、ビスマス、ニッケルを含むものとする。内行花文鏡と同様に、鏡背凹部の赤色は主にベンガラとみられ、水銀朱も共存している。

表1 内行花文鏡鈕破断面のケイ光X線分析結果

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K $\alpha$	308.632	7.86- 8.22
26	Fe	鉄	K $\alpha$	286.506	6.23- 6.57
82	Pb	鉛	L $\beta$	458.537	12.42-12.84
22	Ti	チタン	K $\alpha$	14.337	4.35- 4.66
80	Hg	水銀	L $\beta$	43.360	11.65-12.06
50	Sn	スズ	K $\alpha$	539.045	24.92-25.47
47	Ag	銀	K $\alpha$	26.476	21.84-22.36
51	Sb	アンチモン	K $\alpha$	17.389	25.99-26.55

表2 内行花文鏡採取試料のケイ光X線分析結果

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K $\alpha$	2510.530	7.86- 8.22
82	Pb	鉛	L $\beta$	41.963	12.42-12.84
50	Sn	スズ	K $\alpha$	113.123	24.92-25.47
47	Ag	銀	K $\alpha$	10.959	21.84-22.36
51	Sb	アンチモン	K $\alpha$	7.077	25.99-26.55
33	As	ヒ素	K $\beta$	6.784	11.52-11.93

表3 獣帯鏡背縁表面のケイ光X線分析結果

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K $\alpha$	649.292	7.86- 8.22
82	Pb	鉛	L $\beta$	149.179	12.42-12.84
50	Sn	スズ	K $\alpha$	878.488	24.92-25.47
51	Sb	アンチモン	K $\alpha$	12.400	25.99-26.55
47	Ag	銀	K $\alpha$	11.516	21.84-22.36
33	As	ヒ素	K $\beta$	23.376	11.52-11.93
26	Fe	鉄	K $\alpha$	24.900	6.23- 6.57
28	Ni	ニッケル	K $\alpha$	13.289	7.30- 7.65
83	Bi	ビスマス	L $\beta$	40.470	12.81-13.24

表4 獣帯鏡採取試料のケイ光X線分析結果

Z	元素	元素名	ライン	A (cps)	ROI (keV)
29	Cu	銅	K $\alpha$	2154.314	7.86- 8.22
82	Pb	鉛	L $\beta$	86.572	12.42-12.84
50	Sn	スズ	K $\alpha$	128.186	24.92-25.47
51	Sb	アンチモン	K $\alpha$	7.605	25.99-26.55
47	Ag	銀	K $\alpha$	9.264	21.84-22.36

## 付載4 岡山県宮ノ上古墳から出土した青銅鏡（内行花文鏡、獣帯鏡）の鉛同位体比

別府大学文学部 平尾良光

齋藤美奈子

海洋研究開発機構 谷水雅治

### 1 はじめに

岡山県古代吉備文化財センターから、元興寺文化財研究所を通して、岡山県の宮ノ上古墳から出土した青銅鏡2面（内行花文鏡と獣帯鏡）に関して鉛同位体比測定依頼があった。本調査は当研究室における「古墳時代青銅器の産地推定」という研究の一環として、研究協力する価値が充分にあった。そこで、鉛同位体比法で遺物の材料となった青銅に含まれる鉛の産地推定を行った。

### 2 資料

資料である青銅鏡2面（内行花文鏡と獣帯鏡）は、岡山県勝田郡勝央町にある宮ノ上1号墳から出土した。この付近には弥生時代の遺跡もあり、また宮ノ上1号墳の他、2～4号墳も確認された。宮ノ上古墳群の年代は出土遺物や、埴輪の形式、古墳の形式などから古墳時代中期と推定され、相伴遺物には鉄鎌などがあつた。

内行花文鏡は1号墳の墳丘から流出した土中に破片として検出された。小型の倣製鏡と推定される。獣帯鏡は1号墳竪穴式石室の中から検出された。

これら資料に関する鉛同位体比測定用試料の採取は元興寺文化財研究所で鏡の修復処理の過程で行われた。内行花文鏡からは1点、獣帯鏡からは2点の試料が採取され、測定に供された。

### 3 鉛同位体比法

#### 3-1 鉛同位体比法による青銅材料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した（\*1）。一般的に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が違えばそれぞれの鉱山毎に異なった値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことが今までの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地の違いを示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01%程度、あるいは主成分の一つとして5～20%含まれている。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器（質量分析計）の感度が非常に良いため、1マイクログラムの鉛があれば十分である。また試料は青銅の金属部分でも鍍部分でも、同位体比は変わらないと示されている。しかしながら、鍍の場合には外部からの混入の可能性を否定しきれない場合がある。今回の資料からは金属部分が採取できたので、より安全な試料であると判断できた。また、獣帯鏡からは2点の試料が得られたので、これらも測定値の正確さを判断するよい例となるため、これら2点の試料に関しても測定を試みた。

同位体比測定のために、二重収斂形ICP質量分析計を利用した。

#### 3-2 鉛分離と鉛同位体比測定

金属試料を石英製のビーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解し、試料溶液として保存した。

I C P 質量分析計による測定では、測定機器の安定性のために鉛濃度が「 $0.2 \mu\text{g}$  鉛/1 g」という溶液が必要なので、まず電気分解して鉛を集めた源試料溶液濃度を測定した。その後、源溶液を希釈し、同位体比測定用の溶液を用意した。同位体比測定にはこの $0.2 \mu\text{g}$  鉛/1 g の溶液が2 ml以上必要なので、3~10mlの溶液が得られるように適宜希釈した。利用したI C P 質量分析計は高知大学海洋コア総合研究センターに所属しているサーモエレクトロン社製二重取束型多重検出器型誘導結合プラズマ (I C P) 質量分析計である。なおこの機器の精度や再現性に関する詳細な記載は省略する。実験に先立ち、鉛同位体比を測定するに足るだけの充分安定した状態であることを確認した。また随時、NBS-981標準鉛溶液を測定し、機器の安定性を確かめた。

### 3-3 鉛同位体比の結果と考察

#### (1) 鉛同位体比測定値

測定した鉛同位体比を表1で示した。この値を今までに得られている資料と比較するために鉛同位体比を図1で示した。

縦軸が $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ の値とした図1で示す。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表し、今回の結果をこのなかにプロットした(\*2~6)。日本の弥生時代に相当する頃の東アジア地域において、Aは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると中国華北産の鉛のグループである。Bは中国後漢鏡および三国時代の銅鏡が分布する領域で、華南産の鉛のグループである。Cは現代日本産の鉛鉱石が示す領域である。またDは多鈕細文鏡が分布する領域で、朝鮮半島産鉛のグループと仮定した。図2には縦軸が $^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値、横軸が $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ の値として測定値などをプロットした。この中でA'、B'、C'、D'はそれぞれ中国華北、華南、日本、朝鮮半島産材料領域を意味する。これらの図の中に、2つの鏡から得られた3点を(○と△)で示した。

表1 岡山県宮ノ上古墳から出土した銅鏡の鉛同位体比

	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$
内行花文鏡	2.1455	0.8682	17.967	15.599	38.548
獣帯鏡-1	2.1159	0.8548	18.336	15.674	38.797
獣帯鏡-2	2.1157	0.8547	18.338	15.674	38.800
誤差(1σ)	±0.0006	±0.0003	±0.010	±0.010	±0.030

獣帯鏡からは2箇所の資料を測定した。両資料とも図1と図2で、誤差範囲内で良く一致しており、材料に付け錆や外部からの材料の混入など大きな変化のないことが示された。

#### (2) 結果と考察

表1、図1と図2から理解できることを試料ごとにまとめる。

##### 1) 宮ノ上古墳から出土した内行花文鏡

内行花文鏡の鉛同位体比は図1でも、図2でも華北産材料領域(A, A')と華南産材料領域(B, B')の間に位置した。それ故、この材料は直接的には華北産あるいは華南産であるとは言えない。そこで図3で今までに測定された内行花文鏡の鉛同位体比分布を示した(\*1, 7)。但し、内行花文鏡の中でも日光鏡と昭明鏡は含まれない。その中に宮ノ上古墳から出土した本資料も加えてみた。

この分布は図2でも示される。これら資料の分布から、一般的に見て内行花文鏡は華北および華南産のどちらかの材料で作られていることがわかる。この分布から推測すると、内行花文鏡の製作には華北および華南産材料が利用されており、重圈文鏡その他のいわゆる前漢鏡や、後漢・三国時代に製作された神獸鏡などのように華北産材料のみ、または華南産材料のみで製作されているという特徴的な分布を示していない。宮ノ上古墳出土鏡が両領域の中間に位置したことは、2つの可能性を意味する。一つはこのような材料がどこかにあった。すなわち今までに判っていない鉱山があり、その材料を利用した。もう一つは、華北・華南材料を混合して製作された。この場合、製作場所がどこであるかはわからない。しかし、鏡が倣製鏡であるか、中国鏡であるかどうかは製作地に一つの可能性を与えるであろう。

#### 2) 宮ノ上古墳から出土した獸帯鏡

図1および図2で本銅鏡の鉛同位体比值は華南産材料の領域（BおよびB'）に含まれた。このことは今までに得られている一般的な考え方、すなわち後漢・三国時代の鏡は華南産材料を利用しているという考え方に矛盾しない。その意味では典型的な古墳時代資料と判断できる。

そこで、今までに鉛同位体比を測定した獸帯鏡の分布を図4で示した（\*1, 7）。この分布から判断すると、本資料はこれらの中でも典型的な資料であると判断できる。

## 4 引用文献

- (1) 平尾良光：鉛同位体比の測定と分析『考古資料大観』森田稔・井上洋一編 小学館（東京）p345-368 （2003）
- (2) 馬淵久夫、平尾良光：福岡県出土青銅器の鉛同位体比；考古学雑誌75 385-404 （1990）
- (3) 平尾良光編：古代青銅の流通と鑄造；鶴山堂（1999）
- (4) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究；MUSEUM No.370 4-10（1982a）
- (5) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比から見た銅鐸の原料；考古学雑誌68 42-62（1982b）
- (6) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究（二）；MUSEUM No.382 16-26 （1983）
- (7) 平尾良光：『古墳時代青銅器の鉛同位体比』学術振興会科学研究費成果報告書（2004）

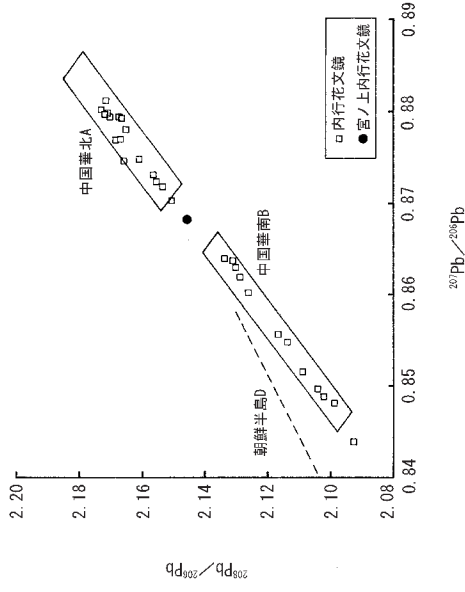


図1 岡山県宮ノ上古墳出土銅鏡の鉛同位体比 ( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ — $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ ) の分布図

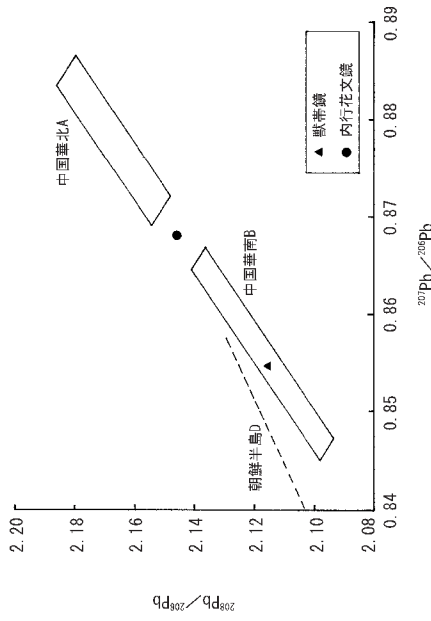


図2 岡山県宮ノ上古墳出土銅鏡の鉛同位体比 ( $^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$ — $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ ) の分布図

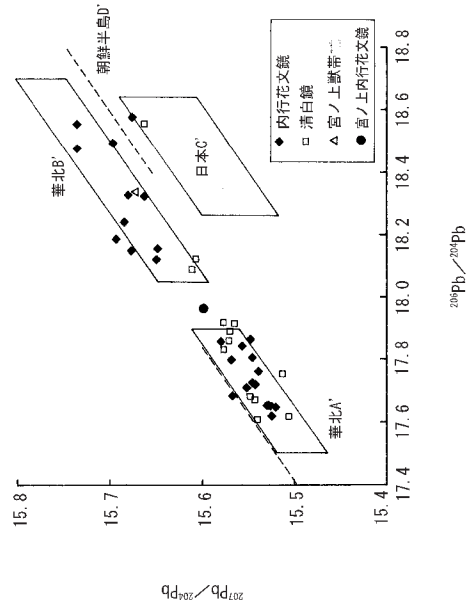


図3 既報告の内行花文鏡の鉛同位体比分布図 ( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ — $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )

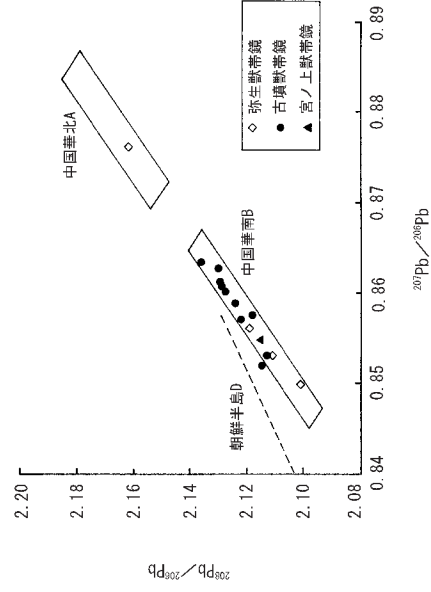


図4 既報告の獣帯鏡の鉛同位体比分布図 ( $^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ — $^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$ )

## 付載5 宮ノ上・坂田遺跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査

九州テクノリサーチ・TACセンター 大澤正己

### 概要

7世紀以降と比定される宮ノ上・坂田遺跡（勝田郡勝央町）から出土した製鉄関連遺物（鉍石、製錬滓、椀形鍛冶滓）を調査して、次の点が明らかになった。

〈1〉宮ノ上遺跡の段状遺構7からは鉍石（磁鉄鉍）と鉍石製錬滓を出土し、段状遺構8には砂鉄製錬滓が存在していた。当遺跡内の段状遺構の被熱床面は箱形製鉄炉の可能性が高い。

〈2〉坂田遺跡からは砂鉄製錬滓と精錬鍛冶滓が検出された。製鉄から鍛冶までの連続作業が想定される。勝央町での鉍石と砂鉄の双方原料の製鉄が畑の平古墳群や土居遺跡で報告したが、ここでも確認された。

### 1. 調査方法

2-1. 供試材 Table 1に示す。

2-2. 調査項目

(1) 肉眼観察 (2) 顕微鏡組織 (3) ビッカース断面硬度 (4) 化学組成分析

### 2. 調査結果

#### (1) R-1 鉄鉍石

平面が不整縦長の五角形をした分割的な磁鉄鉍破片である。各面は多方向からの加撃を受けた破断面で黒色を呈し、脈石を含まず緻密で重量感をもつ66g弱の塊である。このままでは炉内装入には大き過ぎて小割りを要する。Photo 1の①に顕微鏡組織を示す。鉍物組成の大半は淡灰白色部のマグネタイト（Magnetite： $\text{Fe}_3\text{O}_4$ ）で、溶けない程度の加熱を加えて割れやすくする事前処理の焙焼痕跡は不明瞭。右端の黒色部は脈石である。①の中央の方形は硬度測定の前痕である。値は613Hvで、文献硬度値の530～600Hvの上限を僅かに超えるが、磁鉄鉍に同定される。

Table 2に化学組成を示す。鉄分高く脈石成分低めの高品位鉍石である。すなわち、全鉄分（Total Fe）は63.99%、ガラス質成分（ $\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$ ）は8.26%に留まり、鉄に有害な硫黄（S）0.03%、五酸化燐（ $\text{P}_2\text{O}_5$ ）0.09%となる。砂鉄特有成分の二酸化チタン（ $\text{TiO}_2$ ）は0.09%、バナジウム（V）0.02%なども少ない。酸化マンガン（MnO）0.06%、銅（Cu）0.01%なども特別特徴をもつ数値ではなかった。

#### (2) R-2 鉍石炉外流出滓

平面は方形（ $5\text{cm}^2$ ）状に割れた炉外流出滓の破片である。滓の表面は複数堆積して灰褐色を呈し、炉外流出時に急冷されて小皺を寄せる。各側面は破面となり気孔少なく、緻密な滓である。顕微鏡組織をPhoto 1の②に示す。鉍物組成は淡灰色盤状結晶のファイヤライト（Fayalite： $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$ ）と、極く微細な白色結晶のマグネタイトの晶出をみる。断面硬度値は666Hvと文献硬度値の600～700Hvの範疇に納まる。鉍石製錬滓の晶癖である。化学組成をTable 2に示す。鉄分（Total Fe）は35.5%、



ガラス質成分49.65%、随伴微量元素は押並べて少なく、二酸化チタン0.38%、酸化マンガン0.75%、銅 (Cu) 0.01%など鉍石製錬滓の特質が認められる。鉄に有害な硫黄0.03%、五酸化燐0.28%なども低値であった。前述したR-1鉍石の製錬滓としても矛盾のない成分といえる。

### (3) R-3 砂鉄炉外流出滓

平面は不定形で流動状の滓の端部破片である。滓表面は炉外の酸化雰囲気曝されて赤味を帯びた黒褐色を呈する。側面から下面へかけて中型の気孔が多発して凹凸が著しいが全体には緻密な滓である。顕微鏡組織をPhoto 1の③に示す。鉍物組成は淡茶褐色多角形結晶のウルボスピネル (Ulvöspinel:  $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_2$ ) とファイヤライトで構成された砂鉄製錬滓である。硬度値は684Hvとウルボスピネルに同定される。化学組成をTable 2に示す。R-2鉍石製錬滓に比べて二酸化チタン6.86%、バナジウム (V) 0.09%と大きいのが特徴である。

### (4) R-4 砂鉄製錬滓

平面が不整形の炉底塊の破片である。側面は全て破面で、厚みが4.8cmと厚手で189gを測る。上面は平滑で下面に黄褐色の砂粒含みの炉床土を付着する。顕微鏡組織をPhoto 1の④に示す。鉍物組成はウルボスピネルとファイヤライトで構成される砂鉄製錬滓の晶癖を呈する。ウルボスピネル結晶の硬度値は690Hvであった。化学組成はTable 2に示す。全鉄分40.05%、二酸化チタン8.95%、バナジウム0.23%、酸化マンガン0.78%は砂鉄製錬滓の成分系を表わす。

### (5) R-5 椀形鍛冶滓 (精錬鍛冶滓) (掲載番号 坂田遺跡M1)

平面は不整形で、65g弱と小型の椀型滓の破片である。該品は鍛冶炉の炉底に堆積形成された滓。上面は木炭灰や小皺を寄せるが平坦で、下面に砂質炉床土を付着する。破面は光沢質の緻密な重量感を与える滓である。顕微鏡組織をPhoto 1の⑤に示す。鉍物組成はウスタイト (Wüstite:  $\text{FeO}$ ) とウルボスピネル、これにファイヤライトの加わる酸化雰囲気なかで形成された滓の特徴をもつ。ウスタイトの粒内には微細なFe-Ti化合物を晶出しており、不純物を多く含んだ砂鉄系鉄塊の成分調整を行った精錬鍛冶滓の晶癖を表わす。ウルボスピネルの硬度値は677Hv、ウスタイトは硬質の551Hvであった。圧痕写真は紙面の都合から割愛した。化学組成をTable 2に示す。鍛冶滓になると鉄分 (Total Fe) が48.63%と高く、ガラス質成分は24.07%と低減され、二酸化チタンは8.43%、(再チェック必要: 高め) バナジウム0.11%、酸化マンガン0.46%と低下する。精錬鍛冶滓の成分と認定される。

## 3. まとめ

Table 3に調査結果のまとめを示す。宮ノ上遺跡では製鉄原料の磁鉄鉍石と製錬滓が共存し、同じ地点の同様な遺構から砂鉄製錬滓を出土する。更に坂田遺跡では砂鉄製錬滓と後工程に結び付く精錬鍛冶滓が遺存した。勝央町内のエリアは7世紀で既に鉍石と砂鉄を原料とした鉄生産の最先端技術を有した集団の存在を示唆する土地柄と認識できた。

Table 1 供試材の履歴と調査項目

符号	一断名	出土位置	遺物名称	推定年代	評価値		メタル度	調査項目						備考		
					大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース硬度	X-線分析	EDXA	化学分析		耐火度	カロリー
R-1	宮ノ上	段状遺構 7	鉄鉱石	7c	なし	65.80	なし	○	○	○						
R-2			炉外流出滓			55.28	なし	○	○							
R-3	坂田	段状遺構 8	炉外流出滓	古代～中世	なし	30.38	なし	○	○	○						
R-4			～鉄滓(砂底視)			188.75	なし	○	○							
R-5			桶形～活滓		なし	64.58	なし	○	○	○						掲載番号M1

Table 2 供試材の組成

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全成分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化 第1 <sup>次</sup> (FeO)	酸化 第2 <sup>次</sup> (Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	二酸化 珪素 (SiO <sub>2</sub> )	酸化アル ミニウム (Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	酸化カル シウム (CaO)	酸化マク ネシウム (MgO)	酸化 カリウム (K <sub>2</sub> O)	酸化ナト リウム (Na <sub>2</sub> O)	酸化マン ガン (MnO)	二酸化 チタン (TiO <sub>2</sub> )	酸化 クロム (Cr <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )	硫黄 (S)	五酸化磷 (P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> )	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分 Total Fe	造滓成分 Total Fe	TIO <sub>2</sub> Total Fe
R-1	宮ノ上	段状遺構 7	鉄鉱石	7c	63.99	0.01	23.28	65.60	5.78	1.26	0.52	0.48	0.06	0.16	0.06	0.09	0.03	0.03	0.09	0.13	0.02	0.01	8.26	0.12908	0.00141
R-2			炉外流出滓		35.33	<0.01	42.39	3.69	31.24	6.03	8.33	2.46	1.29	0.30	0.75	0.38	<0.01	0.03	0.08	0.08	0.09	<0.01	0.01	49.65	1.39741
R-3	坂田	段状遺構 8	炉外流出滓	古代～中世	38.60	0.05	45.05	5.05	25.88	5.51	1.06	1.02	0.29	0.74	0.02	0.28	0.09	0.02	0.28	0.09	<0.01	<0.01	38.99	1.00777	0.17772
R-4			裂線遺 (炉底視)		40.05	0.01	45.41	6.78	23.58	6.02	2.79	1.43	0.93	0.29	0.78	8.95	<0.01	0.02	0.36	0.08	0.08	0.23	<0.01	35.04	0.87491
R-5			桶形～活滓		48.63	0.07	52.31	11.29	17.54	4.10	1.32	0.66	0.32	0.13	0.46	8.43	0.03	0.02	0.25	0.07	0.11	0.01	21.07	0.49196	0.17335

Table 3 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成 (%)						所見		
						Total Fe	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	造滓性 成分	TiO <sub>2</sub>	V	MnO		ガラス質 成分	Cu
R-1	宮ノ上	段状遺構 7	鉄鉱石	7c	磁鉄鉱・マクネサイト組織	63.99	65.60	1.60	0.09	0.02	0.06	8.26	0.01	高品位磁鉄
R-2			炉外流出滓			35.33	3.69	10.79	<0.01	0.75	49.65	0.01	鉄石～鉄滓	
R-3	坂田	段状遺構 8	炉外流出滓	古代～中世	ウルボスピネル+フアイヤイト	38.60	5.05	6.29	6.86	0.09	0.74	38.99	<0.01	砂～鉄滓
R-4			裂線遺(炉底視)			40.05	6.78	4.22	8.95	0.23	35.04	<0.01	砂鉄質鉄滓	
R-5			桶形～活滓		ウルボスピネル + ウルボスピネル	48.63	11.29	1.98	8.43	0.11	0.46	24.07	0.01	不純物除去・精錬鉄活滓

Photo 1




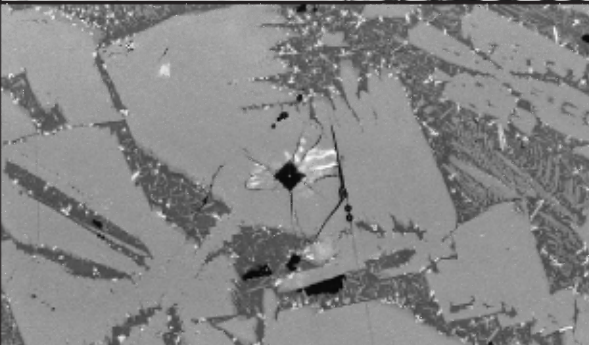

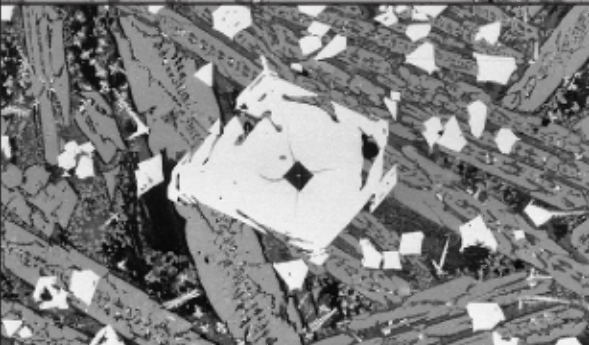

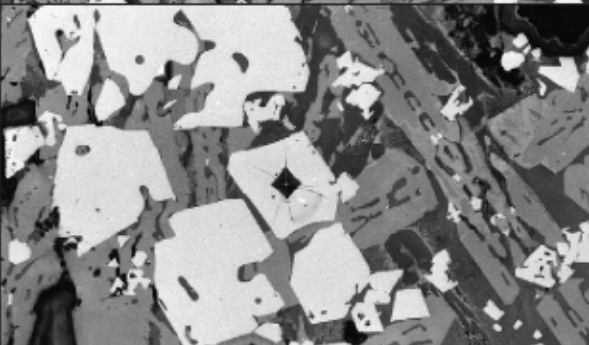

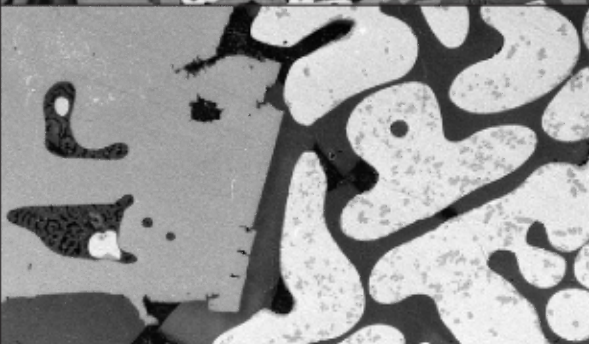
<p>R-1 鉄鉱石</p> <p>①×200 磁鉄鉱 硬度圧痕：613Hv</p>			<p>①</p>
<p>R-2 鉄石製錬滓</p> <p>②×200 ファイヤライト 硬度圧痕：666Hv</p>			<p>②</p>
<p>R-3 砂鉄製錬滓</p> <p>③×200 ウルボスピネル+ ファイヤライト 硬度圧痕 684Hv：ウルボスピネル</p>			<p>③</p>
<p>R-4 砂鉄製錬滓</p> <p>④×200 ウルボスピネル+ ファイヤライト 硬度圧痕 690Hv：ウルボスピネル</p>			<p>④</p>
<p>R-5 精錬鍛冶滓</p> <p>⑤×400 淡茶褐色多角形結晶 ウルボスピネル：677Hv  白色粒状結晶 ウスタイト：551Hv (圧痕写真割愛)</p>			<p>⑤</p>

表3 竪穴住居一覧表

国司尾遺跡

掲載遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	主軸 N-E・W	床面積 (㎡)	柱穴	中央穴 (cm)			中央土 焼土	焼上面	高床部	屋内 外溝	カマ下 位置	時期	備考
							形状	長×短	深さ							
竪穴住居1	円	583~	400~	34-W	17.3~	3/5	-	-	-	1	×	-	×	弥生中期中葉	焼失住居	
竪穴住居2	円	423~	230~	-	6.6~	○	-	-	-	-	×	-	×	弥生中期中葉		
竪穴住居3	円	510~	400~	34-W	11.9~	3/6	楕円	107×90	24	×	×	-	×	弥生中期中葉	間仕切り溝	
竪穴住居4	円	495~	250~	-	9.2~	2	-	-	-	-	×	-	×	弥生中期後葉		
竪穴住居5	a	円	564	推560	38-E	推24.7	4/4	方	69×66	33	×	1	×	-	×	弥生中期後葉
	b															
竪穴住居6	隅丸方	400	390	85-E	推12.9	4/4	方	68×67	20	×	1	×	-	×	弥生中期後葉	焼失住居
竪穴住居7	-	290~	180~	-	4.7~	1	-	-	-	-	-	-	-	×	弥生中期中葉	

宮ノ上遺跡

掲載遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	主軸 N-E・W	床面積 (㎡)	柱穴	中央穴 (cm)			中央土 焼土	焼上面	高床部	屋内 外溝	カマ下 位置	時期	備考
							形状	長×短	深さ							
竪穴住居1	a	円	665	550~	15-E	-	4/4+5/8	楕円	128×91	40	×	3	-	-	×	弥生中期後葉
	b															
竪穴住居2	隅丸方	160~	70~	27-E	0.6~	○	-	-	-	-	-	-	-	×	弥生中期後葉	
竪穴住居3	円	620	586	10-W	推25.4	5/5	楕円	66×55	38	×	×	×	○	×	弥生後期前葉	外周溝、間仕切り溝
竪穴住居4	円	388	376	24-E	11.2	4/4	楕円	64×60	22	×	×	×	×	×	弥生中期後葉	外周溝
竪穴住居5	-	400~	-	23-E	-	4/4	楕円	45×40	10	-	-	-	-	×	弥生後期	
竪穴住居6	隅丸方	333	170~	13-E	4.4~	○	-	-	-	-	-	-	-	×	弥生	塹体溝に杭列
竪穴住居7	円	250~	476~	72-W	11.1~	4/5	楕円	41×32	24	-	-	-	-	×	弥生後期	
竪穴住居8	a	隅丸方	370	342	29-E	11	4/4	-	-	-	-	-	×	×	弥生中期後葉	
	b															隅丸方
竪穴住居9	楕円	718	587	17-E	33.7	6/6	方	127×110	45	×	1	×	○	×	弥生後期前葉	
竪穴住居10	隅丸方	720~	160~	4-E	7.3~	○	-	-	-	-	-	-	-	×	弥生後期前葉	塹体溝に杭列
竪穴住居11	円	672	520~	16-E	推34.3	5/5	楕円	46×36	72	×	×	-	-	×	弥生後期中葉	間仕切り溝
竪穴住居12	円	490	303~	2-W	9.7~	2	楕円	59×54	23	×	-	×	-	×	弥生中期中葉	
竪穴住居13	隅丸方	405~	150~	7-E	4.1~	2	-	-	-	-	-	×	-	×	弥生	
竪穴住居14	a	円	500	410~	22-E	16~	2	楕円	87×75	17	×	1	×	-	×	弥生後期前葉
	b															
竪穴住居15	円	525~	150~	48-E	5.4~	2	-	-	-	-	-	×	-	×	弥生後期前葉	
竪穴住居16	隅丸方	923~	600~	33-E	35.9~	4/8	楕円	30×27	36	-	-	○	-	×	弥生後期末	
竪穴住居17	方	262	180~	24-E	4.4~	2	×	×	×	×	-	×	-	×	弥生後期末	
竪穴住居18	隅丸方	601~	120~	25-E	5.2~	2	楕円	30××48	54	-	-	-	-	×	弥生後期末	
竪穴住居19	楕円	965	800~	14-E	60.3	1/3+8/10	-	-	-	-	-	-	-	×	弥生末~古墳初葉	
竪穴住居20	隅丸方	630~	642	21-E	34.7	4/4	方	108×107	76	×	×	○	○	×	古墳初葉	中央穴開土手
竪穴住居21	隅丸方	1042	800~	14-E	55	3/4+5/8	方	93×91	85	○	×	○	-	×	弥生後期末	上層に土器溜り
竪穴住居22	隅丸方	495	475	61-E	19.3	4/4	方	84×72	41	○	×	×	×	×	古墳初葉	北東壁土贖
竪穴住居23	a	方	420	350~	20-E	13.6~	3/4	方	×	×	×	×	○	×	×	古墳初葉
	b															
竪穴住居24	方	635	615	36-E	36.7	4/4	方	76×71	48	○	×	○	×	×	古墳初葉	
竪穴住居25	方	515	300~	17-E	12.7~	4/4	×	×	×	×	×	×	-	偏	古墳後期前半	
竪穴住居26	方	525~	400~	28-E	19.1~	4/4	×	×	×	×	×	×	-	中央	古墳後期前半~	中央土贖、北東隅にビット
竪穴住居27	a	方	390	360~	6-E	11.2~	2/4	×	×	×	×	×	×	-	-	古墳後期後半
	b															
竪穴住居28	方	673	290~	29-E	15.1~	2/4	×	×	×	×	-	×	-	-	古墳後期前半	北東隅にビット
竪穴住居29	方	549	250~	5-E	9.8~	2/4	×	×	×	×	-	×	-	-	古墳後期前半	
竪穴住居30	方	540~	180~	0	7.7~	2/4	×	×	×	×	-	×	-	-	古墳後期末	
竪穴住居31	方	240~	100~	85-W	1.7~	2/4	×	×	×	×	-	×	-	-	古墳後期	
竪穴住居32	方	569	350~	4-E	12.7~	2/4	×	×	×	×	-	×	-	中央	古墳後期後半	北東隅にビット

表4 埋葬遺構一覧表

国司尾遺跡

掲載遺構名	平面形	掘り方上面 (cm)		深さ (cm)	主軸 N-E・W	等高線	小口溝	小口溝 (cm)			時期	備考
		長さ	幅					志忠距離	最大長	最大位置		
土贖墓1	長方	242	80	17	57-E	平行	×	-	-	-	古墳中期中葉	須恵器壺・鉄斧・鉄鎌・刀子
土贖墓2	長方	347	104	48	60-E	平行	×	-	-	-	古墳中期後葉	須恵器壺・杯身
土贖墓3	長方	237	78	17	35-E	平行	×	-	-	-	古墳中期後葉	杯身
土贖墓4	楕円	200	62	20	76-W	直交	×	-	-	-	古墳中期末	杯身・杯蓋2セット

坂田墳墓群

掲載遺構名	平面形	掘り方上面(cm)		深さ (cm)	主軸N- -E・W	等高線	小口溝	小口溝 (cm)			時期	備考
		長さ	幅					志忠距離	最大長	最大位置		
土壙墓1	長方	220	88	40	50-E	直交	○	164	55	東	弥生中期～後期	
土壙墓2	長方	189	75	34	50-E	平行	○	151	60	東	弥生中期～後期	
土壙墓3	長方	195	68	45	51-E	直交	○	123	47	東	弥生中期～後期	
土壙墓4	長方	175	69	22	55-E	直交	○	142	50	西	弥生中期～後期	
土壙墓5	長方	214	95	39	44-E	直交	○	183	83	西	弥生中期～後期	
土壙墓6	長方	177	78	40	44-E	直交	○	122	70	西	弥生中期～後期	
土壙墓7	長方	146～	105	56	60-W	直交	○	103～	62	?	弥生中期～後期	
土壙墓8	長方	210～	95	76	76-W	直交	○	170	61	西	弥生中期～後期	
土壙墓9	長方	218～	120	50	74-W	直交	○	173	99	西	弥生中期～後期	
土壙墓10	長方	195～	88	20	53-E	平行	○	145	58	?	弥生中期～後期	
土壙墓11	長方?	68～	77	30	85-W	平行	○	43～	56	?	弥生中期～後期	
土壙墓12	長方	148～	77	19	88-E	直交	○	122	57	東	弥生中期～後期	
土壙墓13	長方	209	112	43	79-E	直交	○	155	71	東	弥生中期～後期	
土壙墓14	長方	124	81	24	84-E	平行	○	86	42	東	弥生中期～後期	
土壙墓15	長方	98	60	28	8-W	直交	○	56	33	南?	弥生中期～後期	
土壙墓16	長方	205～	121	38	59-E	平行	○	162	70	東	弥生中期	楕圓石剣
土壙墓17	長方	187～	77	23	7-W	平行	○	155	62	南	弥生中期～後期	
土壙墓18	長方	154	81	57	34-W	直交	○	90	50	北	弥生中期～後期	
土壙墓19	長方	205	88	56	42-W	直交	○	158	64	東	弥生中期～後期	
土壙墓20	長方	120～	51～	20	36-E	平行	○	110～	49	?	弥生中期～後期	
土壙墓21	長方	105～	83	50	12-W	直交	○	78～	65	?	弥生中期～後期	
土壙墓22	長方	58～	83	26	22-W	直交	○	36～	69	?	弥生中期～後期	
土壙墓23	長方	205	83	25	7-W	平行	○	160	67	南	弥生中期～後期	
土壙墓24	長方	243	94	56	5-W	平行	○	157	64	北	弥生中期～後期	
土壙墓25	長方	220	87	35	3-W	平行	○	160	59	南	弥生中期～後期	
土壙墓26	長方	111	50～	33	6-W	平行	○	58	32	北	弥生中期～後期	
土壙墓27	長方	156	68	32	15-E	直交	×	-	-	-	弥生中期中央	ジョッキ形土器
土壙墓28	長方?	200～	81～	10	86-E	平行	○	180	80	東	弥生中期～後期	
土壙墓29	長方	192	76	26	80-E	直交	○	166	61	東?	弥生中期～後期	
土壙墓30	長方	209	72～	14	86-W	平行	○	177	65	東	弥生中期～後期	
土壙墓31	長方	176	80	72	88-W	直交	○	100	42	東	弥生中期～後期	
土壙墓32	長方	43～	60	35	85-E	直交	○	32～	31	?	弥生中期～後期	
土壙墓33	長方	241	92	40	90	平行	○	172	60	東	弥生中期～後期	
土壙墓34	長方	104～	53	7	73-E	平行	○	80～	42	?	弥生中期～後期	
土壙墓35	長方	184	60	40	85-W	直交	×	-	-	-	弥生中期～後期	
土壙墓36	長方?	204～	72～	8	84-E	平行	○	160	65	西	弥生中期～後期	
土壙墓37	長方	125	62	36	6-E	平行	○	95	40	?	弥生中期～後期	
土壙墓38	長方	158～	78	62	81-W	平行	○	120～	58	?	弥生中期～後期	
土壙墓39	長方	165	134	77	0	平行	×	-	-	-	弥生末～古墳初頭	
土壙墓40	長方	232	145	84	3-W	平行	×	-	-	-	弥生末～古墳初頭	
土壙墓41	長方	244	107	69	0	平行	×	-	-	-	弥生末～古墳初頭	
土壙墓42	長方	301	143～	68	3-E	平行	×	-	-	-	弥生末～古墳初頭	
土壙墓43	長方	230	132	66	31-E	平行	×	-	-	-	弥生末～古墳初頭	
土壙墓44	長方	149	110	34	7-E	平行	×	-	-	-	弥生末～古墳初頭	
土壙墓45	長方	340～	158	46	6-E	直交	×	-	-	-	古墳前期	
土壙墓46	長方	307	125	35	90	直交	×	-	-	-	古墳前期	
土壙墓47	長方	166～	86	20	30-W	直交	×	-	-	-	古墳前期	
土壙墓48	長方	227	109	33	3-W	平行	×	-	-	-	古墳前期	
土壙墓49	楕圓	224	180	50	82-W	直交	×	-	-	-	古墳前期	土壙墓47を切る
土壙墓50	楕圓	95	60	20	66-W	直交	×	-	-	-	古墳前期	石蓋土壙墓、内法68×33×13cm
土壙墓51	長方	262	68	80	83-W	直交	×	-	-	-	古墳前期	棺石
土壙墓52	長方	250	105	45	8-W	平行	×	-	-	-	古墳前期	
土壙墓53	長方	248	103	34	0	平行	×	-	-	-	古墳中期	鉄矛
土壙墓54	長方	256	117	70	68-W	直交	○	196	33	西	古墳後期後半	杯身4・鉄鏃3
土壙墓55	長方	348	186	120	74-W	直交	×	-	-	-	古墳後期後半	杯身4・杯蓋4・提瓶、床面に炭
土壙墓56	楕圓	250～	70～	22	76-W	直交	×	-	-	-	平安末～鎌倉	釘13本 鉄鏃
箱式石棺墓1	長方	120～	69	25	77-E	直交	×	-	-	-	古墳前期	石棺内法76×～45cm

坂田3号墳

掲載遺構名	平面形	掘り方上面(cm)		深さ (cm)	主軸N- -E・W	等高線	小口溝	小口溝 (cm)			時期	備考
		長さ	幅					志忠距離	最大長	最大位置		
埋葬施設1	長方 楕圓	213～	100	49	0	直交					古墳前期	掘り方1段
埋葬施設2	長方	199	57	28			×	-	-	-		掘り方下段、粘土使用
埋葬施設2	長方	175	121	42	88-W	直交	○		63		古墳前期	
埋葬施設3	楕圓	186	114	35	88-W	直交	×	-	-	-	古墳前期	

宮ノ上遺跡

掲載遺構名	平面形	掘り方上面(cm)		深さ (cm)	主軸N- -E・W	等高線	小口溝	小口溝 (cm)			時期	備考
		長さ	幅					志忠距離	最大長	最大位置		
土壙墓1	長方	180	80	21	81-E	直交	×	-	-	-	中世?	木棺痕跡内法164×55

宮ノ上1号墳

掲載遺構名	種別	内法 (cm)			主軸N- -E・W	尾根方向	時期	備考
		長さ	幅	残存高				
埋葬施設1	壱式石椁	308	162	82	79.5-E	平行	古墳中期	歌帶鏡・鉄鏃・石杵

掲載番号	挿図番号	出土遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	時期	実測番号	備考
				最大長	最大幅	最大厚					
S 31	第138図	斜面堆積	石鏃	23.5	18	2.8	1.11	サヌカイト	弥生	55	完形
S 32	第138図	斜面堆積	磨製石包丁	46	40	7	16.36	粘板岩	弥生	58	
S 33	第138図	斜面堆積	磨製石包丁	136	44	8	59.88	粘板岩	弥生	57	完形
S 34	第138図	斜面堆積	大型蛤刃石斧	129	70	61	862.01	石英安山岩 (溶岩?)	弥生	80	
S 35	第138図	斜面堆積	碧玉	15	7		0.39	碧玉	弥生	61	孔径 2 mm
S 36	第140図	その他	石鏃	18.5	12.5	2.7	0.53	サヌカイト	弥生	78	完形
S 37	第140図	その他	石鏃	19.5	15	3	0.82	サヌカイト	弥生	81	
S 38	第140図	その他	石鏃	24	15.5	2.8	1.01	サヌカイト	弥生	66	
S 39	第140図	その他	石鏃	29	19.5	3.3	2.05	サヌカイト	弥生	64	
S 40	第140図	その他	石鏃	34.5	17	3.5	2.28	サヌカイト	弥生	65	完形
S 41	第140図	その他	石鏃	25	18	5	2	サヌカイト	弥生	121	
S 42	第140図	その他	石小刀	78	36	8	13.44	サヌカイト	弥生	74	
S 43	第140図	その他	磨製石包丁	106	45.5	9	59.37	粘板岩	弥生	71	完形 未穿孔あり
S 44	第140図	その他	磨製石包丁	86	50	7	45.9	粘板岩	弥生	68	
S 45	第140図	その他	磨製石包丁	93.5	51	6.5	39.61	粘板岩	弥生	50	
S 46	第140図	その他	磨製石包丁	99	48	9.8	51.68	塩基性凝灰岩	弥生	72	刃部欠損
S 47	第140図	その他	磨製石包丁	44	38	8.5	13.13	粘板岩	弥生	67	
S 48	第140図	その他	磨製石包丁	53.5	44	6	15.12	粘板岩	弥生	36	
S 49	第140図	その他	扁平片刃石斧	56.5	40	10.5	36.29	流紋岩	弥生	70	挟りあり
S 50	第140図	その他	石核?	113.5	99.5	50	827.52	砂岩	弥生	16	
S 51	第168図	宮ノ上1号墳	石柁	126	68	53	868.99	閃緑岩	古墳	75	

表 6 金属製品一覧表

国司尾遺跡

掲載番号	挿図番号	出土遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	実測番号	備考
				最大長	最大幅	最大厚					
M 1	第24図	土壇墓 1	刀子	165.2	22.7	4	33.73	鉄	古墳中期中葉	1	
M 2	第24図	土壇墓 1	鉄鎌	179.5	41.35	3	65.7	鉄	古墳中期中葉	2	
M 3	第24図	土壇墓 1	袋状鉄斧	89.4	47.5	27.8	140.45	鉄	古墳中期中葉	3	
M 4	第31図	その他	刀子	52	18.35	3.85	9.06	鉄	不明	7	
M 5	第31図	その他	袋状鉄斧	81.7	37.7	18.5	117.44	鉄	古墳	4	

坂田遺跡・坂田墳墓群

M 1	第49図	その他	楕形洋	55.5	42	19	64.58		古代~中期		
M 2	第75図	土壇墓53	鉄矛	317.8	29.8	29.95	269.33	鉄	古墳中期	18	
M 3	第76図	土壇墓54	鉄鏃	72.5	35.9	2.5	19.61	鉄	古墳後期後半	14	
M 4	第76図	土壇墓54	鉄鏃	84.87	30.4	5	17.02	鉄	古墳後期後半	15	
M 5	第76図	土壇墓54	鉄鏃	90.6	35	4.2	23.26	鉄	古墳後期後半	16	
M 6	第76図	土壇墓54	茎	30.2	4.55	4.2	1.61	鉄	古墳後期後半	17	木質残存
M 7	第78図	土壇墓56	鉄釘	143.3	7.8	8	28.16	鉄	平安末~鎌倉	19	
M 8	第78図	土壇墓56	鉄釘	120.45	8.85	7.6	28	鉄	平安末~鎌倉	31	
M 9	第78図	土壇墓56	鉄釘	89.25	8.3	5.8	15.27	鉄	平安末~鎌倉	21	
M10	第78図	土壇墓56	鉄釘	78.55	8.7	6.45	12.91	鉄	平安末~鎌倉	22	
M11	第78図	土壇墓56	鉄釘	39.5	8.15	5.6	8.49	鉄	平安末~鎌倉	24	
M12	第78図	土壇墓56	鉄釘	70.6	8.4	6.9	17.31	鉄	平安末~鎌倉	20	
M13	第78図	土壇墓56	鉄釘	69.3	6.8	5.9	10.79	鉄	平安末~鎌倉	23	
M14	第78図	土壇墓56	鉄釘	71.15	7.2	4.2	9.62	鉄	平安末~鎌倉	25	
M15	第78図	土壇墓56	鉄釘	74.3	4.55	4.1	5.9	鉄	平安末~鎌倉	28	
M16	第78図	土壇墓56	鉄釘	59.9	5.4	5.1	7.6	鉄	平安末~鎌倉	26	
M17	第78図	土壇墓56	鉄釘	45	4.8	5.25	4.82	鉄	平安末~鎌倉	29	
M18	第78図	土壇墓56	鉄釘	40	6.6	5.9	6.96	鉄	平安末~鎌倉	27	

表5 石製品一覧表

国司尾遺跡

掲載 番号	挿図番号	出土遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	時期	実測 番号	備考
				最大長	最大幅	最大厚					
S 1	第7図	竪穴住居 1	石鏃	19	13	3.5	0.65	サヌカイト	弥生中期	89	完形
S 2	第7図	竪穴住居 1	楔形石器	25	19	7	2.47	サヌカイト	弥生中期	104	
S 3	第7図	竪穴住居 1	石鏃	43.7	26	9	6.46	サヌカイト	弥生中期	105	
S 4	第7図	竪穴住居 1	削器	51	39	9	15.4	サヌカイト	弥生中期	90	
S 5	第13図	竪穴住居 6	砥石	138	84	48	646.18	閃緑岩 (細紋)	弥生中期	85	
S 6	第13図	竪穴住居 6 中央穴		158	154	33	1205.76	安山岩	弥生中期	1	
S 7	第13図	竪穴住居 6 中央穴		117.5	86.5	62	937.53	閃緑岩 (細紋)	弥生中期	3	
S 8	第13図	竪穴住居 6 中央穴	剥片	80	72	22	141.92	石英安山岩 (溶岩?)	弥生中期	2	
S 9	第13図	竪穴住居 6 中央穴	剥片	82	70	37	126.91	石英安山岩 (溶岩?)	弥生中期	4	
S 10	第14図	竪穴住居 7 床面	石鏃	17.5	13.5	4	0.5	サヌカイト	弥生中期	23	完形
S 11	第14図	竪穴住居 7	扁平片刃石斧	75.5	53	15.5	112.15	塩基性凝灰岩	弥生中期	21	完形
S 12	第17図	段状遺構 3	石皿?	178	173	42	2250	流紋岩	弥生中期	86	
S 13	第22図	その他	扁平片刃石斧	141	66	19	320.22	塩基性片岩	弥生中期	22	
S 14	第22図	その他	剥片	137.5	58.5	28	154.12	粘板岩	弥生中期	93	

坂田遺跡・墳墓群

S 1	第38図	その他	大型蛤刃石斧	99.5	50	34.5	227.39	石英安山岩	弥生中期	18	
S 2	第38図	その他	扁平片刃石斧	32	43	10	17.01	塩基性凝灰岩	弥生中期	19	
S 3	第37図	土塚墓16	磨製石剣	142.5	34.5	11	72.54	粘板岩	弥生中期	20	完形

宮ノ上遺跡・古墳群

S 1	第87図	竪穴住居 1	楔形石器	42.5	38	7	13.06	サヌカイト	弥生中期	12	
S 2	第87図	竪穴住居 1	扁平片刃石斧	91	38	18	92.74	塩基性凝灰岩	弥生中期	10	
S 3	第87図	竪穴住居 1	扁平片刃石斧	113	70	20	243.54	塩基性凝灰岩	弥生中期	11	
S 4	第87図	竪穴住居 1	磨製石包丁	121.5	37	7.5	40.93	粘板岩	弥生中期	7	完形
S 5	第90図	竪穴住居 3	磨製石包丁	56.5	53	10	41.19	粘板岩	弥生中～後期	46	
S 6	第90図	竪穴住居 3	砥石	41	28	8.5	15.09	珪質粘板岩	弥生中～後期	47	
S 7	第93図	竪穴住居 8	石鏃	25	16.5	4	1.97	サヌカイト	弥生中期	48	
S 8	第95図	竪穴住居10	石鏃	19.5	10	2	0.39	サヌカイト	弥生後期	107	完形
S 9	第95図	竪穴住居10	磨製石包丁	49	42.5	9	22.94	粘板岩	弥生後期	6	
S 10	第97図	竪穴住居12中央穴	剥片	70	53.5	16	45.08	粘板岩	弥生中期	124	
S 11	第98図	竪穴住居13	石鏃	43.5	17	5.3	3.32	サヌカイト	弥生中期	73	完形
S 12	第99図	竪穴住居14	砥石	90	40.5	13	60.91	珪質粘板岩	弥生後期	63	
S 13	第103図	竪穴住居16		153	79.5	31	686.2	流紋岩	弥生後期	15	
S 14	第103図	竪穴住居16	石皿?	164	64	54	844.95	閃緑岩 (細紋)	弥生後期	14	
S 15	第105図	竪穴住居18床面	砥石	127	39.5	35	245.6	流紋岩	弥生後期	13	
S 16	第105図	竪穴住居18床面		186.5	72	50	1131.98	安山岩	弥生後期	8	
S 17	第106図	竪穴住居20	砥石	140	99.5	58	1342.32	流紋岩	古墳	52	
S 18	第113図	竪穴住居22躯体溝	砥石	94.5	26	22.5	67.28	粘板岩	古墳	37	
S 19	第117図	建物 2	石鏃	21	17	3.8	0.98	サヌカイト	弥生中期	33	完形
S 20	第117図	建物 2	石鏃	27	17	4	2.34	サヌカイト	弥生中期	32	
S 21	第117図	建物 2 床面	扁平片刃石斧	71.5	34.5	14.5	46.81	玄武岩	弥生中期	35	完形
S 22	第121図	段状遺構 1	石鏃	22.5	15	3.5	1.38	サヌカイト	弥生中期	38	
S 23	第121図	段状遺構 1	削器	45.5	24	8	8.42	サヌカイト	弥生中期	39	
S 24	第121図	段状遺構 1		45	26.5	5.5	8	サヌカイト	弥生中期	40	
S 25	第121図	段状遺構 1	磨製石包丁	50.5	49	6.5	22.07	粘板岩	弥生中期	43	
S 26	第121図	段状遺構 1	磨製石包丁	41	34	7	9.87	粘板岩	弥生中期	42	
S 27	第131図	土塚 6	磨製石包丁	42.5	43	7.5	17.26	粘板岩	弥生中～後期	31	
S 28	第138図	斜面堆積	石鏃	24	15	4	1.37	サヌカイト	弥生	54	完形
S 29	第138図	斜面堆積	石鏃	16	18	4	1.2	サヌカイト	弥生	56	
S 30	第138図	斜面堆積	石鏃	22.5	13	2.5	0.74	サヌカイト	弥生	53	完形

宮ノ上遺跡・宮ノ上古墳群

掲載番号	挿図番号	出土遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	材質	時期	実測番号	備考
				最大長	最大幅	最大厚					
M 1	第97図	竪穴住居12	甕?	24.6	11.5	4	4.36	鉄	弥生中期中葉	62	
M 2	第113図	竪穴住居22	鉄鎌	134.8	40.25	4.5	101.68	鉄	古墳初期	33	
M 3	第142図	竪穴住居25	不明	59.4	35.15	4	16.6	鉄	古墳後期前半	59	
M 4	第142図	竪穴住居25	茎	21.6	4.3	3.3	0.88	鉄	古墳後期前半	60	
M 5	第145図	竪穴住居27	鉄鎌	136.4	29	3.1	47.08	鉄	古墳後期後半	34	
M 6	第145図	竪穴住居27	不明	46.15	31.65	9.9	13.76	鉄	古墳後期後半	35	
M 7	第155図	段状遺構 7	茎	48.75	6.75	4.7	5.65	鉄	古墳後期末	44	
M 8	第162図	その他	鉄鏃	110.25	27.9	3.1	24.74	鉄	古墳後期	42	
M 9	第162図	その他	刀子?	40.4	7.9	3.6	3.29	鉄	不明	51	
M10	第162図	その他	不明	70.45	17.2	4.15	15.95	鉄	不明	47	
M11	第162図	その他	楔	56.75	19.5	3.2	17.49	鉄	不明	52	
M12	第162図	その他	不明	40.6	4	3.75	1.71	鉄	不明	48	
M13	第162図	その他	鉄釘	68.5	5.5	4.6	6.02	鉄	不明	50	
M14	第162図	その他	不明	55.6	4.4	3.55	2.83	鉄	不明	45	
M15	第162図	その他	鉄釘	50.3	3.85	4.2	2.05	鉄	不明	61	
M16	第162図	その他	不明	41.5	5.15	4.25	5.16	鉄	不明	46	
M17	第168図	宮ノ上1号墳	微帯鏡	134.4		4.7	182.97	青銅	弥生末~古墳	40	赤色顔料付着
M18	第168図	宮ノ上1号墳	内行花文鏡	78.15		3.2	52.97	青銅	古墳	41	赤色顔料付着
M19	第168図	宮ノ上1号墳	鉄鎌	95.05	28.2	2.6	22.53	鉄	古墳中期	38	

表7 土製品一覧表

坂田遺跡・墳墓群

掲載番号	挿図番号	出土遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	胎土	焼成	時期	遺物番号	備考
				最大長	最大幅	最大厚							
C 1	第42図	段状遺構 4	土鉢	42.5	11.5		5.83	にぶい黄橙10YR7/2	砂粒少量	良好	中世	1	孔径5.0mm
C 2	第42図	段状遺構 4	土鉢	36.5	11.5		4.1	褐灰7.5YR5/1	砂粒少量	良好	中世	10	孔径4.0mm
C 3	第42図	段状遺構 4	土鉢	32.3	11		3.45	灰褐7.5YR6/2	砂粒少量	良好	中世	9	孔径4.0mm
C 4	第42図	段状遺構 4	土鉢	29	10		2.7	褐灰10YR5/1	砂粒少量	良好	中世	11	孔径4.0mm
C 5	第42図	段状遺構 4	土鉢	36.5	14		6.01	橙2.5YR6/6	砂粒少量	良好	中世	3	孔径5.0mm
C 6	第42図	段状遺構 4	土鉢	32	14		5.84	灰黄褐10YR5/2	砂粒少量	良好	中世	2	孔径4.0mm
C 7	第49図	その他	土鉢	47	14.6		7.79	にぶい橙7.5YR7/4	赤色粒多い	良好	中世	12	孔径5.0mm

宮ノ上遺跡・古墳群

C 1	第97図	竪穴住居12	分銅形土製品	59.5	45.5	10.5	25.39	褐灰10YR5/1	長石少量	良好	弥生	5	孔径2mm 両端1孔1対
C 2	第130図	土壇 5	分銅形土製品	89	57.5	17	25.39	にぶい黄2.5YR6/3	長石少量	良好	弥生	4	孔径1.5mm 上縁8孔、両端2孔1対
C 3	第140図	その他	紡錘車	37		8	10.22	橙5YR6/6	長石多い	良好	弥生	7	土器片転用 孔径4.6mm
C 4	第145図	竪穴住居27	紡錘車	44		25	45.21	橙5YR6/6	砂粒、長石多い	良好	古墳	8	孔径7.0mm
C 5	第162図	その他	土鉢	19	11.3		2.05	にぶい橙5YR7/4	砂粒少量	良好	中世	16	孔径3.2mm
C 6	第162図	その他	土鉢	20.5	12.7		3.06	にぶい橙7.5YR7/4	砂粒少量	良好	中世	6	孔径4.0mm
C 7	第162図	その他	土鉢	25	11.5		2.77	にぶい橙7.5YR7/3	砂粒少量	良好	中世	17	孔径3.8mm
C 8	第162図	その他	土鉢	26	12		3.25	にぶい橙5YR6/4	砂粒少量	良好	中世	14	孔径3.8mm
C 9	第162図	その他	土鉢	26	12.8		3.73	にぶい橙5YR7/4	砂粒少量	良好	中世	18	孔径3.0mm
C10	第162図	その他	土鉢	26	12		3.18	にぶい橙5YR7/4	砂粒少量	良好	中世	15	孔径3.5mm
C11	第162図	その他	土鉢	25.5	12		3.42	褐灰10YR4/1	砂粒少量	良好	中世	13	孔径4.5mm
C12	第162図	その他	土鉢	24.5	12.5		3.24	にぶい黄橙10YR6/4	砂粒少量	良好	中世	21	孔径4.0mm
C13	第162図	その他	土鉢	28	8.5		1.63	にぶい黄橙10YR6/4	砂粒少量	良好	中世	20	孔径3.0mm
C14	第162図	その他	土鉢	34	16		7.06	にぶい橙7.5YR7/4	砂粒少量	良好	中世	23	孔径4.2mm
C15	第162図	その他	土鉢	43	18		10.18	にぶい橙7.5YR7/4	赤色粒多い	良好	中世	19	孔径4.0mm



表8 新旧遺構名対照表

竪穴住居

遺跡名	掲載遺構名	旧遺跡	旧遺構名
国司尾	竪穴住居 1	国司尾	20 竪穴住居
国司尾	竪穴住居 2	国司尾	15 段状遺構
国司尾	竪穴住居 3	国司尾	13 竪穴住居
国司尾	竪穴住居 4	国司尾	4 竪穴住居
国司尾	竪穴住居 5	国司尾	6 竪穴住居
国司尾			
国司尾	b		
国司尾	竪穴住居 6	国司尾	5 竪穴住居
国司尾	竪穴住居 7	国司尾	1 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居 1	天神	9 竪穴住居
宮ノ上			
宮ノ上	b		
宮ノ上	竪穴住居 2	天神	6 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居 3	宮ノ上	13 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居 4	宮ノ上	37 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居 5	宮ノ上	38 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居 6	天神	18 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居 7	宮ノ上	14 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居 8	宮ノ上	15 竪穴住居
宮ノ上			
宮ノ上	b		
宮ノ上	竪穴住居 9		
宮ノ上	竪穴住居10	天神	7 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居11	宮ノ上	25 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居12	宮ノ上	54 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居13	宮ノ上	55 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居14	宮ノ上	33 竪穴住居
宮ノ上			
宮ノ上	b		
宮ノ上	竪穴住居15	宮ノ上	51 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居16	天神	10 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居17	宮ノ上	23 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居18	天神	5 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居19	宮ノ上	32~34 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居20	宮ノ上	31 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居21	宮ノ上	45 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居22	宮ノ上	11 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居23	天神	8 竪穴住居
宮ノ上			
宮ノ上	b		
宮ノ上	竪穴住居24	宮ノ上	46 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居25	宮ノ上	18 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居26	宮ノ上	30 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居27	宮ノ上	21 竪穴住居
宮ノ上			
宮ノ上	b		
宮ノ上	竪穴住居28	宮ノ上	28 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居29	宮ノ上	44 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居30	宮ノ上	36 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居31	宮ノ上	52 竪穴住居
宮ノ上	竪穴住居32	宮ノ上	50 竪穴住居

建物

遺跡名	掲載遺構名	旧遺跡	旧遺構名
宮ノ上	建物 1	天神	22 掘立柱建物
宮ノ上	建物 2	宮ノ上	9 建物
宮ノ上			
宮ノ上	b		
宮ノ上	建物 3	宮ノ上	43 溝
宮ノ上	建物 4	宮ノ上	62 建物
宮ノ上	建物 5	宮ノ上	48 建物
宮ノ上	建物 6	宮ノ上	61 柱穴列

段状遺構

遺跡名	掲載遺構名	旧遺跡	旧遺構名
国司尾	段状遺構 1	国司尾	17 段状遺構
国司尾	段状遺構 2	国司尾	18 段状遺構
国司尾	段状遺構 3	国司尾	7 竪穴住居
国司尾	段状遺構 4	国司尾	21 段状遺構
国司尾	段状遺構 5	国司尾	19 段状遺構
国司尾	段状遺構 6	国司尾	3 段状遺構
坂田	段状遺構 1	天神	26 段状遺構
坂田	段状遺構 2	天神	30 段状遺構
坂田	段状遺構 3	天神	15 段状遺構
坂田	段状遺構 4	天神	67 段状遺構
宮ノ上	段状遺構 1	宮ノ上	12 段状遺構
宮ノ上	段状遺構 2	宮ノ上	6 段状遺構
宮ノ上	段状遺構 3	宮ノ上	9 段状遺構
宮ノ上	段状遺構 4	宮ノ上	7 段状遺構
宮ノ上	段状遺構 5	宮ノ上	1 段状遺構
宮ノ上	段状遺構 6	宮ノ上	29 段状遺構
宮ノ上	段状遺構 7	宮ノ上	59 溝
宮ノ上	段状遺構 8	宮ノ上	60 溝

土壇

遺跡名	掲載遺構名	旧遺跡	旧遺構名
国司尾	土壇 1	国司尾	25 土壇
坂田	土壇 1	天神	35 土壇
坂田	土壇 2	天神	42 土壇
坂田	土壇 3	天神	3 土壇
坂田	土壇 4	天神	1 土壇
宮ノ上	土壇 1	天神	19 土壇
宮ノ上	土壇 2	宮ノ上	16 土壇
宮ノ上	土壇 3	宮ノ上	17 土壇
宮ノ上	土壇 4	宮ノ上	2 土壇
宮ノ上	土壇 5	宮ノ上	17 土壇
宮ノ上	土壇 6	宮ノ上	4 土壇
宮ノ上	土壇 7	宮ノ上	20 土壇
宮ノ上	土壇 8	宮ノ上	5 土壇
宮ノ上	土壇 9	宮ノ上	24 土壇
宮ノ上	土壇10	宮ノ上	58 土壇
宮ノ上	土壇11	宮ノ上	35 土壇
宮ノ上	土壇12	宮ノ上	56 土壇

被熱土壇

遺跡名	掲載遺構名	旧遺跡	旧遺構名
国司尾	被熱土壇 1	国司尾	22 火灶
坂田	被熱土壇 1	天神	89 焼土壇
宮ノ上	被熱土壇 1	宮ノ上	49 焼土壇
宮ノ上	被熱土壇 2	宮ノ上	8 焼土壇
宮ノ上	被熱土壇 3	宮ノ上	3 焼土壇

土壇墓・墳墓・古墳

遺跡名	掲載遺構名	旧遺跡	旧遺構名
国司尾	土壇墓 1	国司尾	2 土壇墓
国司尾	土壇墓 2	国司尾	23 土壇墓
国司尾	土壇墓 3	国司尾	10 土壇墓
国司尾	土壇墓 4	国司尾	16 土壇墓
坂田	土壇墓 1	天神	63 土壇墓
坂田	土壇墓 2	天神	61 土壇墓
坂田	土壇墓 3	天神	65 土壇墓
坂田	土壇墓 4	天神	66 土壇墓
坂田	土壇墓 5	天神	84 土壇墓
坂田	土壇墓 6	天神	62 土壇墓
坂田	土壇墓 7	天神	83 土壇墓
坂田	土壇墓 8	天神	68 土壇墓
坂田	土壇墓 9	天神	75 土壇墓
坂田	土壇墓10	天神	85 土壇墓
坂田	土壇墓11	天神	56 土壇墓
坂田	土壇墓12	天神	88 土壇墓
坂田	土壇墓13	天神	64 土壇墓
坂田	土壇墓14	天神	60 土壇墓
坂田	土壇墓15	天神	74 土壇墓
坂田	土壇墓16	天神	59 土壇墓
坂田	土壇墓17	天神	54 土壇墓
坂田	土壇墓18	天神	53 土壇墓
坂田	土壇墓19	天神	73 土壇墓
坂田	土壇墓20	天神	58 土壇墓
坂田	土壇墓21	天神	86 土壇墓
坂田	土壇墓22	天神	87 土壇墓
坂田	土壇墓23	天神	72 土壇墓
坂田	土壇墓24	天神	76 土壇墓
坂田	土壇墓25	天神	77 土壇墓
坂田	土壇墓26	天神	78 土壇墓
坂田	土壇墓27	天神	51 土壇墓
坂田	土壇墓28	天神	82 土壇墓
坂田	土壇墓29	天神	81 土壇墓
坂田	土壇墓30	天神	71 土壇墓
坂田	土壇墓31	天神	92 土壇墓
坂田	土壇墓32	天神	93 土壇墓
坂田	土壇墓33	天神	45 土壇墓
坂田	土壇墓34	天神	90 土壇墓
坂田	土壇墓35	天神	46 土壇墓
坂田	土壇墓36	天神	37 土壇墓
坂田	土壇墓37	天神	31 土壇墓
坂田	土壇墓38	天神	32 土壇墓
坂田	土壇墓39	天神	16 土壇墓
坂田	土壇墓40	天神	14 土壇墓
坂田	土壇墓41	天神	12 土壇墓
坂田	土壇墓42	天神	29 土壇墓
坂田	土壇墓43	天神	27 土壇墓
坂田	土壇墓44	天神	23 土壇墓
坂田	土壇墓45	天神	50 土壇墓
坂田	土壇墓46	天神	49 土壇墓
坂田	土壇墓47	天神	48 土壇墓
坂田	土壇墓48	天神	91 土壇墓
坂田	土壇墓49	天神	94 土壇墓
坂田	土壇墓50	天神	34 石葺土壇墓
坂田	土壇墓51	天神	80 土壇墓
坂田	土壇墓52	天神	79 土壇墓
坂田	土壇墓53	天神	41 土壇墓
坂田	土壇墓54	天神	39 土壇墓
坂田	土壇墓55	天神	43 土壇墓
坂田	土壇墓56	天神	95 土壇墓
宮ノ上	土壇墓 1	天神	4 木棺墓
坂田	箱式石棺 1	天神	32 シスト
坂田 3号墳	埋葬施設 1	天神古墳	第1主体
坂田 3号墳	埋葬施設 2	天神古墳	第2主体
坂田 3号墳	埋葬施設 3	天神古墳	土壇
宮ノ上 1号墳	埋葬施設 1	宮ノ上 1号墳	第1主体
宮ノ上 2号墳		宮ノ上 2号墳	
宮ノ上 3号墳		宮ノ上 3号墳	
宮ノ上 4号墳		宮ノ上 4号墳	

1 遺跡遠景  
(東から)



2 遺跡遠景  
(北東上空から)



3 国司尾遺跡  
・坂田墳墓群全景  
(上空から、上が  
北西)





1 竪穴住居 1 炭化材  
・遺物出土状態  
(東から)



2 竪穴住居 1  
(東から)



3 竪穴住居 4・5  
(南から)



1 豎穴住居6炭化材・遺物出土状態（南西から）



2 北東部炭化材出土状態（北西から）



3 中央穴遺物出土状態（西から）



4 土壇1遺物出土状態（南から）



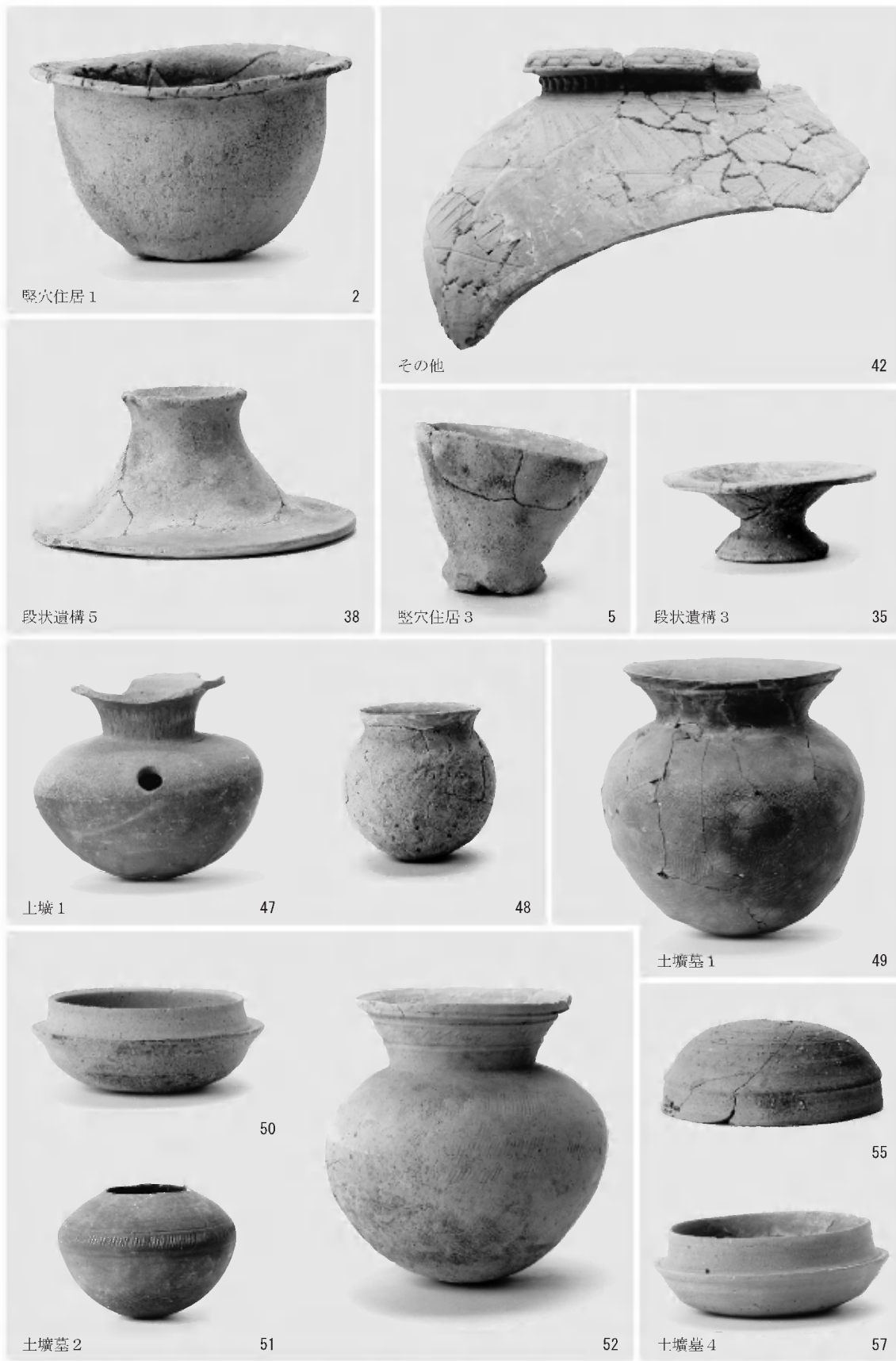
5 土壇墓1遺物出土状態（南東から）



6 土壇墓2埋土断面（南から）



7 土壇墓2遺物出土状態（南東から）

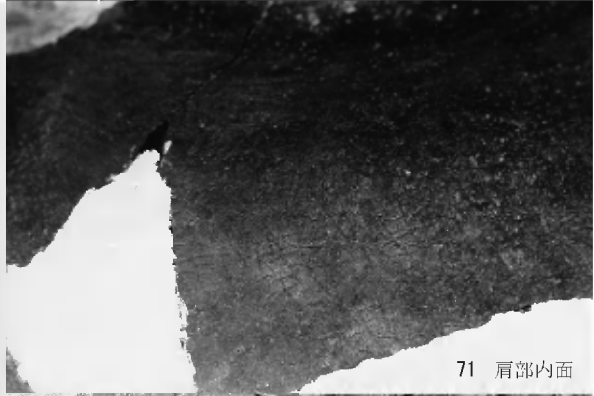


出土遺物①

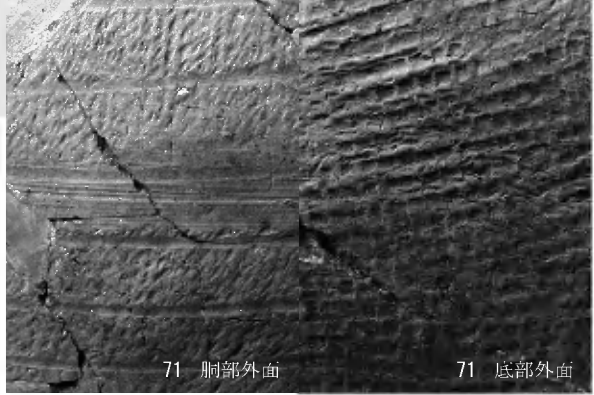


その他

71



71 肩部内面



71 胴部外面

71 底部外面



その他

72



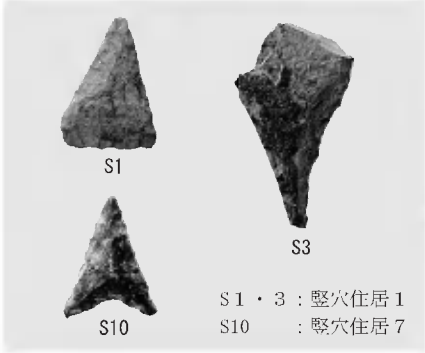
S11

竪穴住居 7



S13

その他

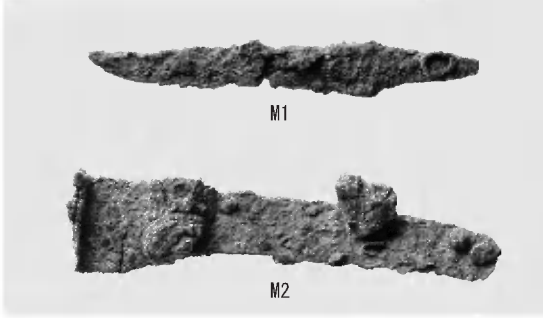


S1

S3

S10

S1・3 : 竪穴住居 1  
S10 : 竪穴住居 7



M1

M2



M3

土壙墓 1



M5

その他

出土遺物②



1 谷部調査状況（西から）



2 土壇4遺物出土状態（南から）



3 墳墓群調査状況（北から）



4 土壇墓3・4（南東から）



5 土壇墓16遺物出土状態（北東から）



6 土壇墓24～26（東から）



7 土壇墓24～26埋土断面（北から）



1 東斜面の土壙墓群（南から）



2 土壙墓42（南から）



3 土壙墓43（南から）



4 土壙墓50石蓋検出状態（南から）



5 土壙墓53調査状況（南西から）



6 土壙墓51（東から）





1 土壙墓54 (南西から)



2 遺物出土状態 (南西から)



3 土壙墓55 (西から)



4 遺物出土状態 (西から)



5 土壙墓55・56埋土断面 (南西から)



1 土壙墓56 (南から)



2 箱式石棺墓1 (南から)



3 坂田3号墳 (西から)



4 3号墳埋葬施設1 (西から)

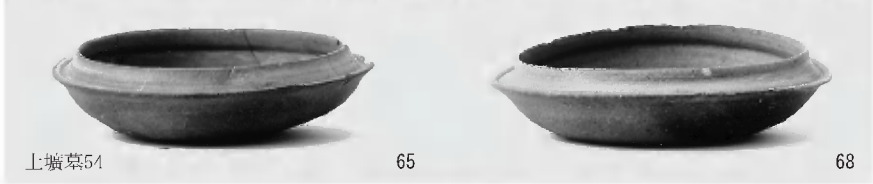


谷部出土遺物



土壙墓27

63



土壙墓54

65

68



71

77

土壙墓55

78



S3

土壙墓16



M4

M5

土壙墓54

M2

土壙墓53

土壙墓出土遺物



1 遺跡全景  
(上空から、上が  
北西)



2 南半部全景  
(北東から)



3 北半部全景  
(上空から、上が  
北西)

1 竪穴住居1  
(南西から)



2 竪穴住居3  
(南西から)



3 竪穴住居8・9  
・16・22  
(南から)





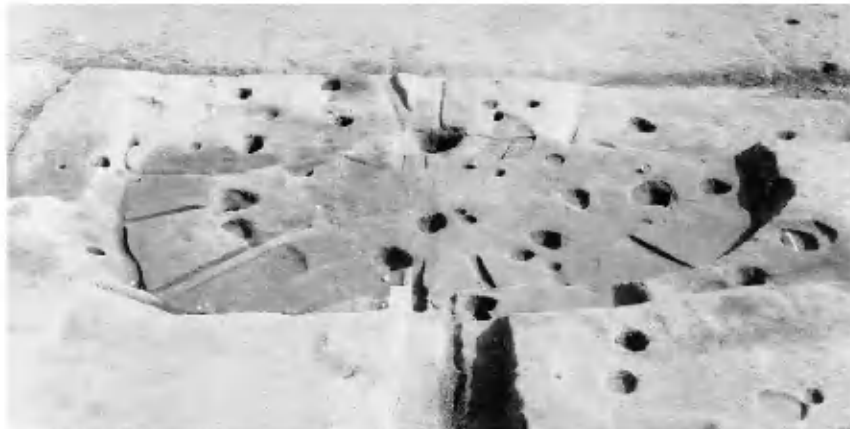
1 竪穴住居19・20 (南から)



2 竪穴住居19南部礫出土状態(東から)



3 竪穴住居19北部礫出土状態(南東から)



4 竪穴住居21 (西から)



5 遺物出土状態(北東から)



6 上層遺物出土状態(東から)



1 豎穴住居22 (北西から)



2 調査状況 (北西から)



3 中央土壙埋土断面 (北西から)



4 豎穴住居24 (南東から)

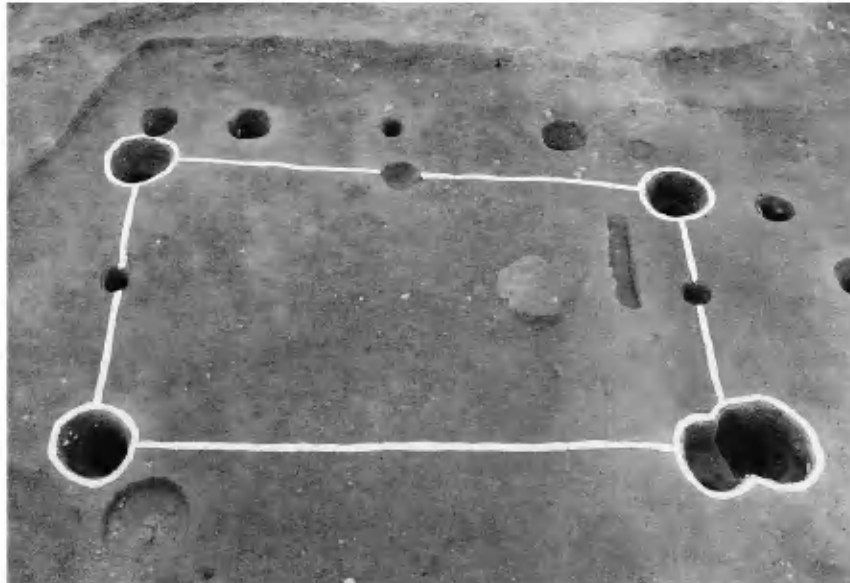


5 中央土壙埋土断面 (南東から)

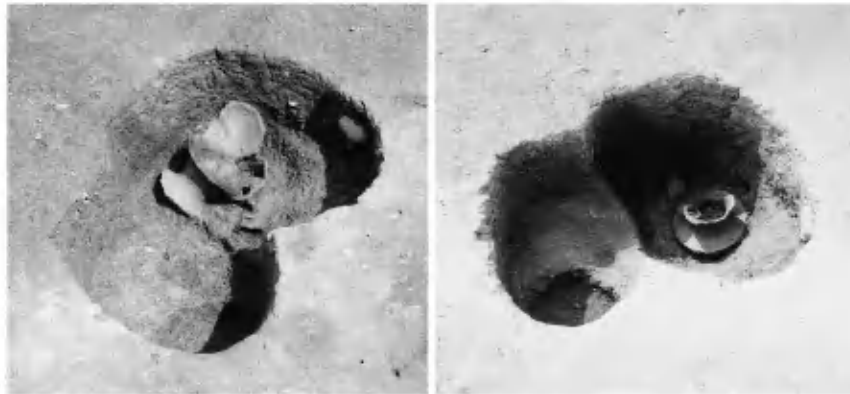


6 埋土B断面 (南東から)





1 建物2 (南東から)



2 P2 遺物出土状態① (南東から) 3 P2 遺物出土状態② (南東から)



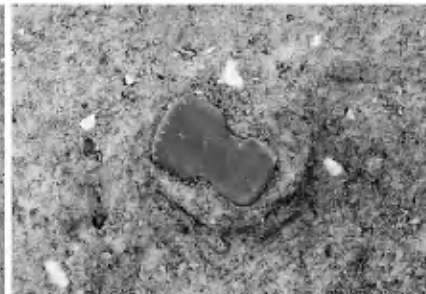
4 段状遺構1 調査状況 (南から)



1 土壌4遺物出土状態(西から)



2 土壌5(南から)



3 遺物出土状態(南から)



4 竪穴住居25・27(南から)



5 竪穴住居25上層遺物出土状態(南から)



6 竪穴住居27カマド遺物出土状態(南から)



1 建物4 (南西から)



2 段状遺構7・8 (南西から)



3 埋土E断面 (西から)

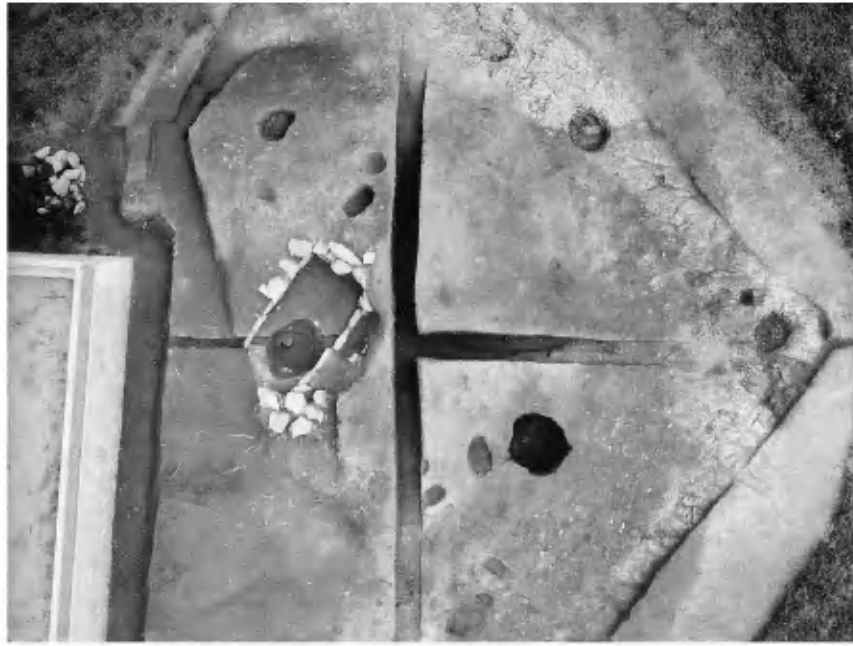


4 被熱土壙3 (北東から)



5 柱穴1 遺物出土状態 (東から)

1 宮ノ上1号墳  
(上空から、上が  
北東)



2 墳丘B断面  
(東から)



3 埋葬施設  
(西から)





1 1号墳埋葬施設南壁（北から）



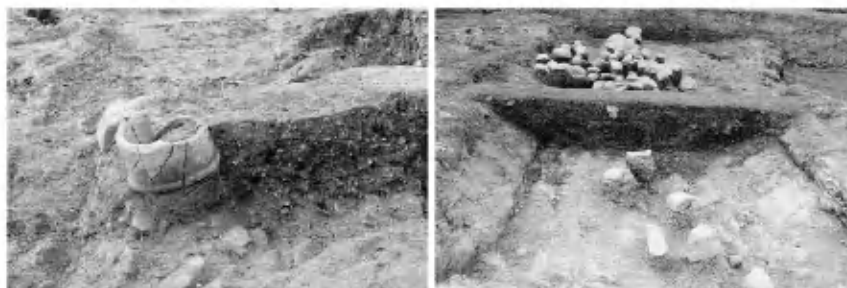
2 石杵・東壁石材出土状態（北東から）



3 東壁石材出土状態（南西から）



4 宮ノ上2・3・4号墳（東から）



5 2号墳埴輪出土状態（東から）



6 4号墳周溝埋土断面（南から）



弥生時代～古墳時代前期の出土土器①



弥生時代～古墳時代前期の出土土器②



古墳時代中期以降の出土土器





石製品・金属製品・土製品

## 報告書抄録

ふりがな	くにしおいせき さかたいせき さかたふんぼぐん みやのうえいせき みやのうえこふんぐん							
書名	国司尾遺跡	坂田遺跡	坂田墳墓群	宮ノ上遺跡	宮ノ上古墳群			
副書名	一般国道374号（美作岡山道路）改良に伴う発掘調査							
巻次	1							
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	197							
編著者名	柴田英樹 柳瀬昭彦 佐藤寛介 山崎孝盛 有賀祐史 白石純 平尾良光 齋藤美奈子 谷水雅治 大澤正己							
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター							
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市西花尻1325-3 TEL 086-293-3211							
発行機関	岡山県教育委員会							
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市内山下2-4-6 TEL 086-224-2111							
発行年月日	西暦2006年2月28日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	。 。 ”	。 。 ”			
くにし おいせき 国司尾遺跡	おかやまけん 岡山県 かつたぐん 勝田郡 しうぶちまち 勝央町 おやた 小矢田	33622	336220759	35° 01′ 13″	134° 07′ 49″	2002. 4. 1 ～	4, 840㎡	一般国道 374号（美 作岡山道 路）改良
さかたいせき 坂田遺跡			336220763	35° 01′ 15″	134° 07′ 52″	2003. 3. 31	5, 140㎡	
さかたふんぼぐん 坂田墳墓群			336220762	35° 01′ 19″	134° 07′ 56″	2003. 4. 1 ～	9, 380㎡	
みやのうえいせき 宮ノ上遺跡			336220761			2004. 3. 31		
みやのうえこふんぐん 宮ノ上古墳群								
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
国司尾遺跡	集落 墳墓	弥生時代	竪穴住居7軒、段状遺構5基、 柱穴列1条		弥生土器、石鏃、石錐、石斧、 砥石			
		古墳時代	土壙1基、土壙墓4基		土師器、須恵器、刀子、鉄鎌、 鉄斧			
		平安末～鎌倉	段状遺構1基、被熱土壙1基		土師器、勝間田焼			
坂田遺跡 坂田墳墓群	集落 古墳 墳墓	弥生時代	段状遺構3基、土壙2基、土壙 墓44基		弥生土器、石斧、石剣			
		古墳時代	土壙墓11基、箱式石棺1基、古 墳1基		土師器、須恵器、鉄鏃、鉄矛			
		平安末～鎌倉	段状遺構1基、土壙2基、被熱 土壙1基、溝1条、土壙墓1基		土師器、勝間田焼、鉄釘、椀形 滓、土錘			
宮ノ上遺跡 宮ノ上古墳群	集落 古墳	弥生時代～ 古墳時代前期	竪穴住居24軒、建物3棟、段状 遺構6基、土壙12基、溝1条、		弥生土器、土師器、石鏃、石小 刀、石包丁、石斧、砥石、管玉、 鏃、鉄鎌、分銅形土製品、土製 紡錘車			
		古墳時代中期	古墳4基		獣帯鏡、内行花文鏡、鉄鎌、石 杵、埴輪			
		古墳時代後期	竪穴住居8軒、建物2棟、段状 遺構2基、被熱土壙1基		土師器、須恵器、鉄鏃、鉄滓、 土製紡錘車			
		平安末～鎌倉	建物1棟、被熱土壙2基、土壙 墓1基		土師器、勝間田焼、土錘			

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告197

国司尾遺跡 坂田遺跡 坂田墳墓群  
宮ノ上遺跡 宮ノ上古墳群

一般国道374号（美作岡山道路）  
改良に伴う発掘調査1

平成18年2月28日 印刷

平成18年2月28日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター  
岡山市西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会  
岡山市内山下2-4-6

印刷 山陽印刷株式会社  
岡山市富吉3098-1



本文用紙は古紙配合率100%再生紙を使用しています